

平成 21 度文部科学省・独立行政法人国際協力機構(JICA)・国立大学法人筑波大学
国際教育協力シンポジウム

平成21年度青年海外協力隊等派遣現職教員 特別研修・帰国報告会

青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア平成 22 年度派遣現職教員特別研修
青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会－国際協力と帰国後の社会貢献－

報告書

共催
文部科学省・
独立行政法人国際協力機構(JICA)・
国立大学法人筑波大学

平成22年1月9日－10日
筑波大学東京キャンパス大塚地区

平成 22 年 2 月

筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)
文部科学省国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業

平成 21 度文部科学省・独立行政法人国際協力機構(JICA)・国立大学法人筑波大学
国際教育協力シンポジウム

平成 21 年度青年海外協力隊等派遣現職教員 特別研修・帰国報告会

青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア平成 22 年度派遣現職教員特別研修
青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会－国際協力と帰国後の社会貢献－

報告書

共催
文部科学省・
独立行政法人国際協力機構(JICA)
国立大学法人筑波大学

平成 22 年 1 月 9 日 - 10 日
筑波大学東京キャンパス大塚地区

平成 22 年 2 月

筑波大学教育開発国際協力研究センター (CRICED)
文部科学省国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業

はじめに

筑波大学教育開発国際協力研究センター（CRICED）は平成 15 年度から文部科学省拠点システム構築事業として派遣現職教員の海外・国内での活動のサポートを行なってきました。派遣現職教員というのは平成 13 年度に制定された現職教員特別参加制度を利用して青年海外協力隊・日系社会青年ボランティアに参加する公立学校の現職教員のことをいいます。この派遣現職教員のサポートは、国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業各課題が協力して実施する体制に平成 18 年度から移行し、筑波大学教育開発国際協力研究センターは課題間の調整機能も果たすことになりました。青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア派遣現職教員特別研修（派遣前研修）および帰国報告会はこうしたセンター業務の一環として行なわれています。

平成 21 年度青年海外協力隊等現職教員特別研修・帰国報告会は、文部科学省・国際協力機構(JICA)・筑波大学の共催で、2010 年 1 月 9 日（土）に特別研修、2010 年 1 月 10 日（日）に帰国報告会が筑波大学東京キャンパス大塚地区で行なわれました。特別研修では帰国後の社会還元に関する講義、国際理解教育に関する講義、JICA の教育協力に関する説明が行われ、また、海外で実際に役立つ ICT 活用研修が行なわれました。帰国報告会は一般にも公開され、既に帰国した派遣現職教員の報告の他、現職教員特別参加制度の意義や現職教員への期待、帰国後の社会還元に関する調査結果の報告、派遣現職教員に関わる国際協力イニシアティブ拠点形成事業の成果と課題を踏まえた具体的で詳細なサポート体制に関する紹介、筑波大学教育開発国際協力研究センターの派遣現職教員支援サポートホームページの紹介が行われ、派遣予定の現職教員 87 名の他にもこれから青年海外協力隊・日系社会青年ボランティアに参加しようとする学校教員や、教員の海外経験を学校現場に還元することに关心を持つ関係者など 166 名が参加しました。

また、今回の特別研修・帰国報告会では今後約 2 年間を途上国で過ごす派遣現職教員同士のネットワーク作りに役立ったことと思われます。そして、この 2 日間の特別研修・帰国報告会は、私ども関係者にとりまして派遣現職教員の先生方と親交を深め、今後のサポート活動の足場を築く貴重な機会になりました。

本年度も研修・報告会の実現には、文部科学省・国際協力機構(JICA)・教育委員会をはじめとして多くの方々のご協力・ご配慮をいただきました。ご尽力いただきました関係の皆様にあらためてお礼を申し上げますとともに、派遣現職教員に対する今後の一層の支援をお願いしたいと考えます。

平成 22 年 2 月
筑波大学教育開発国際協力研究センター
センター長 中田 英雄
佐藤 眞理子
磯田 正美

平成 21 年度青年海外協力隊等派遣現職教員特別研修・帰国報告会

目次

1 日目 青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア平成 22 年度派遣現職教員特別研修 開会挨拶	筑波大学教育開発国際協力研究センター長 中田 英雄 3
JICA の教育協力について	国際協力機構（JICA）人間開発部基礎教育グループ基礎教育第一課長 殿川 広康 5
帰国後の社会還元について	独立行政法人国際協力機構（JICA）地球ひろば市民参加協力促進課長 高田 宏仁 19
国際理解教育～ヒト・モノ・コトを通した国際理解と交流～	文教大学准教授 手嶋 將博 29
ICT 研修	筑波大学教育開発国際協力研究センター研究員 矢原 弘樹／讃岐 勝／野澤 純子 41
2 日目 青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会～国際協力と帰国後の社会貢献～ 開会挨拶	筑波大学教育開発国際協力研究センター長 中田 英雄 115
現職教員特別参加制度の意義について	文部科学省大臣官房国際課長 芝田 正之 117
現職教員に期待すること	独立行政法人国際協力機構（JICA）青年海外協力隊事務局長 伊藤 隆文 119
帰国報告		
分科会 1		
小野 奈津子 (19-1, ネパール, 小学校教諭) (刈谷市立東刈谷小学校) 123	
吉嶋 哲也 (19-1, インドネシア, 体育) (福岡県立香椎高等学校) 139	

橋本 尚子 (19-1, スリランカ, 小学校教諭) (士別市立多寄小学校) 149
宮腰 卓秀 (19-1, 中華人民共和国, 日本語教師) (北海道月形高等学校) 157
分科会 2	
高岡 哲郎 (19-1, ガーナ, 小学校教諭) (摂津市立鳥飼東小学校) 173
外山 瑞穂 (19-1, ジンバブエ／ウガンダ, 行政サービス) (川崎市立菅生中学校) 183
渡辺 正之 (19-1, タンザニア, 理数科教師) (栃木県立学悠館高等学校) 191
山田 千夏 (19-1, ウガンダ, 養護) (神奈川県立高津養護学校) 203
分科会 3	
宇佐美 陽子 (19-1, パラグアイ, 小学校教諭) (高崎市立並榎中学校) 213
安藤 千華 (19-1, ベリーズ, PCインストラクター) (兵庫県立須磨友が丘高等学校) 225
清水 和夫 (19-1, マレーシア, 養護) (神栖市立大野原西小学校) 241
伊藤 由紀子 (19-1, ホンジュラス, 小学校教諭) (大泉町立北中学校) 249
分科会 4	
諸永 健二郎 (19-1, エルサルバドル, 小学校教諭) (京丹後市立五箇小学校) 255
榎原 裕子 (19-1, ベトナム, 養護) (福島県立西郷養護学校) 267
小倉 琴恵 (19-1, フィリピン, 小学校教諭) (仙台市立南光台東小学校) 279
戸田 裕美 (19-1, ザンビア, 体育) (東郷町立東郷中学校) 291
国際協力イニシアティブ	
分科会 1	
海外教育協力者に対する教育実践指導と教育マテリアルの支援	
宮城教育大学 由佐 泰子／三又 英子 303

分科会 2

青年海外協力隊必携としての日本の教育情報の整備と活用

筑波大学教育開発国際協力研究センター 佐藤 真理子／磯田 正美 307

分科会 3

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」活動支援のための教育協力システムの形成

愛知県立大学 東 弘子／松宮 明 315

派遣現職教員サポート・ホームページの紹介

筑波大学教育開発国際協力研究センター研究員 柴山 信二朗 319

海外ボランティア経験教員の還元について

東京都市大学講師 佐藤 真久 321

閉会挨拶

筑波大学教育開発国際協力研究センター教授 佐藤 真理子 329

開催日： 平成22年1月9日(土)～10日(日) 会場： 筑波大学東京キャンパス大塚地区

1月9日(土) 青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア平成22年度派遣現職教員特別研修

12:00～12:30	受付
12:30～12:35 会場 G501	開会挨拶 (中田英雄 CRICEDセンター長)
12:35～13:05 会場 G501	JICAの教育協力について (殿川広康 JICA人間開発部基礎教育グループ基礎教育第一課課長)
13:05～13:35 会場 G501	
13:45～14:45 会場 G501	「国際理解教育～ヒト・モノ・コトを通した国際理解と交流～」 (手嶋将博 文教大学准教授)
14:55～17:55 会場 E157／E158／G501	ICT研修 (矢原弘樹／讃岐勝／野澤純子 CRICED)

終了後、集合写真撮影

1月10日(日) 青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会－国際協力と帰国後の社会貢献－

09:30～10:00	受付
10:00～10:05 会場 G501	開会挨拶 中田英雄 CRICEDセンター長 現職教員特別参加制度の意義について (芝田政之 文部科学省大臣官房国際課長) DVD上映「世界に飛び出すみんなの先生」 現職教員に期待すること (伊藤隆文 JICA青年年海外協力隊事務局事務局長)
10:05～10:15 会場 G501	
10:15～10:25 会場G501	
10:25～10:35 会場 G501	
帰国報告	分科会1 会場 G206
10:45～11:05	小野奈津子 小学校教諭 ネパール 愛知県
11:05～11:15	高岡哲郎 小学校教諭 ガーナ 大阪府
11:15～11:35	吉嶋哲也 体育 インドネシア 福岡県
11:35～11:45	外山瑞穂 行政サービス ジンバブエ/ウガンダ 神奈川県
	安藤千華 PCインストラクター ベリーズ 兵庫県
	柳原裕子 養護 ベトナム 福島

(昼食)

13:15～13:35	橋本尚子 小学校教諭 スリランカ 北海道	渡辺正之 理数科教師 タンザニア 栃木県	清水和夫 養護 マレーシア 茨城県	小倉琴恵 小学校教諭 フィリピン 宮城県
13:35～13:45		Q&A		
13:45～14:05	宮腰卓秀 日本語教師 中華人民共和国 北海道	山田千夏 養護 ウガンダ 神奈川県	伊藤由紀子 小学校教諭 ホンジュラス 群馬県	戸田裕美 体育 ザンビア 愛知県
14:05～14:15		Q&A		

国際協力イニシアティブ (質疑応答含む)	分科会1 【環境教育分野(教科横断型)】会場 G206	分科会2 【算数・数学／日本の教育制度】会場 G304	分科会3 【日本語教育・日本文化】会場 G201
14:30～15:00	海外教育協力者に対する教育実践指導と教育マテリアルの支援(由佐泰子/三又英子 宮城教育大学)	青年海外協力隊必携としての日本の教育情報の整備と活用(佐藤真理子/篠田正美 筑波大学)	日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」活動支援のための教育協力システムの形成(東弘子/松宮朝 愛知県立大学)

15:10～15:20 会場 G501	派遣現職教員サポート・ホームページの紹介 (柴山信二朗 CRICED)
15:25～16:25 会場 G501	海外ボランティア経験教員の還元について (佐藤真久 東京都市大学講師)
16:25～16:30 会場 G501	閉会挨拶 (佐藤真理子 CRICED)
16:40～18:00 会場 G204	懇親会

開 会 挨 捶
(1 日 目)

開会挨拶

中田英雄

(筑波大学教育開発国際協力研究センター長)

新年明けましておめでとうございます。

筑波大学教育開発国際協力研究センター長の中田英雄です。本日は、文部科学省、筑波大学、JICA 共催の青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア平成 22 年度派遣現職教員特別研修にご出席くださいましてありがとうございます。各県の現職教員の中から特別に選出された、ここにご出席の先生方はいま、胸をときめかせていらっしゃることだと思います。皆さんには、日本の現職教員を代表して任地へ赴くことになります。このことをまずしっかりと自覚し、再認識していただきたいと思います。

本日は、JICA 教育協力について殿川広康（とのかわひろやす） JICA 人間開発部基礎教育グループ基礎教育第一課長よりお話をいただき、高田宏仁（たかたひろひと） JICA 地球ひろば市民参加協力促進課課長より帰国後の社会還元について、手嶋将博（てじまさひろ） 文教大学准教授から国際理解教育—ヒト・モノ・コトを通した国際理解と交流—についてお話をいただきます。要点をしっかりと押さえながら、傾聴していただきたいと思います。また、ICT 研修を私どもの研究員が実習形式で行います。短い時間の研修ですが、ICT の基本と応用の技術を身につけ、派遣中と帰国後の活動に役立てていただきたいと思います。

ところで、みなさんの日ごろの教育活動で最も大切なものは何でしょうか。皆さんはすでにそれに気づいていらっしゃると思います。その大切なものを胸に秘めて任国の教育協力に臨んでください。

任地におけるみなさんのご活躍とご健康を祈念して、私の挨拶といたします。

プログラム 1

JICA の教育協力について

殿川広康

(JICA 人間開発部基礎教育グループ基礎教育第一課長)

皆さん、こんにちは。私、JICA 人間開発部基礎教育グループ基礎教育第一課の殿川と申します。どうぞ宜しくお願ひ致します。こんなにたくさんの方の前でお話しするのはすごく久しぶりなのでちょっと緊張していますが、JICA の基礎教育分野での協力ということでお話しさせていただければと思っております。一昨年の 10 月に旧 JBIC と旧 JICA が統合して、JICA は技術協力、無償資金協力、円借款を行う機関になったわけですが、私の属する人間開発部というのは、その中で主に教育、保健、社会保障分野における技術協力全般と無償・有償資金協力の事前調査を担当する部門です。その中で、私がおります基礎教育第一課では、教育の中における基礎教育、基礎教育の中でもアジアと中近東の事業を担当する部署ということになっています。今日は教育の中で基礎教育の分野における JICA の協力の概略についてご説明させていただければと思っております。

本日お話させていただく内容は 4 点です。基礎教育の分野でまずどんな問題があるのかということを概観させていただいた上で、2 番目として基礎教育協力の潮流ということでお話しさせていただきます。その上で JICA の基礎教育協力の実態、どんなことをやっているのかというのを簡単にお話しさせていただいて、最後に技術協力とボランティア活動との連携ということをお話しさせていただきます。

最初にどんな問題があるのかということですが、開発途上諸国の中の基礎教育は近年急速に拡大しているわけですが、就学率は向上し、また、後発開発諸国といわれる LDCs 諸国でも飛躍的に伸びているということです。しかしながら、今の国際的コミットメントの中では、EFA, Education for All と言うのですが、万人のための教育ということで、2015 年までに完全初等教育を達成するということを目標として各国取り組んでいるわけです。しかし、本当に 2015 年に初等教育は 100% 普及することになるのだろうか、また、その時点で初等教育に関するニーズが充足されたということで、その後は初等教育以降の問題に取り組んでいけばいいのか、という状況になるのかといいますと、開発途上諸国では依然として大きな問題を抱えていて、数字で見ると学校に通えない子供たちが 7000 万人います。また、就学率は途上国全体で見たときにはある程度達成しているとしても、地域的にはバランスが取れていないところがあり、また、学校在籍年数は日本で大学まで行けば 6・3・3・4 で 16 年ですか、途上国で考えてみると 9.9 年と高校一年生までです。学校に行けない子がいたり、小学校を卒業できるのは入学児童の 4 人に 3 人、4 分の 1 は卒業できずに途中でやめてしまうのです。41 カ国では小学 1 年生の 3 分の 2 がドロップアウトし、男女間の格差があり、また、成人でも非識字者が 5 億人いるといった問題を抱えているということが

あります。

学校に行けない、また行かない、行っても卒業できないといった問題があるわけですが、その背景にはいろいろな問題が密接に絡み合っていて、必ずしも学校だけに限定される問題ではなく、例えば紛争があつて学校に行けない、貧しくて学校に行けない、子どもが生活の糧を得るために重要な働き手の一人である、HIV エイズの問題、多民族国家の場合、多数を占める民族を中心とした教育システムのために少数民族の人たちがアクセスできない、特にイスラム圏や南アジアの国々での女子教育、学校そのものにアクセスできない、といった理由があります。また、学校へ行っても十分に教育を得られない、行ったとしても卒業できない、というような教育の質の問題があります。教員が不足している、無資格教員がいるなど、日本ではきちんと大学を出られて試験を受けられた先生が教鞭をとっておられるわけですが、高校生ぐらいの方々が教員としての十分な準備がないまま無資格教員になっているとか、カリキュラムの不備、教科書や教材の不足、教員の給与と社会的地位が低いということで教員として働くインセンティブがない、施設が不足しているなどいろいろな問題が絡み合っているということがあります。

つまり、何を申し上げたかったかというと、基礎教育にかかる取り組みの成果もあり、基礎教育分野での成果は出ているという面はあるのですが、複雑な問題が絡みあい、依然として大きな問題を抱えている現状にある、ということです。

2つ目の基礎教育協力の潮流ですが、これまで基礎教育協力というのは行われてきたのですが、基礎教育協力に焦点が当たって来たというのはそんなに古い話ではなく、一つの大きな契機になったのは、万人のための教育世界会議というのが 1990 年にタイのジョムティエンで開かれ、その中で Education for All という全ての人々に基礎的な教育を保証することの重要性が訴えられたことです。それ以降、人間中心の開発といったトレンドの中で、基礎教育に関する取り組みが行われ、2000 年にはタイのジョムティエン会議をレビューするために世界教育フォーラムが開かれ、2015 年までに初等教育の完全普及を達成するという目標が合意され、国連ミレニアムサミットにおいてミレニアム開発目標の中に盛り込まれました。ここで何を申し上げたかったかというと、1990 年以降、基礎教育における国際的な協力が本格化してきたということです。

三つ目では、JICA が基礎教育協力ということでどういうことをやってきたかをご紹介させていただきます。基礎教育といったとき、どのように分類するかということについて、一般的な定義よりも JICA がどう分類しているかというのを述べますと、初等教育、前期中等教育、ノンフォーマル教育、就学前教育という部分を JICA では基礎教育と位置づけていて、初等教育や前期中等教育等の教員の養成、またノンフォーマル教育も基礎教育ということで位置付けています。どんなことをやってきたのかというところでは、先程の繰り返しになるのですが、1990 年に実施された EFA 世界会議というのが一つ大きな契機になっています。それ以前にやられてきたことは協力隊員の派遣がほとんどでした。1990 年以降に、学校建設、理数科の教育改善、教育マネジメントの支援、ノンフォーマル教育

の支援といったものが本格化してきたのです。

教育分野の協力を金額的にどの程度やっているかというと、大体年間二百億円から三百億円といったところです。教育協力の実績の推移について少し申し上げたいのは、教育協力全体に占める基礎教育の割合で、1995年頃は基礎教育も高等教育も同じぐらいの割合だったのですが、2006年には基礎教育の割合はほぼ50%に達しているのに対して、高等教育については15%程となっています。JICAとしては教育分野で現在基礎教育が占める割合が非常に大きくなっています。また、基礎教育分野でどの地域に金額ベースで多く協力しているかというと、南アジアやアフガニスタンを含むアジア、そしてアフリカの国々に対して金額的に大きな貢献をしています。どんな方針に基づいているかというと、JICAの基礎教育分野の方針または重点課題というのは6点あります。初等・中等教育の就学率の向上、初等・中等教育の質の向上、ジェンダー格差の是正、ノンフォーマル教育の拡充、教育におけるマネジメントの改善、就学前教育の拡充というものです。6つの重点項目で具体的にどんなアプローチをとっているかということについては、ここでは割愛させていただきます。

次に事例1についてですが、先ほど申し上げました6つの重点課題・重点項目の中で特にJICAとして取り組んでいるのは、初等・中等教育の就学率の向上や初等・中等教育の質の向上、教育におけるマネジメントの改善になります。そのひとつの事例として初等・中等教育の質の向上に関してやってることは、理数科教育分野での協力です。その中でも特にJICAとして焦点を当てているのは教員能力の向上という部分です。そのひとつの事例として、日本が比較的他の国々の中でも優位性を持つ理数科という分野で、多くの国々で協力をしています。理数科に関するプロジェクトはアフリカ、アジア、中南米で多くやっています。その中で、ケニアの方々に、各国に専門家として行っていただいて、各国での技術協力をしていただき、また、そのような国々からケニアに来ていただいてケニアで研修を受けていただく、というような広域的協力といいますかケニアを拠点とするような教育を行っています。また、中南米の例でいいますと、ホンジュラスで開発した算数の教材を他の国々で使ったり、ホンジュラスに派遣された日本人専門家の方が他の国々に出張して協力をしていく事例があります。事例の1・1はケニアでの協力の事例なのですが、中央の研修講師をトレーニングし、中央の研修講師の方々が地方の研修講師をトレーニングして、地方の研修講師が一般の教員の方々をトレーニングして、そのトレーニングされた教員の方々が各学校で実践をしていくというような方式によって協力をしています。写真はケニアにおけるプロジェクトの中で研修をやっている様子で、授業で実験をしている事例です。

事例2として、コミュニティの参加による学校運営改善の実践という事例を紹介します。どの国でもそうなのですが、これまで中央中心の中央集権でやってきた国々が開発途上国の中には多いのですが、現在は地方分権化によって急速に地方に権限を移譲していくというような動きがあります。教育の世界も例外ではなくて、地方分権化の流れの中で地方も

しくは学校にいろいろな権限が下りてくるという形になっています。その一方、必要なお金が下りてこない、地方分権化に伴って各学校がこういう風に学校運営をしていくという具体的な戦略がない、法規上は地方や学校が主体的に学校運営を行っていくっていうことになっていても実質が伴わない、という状況があって、それを改善するために学校運営委員会のようなものを活発化して、そして学校のマネジメントを改善していくというような活動をやっています。各学校がコミュニティの参加を得て参加型で民主的で自立的で計画的な学校運営を行って、そういうものを行政に上げ、行政は行政政策や必要なお金を下ろしてくる、というボトムアップ的な学校運営アプローチの導入を支援しています。ニュージュールの事例では、学校運営委員会を住民の参加を得て組織し、その人たちに参加型の学校運営をしていただくというアプローチで、学校運営委員会が学校施設の改善として、トイレの改善を行ったという事例です。また、質の改善ということを学校運営委員会で話し合って、夜間教室を開くためにランプが必要だということで購入し、それを女子のための識字教室に使ったという事例もあります。

事例 3 としては、日本の今日の経験を伝えるということで開発途上国の方々を日本に迎え入れて、本邦で研修をするというようなことをやっています。いろいろテーマで、いろいろな国々、いろいろな機関のご協力を得て、いろいろなサブセクターに関する協力・研修をやっています。このスライドは途上国から来た研修員の方々が日本で研修を受けていらっしゃるシーンです。

事例 4 は草の根レベルで協力を支える協力隊員の方々です。2007 年という古いデータですが、1840 人の方々が理数科教師として、709 人が小学校教師としてこれまで派遣されています。技術協力とボランティア派遣との連携ということなのですが、技術協力とボランティア派遣は目的などが違っていて、どちらかがどちらかの下とか上とかということはありません。相互補完関係というか、例えば技術協力プロジェクトがある国の中政府を対象としているとすれば、そこから中央政府で得られる知見を、アドバイスや情報という形でボランティアの方々に提供します。その一方で、ボランティアの方々が活動してらっしゃる草の根レベルでの情報などを技術協力プロジェクトのほうに上げていただき相互補完関係を実現することによって、教育や教育の質を中央と草の根の双方から高めていくことが可能になる、ということです。具体的な事例として、バングラデシュの場合だと、技術協力プロジェクトの中で教員用指導書を開発し、小学校教員の養成機関に派遣された協力隊員の方々がその指導書を使って実際に教えているというような事例があります。次にニュージュールの事例ですが、技術協力プロジェクトの中で研修を受けた先生方が配属される学校に配属される隊員の方がおられて、同じ学校の中で一緒に活動をしておられるというような事例があります。この他にもいろいろな連携事例があります。

最後に一つ申し上げておきたいのが、基礎教育協力の担い手ということでいろいろな方がおられます、コンサルタントの方、大学の研究者の方々、フリーで活動してらっしゃる方、NGO の方、また JICA の専門家人材である国際協力専門員やジュニア専門員とかい

った方々の多くが実はボランティアの出身、特に青年海外協力隊出身の方々が非常に多い
ということです。

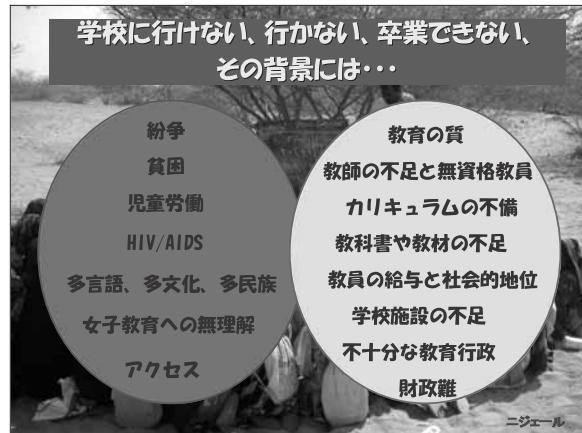
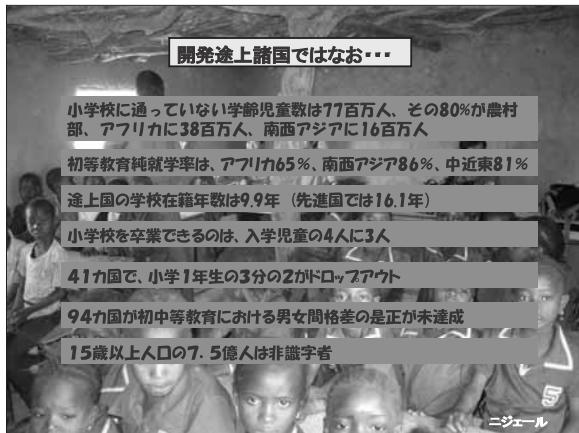
ややかけ足になりましたが、JICA の基礎教育協力について簡単にご説明させていただきました。



主な内容一

1. どんな問題があるのか
2. 基礎教育協力の潮流
3. JICAの基礎教育協力
4. JICAボランティア活動との連携

1. どんな問題があるのか



2. 基礎教育協力の潮流

2-1. 基礎教育協力の国際的な潮流

- 「万人のための教育世界会議」(1990 タイ)
→ *Education for All (EFA)* の提唱
- 「世界教育フォーラム」(2000 ダカール)
→ 以後「EFA ハイレベル会合」として継続的にフォロー
- 「ミレニアム開発目標(MDGs)」(2000 UN)
→ 2015年までのEFA目標の達成
- 「ファスト トラック イニシアティブ (FTI)」(2002)
→ EFA目標達成を促進するための資金的枠組みの創設

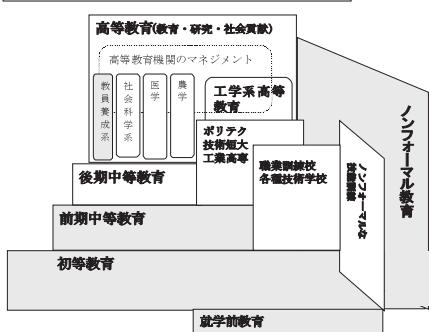
3. JICAの基礎教育協力

3-1. 基礎教育の定義

「人々が社会の中で生きていくのに必要な知識・技術を獲得するための教育活動」
—「万人のための教育に関する世界宣言」
第1条第1項

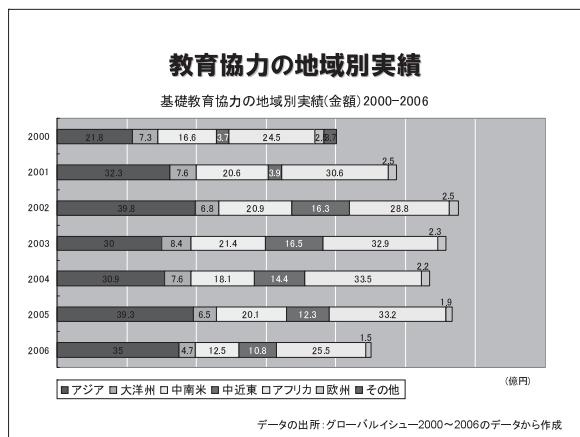
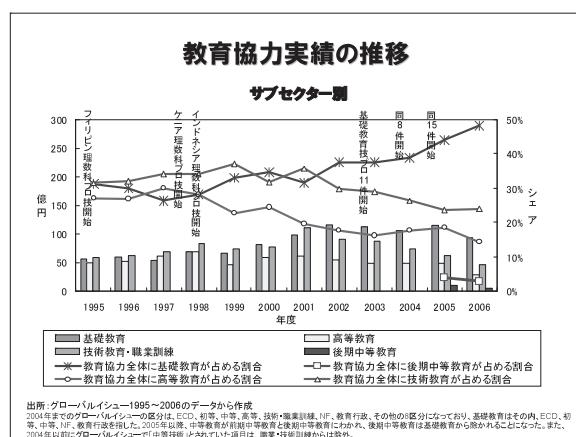
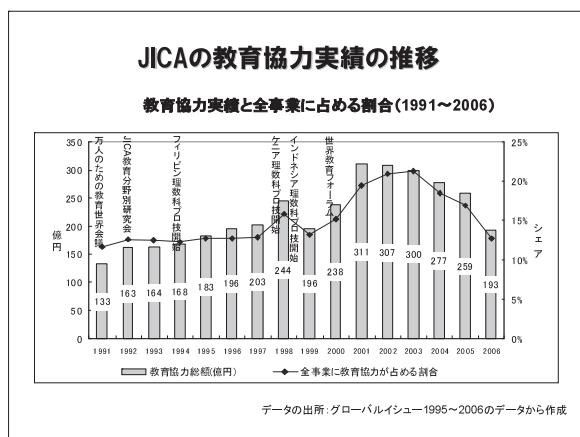
初等教育、前期中等教育、
ノンフォーマル教育、就学前教育

教育分野サブセクターの中の基礎教育



3-2. どんなことをどの位やってきているか

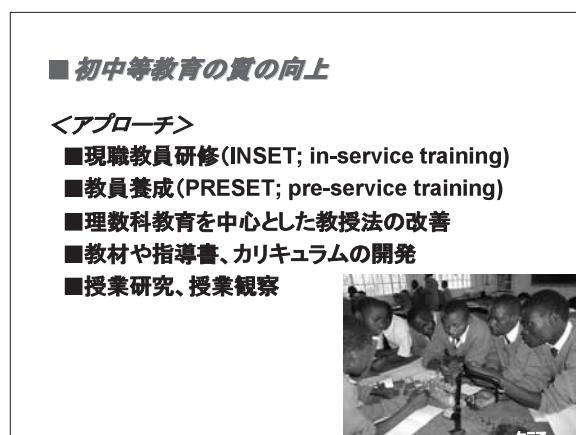
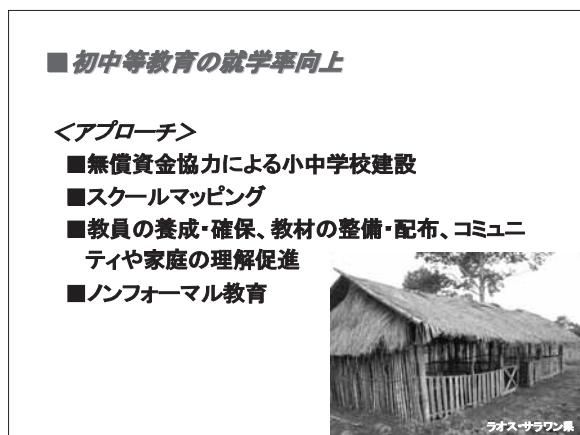
1990年以前	教師隊員派遣(JOCV)	1990年	EFA世界会議
1990年頃～	小学校施設建設(無償)	1996年	DAC新聞発戦略
1992	JICA教育分野別研究会	2000年	ダカール会議、MDGs
1995年頃～	理科教育改善(技プロ)		
1998年頃～	教育分野の開発調査(開発) セクタープラットフォーム支援 教育マシンピット支援		
2000年頃～	ノンフォーマル教育(NFE)支援 (技プロ-草の根技術) 就学前教育支援(開発調査)		
2004	教育行政改善(技プロ-開発調査) JICA課題別指針(NFE)		
2005	同 (基礎教育)		



3-3. どんな方針に基づいているか

- 初中等教育の就学率の向上
- 初中等教育の質の向上
- ジエンダー格差の是正
- ノンフォーマル教育の拡充
- 教育におけるマネジメントの改善
- 就学前教育の拡充

—「基礎教育 課題別指針」2005年



■ 教育におけるマネジメントの改善

<アプローチ>

- 学校運営委員会の強化
- 住民参加の学校運営改善
- 地方教育行政強化
- 教育統計の整備



■ ジェンダー格差の是正

<アプローチ>

- 学校における女子教育阻害要因の調査と改善
- 地域社会、家庭における女子教育阻害要因の調査と改善
- 成人女性の識字教育



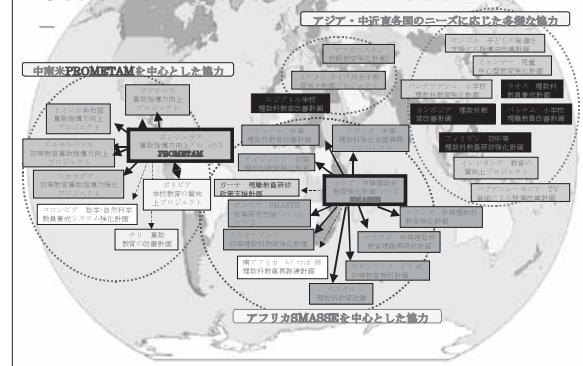
■ ノンフォーマル教育の拡充・その他

<アプローチ>

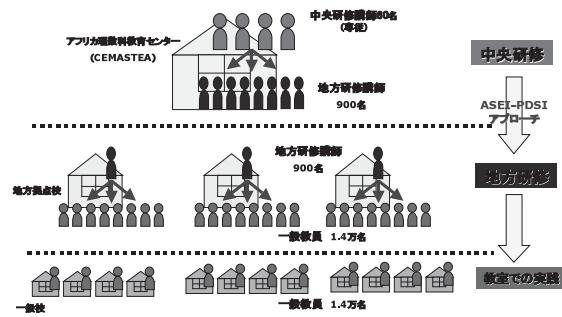
- 識字教育
- フォーマル教育の代替としてのノンフォーマル教育
- 識字教育統計、マッピング
- 地域主体の生活技術教育、生涯教育
- 特殊教育
- 学校保健
- ECD



事例1. 理数科教育改善プロジェクトの展開



事例1-1. 現職教員研修(INSET)制度の構築 <ケニアSMASSEの例>



事例1-2. ASEI-PDSIアプローチによる授業改善(SMASSE)

＜教員が変わり、授業が変わり、生徒が変わる！＞

● ASEI-PDSIアプローチ

- Activity 活動に基づいて知識を得る授業
- Student 教師中心の授業から生徒中心の授業
- Experiment 講義中心から実験や教育方法を工夫した授業
- Improvisation 身近な教材を使った小さな実験のある授業

● Plan-Do-See-Improvement

計画、実施、評価、改善というサイクル

例）授業計画作成から評価、フィードバック・改善を行う



事例1-3. 授業研究を探り入れているプロジェクト例

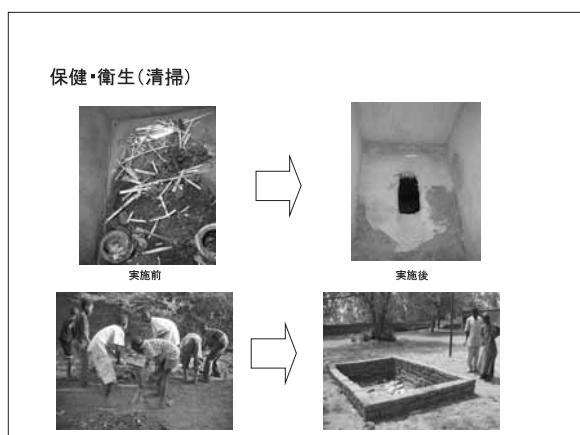
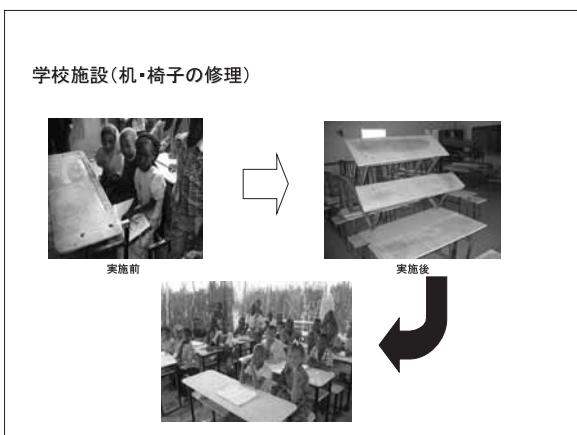
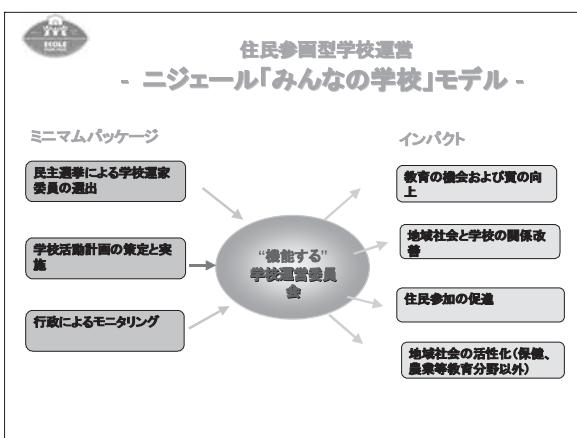
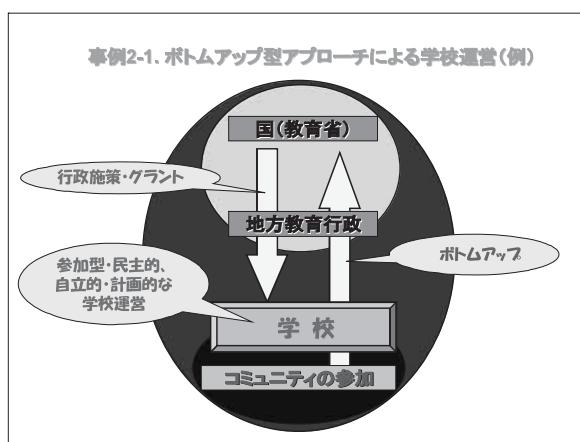
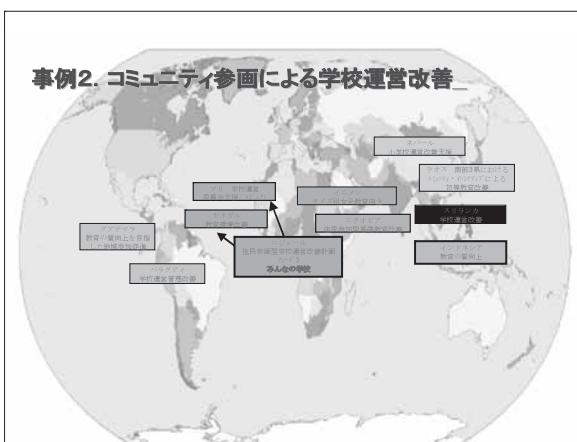
- ザンビア SMASSTE授業研究支援プロジェクト
- モザンビーク ガザ州初等教育強化計画
- ポリビア 学校教育の質向上プロジェクト
- テリ 算数教育の改善
- モンゴル 子どもの発達を支援する指導法改善計画
- バングラデシュ 小学校理数科教育強化
- インドネシア 教育の質向上プロジェクト



事例1-4. 教師用指導書や学習教材の作成支援

- 中米カリブ広域算数教育協力（ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、グアテマラ、ドミニカ共和国「算数大好き！プロジェクト」）
- アフガニスタン 教師教育強化
- ミャンマー 児童中心型教育強化
- バングラデシュ小学校理数科教育強化計画
- モンゴル 子どもの発達を支援する指導法改善
- パプアニューギニア TV番組による授業改善計画







事例3. 日本の教育経験を伝える
<本邦への研修員受入れ～課題別研修コースの例～>

研修コース名	協力機関	サブセンター
仮想国アフリカ「教育行政」	広島大学高等教育研究開発センター	教育マジカル
中等教育開拓Ⅰ	名古屋大学大学院教育実践科学研究所	教育マジカル
中等教育開拓実技Ⅱ	広島大学教育学部	教員研修
学校振興	からら小児保健医療総合センター	教員研修
女性の教育推進セミナーⅢ	国立女性教育会館	女子教育
南南型教育（中国米）	筑波大学教育開発国際協力研究センター	特需教育
初等中等教育・農学校教育向上（南太平洋）	専門教育大学	教員研修
小学校における理科実験教育（南西アジア）	帝京教育委員会	教員研修
幼稚教育（中南米アフリカ）	お茶の水女子大学	ECD
日本の教育監察（中国）	筑波大学教育開発国際協力研究センター	教育マジカル
サブキャラクターランドにおける学校運営技術	企画大学教育学部	教育マジカル
アフリカ婦長委員会における教育開拓	大阪大学大学院人間科学研究所	教育マジカル
基礎教育における教育推進Ⅱ	沖縄県教育委員会、琉球大学	教育マジカル
初等理科実験技術	北海道教育大学	教員研修
地方教育監査（SMASSE-WECSA）	札幌市教育センター	教育マジカル
中南米地区学校運営改善	筑波大学	教育マジカル
小学校理科実験教育（中東諸国）	専門教育大学	教員研修
ノンフォーマル教育文化	広島大学	NFE



事例4. 草の根レベルで教育を支える
<基礎教育分野の青年海外協力隊>

種別	職種	理数科教員	小学校教師
派遣中の隊員		204	183
うち現職教員		22	82
累計		1,840	709

(2007年)



4. JICAボランティア活動との連携

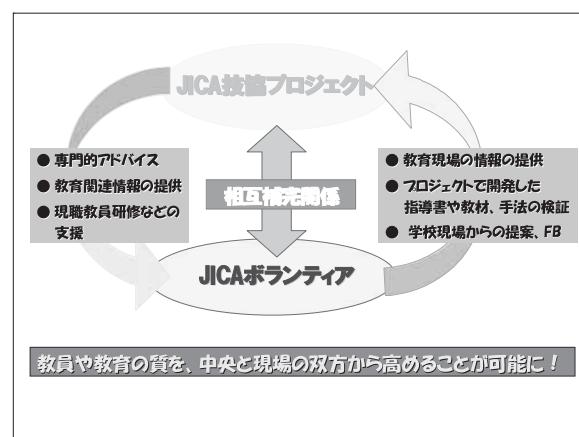
4-1. 技術協力とJICAボランティア

● JICA技術協力は—

- ・相手国の方針に基づき
- ・様々な関係者と共に明確な目標や期待される成果を想定し
- ・達成のための方法論やフレームを定めた上で
- ・計画的に活動を行う

● JICAボランティアは—

- ・ボランティア自身の意志に基づき
- ・これまでに培った知識・技術、経験を活かしつつ
- ・現場の仲間、同僚と共に出来る限りの範囲で
- ・現場のニーズや課題に創意工夫をもって取り組む



4-2. 連携事例：

バングラデシュ小学校理数科教育計画



4-2. 連携事例：

ニジェール中等理数科教育強化計画



4-2. 連携事例：

他にも多くの事例が！

- ニジェール住民参加型学校運営改善計画（「みんなの学校」）
- ケニア中等理数科教育強化計画他（SMASSE）
- 中米カリブ広域算数教育協力（「算数大好き！」）
- ポリビア学校教育の質向上プロジェクト（PROMECA）
- パプアニューギニアTV番組による授業改善（EQUITV）

……などなど

4-3. 基礎教育協力の担い手は…

- 教育コンサルタント
- 大学等の研究者や附属校教員
- フリーランスの教育協力専門家
- 教育NGO
- JICA国際協力専門員
- JICAジュニア専門員
- …などなど

その多くが、実はJICAボランティア出身という事実!!

<基礎教育協力についてさらに詳しく知りたい方は>

■ 教育協力について：

JICA HP>事業案内>課題別取組み>教育
<http://www.jica.go.jp/activities/issues/education/index.html>

■ 技術協力プロジェクトについて：

JICA技術協力プロジェクトHP>課題別インデックス>教育
http://www.jica.go.jp/project/subject/education/01_1.html

■ 基礎教育協力に関するお問い合わせは：

→ JICA人間開発部基礎教育支援ユニット

■ 開発教育／国際理解教育に関するお問い合わせは：

→ JICA地球ひろば（広尾センター）

■ 教育協力のプロを目指したい方は：

→ JICAボランティア道路相談カウンセラーまたは
JICA国際協力人材センター「PARTNER」HP



帰国後の社会還元について

高田宏仁

(JICA 地球ひろば市民参加協力促進課長)

ご紹介いただきました地球ひろば市民参加協力促進課の高田と申します。地球ひろばとは、市民参加協力事業の取りまとめをおこなっているところです。簡単に言いますと国民の皆さんに途上国の現状を理解してもらい、我々の活動を支持してもらい、できれば開発そのものに携わっていただこうというようなことを進めているところです。

皆さん、現職教員の特別参加制度を利用して 4 月から訓練に入り、そして派遣されるということで、現職教員特別参加制度をご活用していただき大変ありがとうございます。皆さんのご活躍を期待しております。いろいろな国に行かれるようなので、折角なので質問いたします。私がこれまで赴任した国を挙げます。パラグアイに行かれる方、いらっしゃいますね。それからホンジュラス、いらっしゃいますね。いずれもとてもいい国なので楽しみつつ良い活動をしてもらいたいと思います。

本日の私の話の内容ですが、一言でいいますと、派遣中および帰国後に、先程私が言いました国民の皆さんに理解を深めていただくために、皆さんにやっていただきたいことをイメージしていただけるようなお話をしたいと思っています。

本日のタイトルである社会還元ということですが、これはボランティア事業、協力隊事業を実施していく中で、皆さん一人一人にはボランティアということで活動してもらうのですが、帰国後にその経験をいろいろ広めてもらったり、ボランティア事業を紹介してもらったり、その経験を活かして別の仕事に就いてもらったり、それから国際理解の推進に役立っていただいたり、地域の活性化や多文化共生社会の対応をしていただく、ということを考えています。これはここ数年非常にクローズアップされている部分です。実際に協力隊 OB の方が町おこしをやったり、起業をしたりなど、そのような形で地域にとってプラスになるということで注目されている部分です。皆さんは教師ですので、学校現場において協力隊の経験なりを還元していただきたいと思っております。我々が大きな目的として掲げていることは、国民・市民の皆様の理解と参加ということです。これを市民参加と呼んでいます。国際理解を深めてもらい、それを踏まえて支持をしてもらう、なお且つ一部興味がある人に参加をしてもらう、ということです。市民参加ではないタイプがあり、国の事業としてやっている技術協力事業、無償資金協力、有償資金協力といった殿川課長が説明したような部分もありますが、市民参加は市民の方に実践していただきたいと期待している部分です。このようなことが多くおこなわれ、国際協力が日本の文化になっていけば、と我々は思っています。

このような理解の促進だとか、開発への貢献という言葉に対して、実際にどういう参加

の仕方、かかわり方があるのかということでは、スライドの右側に事業のことが展開されています。例えば、イベント・セミナーなどに参加してもらうということがあります。もちろんボランティア事業もあります。また、草の根技術協力というものがあり、NGOの方々が途上国でこんな活動をしてみたいというものを形にしていくというものもあります。また、開発教育支援事業というものがあり、我々地球ひろばを始めとした全国の国内機関において、後で説明します出前講座を行ったり、先生に途上国に視察に行ってもらい見聞きしたことを授業に活かしてもらう、という事業をやっております。これらのような活動によって市民・国民の理解と参加が深まり、それが日本全体の文化になれば、ODA予算も増え、我々の活動もどんどん広がっていく、と考えているところです。

さて、開発教育という言葉を我々は使っているのですが、これはヨーロッパのNGOなどが使い始めた言葉で、この言葉の定義にはいろいろな考え方があり、我々としては結果的に開発教育という言葉を使っているのですが、国際理解教育という言葉のほうがメジャーなのでその言葉も我々は使わせてもらっています。これについてはおそらく次のコマで手嶋先生がお話をされると思います。

我々JICAでは開発や国際協力の取り組みを促進するということもあり、開発という言葉がある方が使い易く、外務省もそのように使っているので、開発教育という言葉を使っています。

また具体例として写真をお見せしますが、我々は現場の教育のところに入り込んでいるわけではなく、開発教育の現場というのは日頃皆さんのが携わられている教育現場であり、あくまで皆さんのが授業を行っていく中で取り入れたい、取り入れると面白いのでは、という場面のためにいろいろな材料を提供している、ということです。

我々にとってここ数年非常に追い風になったのが総合学習という時間です。皆さんのはうが詳しいと思いますが、教育現場ではやり方に腐心をされたり、工夫をされたりという中で、国際理解というテーマがあって、我々もそれに協力をさせていただいたといいますか、活用させていただいた、ということです。国際協力または国際理解をやっているNGOや国際交流協会などと協力して、こういうことができます、こういう資料があります、ということでやらせていただきました。ところがこの間、削減が決まり、我々もとても心配しています。これまで国際理解ということであれば途上国の人にも英語がしゃべれる人が大勢いるのですが、小学校からでしょうか、英語の時間が入ってきたということで、やはり英語となるとアメリカ、イギリスということになるのではと、今後の行方を注視しなければと思っています。

また学校外の市民社会でも、国際協力とはどういったものでしょうか、途上国ってどんなところですか、というような市民の皆さんからのニーズがあって、それに対して我々が情報提供をしています。また、一部では直接巻き込んで開発教育支援事業をやらせてもらっています。

次のスライドから少しわかり易いように写真を使いながら説明したいと思います。知見

の還元、考える機会の提供、橋渡し役と 3 つのカテゴリーに分けて、それに基づいてお話をします。主力になっているのは国際協力出前講座で年間 2400 件、小・中・高・大学生を中心に全体で 20 万人くらいに受けてもらっています。これは主に協力隊 OB の方々が学校現場に行き、私はこういう国でこんな活動をしてきましたという話をします。小学生の場合だと、座学ではつまらないで、民族衣装を着て現地語で挨拶してもらって、子供たちに興味を持ってもらい、次の話につなげていく、というようなこともやっています。そのために帰国ボランティアに対してセミナーなどもやっています。また、施設訪問ということで全国に 17 のセンターがあり、そこで年間 1000 校を受け入れています。写真は地球ひろばで、体験ゾーンという体験型のスペースを設けており、途上国の現状を見て触って感じて理解してもらえるところです。ちなみに、ここに事業仕分けがいらっしゃって、コストが高いとの指摘を受けており、今後は改めていきたいと思っています。

次は開発教育のための教材の作成ということについてです。当然教材とは先生方が使われるものなので、我々がいわゆるきちんとした形で教材を提供するということはできませんが、使っていただける資料としていろいろなを作っています。また、地球調査隊という HP も作成していますので興味があれば覗いてみて下さい。

それから考える機会の提供ということですが、この中でやっていることのひとつにエッセイコンテストがあります。中・高生を対象にエッセイを書いてもらい、上位入賞者には海外研修旅行をプレゼントするというものです。年間 7 万 5 千通の応募をいただいている。全校生徒の 3 割以上か 60 人以上の応募があると学校賞という賞を出させてもらっていますが、学校賞を出したところが 400 校ぐらいあります。ちなみにうちの学校でも応募したはずだという方いらっしゃいますか？失礼しました。では先ほどの出前講座で誰かが来たことがある、呼んだことがあるという方は？ありがとうございます。

次の教師海外研修は学校の先生方を対象にしたプログラムで、10 日間ほど途上国を訪問してもらい、協力の現場、途上国の学校現場を見ていきます。国内センターによって異なりますが、前後の研修も組み合わせて実際に授業をするための研修なども組み込んでいる場合もあります。

もう一つの国際協力実体験プログラムは、地方のセンターを訪問してもらい、泊まり込みでもう少し濃密に体験してもらうというものです。

これまで海外や現場に直接行くようなものの紹介が多かったのですが、それ程時間がない、それ程興味がない、という先生方にも軽い気持ちで参加していただけるような研修も行っています。最近多いのは、学校現場入り込んでいくためには教育委員会などへの働きかけが大切かと思い、例えば教育委員会が実施する教員研修で、階層別やいろいろな専門研修のような場をお借りするというような形のものもあります。以上が、我々が行っている開発教育支援事業というものです。

我々が直接担当していないものにも有益な制度があります。皆さんには是非知っておいていただきたいと思うので、二つほど紹介します。一つは、「世界の笑顔のために」プログ

ラムというもので、途上国に寄付をしてみたい、困っている人を助けたい、という日本人達からいろいろなものを集めて、それをボランティアが活動している現場に送って使ってもらう、というものです。活動現場でこんなものが欲しいというものをリストアップします。ボランティアの皆さんのが自分の任地でこんなところでサッカーやっているのだけれど、サッカーボールがないので是非送ってあげたい、と。そして、日本側のサッカークラブでいらなくなつたボールとマッチングして送る、というものです。その時にただ送るだけではなく、送った人に対して現地のボランティアのからお礼状を書いてもらいます。現地でこういう風に使っています、という子供たちの写真をこっちに送つてもらうと、寄付した方はそれをみてこういう風に役立っているのだ、というとても嬉しい気持ちになり、また、途上国ってこういう状況なのだ、というのがわかるということで、非常に好評なプログラムです。もう一つは小さなハートプロジェクトというもので、もう少し大きな活動資金などが支援されます。例えば、現地で、ここに橋が欲しいというようなときに使えるお金です。ただし、いずれのプログラム、プロジェクトも本来の活動とは分けてやらせてもらっています。

そして、このスライドが皆さんに覚えていただきたいものです。主に紫のところが開発協力支援事業なのですが、そういうものを使って、学校には途上国の理解促進などをやつていただいています。先生が途上国を垣間見て帰国し、子供たちに伝える、というのが開発教育支援事業です。先程の小さなハート、世界の笑顔が真ん中にあります。右側はいわゆるボランティア派遣事業の部分なのですが、途上国にボランティアの方々が派遣されて帰国されるとボランティア OB ということになり、その後に出前講座に派遣される。それから教師海外なり、エッセイコンテストの入賞などで現地に行かれると、現場でボランティアの方々に触れて、途上国を垣間見るということになります。皆さんはこれを全て経験します。今は左側にいますが、これから右側のボランティアとして途上国に行かれ、2年間の活動を経て、戻って来ると右下に行きます。下は左と同じです。我々は開発教育の現場でいろいろな取り組みを行っていますが、皆さんはその受け手であり、我々が活用させていただいている主体でもあります。我々としてはとても貴重な存在だと思っております。これから訓練・活動、それからその後の取り組みにおいて、その後の教師生活に生かしていただければと思っております。

皆さんは先ほど言いましたように、国際理解教育、開発教育の現場にいらっしゃって、そもそももの主体であり、且つこれからボランティアに直接従事されるということで、その経験を持って帰られるということから、我々が進めている開発教育の中核になると思っています。このため、皆さんからの協力をお願いしたいと思っておりますし、そのために皆さんの活動については我々としても全面的に支援したいと思っています。

皆さんはこれから訓練を受けて派遣されるということなので、何か伝えられることがあればということでスライドに書いてみました。またこれからも話があるかと思うのですが、帰国後にもしくは派遣中に実践していただくためにということで、お願いといいますか、

心がけていただきたいことです。開発教育に使う材料については、やはり現地の生の素材が一番ですので、活動中にそういうものの収集をやっていただければと思います。私も随分昔に協力隊員として現職で行きました。最初は、いろんなものが珍しかったり、面白かったりするのですが、活動のことでいろいろ悩んだりしているうち、時間は経っていきます。気が付くといつの間にか生活に慣れてしまい、最初の時の新鮮な緊張というか感覚はなくなって、そういうものは思い出したくても思い出せなくなってしまいます。ですから、最初のうちからはメモに留めておくとかすることが大切だと思います。私が行ったときは、20年近く前で、日本との連絡といえば手紙ぐらいだったのですが、今はインターネットが普及してSkypeもありますから、現地からの発信・連絡というのをやってもらえたるだと思います。ただ、あまりやりすぎると、せっかく途上国にいるのが逆にバーチャルになってしまい、結局日本にいるのと頭の中が変わらないということになるので、気を付けて下さい。皆さんは技術もお持ちですし、社会人としての経験もお持ちなので、援助の実践者としても期待をしています。これから訓練がありますが、訓練の中で言われることはとりあえず置いておくとして、私がいろいろな隊員を見て来て感じたところを話します。現地にはいろいろな人がいます。JICA関係者の中にも、先程言いました専門家やJICAのスタッフなどいろいろな人がいますので、そういう方々といろいろな幅広い視点から交流し、意見交換してもらえるといいと思います。そうすると、普通の隊員だと自分の活動にそれこそ一生懸命というもののですが、それを一步ひいて高いところから見てもらえるようになるのではないかと思います。そういう視点から見ると、国によっては日本の在留邦人で他の仕事をされているとか、日本人学校の先生などもいらっしゃるので、そういう方々と交流・意見交換というのも大切なと思います。

また、皆さんのレジュメには入れていないのですが、現職参加である皆さんは仕事を持っている社会人であるということ、それから恐らく全員かと思うのですが、公務員ですね。これもすごい特徴であり、また先生という、非常に特徴的な3つの肩書をお持ちなので、それを意識しつつ活動してもらえたると思います。現職ということでは、私もそうだったのですが、大変な使命感・責任感というものを抱える部分があると思います。自分たちを送りだしてくれている、自分のために迷惑が掛っている人のためにきちんとやらないという気持ちがあるのですが、それが余り強すぎるとプレッシャーになるので、そこは適宜上手くやっていただければと思います。また、公務員という立場で行くと、JICAの現地スタッフというのは基本的に税金で雇われているので、やはり公務員的な感覚が強いです。それが普通の隊員になると、一般企業の社員であったり、学生であったりということで、公務員のお金の使い方に非常に疑問があつたりします。そういうところを皆さんによく理解してもらえるといいかなと思います。それから3つの先生ということなのですが、皆さんは、どちらかというと日本の会社の階層や役割がしっかりしている、または上意下達のような考え方などなじみが薄いところがあるかと思います。ところが途上国はそういう縦社会が一層強かつたりしますので、その点は一つ留意していただければと思います。いろ

いろ申し上げましたが、この 3 つの立場ということでは、皆さんにはボランティアとしても模範になられる存在だと思いますので、そういう意識のもとにやって下さったらと思います。しかし、それだけでは息が詰りますので、時々はリラックスして下さい。日本と比べてとても自由な社会なので、大いにリラックスできると思います。そういう形で皆さんの素晴らしい活動を実現してもらえたならと思っています。

最後に先ほど申し上げました JICA 国内センターについては、HP などでも検索してみて下さい。派遣前の表敬でそこにいる方々と>Contactする場面もあります。是非関係を継続させて、日本国内での活動に繋げていただければと思っております。御清聴ありがとうございました。

平成21年度青年海外協力隊
現職教員特別研修

ボランティアの社会還元と派遣現職教員への期待

独立行政法人国際協力機構(JICA)
地球ひろば 市民参加協力促進課
課長 高田 宏仁

本日のプレゼンテーションの内容

1. ボランティア経験の社会還元
2. JICAの行う開発教育支援事業
3. その他有用なスキーム
4. 活動のイメージ(教師海外研修のOBを事例)
5. 帰国後に期待すること
6. 赴任中にお願いしたいこと

1. ボランティア経験の社会還元

今、ボランティア経験の日本社会への
還元に期待が高まっています！

社会還元の内容

- ① ボランティア事業の紹介
- ② “経験”を活かした就業
- ③ 国際理解の推進
- ④ 地域の活性化
- ⑤ 多文化共生社会への対応

**学校現場への
経験の還元**

2. JICAの行う開発教育支援事業

JICAの行う活動

市民参加協力事業

開発教育とは…？

2. 開発教育支援事業

地球規模の開発をめぐる諸問題 → 共に生きることのできる公正な社会の実現

解決に向けて参加する態度と能力を養うための教育学習活動

● 多様性の尊重 "理解"から"行動"へ
 ● 開発問題の現状と原因 → ● 私たちのとりくみ
 ● 地球的諸課題の関連性
 ● 世界と私たちのつながり

開発教育

1960年代、北米・ヨーロッパのNGO活動から誕生

2. 開発教育支援事業

国際理解教育

【UNESCO】
 -ユネスコ憲章
 -1974年「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」

【日本の国際理解教育】
 1984年
 -臨時教育審議会答申
 1996年
 -中央教育審議会答申

開発教育と国際理解教育

概念整理の例

JICAでは、開発や国際協力の取り組みを促進する立場から「開発教育」を使用

総合的な学習の時間と開発教育

□ 総合的な学習の時間
1996年中央教育審議会答申⇒導入
「国際理解、情報、環境、福祉・健康」

学校現場から、NGOや国際交流協会、JICAなどの外部機関への要請が急増

2007年:新学習指導要領で、総合的な学習の時間の削減が決定(中教審)

今後の動向を注視

事業の対象者

事業の例～知見の還元

□ 国際協力出前講座
・年間2400件
・20万人以上が受講

□ JICA施設訪問
・年間約1,000校

□ 開発教育のための教材の作成
・集まれ！地球の教室
・ホームページ：「僕ら地球調査隊」
<http://www.jica.go.jp/kids/pages/index.html>

事業の例～考える機会の提供

□エッセイコンテスト
・中学生、高校生を対象に国際協力に関するエッセイを募集
・上位賞受賞者は海外研修旅行を提供

□教師海外研修
・10日間の日程で途上国を訪問し国際協力の現場を視察

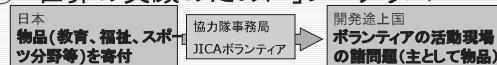
□国際協力実体験プログラム
・小学校、中学校、高校生に開発問題等を考えてもうプログラム

事業の例～橋渡し役

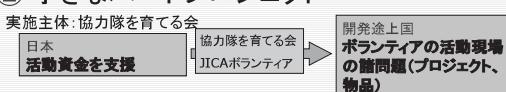
□ 開発教育指導者研修
・開発教育の「担い手（=教師、市民など）」育成を目的
・地域で開発教育に携わっている市民団体等と協働で実施

3. その他有用なプログラム

①「世界の笑顔のために」プログラム



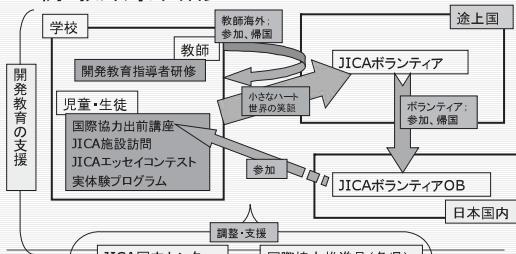
② 小さなハートプロジェクト



* いずれも本来業務への支援を除く

4. 活動のイメージ

□ 例：教師海外研修OB



5. 帰国後に期待すること

現職派遣教員の皆さんへ

- 国際理解教育／開発教育
□ ボランティア経験の社会還元

国際協力への理解促進、支持の拡大、市民の参加に「協力」をお願いします。

そのような活動をJICAも全面的に支援します。

6. 職任中にお願いしたいこと

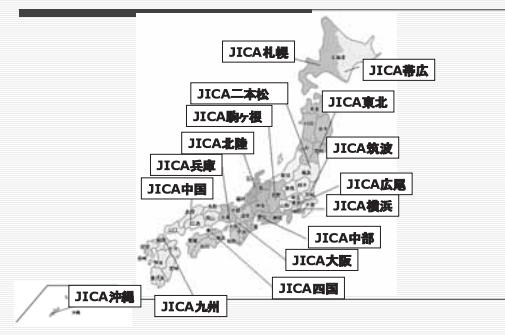
① 開発教育実践のために

- 材料の現地調達を。(写真、ビデオ、民族衣装、生活用品等)
 - 現地から発信／連絡を。

② よき援助実践者として

- 現地の実情の把握・幅広い視点から(他のボランティアな、専門家、JICA関係者など)
 - 現地関係者との交流・情報交換を。(在留邦人等)
 - 「現職」「公務員」「教師」としての立場

帰国後(出発前)はお近くのJICA国内機関をお訪ね下さい!



ご静聴、ありがとうございました。

ご不明点等ありましたら、
JICA地球ひろば(広尾センター)
市民参加協力促進課(03-3400-7254)まで。

プログラム 2

国際理解教育～ヒト・モノ・コトを 通した国際理解と交流～

手嶋 將博

(文教大学)

平成22年1月9日 青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア
現職教員特別研修

国際理解教育概論 ～「理解」から「共生」へ～

手嶋 将博
(文教大学教育学部)

1

I. 共に生きる教育

2

I. 「共に生きる教育」とは？

1. 「共に生きること」の意味

- 「共生」とは？…人間同士のかかわり、人間の生き方、あるいは人間と環境のあるべき姿を示す言葉。
例：「障がい者と健常者」「民族共生」「男女」「若年者と高齢者」など。
- 現実の力関係をそのままにして、「ただ仲良くする」ことだけを強調すると、結果的に差別を助長したり、人権侵害を隠蔽したりするといった問題を孕んでいる。
⇒対等な立場の「共生」ではなく、単なる「受容」（強者が弱者に「手を差し伸べている」状態）に陥りやすい。

3

1. 「共に生きること」の意味

- 「共生」の基本…「自己を知ることから始まり、自己と他者の関係を築くという対話的課程」
(ユネスコ21世紀教育国際委員会『学習：秘められた宝』より)
- 共生を実現するための二つの提案
 - ①「他者を見発見すること」（自己を知り、他者を知る
⇒他者との共感性の発達）
 - ②「共通目標のための共同作業」（スポーツ、文化活動、地域活動、奉仕活動など）
- 日常的な教育活動において、共同で課題を解決していくことで実現化。

4

2. 「共生」を柱にした教育とは？

(1)「共生」の3つの柱

- ①「自分との共生」…個性を含めた、あるがままの自分を受け入れること（自己肯定感）。
- ②「他者との共生」…自分と他者のつながりを作ること（身近なレベルで異なる背景を持つ人々との交流によって可能）。
- ③「環境との共生」…さまざま「違い」を超えた相互理解によって、新しい価値を基盤にした生活環境を作り上げていくこと（自然との「共生」も含む）。

5

2. 「共生」を柱にした教育とは？

*「共生を柱にした教育」=自己との共生を基盤にして、他者と関わりつつ、自分の生活を認め、より良い環境を共につくり上げていくこと。

↓

その具体的な手法として

1. 自分と向き合う
2. 他者への共感的理解
3. 生活を振り返る

といった学習が求められる。

6

3. 「共生する力」をどう育てるか？

* 単なる「スキル(技能)の習得」では育たない。

①批判的思考力

②知を構成する力

③人とかかわる力

④違いを認め、受容する力

⑤他者への想いと想像力

7

4. 「共生」ための実践の視点

* 教師の実践への振り返り…既成の枠組みの中で子どもたちをとらえてしまうことへの疑問。

↓

①「人とのかかわり」…地域の人々、身近な友達、障害者などとの関係を中心にする。

②「違い」をきちんと説明できるように新たな単元や教材を開発。

③外国籍の子ども一人ひとりの背景を生かす。

☆教師同士の協働…個々の力ではなく、地域の教員同士、ボランティアなどの協力体制での実践。

8

II. 国際理解教育 の概要

9

国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)
(United Nations Educational, Scientific and
Cultural Organization)

■ 教育や文化の振興を通じて、戦争の悲劇を繰り返さないとの理念から、設立を定めた
ユネスコ憲章の前文には、
「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、
人の心の中に平和のとりでを築かなければなら
ない」
との文言があり、ユネスコ設立の目的とその精
神を顕著に表している。

10

ユネスコ・1974年第18回総会

「国際理解、国際協力及び国際平
和のための教育、並びに人権及び
基本的自由についての教育に関する勧告」

の採択。7項目の指導原則を提示。

11

指導原則・7項目の内容

1. 国際的側面と世界的視点に立つ教育。
2. 全ての民族、文化、文明、価値及び生活様式(多文化教育)に対する理解と尊重。
3. 諸民族及び諸国民の間に世界的な相互依存関係が増大していることの理解。
4. 他の人々と交信する能力(特に情報発信能力)。
5. 権利と相互に負うべき義務が、個人、社会集団、国家それぞれにあることの認識。
6. 国際的な連帯と協力についての理解。
7. 一人ひとりが自分の属する社会、国家および世界全体の諸問題の解決に参加する用意を持つこと。

12

国際理解教育の主な内容

(The main contents of international understanding education)

1. 異文化理解(Inter-cultural understanding)
2. 自文化理解(Self-culture understanding)
3. コミュニケーション能力(Communication ability)
4. 国際交流・協調
(International exchange and cooperation)
5. グローバル教育(Global education)
6. 人権教育(Human-rights education)

13

1. 異文化理解

(Inter-cultural understanding)

■国際理解教育の代表的な「3F」(文化的特徴が表れやすいため、現場での実践が多い学習)。

◎Fashion(衣)・Food(食)・Festival(祭祀)

■「自分たちと異なるもの(文化／宗教／習慣など)」に対する正しい理解と寛容(tolerance)の態度／実践を身に付ける。

■日本のように「食文化」に関わらせる異文化理解学習ができることは、非常に貴重な体験学習である。

■ステレオタイプな知識の詰め込みになり易いので、気をつける必要がある。

14

2. 自文化理解

(Self-culture understanding)

- 自分たちの国や郷土／地域の文化的特徴について正しく理解する。
- 体験的学習などを通して、その知識／情報を、正しく伝えられるようになる。
- 広くとらえれば、現代社会の中で起きる様々な出来事全てを題材にできる。→広く社会を見る視点や思考力を養うことができる。
- エスノセントリズム(ethnocentrism:自民族中心主義)に陥らないよう注意する必要がある。

15

3. コミュニケーション能力

(Communication ability)

- 自分の考えをまとめ、的確に相手に伝えることができる能力。
- 言語活動が含まれるため、国際理解＝英語教育や外国語教育そのものと混同されやすい(目的と方法の混同)。
- 読解力、論述力、表現力などに関する能力が大きな位置を占める(その育成には、国語、算数、実技教科などが全て関係)。

16

4. 国際交流・協調

(International exchange and cooperation)

- 短期／長期の留学や国際的な学校間の交流、あるいは同じ地域に住む外国人との交流などを通して異文化を体験、交流をして行く実践(前記1～3の能力が全て含まれる総合的実践ともいえる)。
- ネット社会の進歩で海外など遠い国や地域との交流も容易になって来ている。
- 世界で起きている様々なことを学び、「共生」の思想、相互依存、国際協力、国際援助などについて正しく知り、考え、行動できる力を身につける(環境教育、情報教育、健康・福祉教育、平和教育、人権教育等とも関連付けられる)。

17

5. グローバル教育

(Global education)

- いわゆる「地球市民(global citizen)」としての素養／意識を高めるための学習。
- 異文化を理解・尊重し、共生できるための知識、技能・能力、価値観、態度を持ち、現代社会の諸問題(環境・人権・平和・開発など)を平和的・民主的に解決できる人間の育成(平田(大分大学):2004年「21世紀を生き抜く市民性教育」の定義より)。
- 地域(local)、国家(national)、地球(global)などといった各レベルで意思決定し行動できる人間の育成。
- 前出1～4. をさらに知識／実践レベルで深め、推し進めて行くことで学習を進められる。

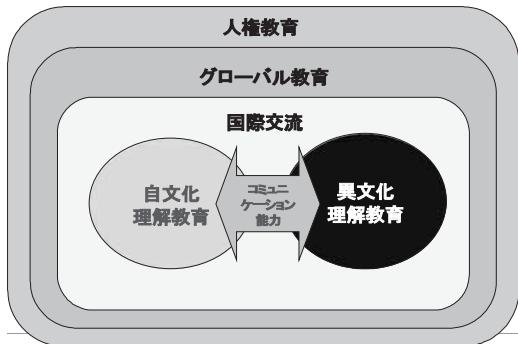
18

6. 人権教育 (Human-rights education)

- 「人権」に関する正しい理解と実践の学習。
- 国際レベルでの学習はもちろん、国内、あるいは日常的なレベルでも関わりが深い。
- 扱いに十分な配慮が必要な場合も多く、学校現場で学習するには難しいケースもあるため、これまで国際理解教育の中で扱われることが少なかった分野のひとつ。
- いじめ問題や差別、青少年犯罪などとの関わりもある分野なので、まず身近なレベルから始め、国際／国内等各レベルとのバランスを保ちながら進めることが期待される。

19

国際理解教育の構造



20

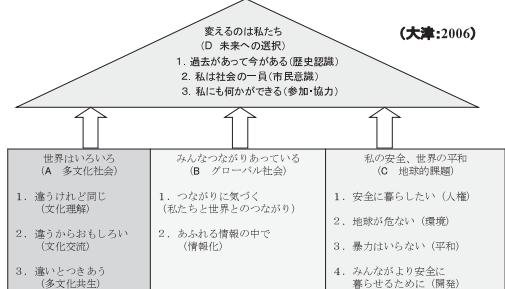
まとめ: 国際理解教育の課題

- ①異文化に対するステレオタイプではない認識をどのように持たせるのか。
- ②自文化への興味／関心と正しい知識の育成。
- ③英語教育≠国際理解教育という観点に立った方法論としての英語(言語)教育の見直し。
- ④市民レベルでの国際交流／協調の推進。
- ⑤「地球市民」を目指したグローバル教育の推進。
- ⑥広い意味での人権教育のさらなる推進。

21

III. 国際理解教育のカリキュラム開発

3-1. 国際理解教育のカリキュラム開発 -学習領域の構造-



23

3-2. 国際理解教育のカリキュラム開発 -実践的枠組-

キーワード 学習領域	1	2	3	4
A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	-
B グローバル社会	相互依存	情報化	-	-
C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	-

24

平成22年1月9日 青年海外協力隊・日系社会
青年ボランティア
現職教員特別研修

国際理解教育事例 ～ヒト・モノ・コトを通した国際理解～

手嶋 将博
(文教大学教育学部)

国際理解の3つのパターン

- ヒト(人)を通した国際理解…留学生や地域の外国人等との交流などを通して
- モノ(物)を通した国際理解…日用品や道具などの「五感」を通して触れるモノを通して
- コト(事柄)を通した国際理解…祭祀や習慣、行事、行動に伴う考え方等の「文化的な異同」を通して

国際理解教育実践における課題

- ヒト(人)を通した国際理解…一緒に何をしたらしいのか、あるいは何を質問していいのかわからない(表面的・形式的になりがち)。
- モノ(物)／コト(事柄)を通した国際理解…文化や習慣の「違い」の強調のみになりがち。「つながり」の実感が乏しいまま、そのとき限りのイベントで終了しやすい。
- いずれにしても、継続性や学びの深まりに欠け、手間の割に成果が見えない場合が多い。

国際理解教育の実践における留意点

- * 「国際理解」の究極の目的=「共生」
- * 基本は「人間理解」→学校で普段から行われていること(自分を大切にする、お互いを尊重し、認め合う)の延長線上にある
- * 新しい価値を基盤にした生活環境(=「公平」な生活環境)の意識の涵養
- といったことをねらいにした「継続的」で「学びあい」に繋がる実践。

実践事例:

博物館アウトリーチ教材の開発 ～マレーシアでの実践を通して～

木村 慶太	立命館守山中学校
山田 幸生	鎌田小学校
中島 大輔	鎌田小学校
手嶋 将博	文教大学
クマラグル ラマヤ	マレーシア工科大学
今田 晃一	文教大学

これまでの実践の流れ

2003年 博学連携について学習指導要領に明記



国立民族学博物館と連携した国際理解教育

年度	香芝西中学校	鎌田小学校
2005	ミニ博物館づくり	ミニ博物館づくり
2006	ミニ博物館づくり 日本版みんぱくの製作	ミニ博物館づくり
2007	マレーシアへの送付と実践 マルチメディア解説	日本版みんぱくの製作
2008		マレーシアへの送付と実践

レインツリー 雨の木



レインツリーは、文字通り雨の音がする楽器です。枯れたサボテンの幹とトケと砂漠の小石を使い作られます。小石がゆっくり落ち、トケにあたる音が、雨の音に聞こえるのです。カトカマ砂漠では現在も雨乞いの儀式の道具として使われています。

<感想>
初めてレインツリーを見たとき、ただの木の棒だと思ったけど、音を聞いてすごい綺麗だと思った。調べてみて、サボテンから出来ている、という事にまた驚きました。
これだけ、雨の音に似ているのだから、雨乞いにも効果がありそうだと思いました。皆さんも、是非レインツリーを頼けてみて下さい。綺麗な音に、感動すること間違い無しです!!!!

<引用・参考アドレス>
<http://benigamu.blog72.fc2.com/blog-entry-404.html>
<http://www.african.jp/tinatingsa/shop/ethnic.html>
<http://www.tiine.jp/milky/gakki/rainstick.html>

本実践研究の目的

- 「日本文化」の再発見
- 異なる文化を持つ他者への日本文化の発信
- マレーシアへの送付及び現地での評価を通して両国の「日本文化」に対する認識の違いを比較検証する
- 本実践を通した中での両国の児童・生徒の意識変容に関して考察を行う

本実践研究のプロセス

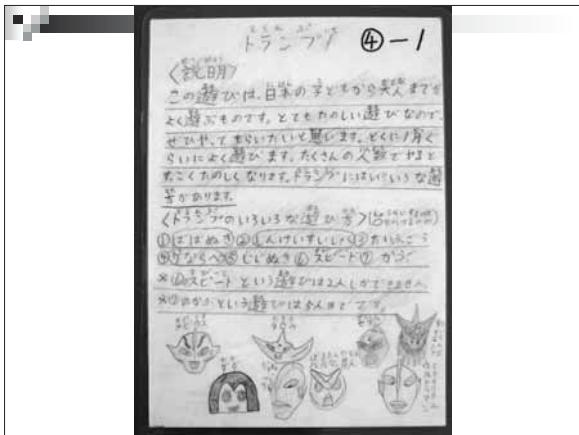
- 民博を訪問後、民族学的資料及び解説ラベルを調査
- 「みんぱっく」を活用した授業の展開
- 「日本文化」を紹介するアウトリーチ教材の生徒自身による選定
- 日本の中学生による「日本版みんぱっく」の作成
- マレーシアへ送付。現地の中学生に「日本版みんぱっく」の評価をしてもらう。
(タマン・デサ・スクダイ国民中学校)





<児童が選んだ資料>

学校で使用するモノ	ランドセル、文房具類、絵の具 習字道具
生活に使用するモノ	扇子、うちわ、はし、花の便箋、風鈴
遊びに使用するモノ	こま、べったん、めんこ、万華鏡、折り紙、 千代紙、なわとび、連だこ、だるま落とし、 けん玉、ゲイラカイト、とび出す絵本、トランプ、 ペーゴマ、野球道具、福笑い、かるた
その他のモノ	千羽鶴





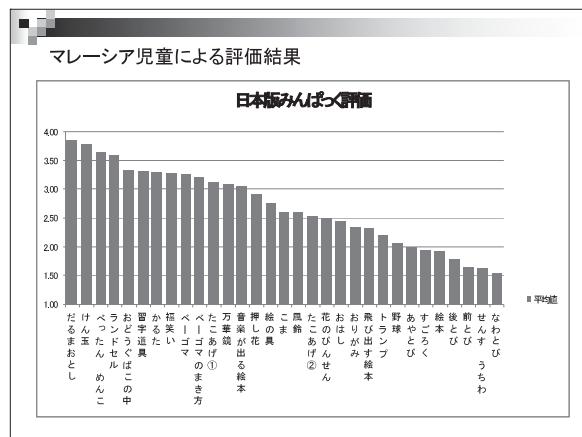
実践の結果

- 「マレーシアで、自分たちが作った教材が実際に使用される」という学習状況の設定が児童の主体的な学びを導く。
- 身近な中学生が作成した「みんぱっく」がより良い見本となり、小学生の学びに刺激を与えた。
- 小学生の資料選定の基準は「生活や遊びに根ざしたもの」が中心であった。
- 中学生版を使ったときのマレーシアの子どもたちの反応では、「日本文化を感じさせるモノ」は、「季節」に関するモノや、日本のマンガ、アニメから得た情報に関するモノであった。

今後の展開

- マレーシア留学生らの協力を得て、解説ラベルをマレー語に翻訳。
- H20年8月に、小学生版日本文化を紹介するアウトリーチ教材をマレーシアの小学校において実践。
- H21年、マレーシアの小学生から得た評価をもとに、さらにBRUSH UPした、アウトリーチ教材を製作することで児童の学びをより深めた。
- H22年度以降、マレーシアの小学生が製作したマレーシア版アウトリーチ教材(マレー版みんぱっく)を日本で実践し、交流の予定。





実践のまとめ(1)

- 独楽、凧、箸、扇子、風鈴等(日本にもマレーシアにも存在するもの)…形状や使い方(遊び方)の「違い」が分かると関心が高くなる(異文化の認知・理解による関心度の上昇)。
 - お道具箱とその中身(3.33)、ランドセル(3.60)、習字道具(3.31)、絵の具セット(2.75)などの学用品や、音楽の出る絵本(3.06)などは、マレーシアの児童がそれを選択した理由として、コンパクトに収納できたり、いろいろ便利な機能が付いていたりしているという点で日本らしいと感じたという意見が多かった(日本の技術面・器用さへの評価)。

実践のまとめ(2)

- 剣玉(3.78)、だるま落とし(3.86)などの初めて見る遊び道具、特に木でできたモノに強い関心が示された。他にも、めんこ(3.65)やかるた(3.30)、福笑い(3.27)、ペーゴマ(3.27)などの日本にあってマレーシアにはない遊びへの関心も相対的に強い(木でできたモノへの関心・初めて見るモノへの関心)。
 - 万華鏡(3.10)、押し花(2.92)などの「繊細さ」に日本らしさを感じる傾向が見られた(繊細さ・技術への評価)。

実践のまとめ(3)

- 野球道具等(マレーシアでは行われないスポーツ用具)…非常に関心が強いが、「日本文化」であるという意識は低い。
- 児童が日本に紹介したいマレーシアの遊び…“チヨンカ”(伝統的ボードゲーム)や，“マレー凧(ワウ)”，セパタクローなど多数が挙がった。
- 一方、サッカー、TV・パソコンでのゲームなどもあり、日本の児童との共通項も多く見られた(グローバリゼーションの影響?)。

実践による日本の児童・生徒の変化

- 「自作アウトリーチ教材を外国で使ってもらう」という学習目標により、児童・生徒に「自分たちが日本の代表として自国の文化を紹介するのだ」という自覚と意欲を喚起させた。
- 双方の児童・生徒にとって、異文化についての学びを通して自分自身の意識を知り、自文化に“見つめ直し(再考察)”や、なぜそのような意識が形成されたのか、という考察を深めた。
- 自作アウトリーチ教材が実際にマレーシアで活用される映像・写真を見ることで、児童・生徒は達成感と、一層の興味・関心を得た。? 学習の継続／発展

実践によるマレーシア側の評価

マレーシアにおいてもこの実践によって、日本の同世代の子どもたちの日常を知るだけでなく、自国の子どもたちの「日本文化」に対して抱いている意識を知ることが可能となる取り組みである、と(現地の教員にも)大変好評であった。? 「マレーシア版みんぱく」を作りたい、というマレーシアの小学生の意欲を喚起した。

実践後の児童の学習の発展(1)

- マレーシアから得た小学生版「日本版みんぱく」に対する評価をもとに、鎌田小学校の児たち(5年生に進級)は、現担任の中島大輔教諭のもとで、ブラッシュアップしたアウトリーチ教材を製作するために、以下の3つの視点…
①木材で出来たもの、②日本の技術を感じられるもの、③冬を感じさせるもの
を自ら考え出した。

実践後の児童の学習の発展(2)

- 日本版みんぱく改良の過程で、今まで自分たちが使っていた「木のおもちゃ」原材料の木材が、実はマレーシアなどの海外から大量に輸入されていたこと気づき、地球環境に関する関心も深まなど、児童の「学び」をより深める結果となつた。





今後の展開

- 本研究の結果、マレーシアの子どもたちは「遊び」を通して日本の文化を知り、日本の子どもたちはアウトリーチ教材の製作を通して、異文化である「世界」を意識する一方、自文化としての「日本」への見つめなおしが行われた。
- 今回の成果を生かして、来年度以降、マレーシアの小学生が製作したマレーシア版アウトリーチ教材「マレー版みんぱっく」を用いた実践研究を日本で実践して、教材の内容や、児童による評価結果を比較していく予定である。

プログラム 3

ICT 研修

矢原 弘樹／讚岐 勝／野澤 純子
(筑波大学)

使用機材・ソフト一覧

ウェブカメラ・ヘッドセット: いろいろな商品が市販されています。

研修で使用したものは以下の商品です。

社名: Logicool, 品番: QV-61HSSV, 商品名: Qcam Instant Messenger with Headset

Skype (スカイプ) : フリー ウェア ソフト

<http://www.skype.com/intl/ja/welcomeback/>

Windows ムービーメーカー: Windows マシンにはついています。

ブログ作成: いろいろなブログ開設サイトがあります。

Google blogger <http://www.blogger.com/>

Excite ブログ <http://www.exblog.jp/>

livedoor ブログ <http://blog.livedoor.com/>

Yahoo! ブログ <http://blogs.yahoo.co.jp/>

MSN Spaces <http://spaces.msn.com/>

ココログフリー <http://www.nifty.com/pleasy/cocolog/index.htm>

.....

参考

MSN メッセンジャー: フリー ウェア ソフト

<http://messenger.msn.co.jp/Xp/Default.aspx>

Yahoo メッセンジャー: フリー ウェア ソフト

<http://messenger.yahoo.co.jp/>

eメールアカウントを作ろう！！

eメールを使うとインターネットを通して文章を交換できます。

多くのポータルサイト(Yahoo! Japan, MSN Japan, Livedoor, etc.)ではフリーメールのアカウントを無料で作成できます

フリーメールはインターネット上に存在するメールサーバ上に受信メールを保存します

Yahoo! メール

<http://jp.f40.mail.yahoo.co.jp/>



Excite メール

<http://www.excite.co.jp/mail/>



Windows Live Hotmail

<http://get.live.com/>



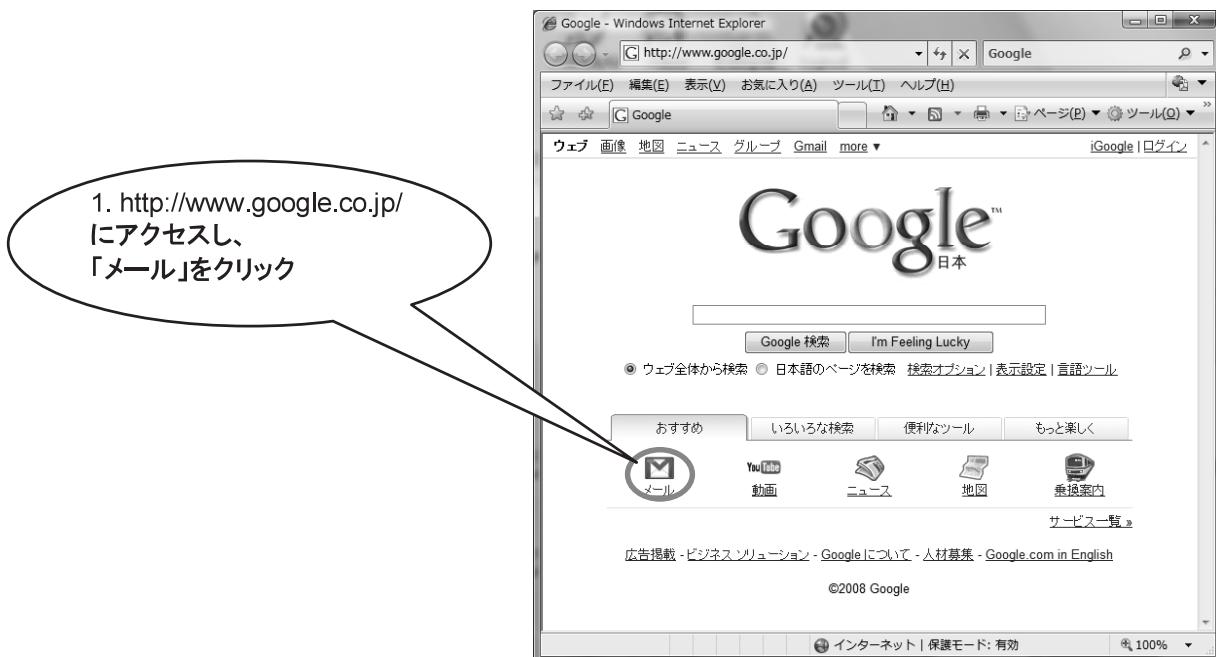
eメール作成に必要なもの：
インターネット接続

eメール作成法-1

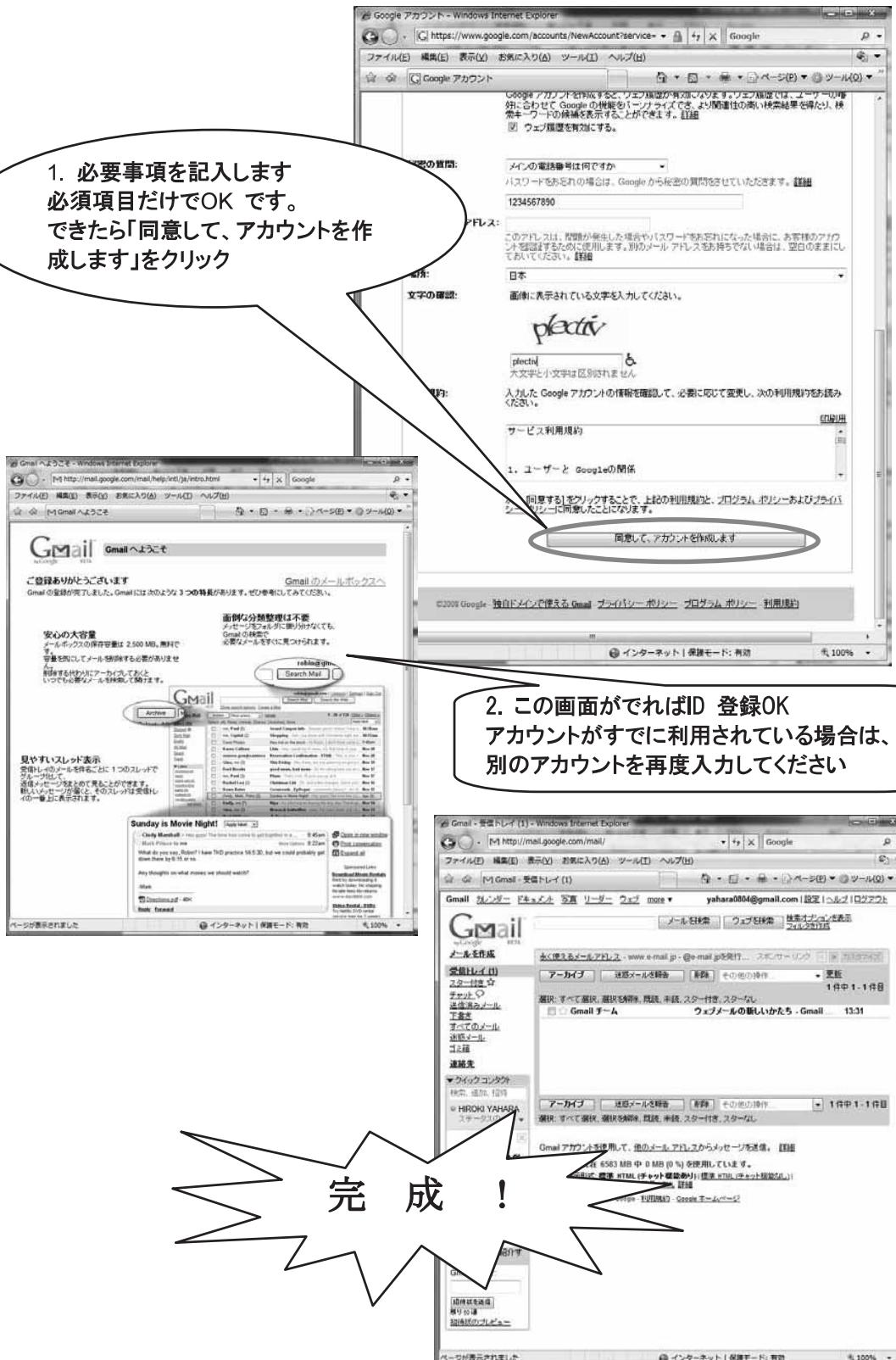
- 43 -

ポータルサイトにアクセス (Gmailの場合)

<http://www.google.co.jp/>



Gmailアカウントの取得



e メール作成法-3

ブログを作ろう！！

ブログ（Weblog）は、インターネット上で構築できる日記形式のWebサイトです
Webページを作成するために必要なHTML言語の知識がなくても簡単に作成できます
多くのポータルサイト（Yahoo! Japan, MSN Japan, Livedoor, etc.）では無料で作成できます

国際協力・NGO 情報ブログ
<http://globalcitizen.jp/>

The screenshot shows a blog post titled "タイ銃撃事件、開幕作業始まる" (Thailand shooting incident, opening operations start) dated March 27, 2006. The post discusses the shooting of a reporter by the Thai military and the subsequent investigation.

ブログ作成に必要なもの：
インターネット接続

平成17年度1次隊小川建治先生(ミクロネシア)のブログ
[http://kyap.exblog.jp/ \(エキサイトを使っています\)](http://kyap.exblog.jp/)

Everlasting Wind blog
kyap.exblog.jp

The screenshot shows a post from April 2, 2006, titled "初公開！これが通知表だ！" (First public! This is the notice sheet!). It includes a table of data and a note about the event being held in Okinawa.

Google Blog Search
<http://blogsearch.google.com/>

The screenshot shows the Google Blog Search interface with the search term "Google" entered. It displays various blog posts related to the search term.

Google ではブログのみの検索エンジンも
開発されています
<http://blogsearch.google.com/>

ブログを開設しよう（blogger の場合）

<https://www.blogger.com/>



1. <https://www.blogger.com/> にアクセスし、「今すぐブログを作成」をクリック



3. ブログのタイトル、アドレスを記入して、「次へ」をクリックします。



4. ブログに適用するテンプレートを選択して、「次へ」をクリックします。



完成！



記事を投稿しよう



ブログー4

画像を投稿しよう

1. 画像を入れようとするコメントの

ボタンをクリック



Blogger: つくばの大自然 - 投稿を作成 - Windows Internet Explorer

http://www.blogger.com/post-create.g?blogID=3818735566250185512

ファイル(E) 編集(V) 表示(U) お気に入り(A) ツール(T) ヘルプ(H)

ホーム ブログの表示 ブログの編集 ブログの新規作成 ブログの削除 ブログの複数選択

ログイン情報 ログアウト ヘルプ ログアウト

つくばの大自然

投稿 設定 レイアウト プロフィールの表示

作成 投稿元選択 コメントの管理

タ イ ル:

題名: はじめまして

本文:

つくばにも春がやってきました。

このブログでは、つくばにある大自然を紹介していくと思っています。
よろしくね。|

HTMLの編集 作成 プレビュー

書式オプション この投稿のラベル: スクーター、旅行、秋

ショートカット: Ctrlキーを押しながら次のキーを押します: b=太字, i=斜体, P=公開, S=保存, D=下書き 詳細

投稿を公開 SAVE NOW 下書きは 15:22 に自動的に保存されました

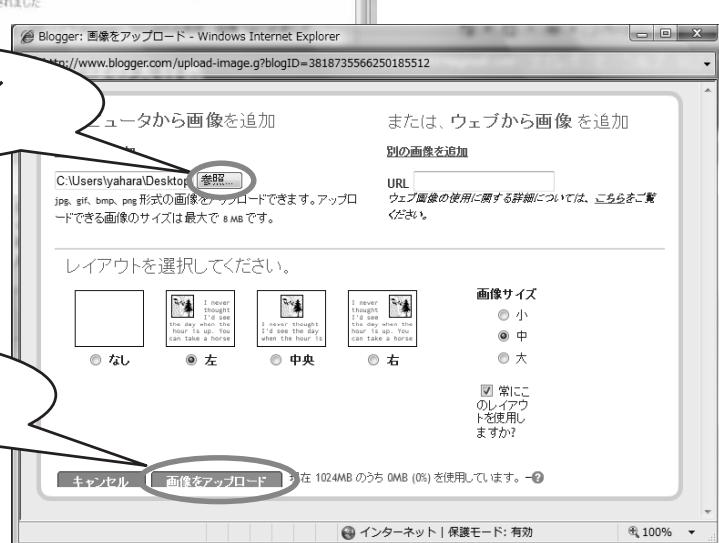
投稿のリストに戻る

2.

ボタンをクリック

3. 参照ボタンをクリックして、画像ファイルを選択

4. 「画像のアップロード」をクリック



ブログー5



5. 「完了」をクリック

6. 「投稿を公開」をクリック



7. できあがり

記事を編集・修正しよう

希望例：表示される画像が大きすぎる。もっと小さくしたい！

1. コメントの笔ボタンをクリック

2. 画像を選択すると、画像の周りに□マークが出るので、右下の□をドラッグして大きさを調整する

3. 「投稿を公開」をクリック

4. できあがり

ブログをかっこよくしよう（ブログの設定） 希望例：もっとサファリっぽくしたい！

1. 「カスタマイズ」をクリック

2. 「新しいテンプレートを選択」をクリック

3. 「Harbor」を選択

4. 「テンプレートを保存」をクリック

5. 「ブログを表示」をクリック

skinsはより細かくカスタマイズできます。興味のある方は「編集」からカスタマイズしてみてください。
要HTML, CSS 知識。

完 成 !



参考

エキサイト以外のポータルサイトでも無料でブログを作成できます。サイトによってデザイン等、設定できるものが異なりますので、色々試してみてください。以下、参考ブログサイトです。

- <http://www.excite.co.jp/>
- <http://blog.livedoor.jp/>
- <http://blog.goo.ne.jp/>
- <http://blogs.yahoo.co.jp/>

画像を圧縮しよう

ブログ上では掲載できる写真は500kバイト程度なので、それを上回るデータサイズの画像は圧縮する必要があります。ここでは「縮小専用。」というフリーソフトを用いて画像の圧縮をしましょう。

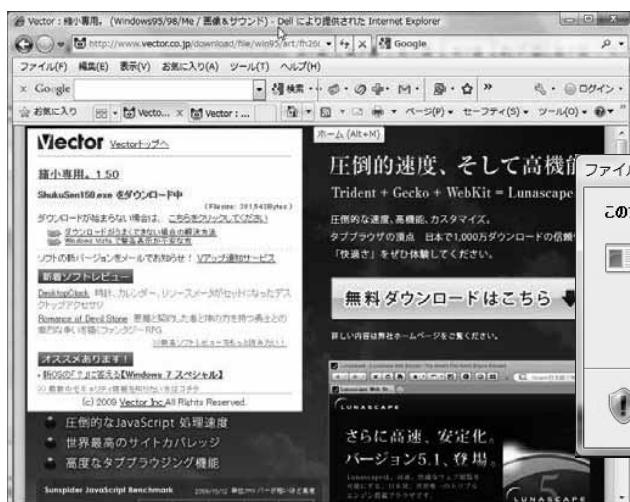


1. ダウンロードサイト「Vector」

<http://www.vector.co.jp/>で「縮小専用。」のダウンロードページ

<http://www.vector.co.jp/soft/dl/win95/art/se153674.html>

にアクセスし、ダウンロードをクリック。



2. 次ページでダウンロードが始まるので、実行。

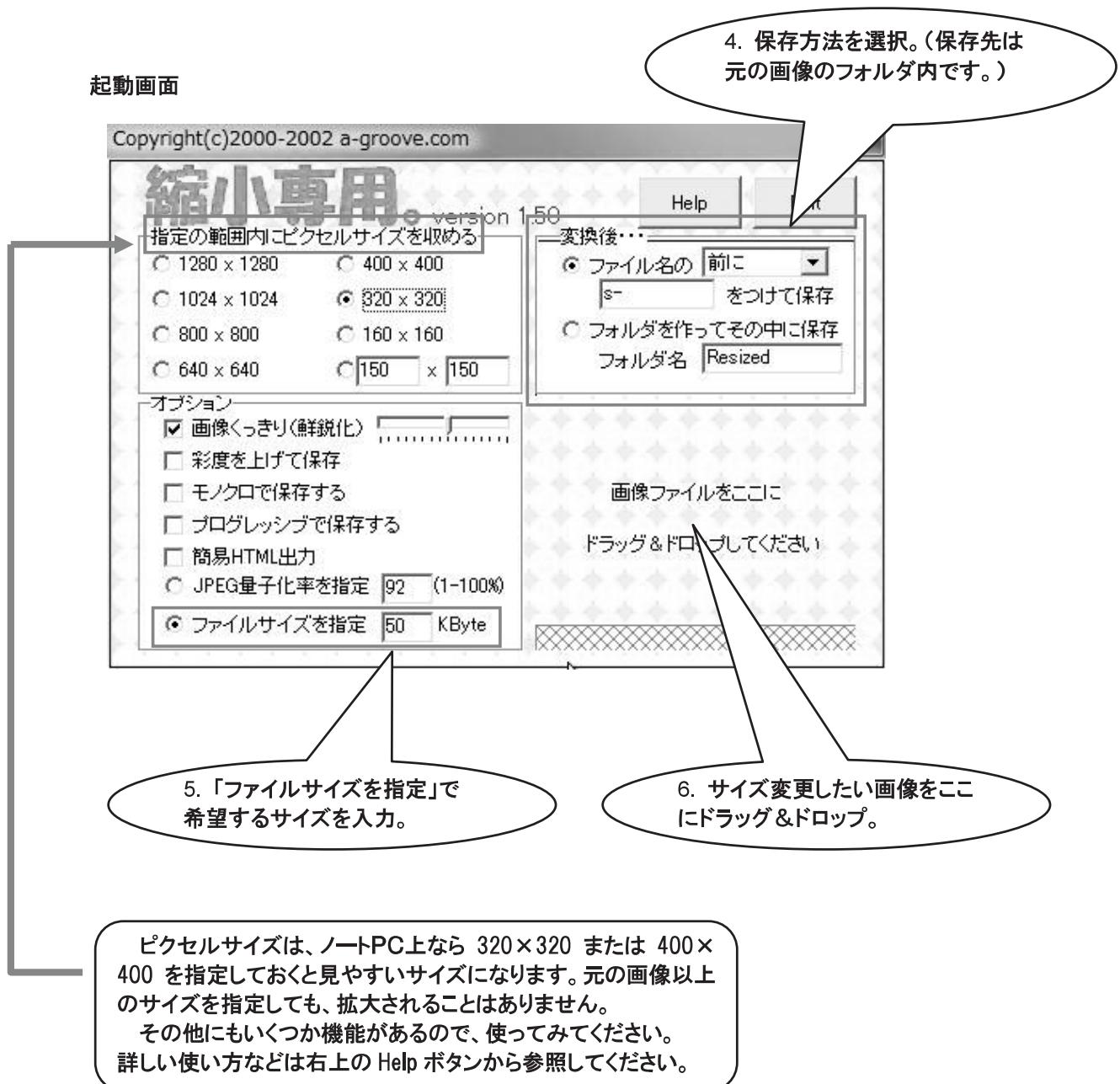


Vista や Windows7 の場合、Program Files 内に解凍しようとするとエラーになることがあるので、うまくいかない場合は解凍場所を変更してみてください。

3. 解凍場所を指定して「OK」をクリック。

解凍した場所に「Syukusen」というフォルダが生成されるので、その中にある「ShukuSen.exe」をクリックして起動してください。

起動画面

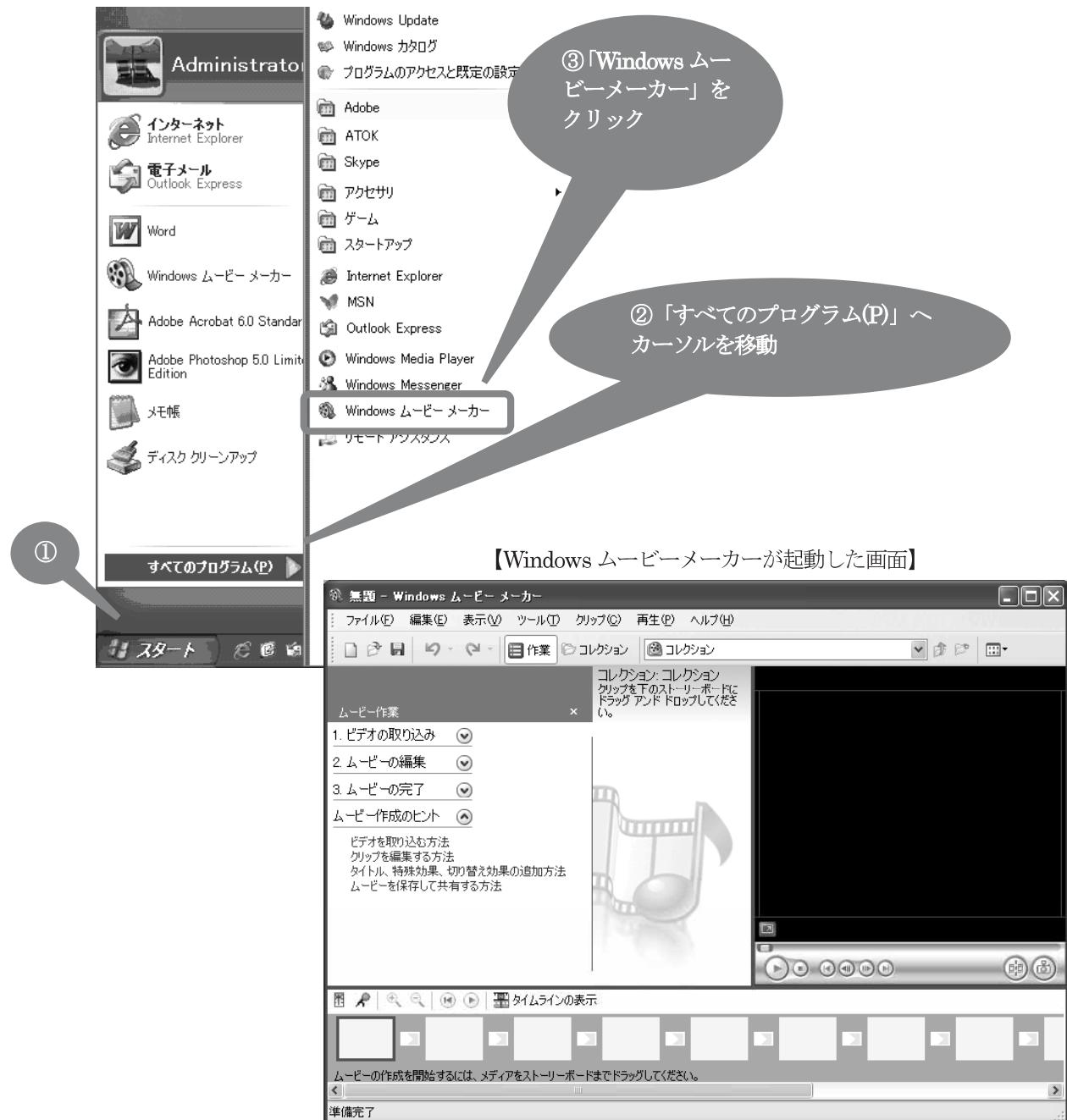




Windows ムービーメーカーは、パソコンにビデオ映像（及び静止画）を取り込み、さらに取り込んだ映像（及び静止画）をつなぎ合わせて1本の映像に編集・保存できます。任地において映像教材を作成したり、任地での活動を映像でまとめたりすることに使えます。

Windows ムービーメーカーを起動しよう

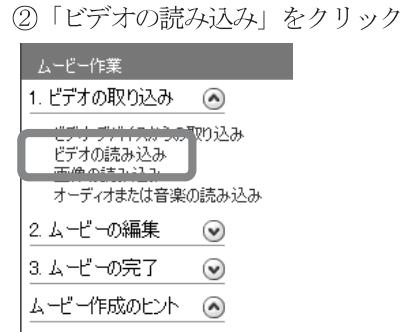
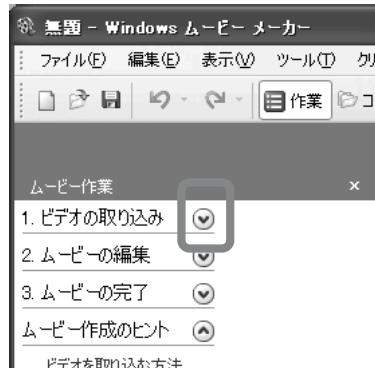
パソコンの画面左下の、①「スタート」をクリックし、②「すべてのプログラム(P)」にカーソルを移動し、③「Windows ムービーメーカー」をクリックします。



ビデオ映像をつなぎ合わせて編集しよう

1. パソコンに保存されているビデオ映像を、ムービーメーカーに取り込みます。

①「ビデオの取り込み」の右横のボタンをクリック



③ファイルの場所を「デスクトップ」にし、「鯉」をクリック



註：「鯉」を選んで、
右下の「読み込み」を
クリックしてもかまいません

再生ボタンをクリックすると、取り込んだ映像が再生されます。

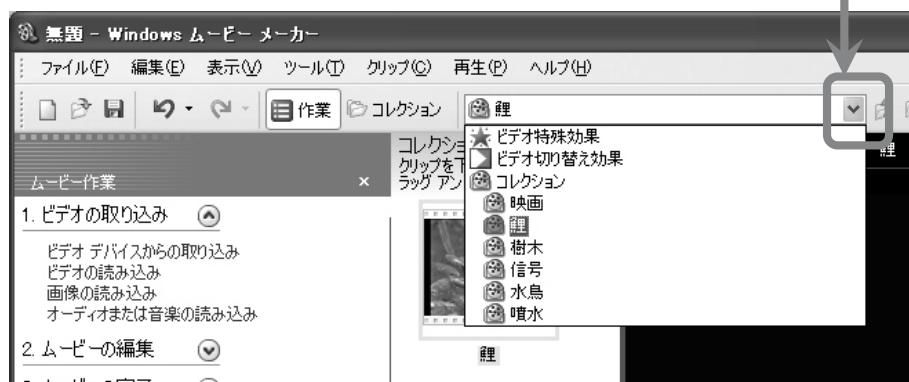
※再生画面に映像が表示されていないときには、画面中央の「鯉」をクリックしてください



④同様に、②と③を繰り返して「噴水」、「信号」、「水鳥」、「樹木」、「映画」を読み込みます。

2. ビデオ映像をつなぎ合わせます。

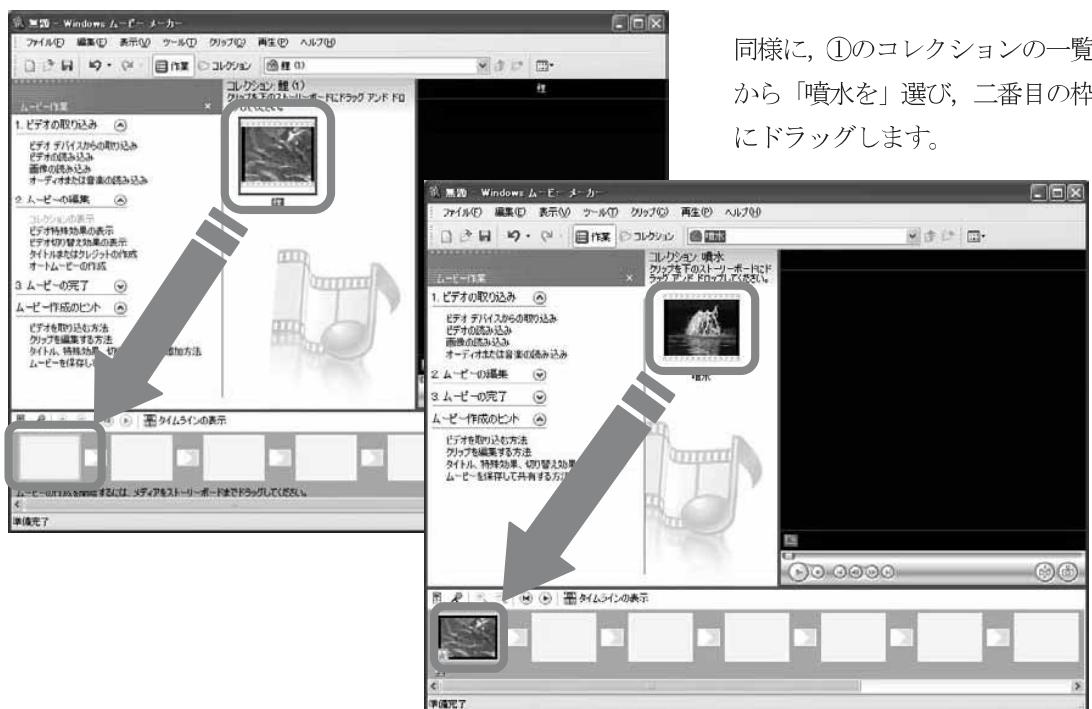
- ①ムービーメーカーに取り込まれた映像等の一覧は、「コレクション」右横のボタンをクリックすると表示されます。



- ②「鯉」、「噴水」、「信号」、「水鳥」、「樹木」、「映画」の順につなぎ合わせるとします。

まず、①のコレクションの一覧から「鯉」を選びます。

次に、画面中央の「鯉」を画面左下の枠にドラッグします。



同様に、①のコレクションの一覧から「噴水」を選び、二番目の枠にドラッグします。

「信号」、「水鳥」、「樹木」、「映画」についても同様に枠にドラッグします。

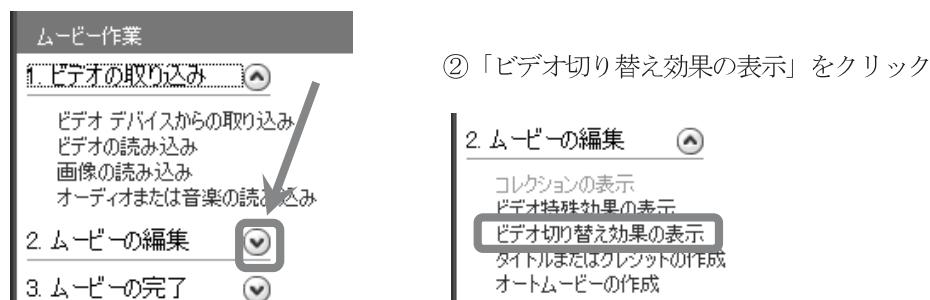


※③ビデオをつなぐ順序を、「信号」、「水鳥」、「樹木」から「水鳥」、「樹木」、「信号」へ変えたいときは、画面下に表示されている「信号」を「映画」の左横へドラッグします。



3. ビデオ映像を切り替えるときの効果をつけます。

①「ムービーの編集」の右横のボタンをクリック

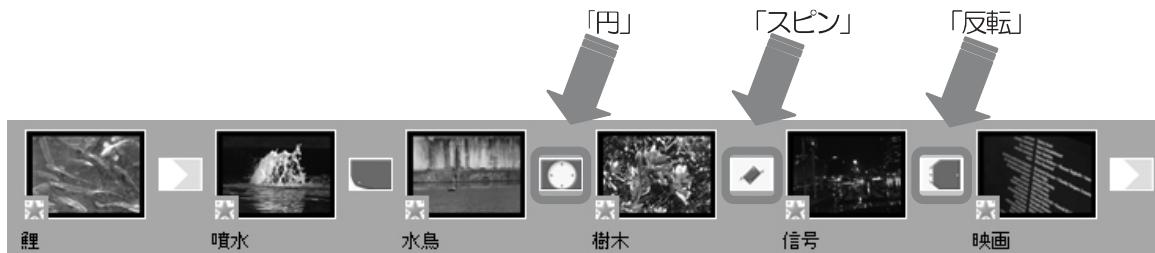


③「噴水」の映像を、ページを右上へめくるようにしながら「水鳥」の映像へと切り替えます。

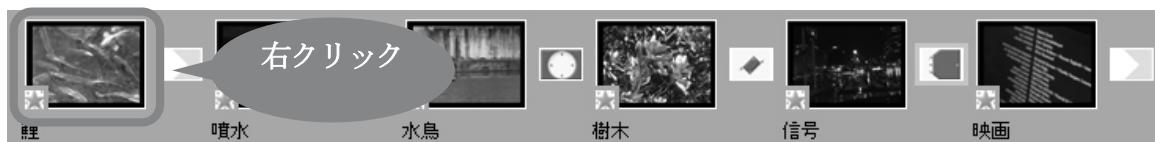
画面中央に表示される「ビデオ切替え効果」一覧の中にある、「ページカール」を画面下の「噴水」と「水鳥」の間の枠にドラッグします。



- ④同様に、ビデオ切替え効果「円」を「水鳥」と「信号」の間、
 ビデオ切替え効果「スピン」を「信号」と「映画」の間、
 ビデオ切替え効果「反転」を「映画」と「映画」の間、の枠にそれぞれドラッグします。



4. ビデオ映像に特殊効果をつけます。
 「鯉」の映像に、「イーズイン」及び「フェードアウト(黒へ)」をつけています。



②□まず、画面下の「鯉」を右クリック。

③次に、「ビデオ特殊効果の表示」をクリック。



- ④「イーズイン」をドラッグし、
 「鯉」にかぶせる。

⑤同様に、「フェードアウト(黒へ)」をドラッグし、鯉にかぶせる。

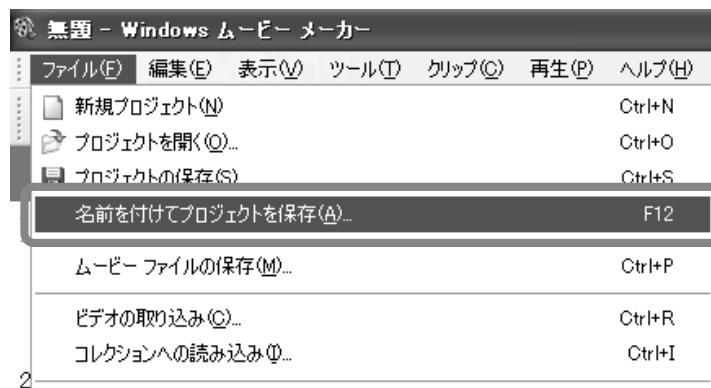
「噴水」についても、同様に、ビデオ特殊効果「フェードイン(黒から)」をつきます。



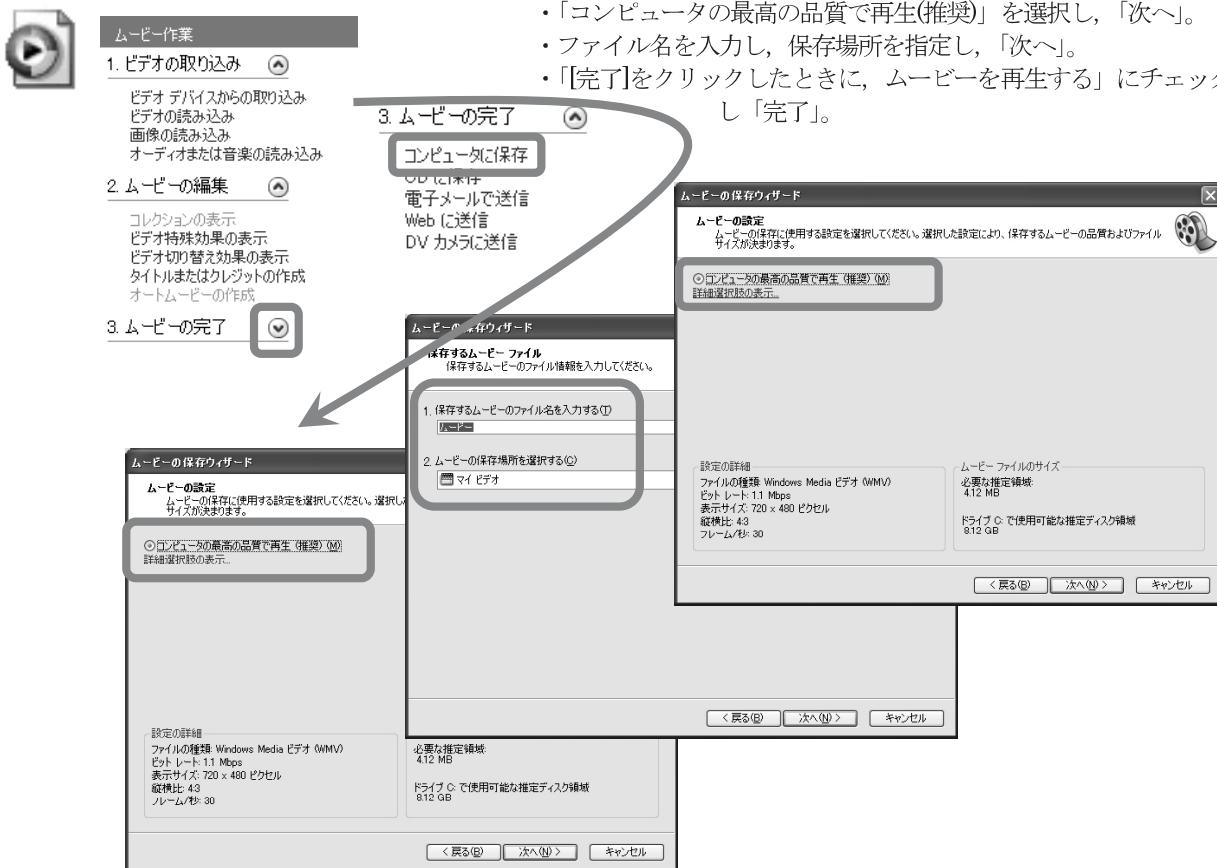
5. ファイルの保存（Windows ムービーメーカーでは「プロジェクトの保存」と呼びます）



「ファイル」から「名前を付けてプロジェクトを保存」をクリックし、Windows ムービーメーカーのファイルとして保存します。



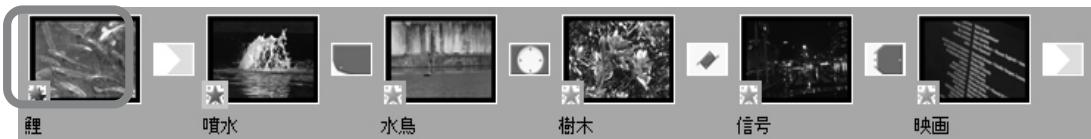
6. 映像ファイルとして保存



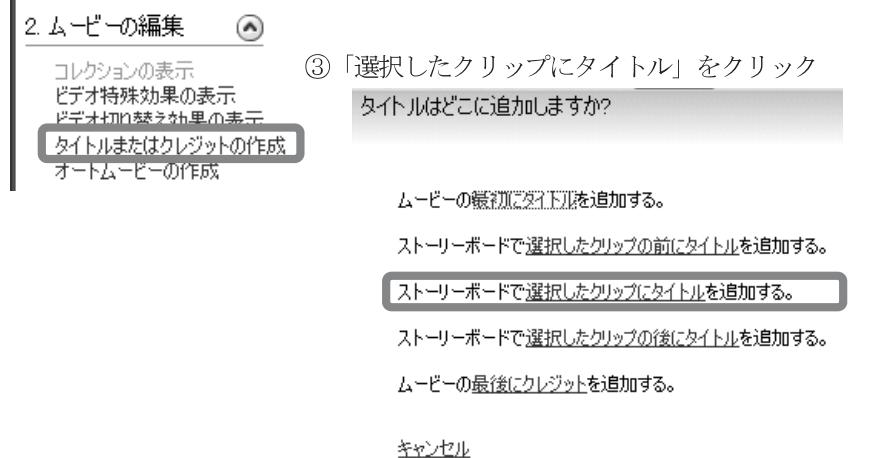
7. タイトルとクレジットをつけます。

「鯉」の映像に重ねてタイトルをつけてみましょう。

- ① □面下の「鯉」をクリック



- ② 「ムービーの編集」から「タイトルまたはクレジットの作成」をクリック



- ④ タイトルを入力します

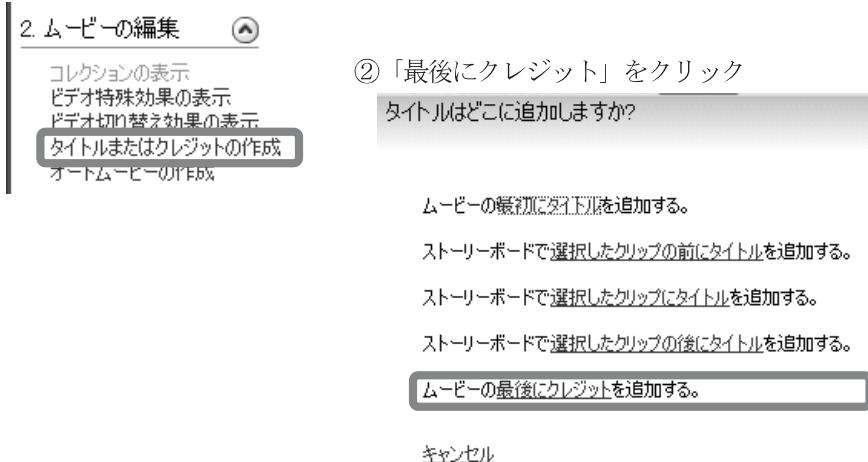
タイトルのテキストを入力
タイトルをムービーに追加するには、[終了] をクリックしてください。



- ⑤ 「終了、タイトルをムービーに追加する」をクリック。

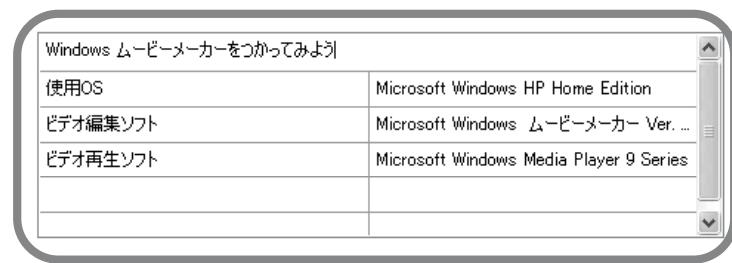
クレジットをつけてみましょう。

- ① 「ムービーの編集」から「タイトルまたはクレジットの作成」をクリック



- ③ クレジットを入力します

タイトルのテキストを入力
タイトルをムービーに追加するには、[終了] をクリックしてください。



- ④ 「終了」をクリック。

8. 全体の微調整をします。

- ① 「タイムラインの表示」をクリック。画面下の表示がタイムラインに切り替わる。



- ② タイトルを表示する時間帯を変更する



③映像の中から必要な箇所だけを採用する（トリミング）

「噴水」の先頭部分を削除してみましょう。

映像を選択して、再生します。



再生しながら、「クリップ」から「開始トリミングポイントの設定」をクリック。

（再生しながら、「Ctrl+Shift+I」の方が素早くポイントを設定できます）



これで、開始トリミングポイント設定位置以前の「噴水」部分は編集画面上から消去されました。

※ 同様に、映像を再生しながら「終了トリミングポイントの設定」または「Ctrl+Shift+0」を行うと、設定ポイント位置以降の「噴水」部分は編集画面上から消去されます。

「5. ファイルの保存」「6. 映像ファイルとして保存」を再度しましょう。完成です!!

動画をムービーメーカーに取り込もう (参考)

1. デジタルビデオカメラの IEEE1394 端子とパソコンの IEEE1394 端子を、 IEEE1394 用のケーブルで接続します。
2. Windows ムービーメーカーを起動し、画面左のムービー作業の「1. ビデオの取り込み」の中から「ビデオデバイスからの取り込み」をクリック。
3. 取り込んだビデオファイルに対する名前と保存先を指定し、「次へ」をクリック。
4. 「コンピュータの最高の品質で再生 (推奨)」を選択し、「次へ」をクリック。
※目的に応じて画面に表示される指示に従って選択してください。
5. 取り込み方法 (テープ全体を自動 or テープの一部を手動) を選択し、「取り込み中にプレビューを表示する」にチェックを入れ、「次へ」をクリック。
6. プレビュー表示しながら取り込みが始まる。
7. 画面中央のコレクションに、いくつかの映像 (クリップ) とムービーメーカーでは呼びます) が並びます。

以降は、[ビデオ映像をつなぎ合わせて編集しよう](#)を参照ください。

補足： Windows ムービーメーカーは、音声についてアフレコが可能ですが。テロップを入れることもできますが、表示位置や大きさの調節には制限があります。また、画面を分割したりすることはできません。本格的なビデオ編集ツールとして、「Adobe Premiere Pro」があります。このソフトでは、もっと詳細な編集を行うことができます。



Windows ムービーメーカーは、パソコンにビデオ映像（及び静止画）を取り込み、さらに取り込んだ映像（及び静止画）をつなぎ合わせて1本の映像に編集・保存できます。任地において映像教材を作成したり、任地での活動を映像でまとめたりすることに使えます。

Windows ムービーメーカーを起動しよう

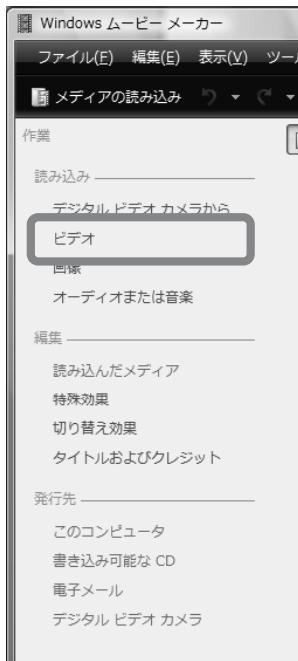
パソコンの画面左下の、①「スタート」をクリックし、②「すべてのプログラム(P)」にカーソルを移動し、③「Windows ムービーメーカー」をクリックします。



ビデオ映像をつなぎ合わせて編集しよう

1. パソコンに保存されているビデオ映像を、ムービーメーカーに取り込みます。

①「ビデオ」ボタンをクリック

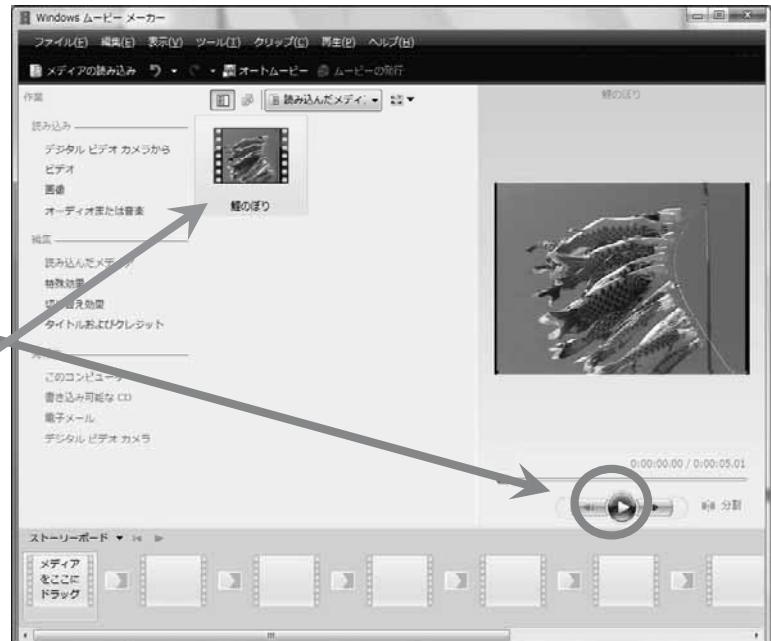


②ビデオ「鯉のぼり」を選んで、右クリックして選択



再生ボタンをクリックすると、取り込んだ映像が再生されます。

※再生画面に映像が表示されていないときには、画面中央の「鯉のぼり」をクリックしてください



③同様に、①と②を繰り返して「キリン」、「ドッグ」、「フラミンゴ」、「柿」、「夕日」を読み込みます。

2. ビデオ映像をつなぎ合わせます。

①ムービーメーカーに取り込まれた映像が表示されています。



②「鯉のぼり」、「キリン」、「ドッグ」、「フラミンゴ」、「柿」、「夕日」の順につなぎ合わせるとします。

まず、①の一覧から「鯉のぼり」を選びます。

次に、「鯉のぼり」を画面左下の枠にドラッグします。



「ドッグ」、「フラミンゴ」、「柿」、「夕日」についても同様に枠にドラッグします。



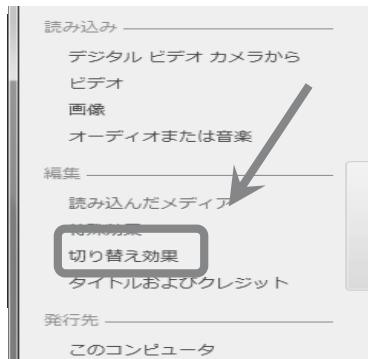
※③ビデオをつなぐ順序を、「ドッグ」、「フラミンゴ」から「フラミンゴ」、「ドッグ」へ変えたいときは、

画面下に表示されている「ドッグ」を「柿」の左横へドラッグします。



3. ビデオ映像を切り替えるときの効果をつけます。

- ① 「ビデオの取り込み」の右横のボタンをクリック



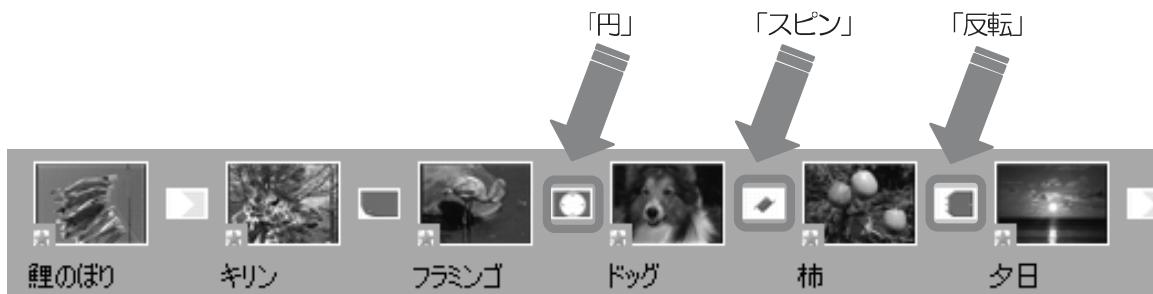
- ② 「キリン」の映像を、ページを右上へめくるようにしながら「フラミンゴ」の映像へと切り替えます。

画面中央に表示される「ビデオ切替え効果」一覧の中にある、「ページカール」を

画面下の「キリン」と「フラミンゴ」の間の枠にドラッグします。

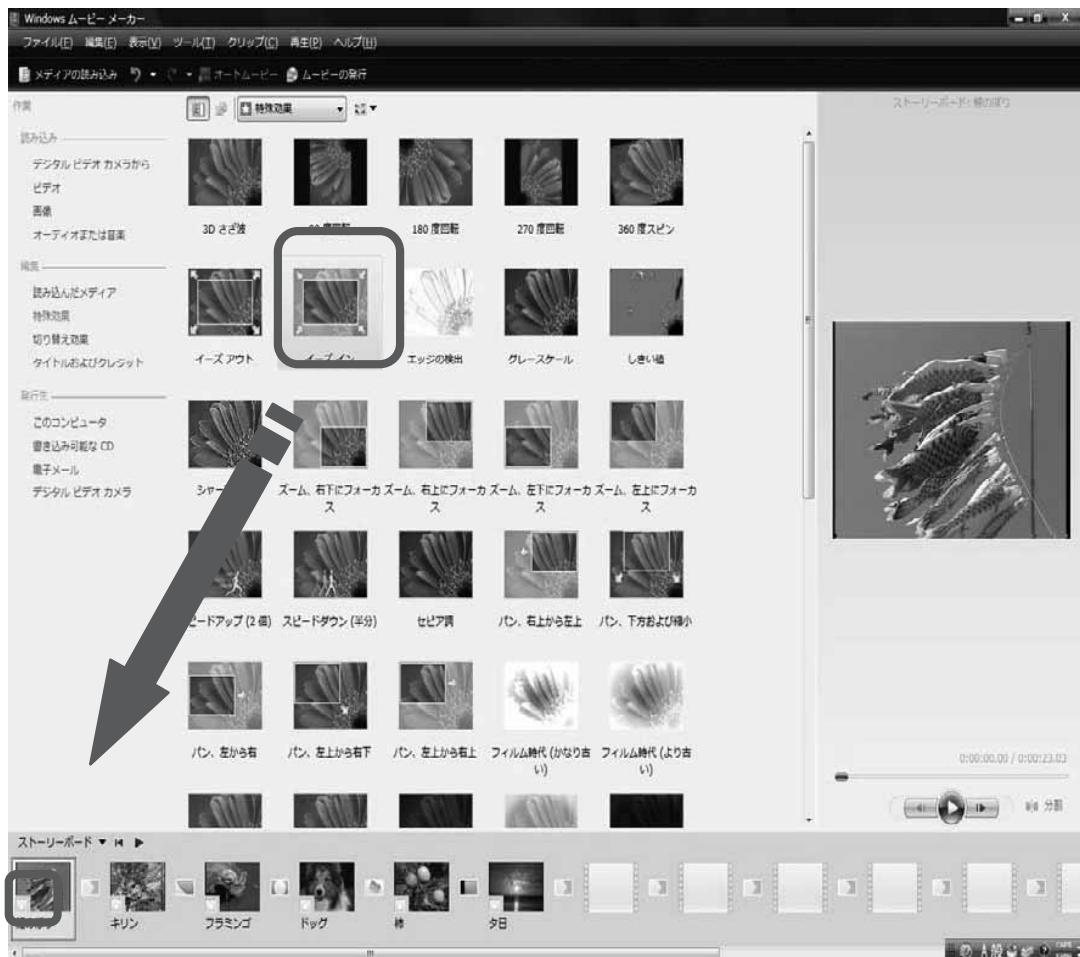


- ③同様に、ビデオ切替え効果「円」を「フラミンゴ」と「ドッグ」の間、
 ビデオ切替え効果「スピン」を「ドッグ」と「柿」の間、
 ビデオ切替え効果「反転」を「柿」と「夕日」の間、の枠にそれぞれドラッグします。



4. ビデオ映像に特殊効果をつけます。

「鯉のぼり」の映像に、「イーズイン」及び「フェードアウト(黒へ)」をつけます。



「キリン」についても、同様に、ビデオ特殊効果「フェードイン(黒から)」をつけてます。

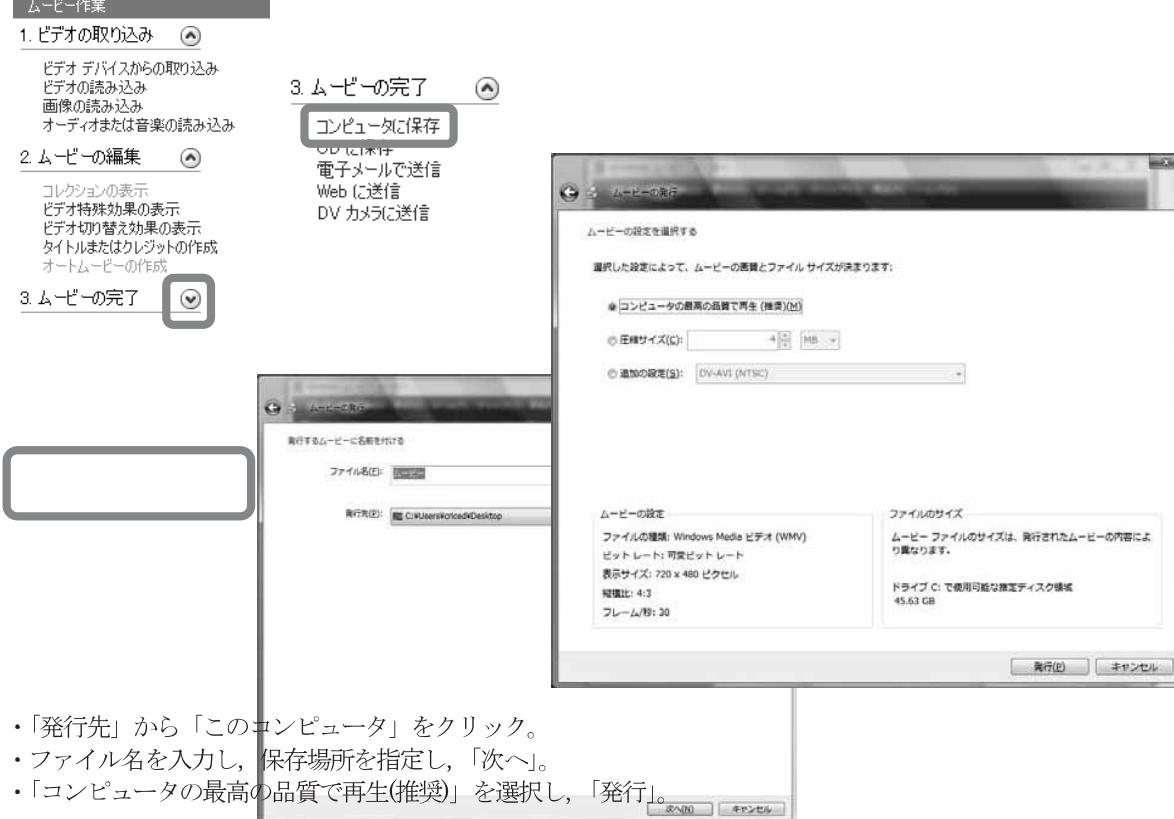


5. ファイルの保存 (Windows ムービーメーカーでは「プロジェクトの保存」と呼びます)

 「ファイル」から「名前を付けてプロジェクトを保存(A)...」をクリックし、Word 文書や一太郎文書のように Windows ムービーメーカーのファイルとして保存します。



6. 映像ファイルとして保存



• 「発行先」から「このコンピュータ」をクリック。
• ファイル名を入力し、保存場所を指定し、「次へ」。
• 「コンピュータの最高の品質で再生(推奨)」を選択し、「発行」。

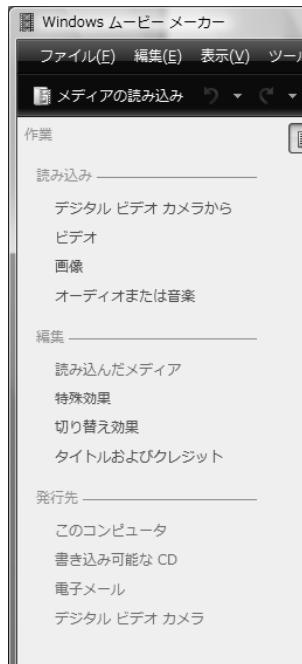
7. タイトルとクレジットをつけます。

「鯉のぼり」の映像に重ねてタイトルをつけてみましょう。

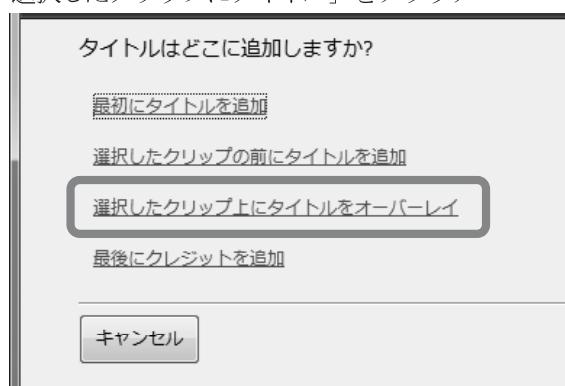
- ①画面下の「鯉のぼり」をクリック



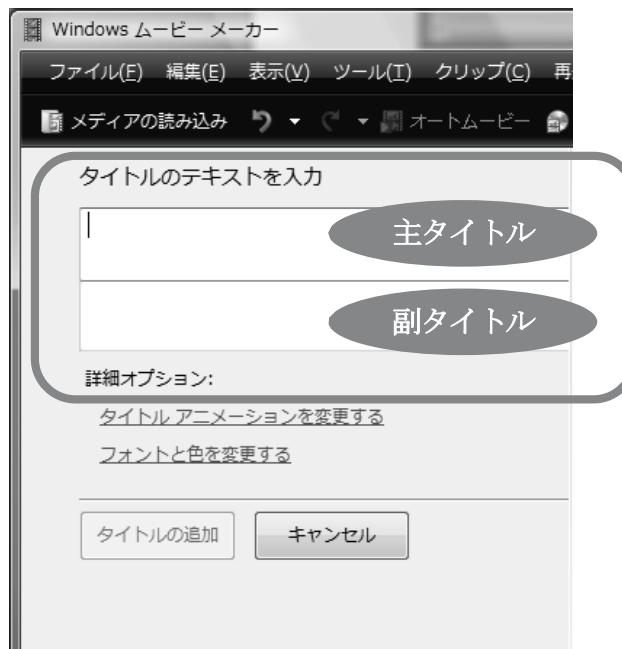
- ②「編集」から「タイトルおよびクレジット」をクリック



- ③「選択したクリップにタイトル」をクリック



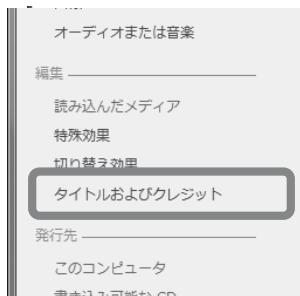
- ④タイトルを入力します



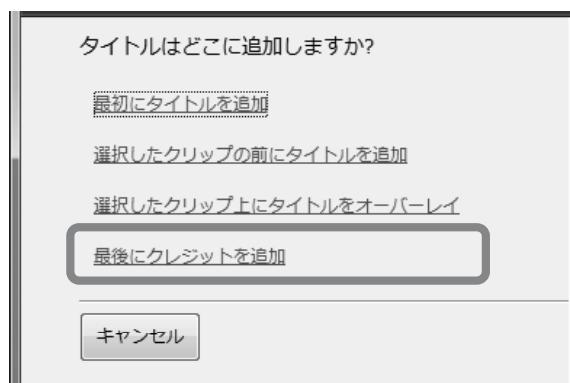
- ⑤「タイトルの追加」をクリック。

クレジットをつけてみましょう。

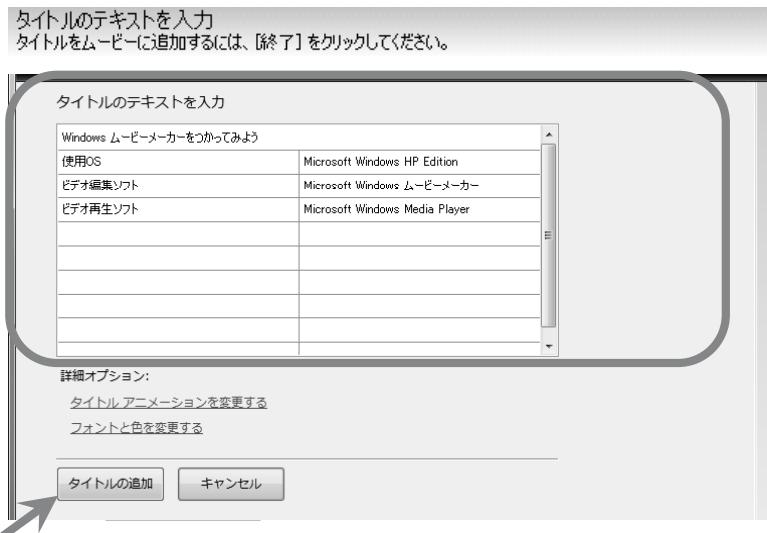
- ① 「ムービーの編集」から「タイトルまたはクレジットの作成」をクリック



- ② 「最後にクレジットを追加」をクリック



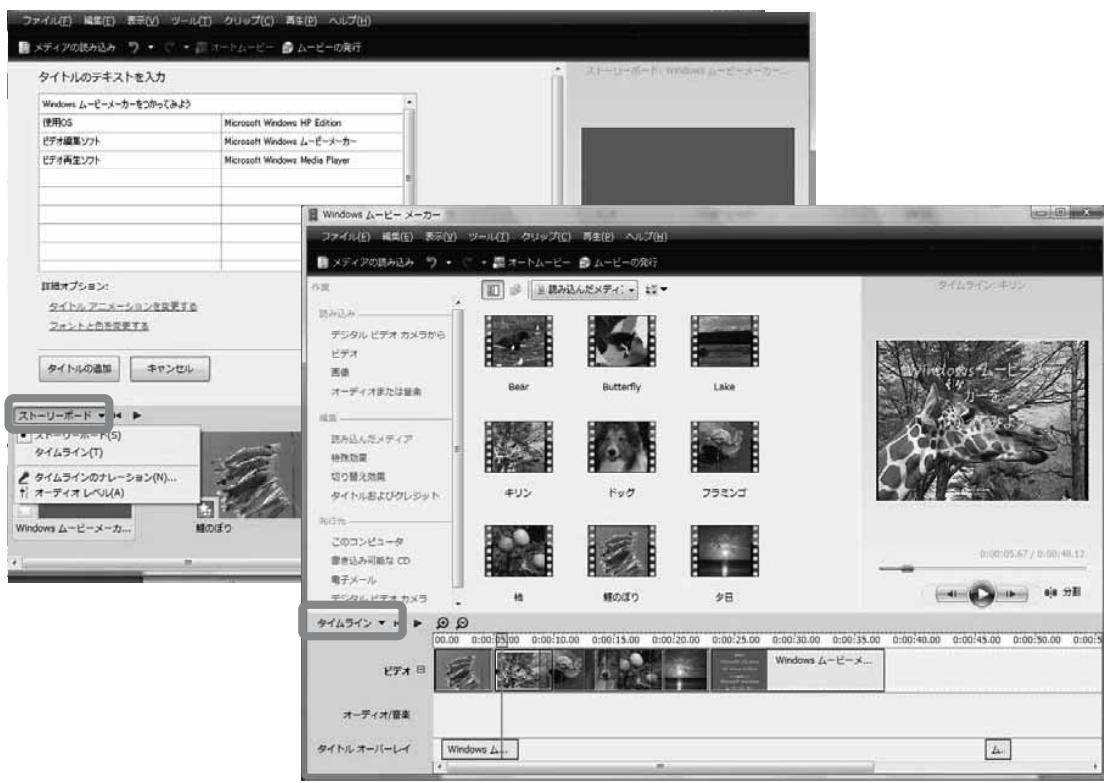
- ③ クレジットを入力します



- ④ 「タイトルの追加」をクリック。

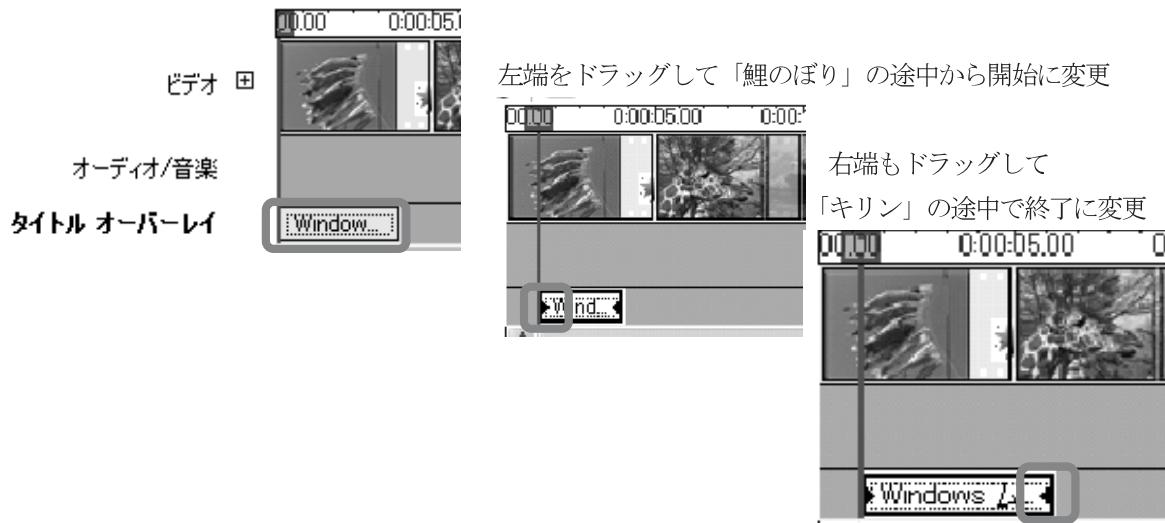
8. 全体の微調整をします。

①「ストーリーボードの表示」をクリック。画面下の表示が「タイムライン」に切り替わる。



②タイトルを表示する時間帯を変更する

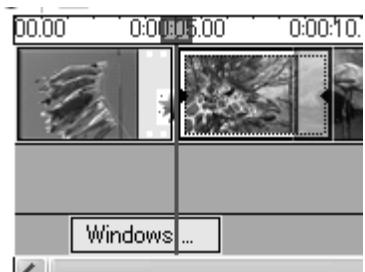
「タイトルオーバーレイ」のタイトル部分をクリック



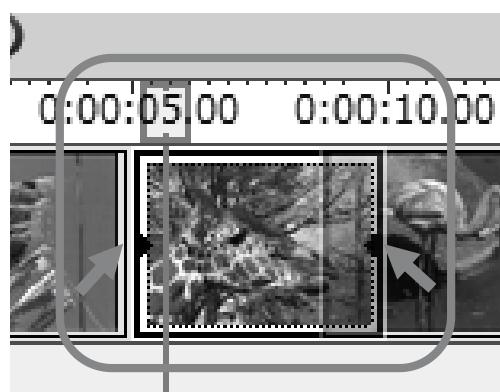
③映像の中から必要な箇所だけを採用する（トリミング）

「キリン」の先頭部分を削除してみましょう。

映像を選択します。



「クリップ」の両脇をドラッグすることでトリミングできます。



「5. ファイルの保存」「6. 映像ファイルとして保存」を再度しましょう。完成です!!

動画をムービーメーカーに取り込もう (参考)

1. デジタルビデオカメラの IEEE1394 端子とパソコンの IEEE1394 端子を、 IEEE1394 用のケーブルで接続します。(SD カードを使うこともできます)
2. Windows ムービーメーカーを起動し、画面左のムービー作業の「1. ビデオの取り込み」の中から「ビデオデバイスからの取り込み」をクリック。
3. 取り込んだビデオファイルに対する名前と保存先を指定し、「次へ」をクリック。
4. 「コンピュータの最高の品質で再生 (推奨)」を選択し、「次へ」をクリック。
※目的に応じて画面に表示される指示に従って選択してください。
5. 取り込み方法 (テープ全体を自動 or テープの一部を手動) を選択し、「取り込み中にプレビューを表示する」にチェックを入れ、「次へ」をクリック。
6. プレビュー表示しながら取り込みが始まる。
7. 画面中央のコレクションに、いくつかの映像 (クリップ) とムービーメーカーでは呼びます) が並びます。

以降は、**ビデオ映像をつなぎ合わせて編集しよう**を参照ください。

補足： Windows ムービーメーカーは、音声についてアフレコが可能です。テロップを入れることもできますが、表示位置や大きさの調節には制限があります。また、画面を分割したりすることはできません。本格的なビデオ編集ツールとして、「Adobe Premiere Pro」があります。このソフトでは、もっと詳細な編集を行うことができます。



Windows Live ムービーメーカーは、パソコンにビデオ映像（及び静止画）を取り込み、さらに取り込んだ映像（及び静止画）をつなぎ合わせて1本の映像に編集・保存できます。任地において映像教材を作成したり、任地での活動を映像でまとめたりすることができます。

Windows 7 では上記の「Windows Live ムービーメーカー」を利用しますが、Windows Vista 及びXPでは「Windows ムービーメーカー」というソフトを用いて同様の作業を行うことができます。「Windows Live ムービーメーカー」は「Windows ムービーメーカー」の基本的な機能を受け継いだ簡易版で、少し機能が制限されています。

Windows Live ムービーメーカーをインストールしよう

Windows 7 の公式ホームページ (<http://www.microsoft.com/japan/windows/windows-7/default.aspx>) から Windows Live ムービーメーカーをダウンロードし、インストールします。① ページ上部の「ダウンロード」をクリックし、② 次のページで「Windows Live パックおすすめパック」の「詳細を見る」をクリック、③ 次のページで「今すぐダウンロード」をクリックします。

The image consists of five screenshots illustrating the download process for Windows Live Movie Maker:

- Screenshot 1:** Microsoft Japan website for Windows 7. A callout bubble points to the "ダウンロード" (Download) button in the top navigation bar.
- Screenshot 2:** Windows 7 landing page. A callout bubble points to the "詳細を見る" (View details) link under the "Windows Live パックおすすめパック" (Windows Live Pack Recommended Pack) section.
- Screenshot 3:** Windows Live Pack Recommended Pack page. A callout bubble points to the "今すぐダウンロード" (Download now) button at the bottom of the page.
- Screenshot 4:** Microsoft Japan website for Windows Live Movie Maker. This is the final step where the user is prompted to log in or sign in to download the software.

④ 「ファイルのダウンロード - セキュリティ警告」画面で「実行」をクリック

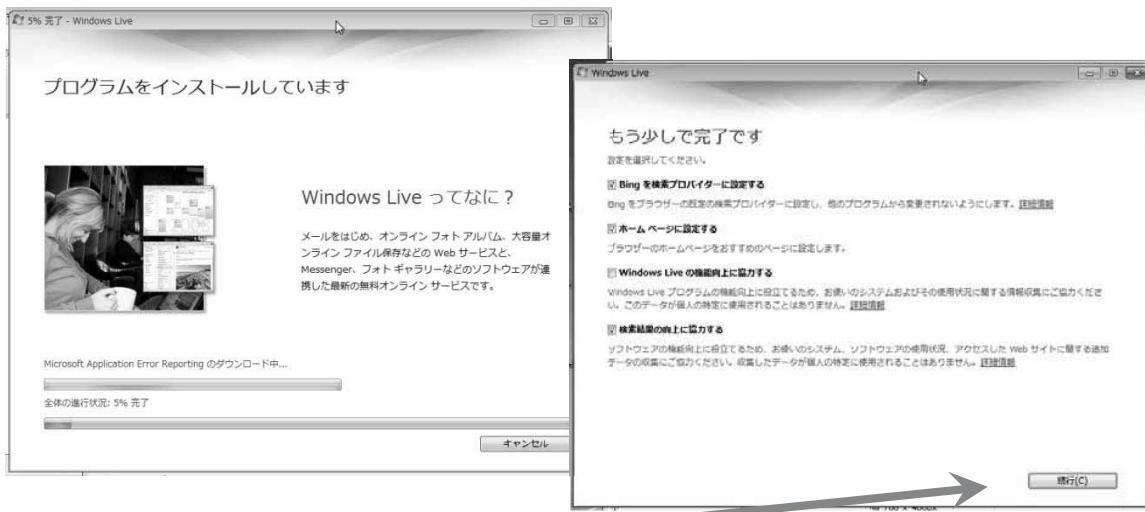


⑤ 「ユーザー アカウント制御」等の画面が表示された場合でも「続行」をクリックしてください。



⑥ 右のような画面が表示されるので、これまでの「ファミリーセーフティ」以外のすべてのプログラムのチェックボックスにチェックを入れ、「インストール」をクリックしてください。

インストールが開始されます。



しばらくすると「もう少しで完了です」という画面が表示されますが、そのままの状態で「続行」をクリックしてください。

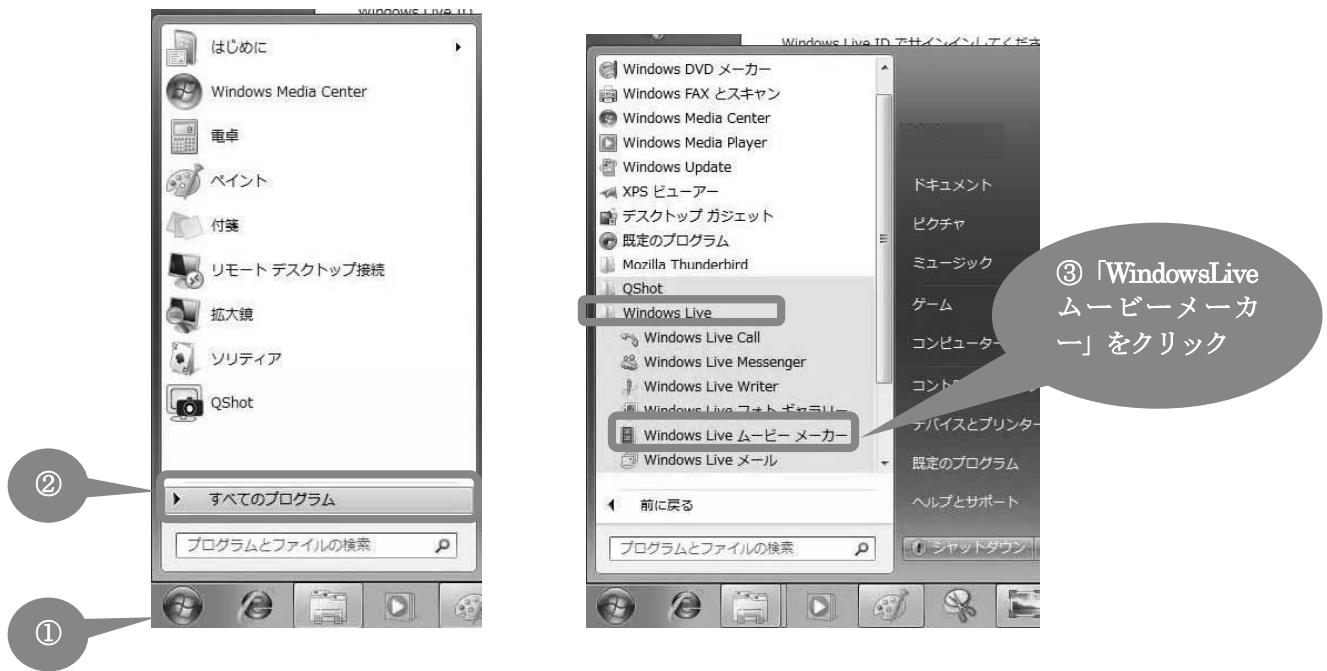


インストールが完了すると左の画面が表示されます

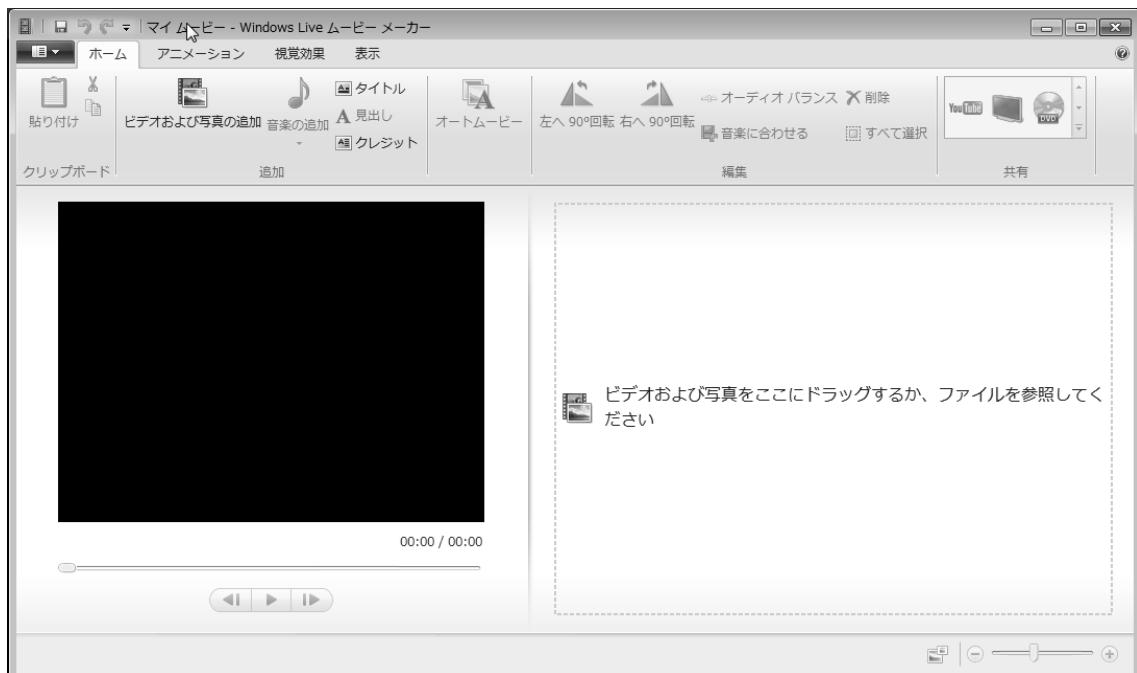
今回はサインインしないで用いるので、「閉じる」をクリックし、インストール作業を終了します。

Windows Live ムービーメーカーを起動しよう

パソコンの画面左下の、①「スタート」をクリックし、②「すべてのプログラム」にカーソルを移動し、③「Windows Live」→「Windows Live ムービーメーカー」の順でクリックし起動します。
「すべてのプログラム」に表示されていない場合、「Windows Live」をインストールする必要があるので、前述の「Windows Live ムービーメーカーをインストールしよう」を参照してインストールしてください。



【Windows Live ムービーメーカーが起動した画面】

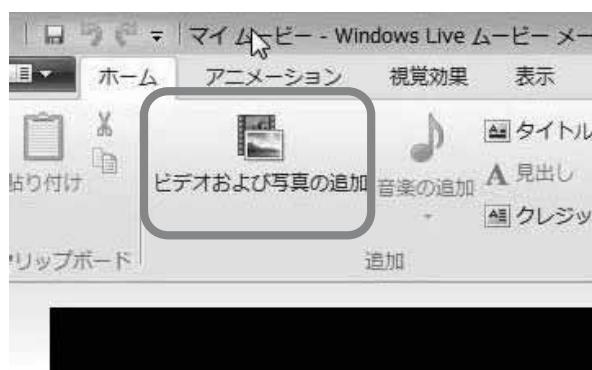


ムービーメーカー - 3

ビデオ映像をつなぎ合わせて編集しよう

1. パソコンに保存されているビデオ映像を、ムービーメーカーに取り込みます。

①「ビデオおよび写真の追加」をクリック



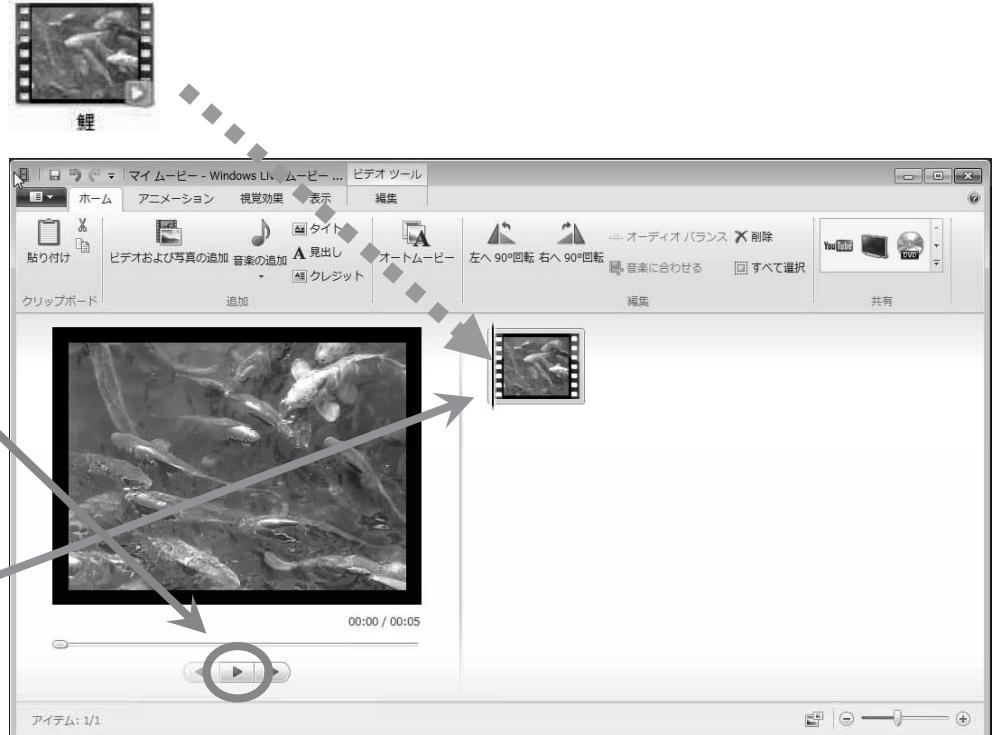
註：「ビデオおよび写真の追加」ボタンを使わず、動画を直接右側の領域にドラッグ＆ドロップしてもかまいません。

②ここではビデオ「鯉」を選んで、「開く」をクリックします。



再生ボタンをクリックすると、取り込んだ映像が再生されます。

※再生画面に映像が表示されていないときには、画面中央の「鯉」をクリックしてください



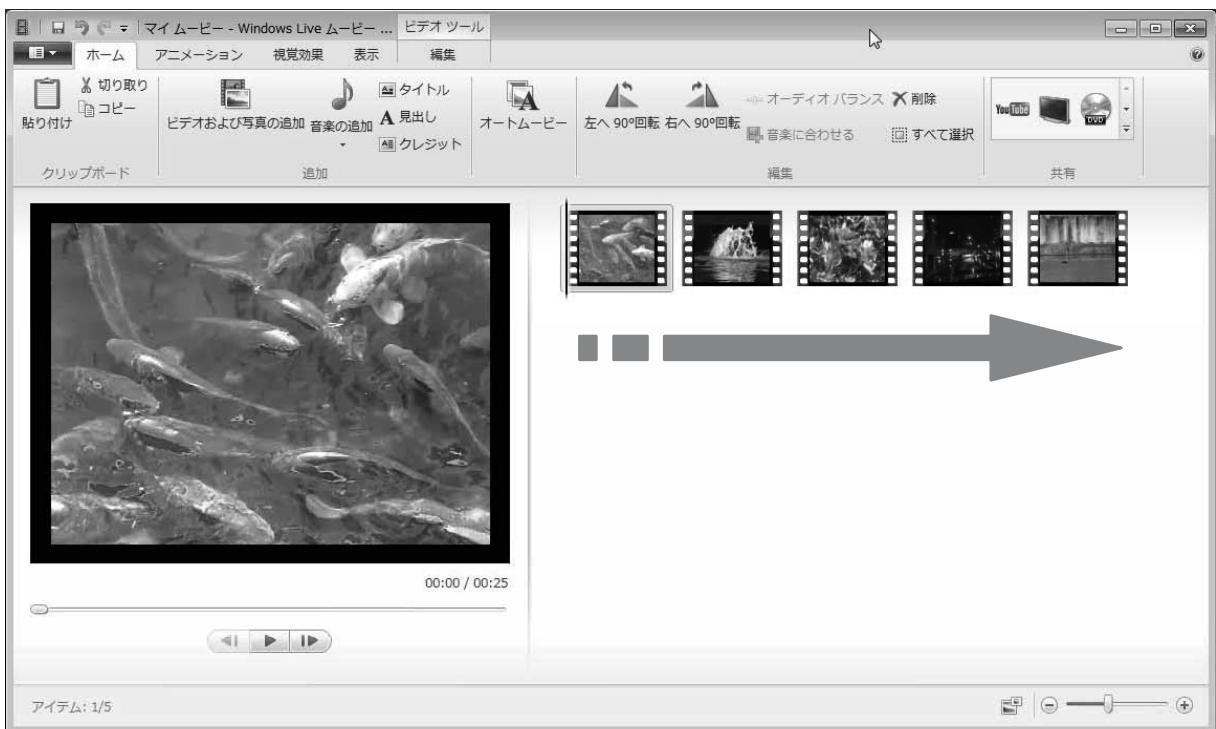
③同様に、①と②を繰り返して「樹木」、「信号」、「水鳥」、「噴水」を取り込みます。

2. ビデオ映像をつなぎ合わせます。

①ムービーメーカーに取り込まれた映像が表示されています。



②右側の領域に並んだ順に、動画がつなぎ合わされます。図では左から「鯉」、「噴水」、「樹木」、「信号」、「水鳥」の順につなぎ合わされています。



※ビデオをつなぐ順序を、「噴水」、「樹木」から「樹木」、「噴水」へ変えたいときは、画面下に表示されている「ドッグ」を「柿」の左横へドラッグします。



3. ビデオ映像を切り替えるときの効果をつけます。

①画面上部にある「アニメーション」タブをクリック



②「鯉」の映像を、ページを右上へめくるようにしながら「噴水」の映像へと切り替えます。

このボタン を押すと、下図のように切替え効果の一覧が表示されるので、「噴水」の動画を選択している状態で一覧にある「ページカール（右上へ）」ボタンをクリックします。



③同様に、

ビデオ切替え効果「蝶ネクタイ（縦方向）」を「樹木」から「噴水」の間、

ビデオ切替え効果「斜線（右下へ）」を「噴水」から「信号」の間、

ビデオ切替え効果「星（複数）」を「信号」から「水鳥」の間に入れてみます。

動画の左下に、切り替え効果が設定されていることが示されています。



4. ビデオ映像に特殊効果をつけます。

「鯉」の映像に、「フェードイン(黒から)」をつけています。



先程と同様に、効果をつけたい動画（ここでは「鯉」）を選択した状態で、「視覚効果」タブを開きます。その中にある「フェードイン(黒から)」効果をクリックします。

すべての動画に視覚効果をつけたところです。

今度は左上に、視覚効果が設定されていることが示されています。（効果の消し方は切り替え効果と同様に、視覚効果一覧から「特殊効果なし」を選択してください。）



5. ファイルの保存 (Windows Live ムービーメーカーでは「プロジェクトの保存」と呼びます)



「ファイル」から「名前を付けてプロジェクトを保存」をクリックし、Windows Live ムービーメーカーのファイルとして保存します。



画面左上のこのボタンをクリックして開き、「名前を付けてプロジェクトを保存」をクリックします。



6. 映像ファイルとして保存



上記の方法では、作成した動画は「ムービーメーカープロジェクト」という保存形式で保存され、Windows Live ムービーメーカーで読み込むことで、保存後も編集することができます。

これ以上編集しない、映像ファイルとして他のアプリケーションで読み込みたいという場合は、上で使った「名前を付けてプロジェクトを保存」の下にある「ムービーの保存」をクリックします。保存画質や解像度を選び、以下の画面で保存場所を選び保存します。



この時、保存形式は「Windows Media ビデオ (WMV) ファイル」になり、Windows Media Player などのアプリケーションで再生することができます。

7. タイトルとクレジットをつけます。

「鯉」の映像の前にタイトルをつけてみましょう。

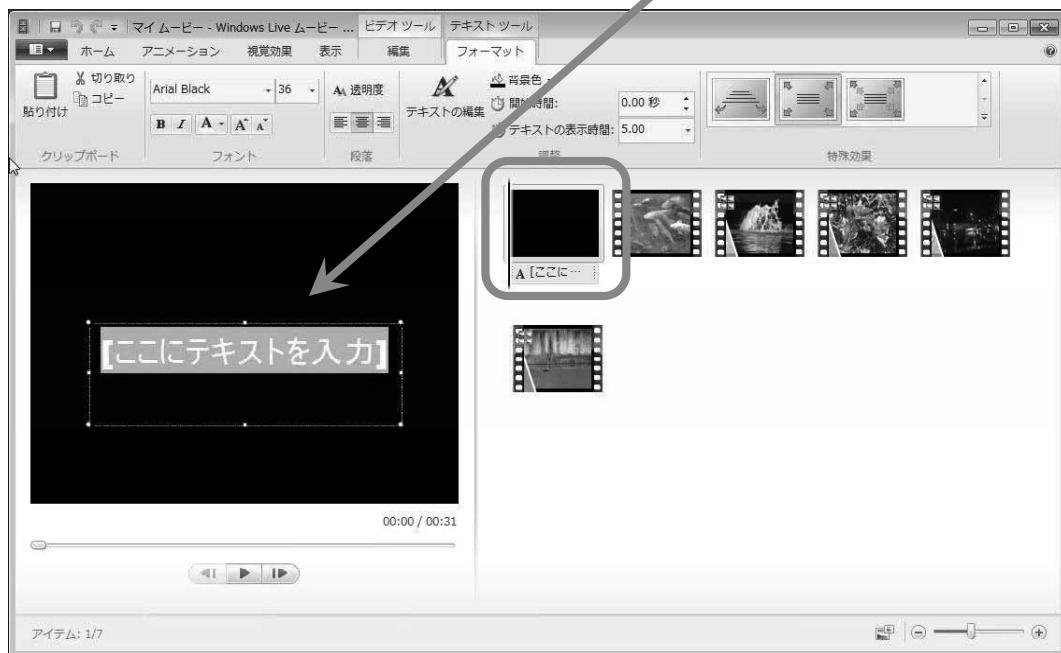
- ①画面下の「鯉」をクリック



- ②「鯉」を選択している状態で画面上部の「タイトル」をクリック



- ③以下のように、プレビューフレームにタイトルを入力するテキストボックスが表示され、右の領域で「鯉」の動画の前にタイトル用の動画が挿入されました。



④画面上部に表示されている「フォーマット」タブ内で、フォントやサイズなどの書式、テキストの表示に関する特殊効果、表示時間などを設定することができます。



「鯉」の映像に重ねてタイトルをつけてみましょう。

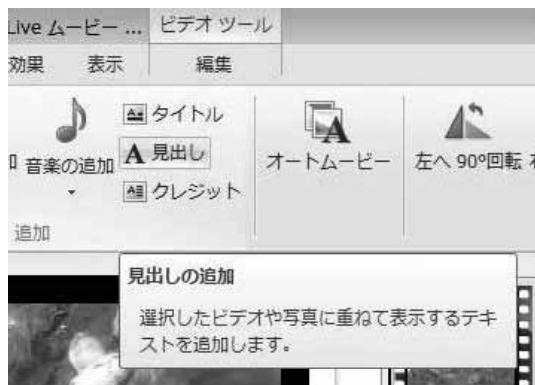
挿入されたタイトル用の動画ではない部分にもタイトルを表示させることができます。

①上記の「フォーマット」内の「開始時間」に、タイトルの表示を開始したい時間を打ち込みます。この場合、動画全体が30秒、最初にタイトル用の動画が5秒間挿入されているので「鯉」は30秒のうちの5～10秒の間に表示されています。この時間内にタイトルの開始時間を設定することで、映像に重ねてタイトルを表示することが可能になります。

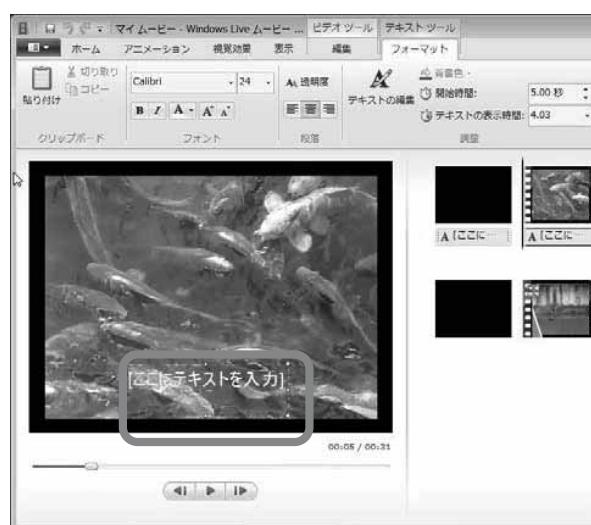
②最初に挿入されたタイトル用の背景動画は不要なので、削除してかまいません。



タイトルとは別に、動画ごとに見出しをつけることができます。



①タイトルの場合と同じく、見出しを付けたい動画を選択した状態で画面上部の「見出し」をクリック。

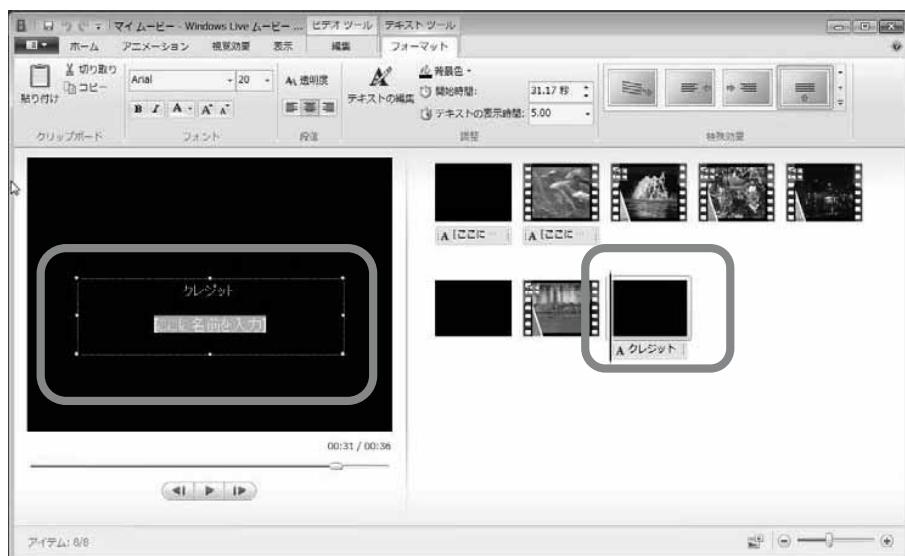


②プレビュー内に見出し編集用のテキストボック
スが表示されます。編集方法はタイトルの時とほ
ぼ同じですが、見出しあは最初から動画に重ねて表
示されることに注意してください。

クレジットを付けてみましょう。

動画の最後に、製作者や出演者の名前を表示させる「クレジットタイトル」を付けることが可能です。

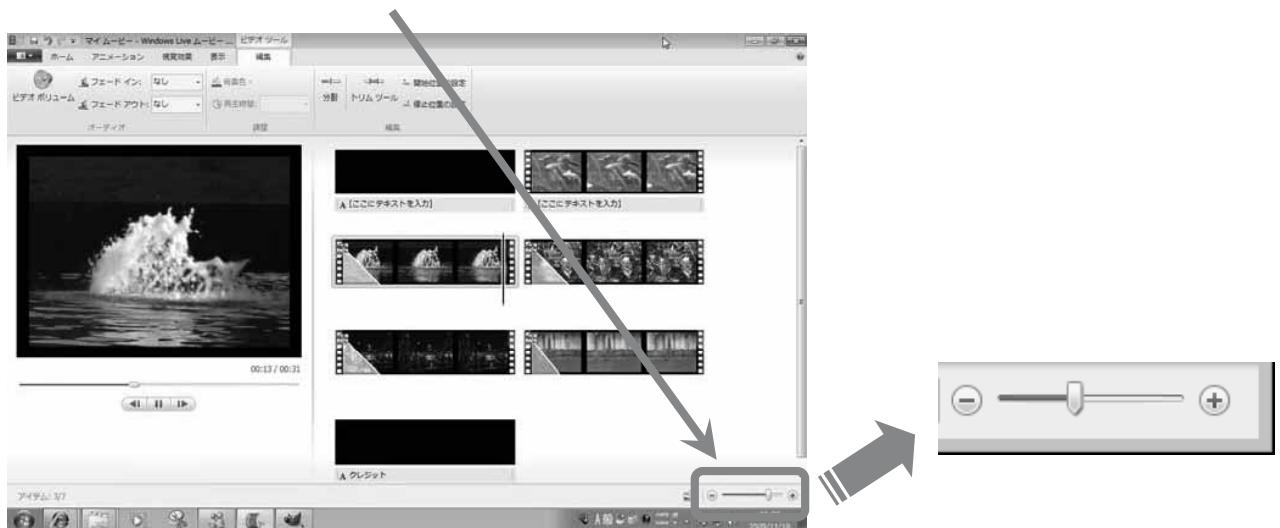
- ①画面上部の「クレジット」をクリック。



8. 全体の微調整をします。

- ①画面右下の「タイムスケールの調整」で、各動画をより細かく分割して表示させることができます。

動画の最後にクレジットが追加されます。プレビュー内のテキストボックスから同様にして編集してください。

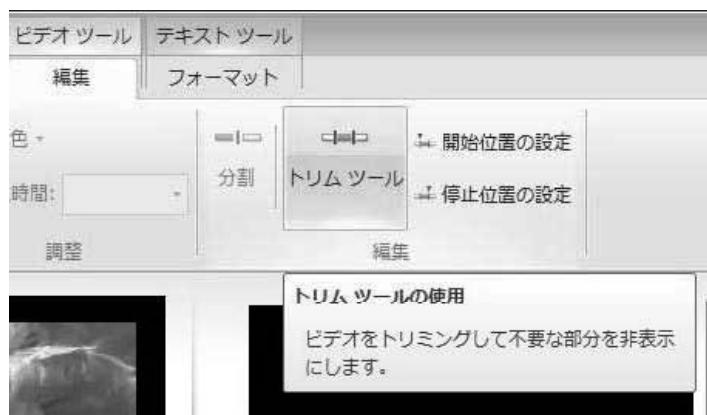


微調整をする際、適宜表示を調整しながら作業してみてください。

②映像の中から必要な箇所だけを採用する（トリミング）

「鯉」の先頭と末尾部分を非表示にしてみましょう。

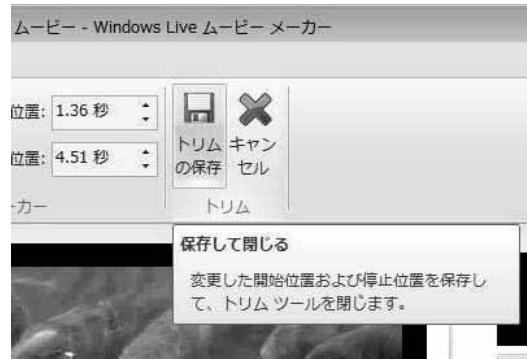
「鯉」の映像を選択した状態で、画面上部の「編集」タブから「トリムツール」を選択します。



画面上部の「開始位置」「停止位置」に直接時間打ち込むか、プレビュー画面下のタイムスケールの両端に表示されているトリミング用のスクロールボタンを移動させることで動画の開始・停止位置を変更し、
先頭と末尾の不要な部分を非表示にできます。



開始、停止位置を決定したら、「トリムの保存」をクリックしてください。変更が適用されます。



③希望する位置で映像を分割する

「鯉」の映像を分割してみましょう。

まず、「鯉」の映像を選択し、分割したい位置で停止します。上記の「トリムツール」の横にある「分割」をクリックします。



これで映像が分割されました。



注：トリムツールの場合、トリミングした部分は非表示になるだけでしたが、分割を用いれば、不要な部分の前後で分割し、完全に削除することができます。

編集が完了したら「5. ファイルの保存」「6. 映像ファイルとして保存」をして、完成です!!

動画をムービーメーカーに取り込もう (参考)

1. デジタルビデオカメラとパソコンを、専用ケーブルで接続します。(カメラのデータが入った SD カードを読み込む、IEEE1394 端子とパソコンの IEEE1394 端子を、IEEE1394 用のケーブルで接続する等。)
2. Windows Live ムービーメーカーを起動し、「ホーム」の左のボタンから「デバイスからの読み込み」をクリック。
3. 接続しているカメラのアイコンが表示されるので、選択して「読み込み」をクリック。
4. カメラ内の動画、写真が検索されるので、次の画面で「読み込むアイテムを確認、整理、グループ化する」を選択して「次へ」をクリック
5. 日付ごとに自動的に写真、動画がフォルダ分けされるので、取り込むフォルダをチェックして「読み込み」をクリック。読み込み後マイピクチャ内に保存されます。(Windows Live フォトギャラリーが起動し、読み込んだファイルのプレビューが表示されます。)
6. Windows Live ムービーメーカーで「ビデオおよび写真の追加」から読み込んだファイルの追加ができます。



Skype（スカイプ）は、インターネットを使ったIP電話ソフト（ソフト代無料）です。利用者同士なら通話料無料で世界中の相手と通話ができます。派遣隊員同士や帰国隊員との情報交換・連絡をはじめ、ご家族との連絡にも使えます。

また、最後に紹介するネットミーティングを使えば、派遣先の教室と日本の教室をつないで、インターネットライブ授業も行えます。

Skype をインストールしよう

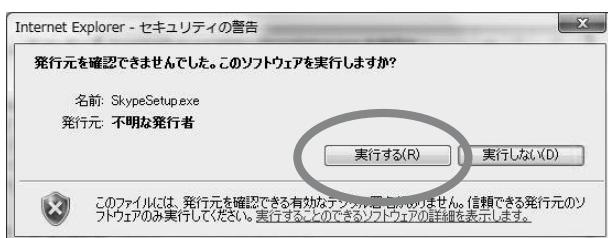
1. 「<http://www.skype.com/intl/ja/>」にアクセスし、「Skype のダウンロード」をクリック



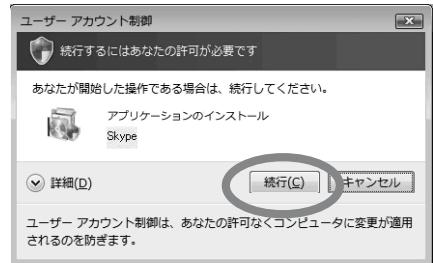
2. 「ファイルのダウンロードセキュリティの警告」画面で「実行」をクリック



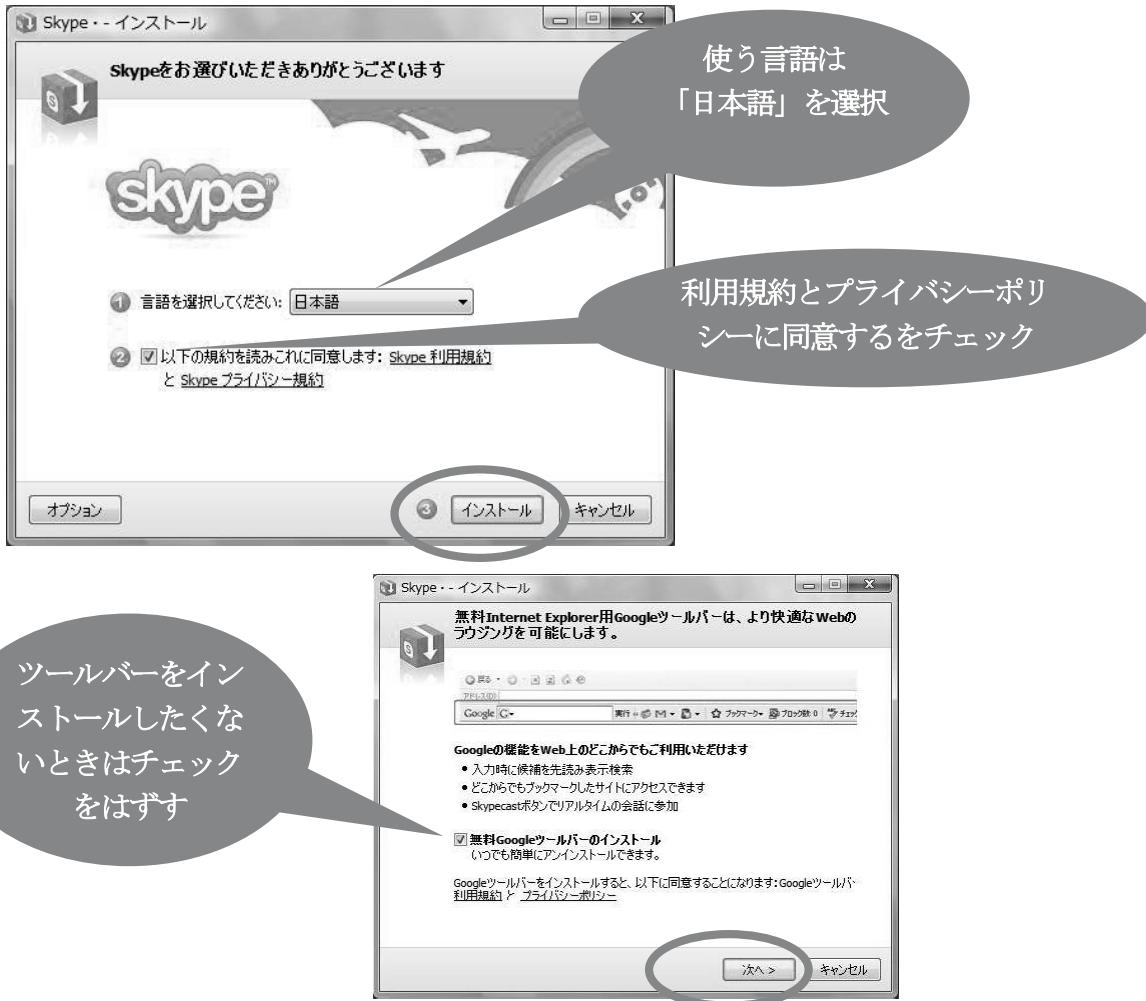
3. 「実行する」をクリック。Skypeのインストールが始まります。



4. このようなウィンドウが出てきた場合は「続行」をクリック。



5. 使う言語として「Japanese」を選択、「次へ」をクリック。
表示される画面にしたがって、「使用許諾に同意する」を選び、「次へ」をクリック。



6. 途中、「Google ツールバー」のインストール画面が表示されたときは、必要に応じてチェックを入れたりはずしたりし、「次へ」。右の画面が表示されれば、インストールは完了です。「完了」をクリック。

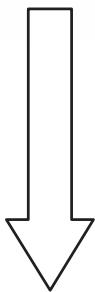




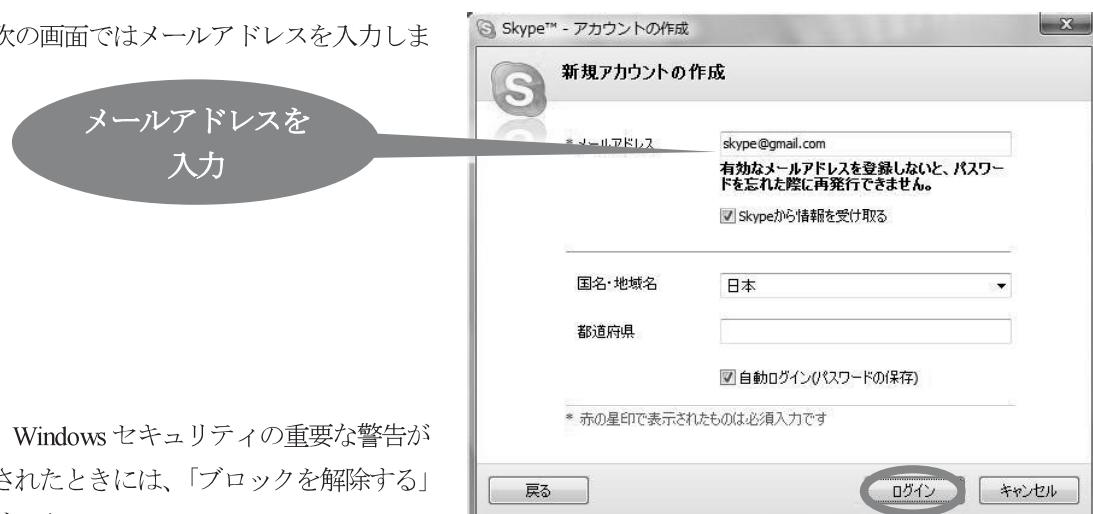
7. デスクトップ上の Skype アイコンをクリックしてスカイプを起動します。スカイプウィンドウとアカウント作成ウィンドウが表示されます。



8. 自分のアカウント名（Skype 名）や
「パスワード」を設定し、「利用規約に同意
して登録する」をチェックし、「次へ」を
クリックします。



9. 次の画面ではメールアドレスを入力します。



10. Windowsセキュリティの重要な警告が表示されたときには、「ブロックを解除する」をクリック。



11. このようなウィンドウが出てきた場合は「続行」をクリック。



12. 「Skype開始ウィザード」が表示されますが、今回は使いませんので、閉じます。

「Skypeの起動時に開かない」を
チェックしてから閉じると、以後
はこの画面は表示されません

ヘッドセットの設定をしよう

ヘッドセット（マイクとヘッドホン）を用意してください。（店頭では安いもので二千円程度です。）

1. ヘッドセットのプラグを、パソコンのマイク端子とヘッドホン端子に差し込んでください。



2. 音声テストを行います。メニューの中の「ツール」をクリックし、下に表示される「設定」をクリックします。

3. 「オーディオ設定」をクリックし、「Skype 音声テストサービスに発信」をクリックします。
音声案内にしたがって、声を
出してみてください。
正常にセットアップできたら
「保存」をクリック。



音声案内が聞こえないときには、音
声端子の接続やパソコンのボリュ
ーム設定を確認してみてください。

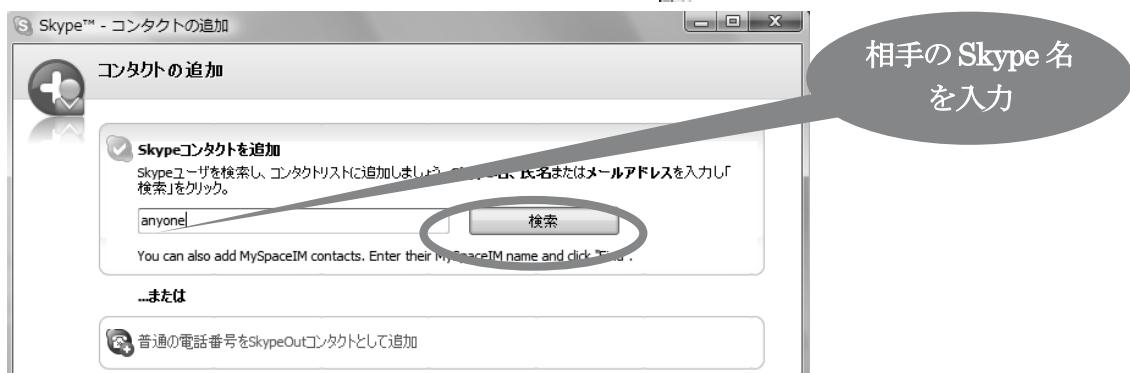
自分の声が再生されないときには、マイク端子の接続などを確認
してみてください。

会話したい相手を登録しよう

1. 「コンタクトを追加」をクリックします。



2. 相手の Skype 名を入力し、「検索」ボタンを押します。



3. 一覧の中から相手を選択し、
「選択されたコンタクトを追加」
をクリックします。

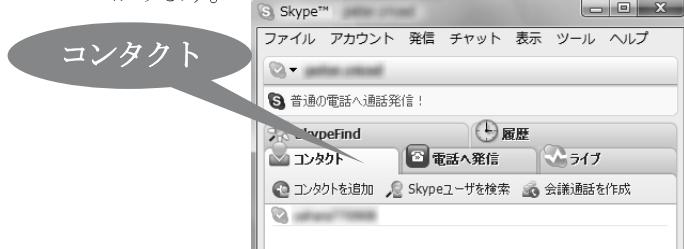


4. 相手に送るメッセージを入力し、
「OK」をクリックします。

メッセージ
を入力

Skype で会話してみよう

- 「コンタクト」の中に、先ほど登録した相手が表示されているはずです。クリックすると、その行が広がります。



- 受話器マーク（緑色）をクリックします。電話同様の呼び出し音が鳴り、相手が受話器マークをクリックすると通話が出来ます。（相手がSkypeを起動していないとつながりません）



電話にでる

Skypeを起動してあれば、電話同様の呼び出し音が鳴ります。受話器マーク（緑）をクリックすると通話ができます。

電話をきる

右側の受話器マーク（赤）をクリック。

註1： 各種設定は、「ツール」から「設定」を選択し行います。

註2： SkypeOut（Skypeアウト）という機能を使えば、固定電話や携帯電話にも電話をかけることができます。ただし有料ですので、「Skypeアウトクレジット」を購入する必要があります。一般的の固定電話から国際電話をかけるよりは安くなることが多いです。

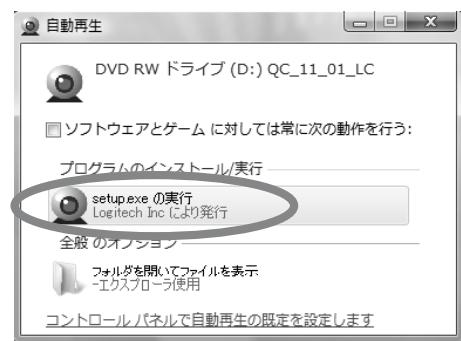
註3： 複数の人と会話することもできます。

註4： 最新版を利用しましょう。

Web カメラをセットアップしよう

1. カメラのソフトウェアをインストールします。ここではカメラはまだ接続しないでください。

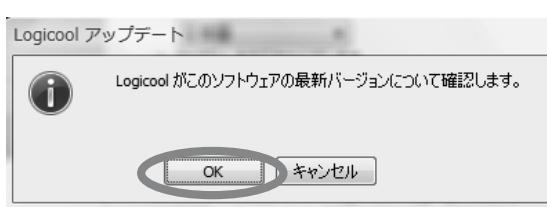
まずは「Qcam v11.1」と書かれたインストールディスク（緑色）をドライブに入れます。右のような画面が出たら「setup.exe の実行」をクリックしてください。



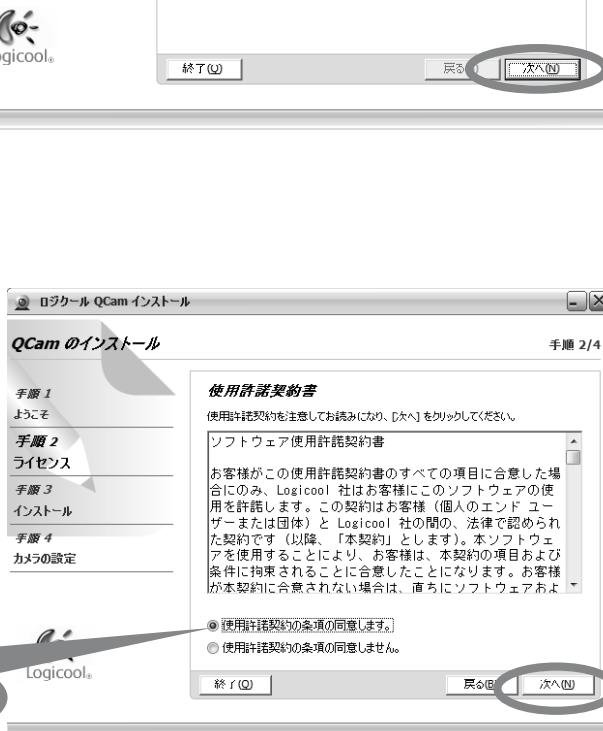
2. 左の「ユーザーアカウント制御」の画面が出てきた場合は「続行」をクリックします。



3. 「Qcam のインストール」画面が表示されます。「次へ」をクリックしてインストールを進めます。



5. 「使用許諾契約の条項に同意します」を選択し、「次へ」をクリック。



「使用許諾契約の条項に
同意します」を選択

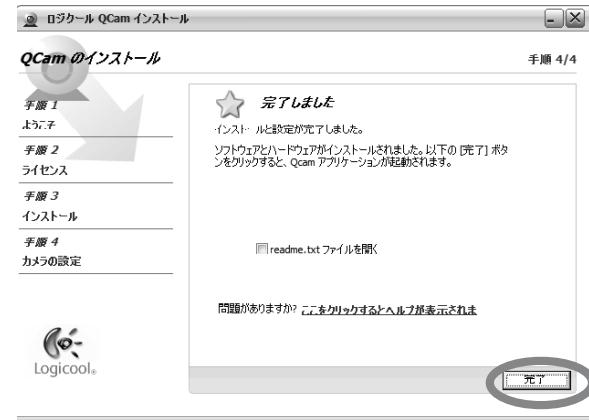
6. この画面が表示されたらカメラを接続します。
カメラが認識されたら自動的に次の画面に進みます。



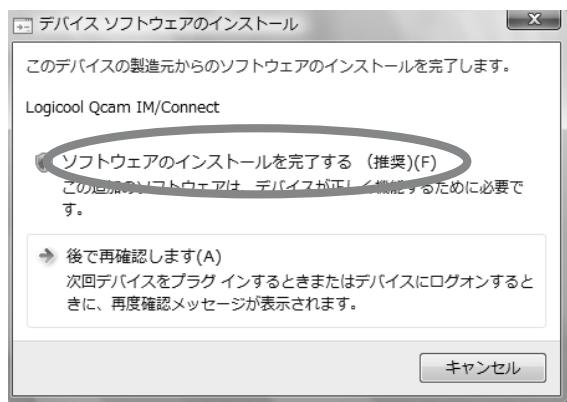
8. 「完了」をクリックします。



7. カメラの映像を確認し、「次へ」をクリック。



下記のような画面がでたら「ソフトウェアのインストールを完了する」をクリック。



下の画面が表示されますが、今回は使いませんので、それぞれ右上の「×」ボタンをクリックして閉じます。



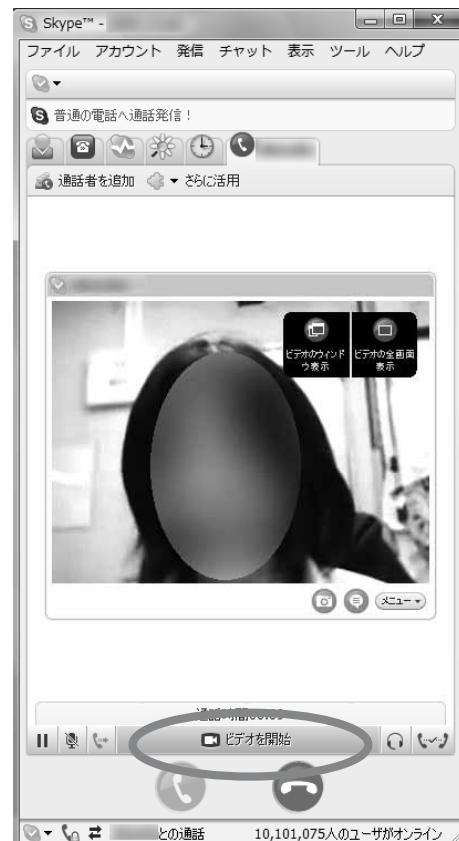
Skype でネットミーティングしてみよう



- Skype でカメラ設定を行います。
先ほどと同じように、「ツール」から「設定」を選択します。
- 相手との通話中に、下の「ビデオ開始」をクリックします。
相手も同じように選択すると、お互いの映像を見ながら話すことができます。

1. Skype でカメラ設定を行います。
先ほどと同じように、「ツール」から「設定」を選択します。

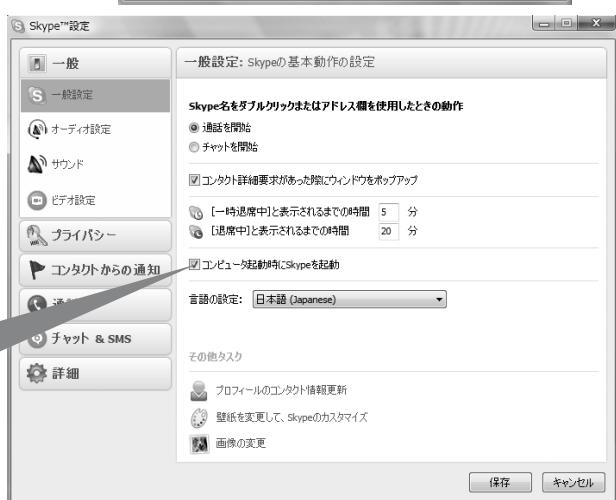
今回は、「ビデオ設定」を選択します。Web カメラの映像を調整し確認します。「保存」をクリックして閉じます。



註5：ネットミーティングは、「Yahoo！メッセンジャー」、「Windows Live メッセンジャー」でも出来ます。

註6：コンピュータ起動時に自動的に Skype を起動したくないときには、「ツール」から「設定」を選択し、「コンピュータ起動時に Skype を起動」のチェックをはずす。

自動的に Skype を起動したくないときは、チェックをはずす





Skype（スカイプ）は、インターネットを使ったIP電話ソフト（ソフト代無料）です。利用者同士なら通話料無料で世界中の相手と通話ができます。派遣隊員同士や帰国隊員との情報交換・連絡をはじめ、ご家族との連絡にも使えます。また、最後に紹介するネットミーティングを使えば、派遣先の教室と日本の教室をつないで、インターネットライブ授業も行えます。

Skype をインストールしよう

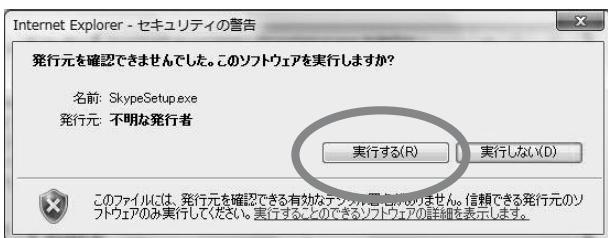
1. 「<http://www.skype.com/intl/ja/>」にアクセスし、「Skype のダウンロード」をクリック



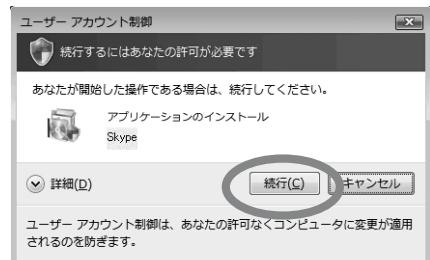
2. 「ファイルのダウンロードセキュリティの警告」画面で「実行」をクリック



3. 「実行する」をクリック。Skypeのインストールが始まります。



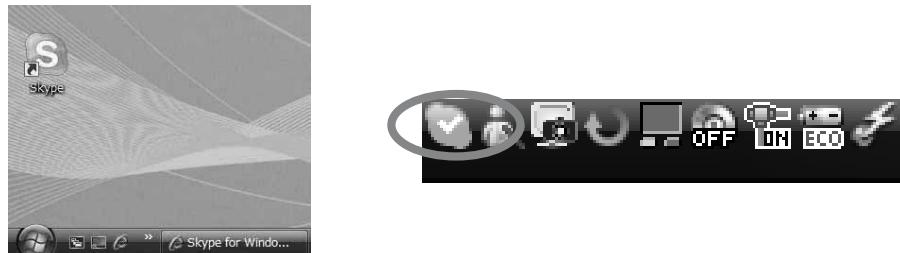
4. このようなウィンドウが出てきた場合は「続行」をクリック。



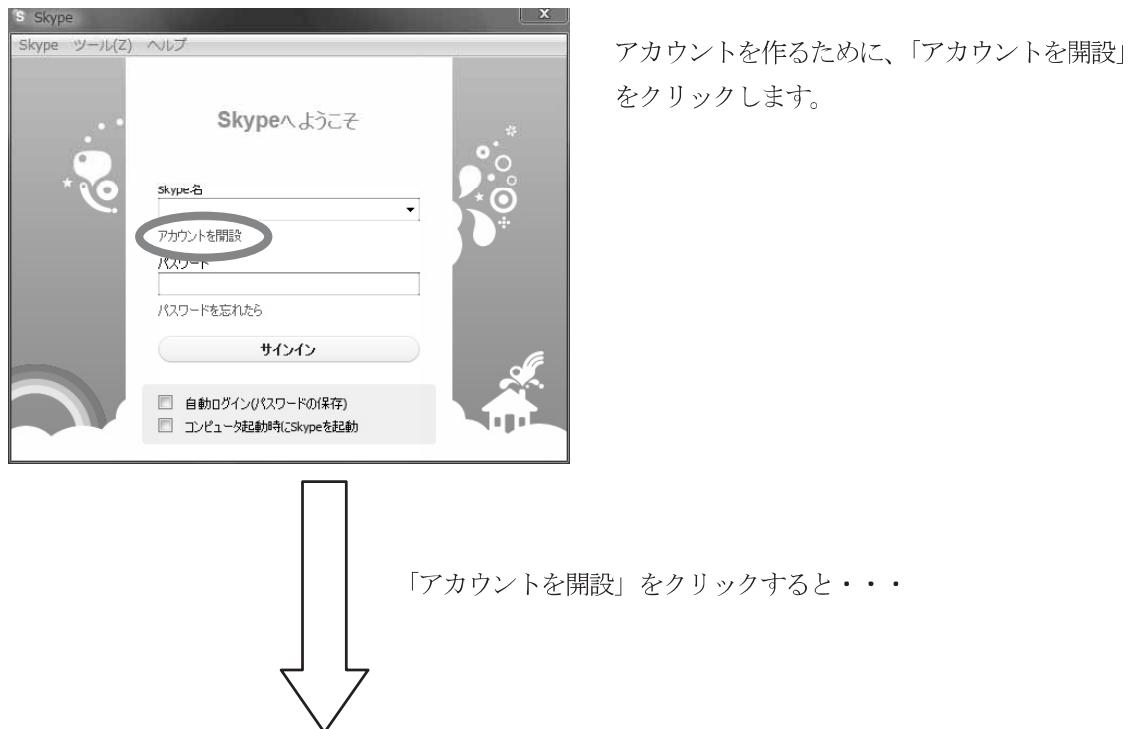
5. 使う言語として「日本語」を選択。
使用に関する規約を読み、「同意してインストール」をクリック。



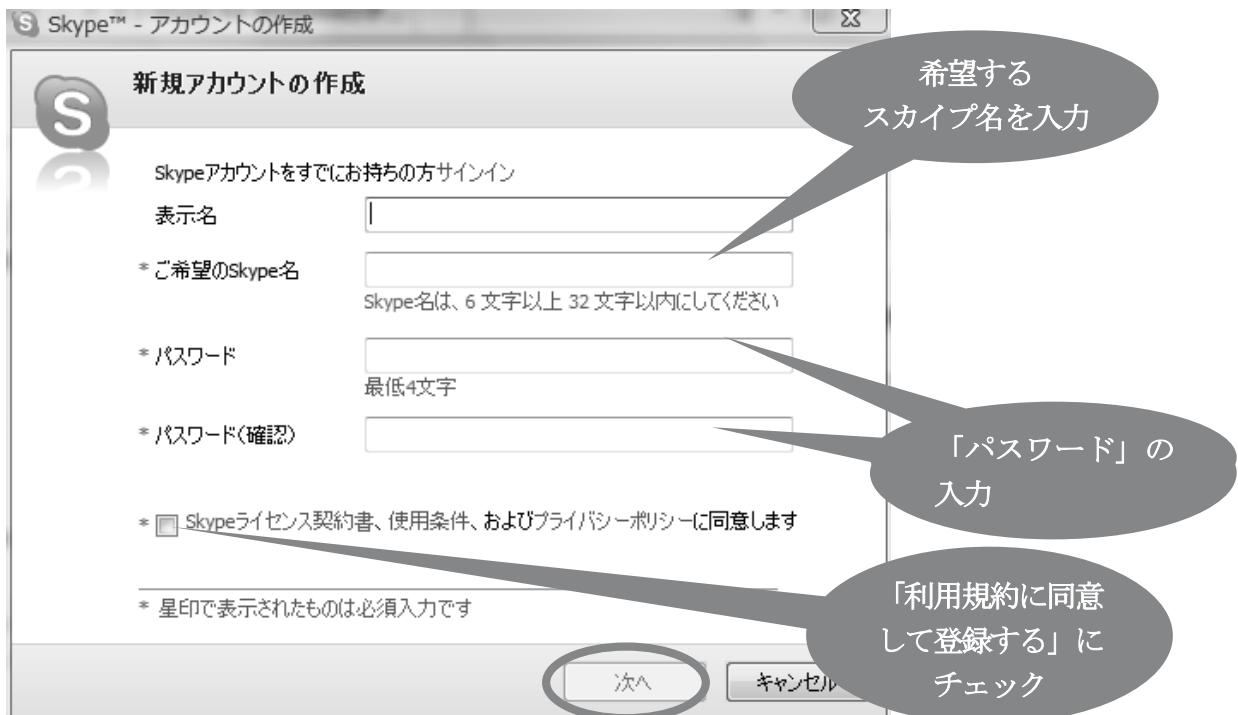
インストールがはじまるので、終わるまで待ちます（数分かかります）。インストールが終わると、デスクトップ上、画面右下に Skype アイコン、プログラムに Skype が追加されます。



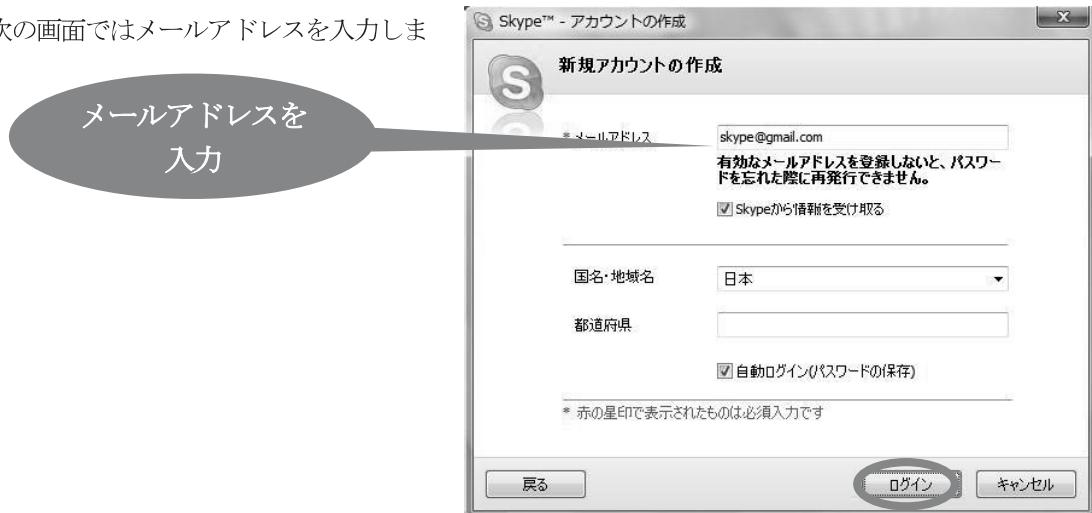
6. デスクトップ上の Skype アイコン、または画面右下に Skype アイコンをクリックしてスカイプを起動します。スカイプウィンドウとアカウント作成ウィンドウが表示されます。



7. 自分のアカウント名（Skype 名）や「パスワード」を設定し、「利用規約に同意して登録する」をチェックし、「次へ」をクリックします。

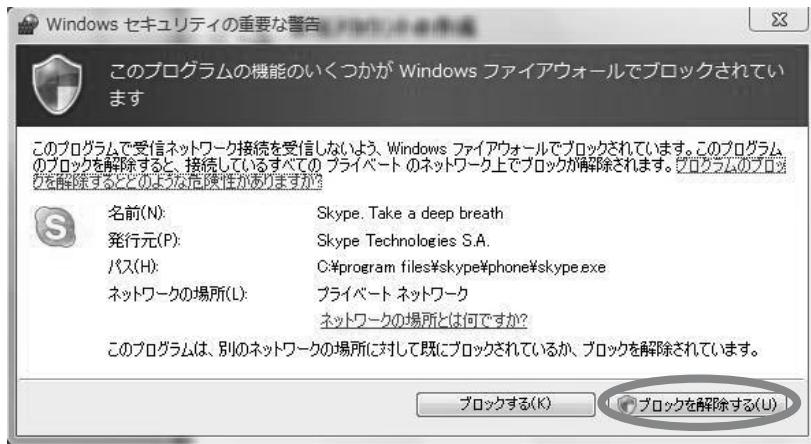


8. 次の画面ではメールアドレスを入力します。



入力が終了したら、「ログイン」をクリックします。

9. Windowsセキュリティの重要な警告が表示されたときには、「ブロックを解除する」をクリック。



10. このようなウィンドウが出てきた場合は「続行」をクリック。



11. 「Skype開始ウィザード」が表示されますが、今回は使いませんので、閉じます。



ヘッドセットの設定をしよう

ヘッドセット（マイクとヘッドホン）を用意してください。（店頭では安いもので二千円程度です。）

1. ヘッドセットのプラグを、パソコンのマイク端子とヘッドホン端子に差し込んでください。

2. 音声テストを行います。メニューの中の「ツール」をクリックし、下に表示される「設定」をクリックします。



3. 「オーディオ設定」をクリックし、「Skype 音声テストサービスに発信」をクリックします。

音声案内にしたがって、声を出してみてください。

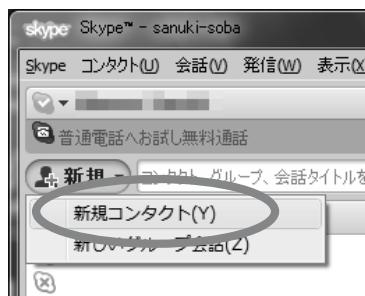
正常にセットアップできたら「保存」をクリック。

自分の声が再生されないときに
は、マイク端子の接続などを確認
してみてください。



会話したい相手を登録しよう

- 「新規コンタクト」をクリックします。



- 相手の Skype 名を入力し、「検索」ボタンを押します。



- 一覧の中から相手を選択し、「選択されたコンタクトを追加」をクリックします。



- 相手に送るメッセージを入力し、「OK」をクリックします。

メッセージ
を入力

Skype で会話してみよう

- 「コンタクト」の中に、先ほど登録した相手が表示されているはずです。クリックすると、その行が広がります。



- 受話器マーク（緑色）をクリックします。電話同様の呼び出し音が鳴り、相手が受話器マークをクリックすると通話が出来ます。（相手がSkypeを起動していないとつながりません）

※ ウィンドウの左側にある入力画面（日本の電話番号またはSkype名を入力）に直接入力して、受話器マーク（緑色）をクリックしてもつながります。

電話にてる

Skypeを起動してあれば、電話同様の呼び出し音が鳴ります。受話器マーク（緑）をクリックすると通話ができます。

電話をきる

右側の受話器マーク（赤）をクリック。

註1： 各種設定は、「ツール」から「設定」を選択し行います。

註2： SkypeOut（Skypeアウト）という機能を使えば、固定電話や携帯電話にも電話をかけることができます。ただし有料ですので、「Skypeアウトクレジット」を購入する必要があります。一般的の固定電話から国際電話をかけるよりは安くなることが多いです。

註3： 複数の人と会話することもできます。

註4： 最新版を利用しましょう。

Web カメラをセットアップしよう

1. カメラのソフトウェアをインストールします。ここではカメラはまだ接続しないでください。

まずは「Qcam v11.1」と書かれたインストールディスク（緑色）をドライブに入れます。右のような画面が出たら「setup.exe の実行」をクリックしてください。



3. 「Qcam のインストール」画面が表示されます。「次へ」をクリックしてインストールを進めます。

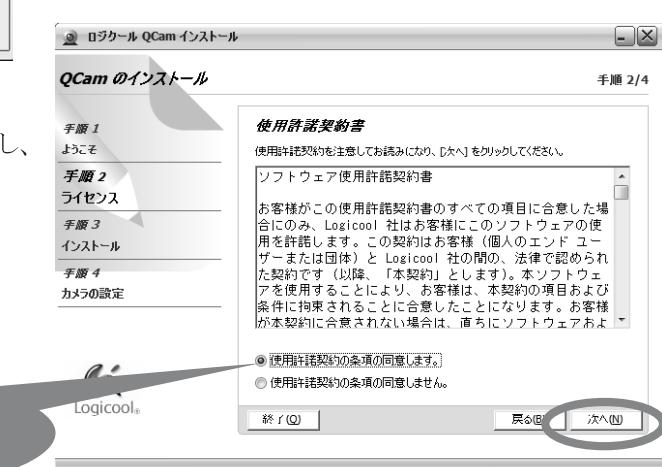
2. 左の「ユーザーアカウント制御」の画面が出てきた場合は「続行」をクリックします。



4. 「OK」をクリックしアップデートを確認します。



5. 「使用許諾契約の条項に同意します」を選択し、「次へ」をクリック。

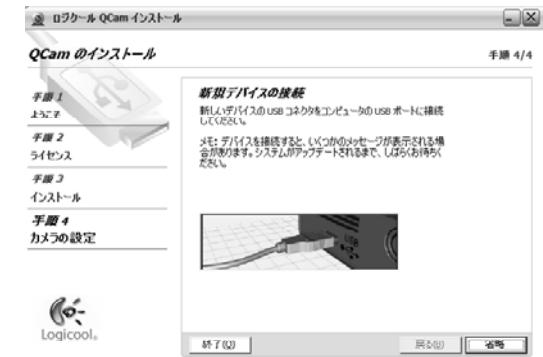


「使用許諾契約の条項に
同意します」を選択

6. この画面が表示されたらカメラを接続します。
カメラが認識されたら自動的に次の画面に進みます。



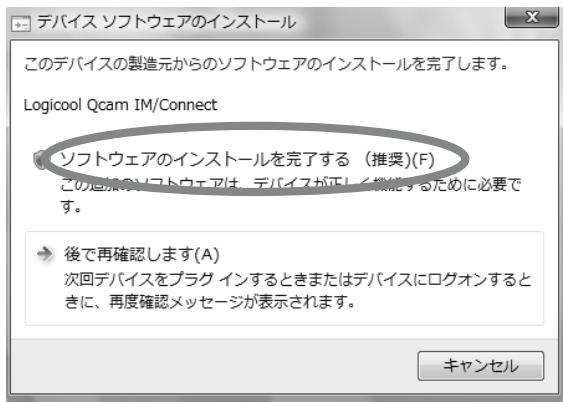
8. 「完了」をクリックします。



7. カメラの映像を確認し、「次へ」をクリック。



下記のような画面がでたら「ソフトウェアのインストールを完了する」をクリック。



下の画面が表示されますが、今回は使いませんので、それぞれ右上の「×」ボタンをクリックして閉じます。



Skype でネットミーティングしてみよう



- 相手との通話中に、下の「ビデオ開始」をクリックします。
相手も同じように選択すると、お互いの映像を見ながら話すことができます。

1. Skype でカメラ設定を行います。
先ほどと同じように、「ツール」から「設定」を選択します。
今回は、「ビデオ設定」を選択します。Web カメラの映像を調整し確認します。「保存」をクリックして閉じます。





Messenger では、テレビ電話のように話をすることができます。派遣隊員同士での情報交換や、帰国隊員との連絡、さらには派遣先の教室と勤務校とをつないでインターネットライブ授業等も行えます。

MSN Live メッセンジャ

ー を使えるようにしよう

1. <http://messenger.live.jp/> にアクセスし、「MSN メッセンジャー7.0 ダウンロードする」をクリック



2. 「実行」をクリックします。
以降、Yahoo! メッセンジャー同様にインストールを行います。

3. インストールが終わったらアカウントを作成して使ってみよう。



ログイン画面



チャット画面



Messenger では、テレビ電話のように話をすることができます。派遣隊員同士での情報交換や、帰国隊員との連絡、さらには派遣先の教室と勤務校とをつないでインターネットライブ授業等も行えます。

Windows Live メッセ

ンジャー を使えるようにし よう

1. <http://messenger.live.jp/> にアクセスし、「今すぐダウンロード」をクリック



2. 「実行」をクリックします。するとインストールが始まるので、メッセージに従い作業を進めます。

3. インストールが終わったらアカウントを作成して使ってみよう。



ログイン画面



チャット画面

- ※ Windows Live Web メッセンジャーというサービスを利用すると、上記のようにインストール手順を踏まなくても、Internet Explore のようなブラウザ上でメッセンジャーを使うことができます。詳しくは上記サイトを参照してください。

開 会 挨 捶
(2 日 目)

開会挨拶

中田英雄

(筑波大学教育開発国際協力研究センター長)

新年明けましておめでとうございます。

筑波大学教育開発国際協力研究センター長の中田英雄です。本日は、文部科学省、筑波大学、JICA 共催の平成 21 年度海外協力隊派遣現職教員帰国報告会—国際協力と帰国後の社会貢献—にお越しくださいましてありがとうございます。

本報告会では、平成 19 年度に派遣され、教育協力活動を無事に終えて帰国した海外協力隊派遣現職教員の方々にご出席いただき、任国での活動結果をご報告していただきます。

16 カ国のそれぞれの国で教育協力活動に従事した 16 名の方にご報告していただきます。

16 名の方は約 2 年間にわたる教育協力活動を通してどのような成果を上げたのでしょうか。成果を上げるために様々な苦労や困難があったことでしょう。困難をどのようにして克服し、解決したのでしょうか。帰国後にこみあげてきた喜びや達成感、充足感を皆さんはどうのように表現するのでしょうか。派遣中の体験を帰国後の教育活動でどのように活用しようとするのでしょうか。限られた時間のために、16 名の方のすべての報告をお聞きすることができないのは大変残念に思います。

本会では帰国報告に統一して文部科学省国際協力イニシアティブの成果を宮城教育大学、愛知県立大学、筑波大学が発表いたします。海外協力者及び派遣現職教員を支援するため各大学が取り組んでいる最先端の研究活動が紹介されます。

最後に、海外ボランティア経験教員の社会還元について佐藤真久東京都市大学講師よりお話をいただきます。帰国した派遣現職教員のみなさんは、帰国したから役目を終えたと思わないで、帰国後も学校をはじめ地域社会に対して社会還元という役割が与えられていることを強く認識していただきたいと思います。

プログラム 5 の帰国報告会において活発な質疑応答をしていただきますよう皆様にお願いして、私のご挨拶とさせていただきます。

プログラム 4

現職教員特別参加制度の意義について

芝田政之

(文部科学省大臣官房国際課長)

皆さん、おはようございます。文部科学省国際課長の芝田と申します。宜しくお願ひ致します。文部科学省を代表して一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

これまで、帰国された先生の報告会と次年度派遣予定の先生の特別研修を別々に実施しておりましたが、今年度からこの2つを合同で行うことに致しました。これにより、多くの新規派遣予定の先生に先輩の経験談に接する機会が提供され、先生同士のネットワーク作りの一助になればと期待しております。また、本会は、調査研究の成果を活用し、学問的にこの分野をサポートしていただいている大学の先生の発表を聞くなど、学問を通して得られた知見の実践的なプロジェクトへの活用・適用について学ぶ機会でもあります。

平成19年度に青年海外協力隊員として派遣された帰国教員の皆様、既に帰国後9カ月が経とうとしておりますが、2年間の活動大変お疲れ様でした。日本とは教育環境はもちろん、住環境もまったく異なる途上国で、色々な困難があったとお察しします。一方で日本の教育を外から見直すよい機会であったかとも思います。ある意味、学校は閉じられた社会ですので、教育委員会でも教員を民間企業に派遣するなど、外に出る機会を増やしているとは思いますが、皆様はその中でも異文化体験という貴重な経験をしてこられたことになります。最近では特に若者の内向き志向が強いと指摘されておりますが、そうした中でチャレンジ精神旺盛にこのプログラムに参加していただいたことに本当に敬意を表したいと思います。色々な意味で自分の世界を広げて帰って来られたものと思います。

それから来年度派遣予定の皆様、3学期開始早々のこの時期に本研修に参加いただき本当にありがとうございました。文部科学省ではJICA、教育委員会、外務省等と協力して、現職の先生がこの活動に参加しやすいように、平成13年度に現職教員特別参加制度を創設致しました。以来8年間で約600名の現職の先生が世界に派遣されています。来年度は青年海外協力隊78名、日系社会青年ボランティア7名の85名を派遣する予定です。現職の先生は児童・生徒に密着した実践的な教育経験・能力をお持ちですので、派遣された国ではそれを活かして国際貢献に寄与していただくことを期待しております。また一方で、こうした国々で経験を積まれることで、帰国後の教育活動もより充実するもの信じております。先ほども申しましたように、若者がどんどん内向き志向になる中で、特に私が期待するのは、若者がより早い時期から異文化へ接触することです。その意味では帰国後の学校等での活動がこのプログラムのより重要な部分になっているのかもしれません。是非、帰国後の活動を充実させていただきたいと思います。

このような背景のもと、文部科学省では、青年海外協力隊事務局の協力を得まして、昨

年9月から開発途上国でのボランティア経験を日本の教育に生かす研究を続けておられる先生と、これを有効に活用しようとされている教育委員会などの取り組みについて調査を進めております。今日はその調査を担当していただいた先生から中間報告をいただくことになっています。

本帰国報告会を特別研修の一環として受講されている来年度派遣予定の皆様には、本研修後、学校での3学期の指導、4月からの派遣前研修を無事終えられ、それぞれの任国の子供たちのもとへ旅立っていただきたいと思います。

帰国教員の皆さんにおかれましては、これからが任国での経験を生かしていただく大切な時期でございますので、本日の報告会で得られる情報、また人脈を活かして、今後の活動を充実させていただければと思います。

最後になりましたが、本シンポジウムの実施にあたり、多大なご支援をいただいておりますJICA青年海外協力隊事務局、および開催にご尽力いただいております筑波大学教育開発国際協力研究センターの関係者の皆さんに深く感謝申し上げますとともに、皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念致しまして冒頭のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

現職教員に期待すること

伊藤隆文

(JICA 青年海外協力隊事務局事務局長)

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました JICA 青年海外協力隊事務局長をしております伊藤といいます。よろしくお願ひします。

本日ここにお集まりになっておりますこれから派遣される先生方は 86 名いらっしゃると思います。協力隊 80 名、日系社会青年ボランティア 6 名と承知しておりますが、この先生方は 4 月の上旬から駒ヶ根、二本松の両訓練所、そして横浜国際センター、これらはいずれも JICA の組織でございますが、こちらの方で派遣前の訓練・研修を受けていただくことになります。その研修に先立って、今回の特別研修を設定していただいたということでございます。この特別研修の実施にあたりまして、大変お世話になりました文部科学省、それから筑波大学教育開発国際協力センターの先生方に高いところからではございますけれども、厚く御礼申し上げたいと思います。また今年は初めての試みとしまして、19 年度一次隊で派遣されて、昨年帰国された帰国隊員の先生方 16 名の報告会を同時に開催することにいたしました。これによりまして、先輩の経験が後輩にきちんと受け継がれることを期待しております。

青年海外協力隊は 1965 年に始まりまして、これまでに 3 万 3 千人を超える隊員を派遣してきました。今の時点で約 2400 人の隊員の皆さんが 74 カ国で活躍しております。それから日系社会青年ボランティアの方々は南米の日本人移住地を支援する海外開発青年という制度として、1985 年に発足した制度でございますが、1996 年（平成 8 年）度に名前を現在の日系社会青年ボランティアという形に変更しまして、これまでに約 1000 人のボランティアの方を派遣しております。そして、今日の時点で 5 つの国で 67 名のボランティアが活躍中でございます。

現職教員の特別参加制度といいますのは、先ほど文部省の国際課長さんの方からもお話をありがとうございましたが、派遣を開始しましたのは 2002 年でございます。この制度が始まる以前にも 650 人を超える学校の先生方が協力隊に参加されておりました。ただ協力隊の場合、訓練を含めて 2 年 3 カ月の期間参加することになりますので、学年の変わり目に日本に居ることが非常に重要である学校の先生の場合、なかなか 2 年 3 カ月という期間では現職での参加が難しいということで、トータルで 2 年の制度としたものでございます。この制度を作りまして以降、8 年間経ちましたが、585 名の先生方が派遣されておりまして、現在 50 カ国で 146 名が活躍中でございます。そして、この現職教員特別参加制度は、昨年度から日系社会青年ボランティアの方にも拡大しております。

JICA のボランティア事業には 3 つの目的があります。1 つは開発途上国の経済・社会の

発展に貢献するという技術協力の側面があります。2番目は途上国と日本の友好親善と相互理解を促進するという側面があります。それから3つめがボランティアの経験を日本の社会に還元するということです。この3つ目の日本社会への還元というのが非常に重要な部分でありまして、国の事業として国民の税金でこの事業が賄われている理由がそこにあるといつても過言ではないと思います。教員の皆さんはこの社会還元という点で、とても有利な立場にあると思います。つまり帰国されてから、再び教壇に立って子供たちに経験を語ることによって日々の仕事の中で社会還元をすることになります。これは他の職業にはないメリットだと思います。したがって、私達JICAとして、もっと多くの先生方にJICAボランティアとして海外に出ていただきたいと考えております。

また近年、日本の社会も大きく変化しました。たくさんの外国人労働者が日本の経済を支える構図になってきています。その数は200万人とも言われています。そしてその子供たちである外国籍の児童、これが7万人も日本の公立の小学校に通っていると聞いております。恐らくここにおられる先生方が教えていらっしゃる学校にも、外国籍の子供が多かれ少なかれ在籍しているのではないかと思います。まさに日本の社会も異文化と共生する時代、社会になってきたということが言えると思います。こういう状況の中で、豊富な海外経験をもって、異文化に対する深い理解をもって、更にコミュニケーション能力がある人材、これを教育現場が必要としているのではないかと思います。皆さんが訓練も含めて2年間、協力隊員、日系青年ボランティアとしてチャレンジされれば、必ずこういう期待される人材になるものと確信しております。これから出発される皆さんにはどうか頑張っていただきたいと思いますし、昨年帰ってこられた皆さんには、既にこうした人材として学校現場で活躍されているものと考えております。JICAとしましても、現在、「日本も元気にするJICA海外ボランティア」というプロジェクトをやっておりまして、これは日本の社会の中でボランティアの経験をいかして、地域の活性化ですか、町おこし、村おこしに取り組んでいるOB・OGの方々、あるいは教育現場や自治体で頑張っているOB・OGの皆さん、これを積極的に取り上げて世の中に発信していく取組です。帰国隊員の皆さんには、御自分を含めて周りで頑張っている仲間の皆さんの情報をJICAに提供していただけると非常にありがたいです。

これから派遣される皆さんに対する今回のこの特別研修の目的の一つは、支援のプログラムをご紹介することにあります。筑波大学をはじめとする多くの大学による充実した支援体制が組まれています。協力隊の他の職種ではなかなかこれほど充実した支援の体制はみられません。どうか、しっかりと活用していただきたいと思います。JICAのボランティア事業はボランティア本人が主役です。我々JICAはこれをサポートさせていただくものです。現地の活動の場面では、日本では想像できないような困難や苦労があると思います。でも迷ったらぜひ高いハードルの方に挑戦をしていただきたい。そういうチャレンジ精神で乗り越えていただきたいと思います。昨日と今日の研修が皆さんにとって有意義なものになりますことを期待しております。

JICA を代表して一言御挨拶申し上げました。どうもありがとうございました。

プログラム 5

ネパールでの活動報告

小野奈津子

(19-1、ネパール、小学校教諭、刈谷市立刈谷東小学校)

宜しくお願ひします。だいたいのことは配布資料に書いてあります。せっかく来て下さったので、そこに書いてないことをお話したいと思います。わからないことがありましたら、また後で聞いて下さい。21ヶ月間に行ったことを順番に報告させて頂きます。

知っている方も多いと思いますが、ネパールはインドの右上にあります。日差しは結構強いのですが、高地で温度は日本より涼しいです。海がないので物は全てインドから運ばれてきますから、インドから物が来ないと何も入ってこないという大変なことになります。

ネパールの面積は日本の三分の一、人口も六分の一と凄く少ないので、日本と違うのは民族が50以上あり、緯度の高いヒマラヤ山脈の方に住む山岳民族から、熱帯のように年中暑いバナナが採れるようなところに住む民族まであり、言葉もそれぞれ違い、公用語はネパール語です。

駒ヶ根での訓練が終了した後、ネパールに向かう空から眺めたネパールは全部赤茶色に見えました。そのわけは、煉瓦の道や建物が多かったからです。私はこの道でよく滑って転びました。特に苔が生えているので「緑の煉瓦には気を付けて下さい」と、言われました。

ヒンズー教のお寺が至る所にあります。4月が新年なのですが、お正月にスライドにあるようにお祭りが行われます。

先ず、ネパールに行ってびっくりしたこと。目の見えない子が、例えばこういう橋のところなどに居て、私が「ちゃんと迎えに来るの?」と聞いたら、「朝、家族と一緒に来て、夕方お姉ちゃんが迎えに来てくれるんだ」って言うんです。暑いからかわいそうで、日傘をかけてあげたりしました。暑くてもずっと座っています。また、生きる糧としてお金をもらうために、親が手を故意に切断して足や手がない子とか、包帯ぐるぐる巻きで倒れている人とか、とても心配になるような人がたくさん街にいました。それからある日、ご飯を食べていたら絵を描いてくれたのですが、後からお金を請求されてびっくりしたこともあります。それと、バナナの皮は本当に滑るのです。教科書にも注意するようにちゃんと書いてありました。見るとわかるのですが、英語とネパール語の両方で書いてあります。

スライドにあります可愛い子羊たちは、ご飯になります。お肉屋の前に大きい鍋があつて、そこに入れて皮を剥がされてお肉として売っているので、初めはもう目を向けるのが凄く辛かったのですが、だんだん「ああ・・・ドナドナ」って感じになりました。

私の任地バクタプルは首都から30分くらい離れています。スライドは私の部屋から見た景色です。真ん中に町のお寺、そして10月には奥にヒマラヤ山脈がはよく見えました。

私は教育チームの一員として派遣されました。この衣装がチームの衣装で、私たちが作ったのですが、ネパールの民族衣装で、4人チームでやっていました。真ん中の人人が JICA の職員と調整員の方です。

バクタプル郡という所は 6 地域に分かれているのですが、そのうち 2 地域は他の NGO などが入っているので、JICA は 4 地域を担当していて、そこで 1 名 1 地域を担当していました。

私の配属先はバゲショリー高校というところです。そこには幼稚園児から高校生まで 2000 人いました。私は先程のスライドの真ん中の地域担当だったのですが、そこの地域には 18 の学校がありました。その中のリーダー格で一番大きな学校が私の配属先です。その学校には特別にリソースセンターというものがあり、一角にある小さい部屋なのですが、そこに私は配属していました。

要請内容はバゲショリー高校に付属するリソースセンターそのものの機能を強化することと、算数の学力向上、教師指導技術の向上でした。リソースセンターにいるリソースパーソンと言われる人と一緒に仕事をすることになりました。リソースセンターは勉強会やコンテスト、ほかの地域、ほかの学校の中心的役割を果たす、という役割を担っています。しかし、普段ネパールの先生が「リソースセンターってなに?」というくらいの知名度しかなく、全く機能していない状態でした。

先ず私は、地域 18 校を巡回しました。その中のほとんどが寺子屋で、お寺の中の一棟を借りて教えている感じでした。寒いと外に出たりもしていました。また、障害のある子も皆と一緒に勉強していたのはびっくりしました。

その中で私が問題だと感じたことは、教えないで最初から問題を解かせること、暗い教室の窓が小さいこと、机の位置が日の当たらない場所にあること、掲示物がないこと、ゴミを床や外に捨てる習慣、土足で出入りすること、カンニングが日常的なこと、先生も雑談していることがよくあること、などです。また、先生が物を投げ渡すことも気になりました。教えないで問題を解かず、教具を使わない、教科書を写す、机間指導をしない、「できたらもっておいで、」と言う、答え合わせをしないでチャイムがなったら「はい終わり」というようなことがよくありました。そして、わからない子が「あー、わからないで終わっちゃったな」というのが気になりました。

私たち四人がネパールに着いたとき、これからどうやってチーム活動をしていくかと一度皆で話し合ったことがあります。巡回中に突然入っていき、「もうちょっとこうしたほうがいいですよ」と言うのは気が引けるしおかしいと思っていたので、1 対 1 で話すよりも勉強会などを開いてお互いに情報共有をしていくという形がいいかなと思い、勉強会を開くことにしました。それに際して、私たちボランティア 4 人にそれぞれ一人リサーチパーソンがいますので、その人たちと会議を持って、「じゃあこういう計画でやっていきましょう」ということを決めました。マス目ノート推進というのは前任者からの引き継ぎです。筆算の計算間違いはノートに真っ直ぐ書けないからということがほぼ全員について書

かれていたのですが、何も改善されていませんでした。そのため、升目ノートを経費を使って作ることにし、その管理の仕方などの約束事を決めて、配ることにしました。これらはグループ共通のことと、個人では校長会議で「私はいまこの活動をしています」や「こういうことをしたいのですが」という提案をしたり、学校巡回や他にも自発的活動をしました。

算数については、算数教師や各カウンターパート、リソースパーソンとどのような問題があるのか話し合い、それをもとに勉強会を開催する、ということをしました。そして、ネパール人が主体となって今どんな問題があるのか聞いたり、それを共有したり、日本のやり方を紹介したりしました。私の個人の活動ですが、算数では竹ひごやビールの王冠、カード、それに紐などの道具を使って一緒に行うということをしました。また、餅を作つて食べたり、劇をやったり、絵本を読んでゲームをしたりしました。特に気になったのは、「イエスかノーか」という問い合わせがとても多いことでした。そのため、「どう思う?」というような問い合わせるやり方を紹介できるといいと思い、一緒に行いました。また、先生と話していて、楽器・ボール・運動場がない、教具がない、情操教育はやれない、図工・体育・音楽が指導できないので他の教科に振り替えられることが多い、という問題があることが見えてきたので、「世界の笑顔のために」という制度を利用していただいた物を使って、一緒に授業することにしました。

日本から届いた絵本は、先生と一緒にネパール語に訳して、ボールも 18 校で順番に使えるようしました。鍵盤ハーモニカは、巡回していたので移動するたびに子供が持つて運んでくれたのですが、先生たちもとてもやる気がありました。音階というのを聞いたことがなかったとのことで、これはとても大きなことだと思います。また、私が日本で働いていた学校の先生がその学校に呼びかけて、手荷物でネパールまで持つて来て下さいました。それを使って図工や絵を描いたりしました。絵を描くという経験があまりないので、友達の絵を見て笑ったりしていました。スライドは、たばこの空き箱やペットボトルで楽器を作ったりした時のものです。

勉強会を何回も開催し、その中で先生に子供になってもらい、どんな風に丸付けしてもらつたらいいかなどを体験してもらつたりしました。ほとんどの勉強会では子供がいなかつたので、実際に子供に出てもらうなどもしました。勉強会を 4 回行った後、自分たちだけでもできるようにと言うことで、授業研究会を 1 回やり、後任に引き継ぎました。現在、私の後任は授業研究会を中心に進めているそうです。

幼稚園クラスではおもちゃが飾ってあり、私も頼んだのですが、「壊れたらどこからお金が来るの? いつ買ってもらえるの?」と言われシュンとなってしまいました。それと、字を書くテストがあるのですが、幼稚園の子でも遊ばないで A,A,A,B,B,B … と書く練習をしていたので、幼稚園の勉強会も開こうと言って、これも二回開きました。シニア・ボランティアの方に協力してもらい、ネパール語は私の方が話せて、シニアの方は技術を持っているということで、良い勉強会になったと思います。シニアの方には、言葉カードとか

物から教えるということを紹介して頂きました。

気になっていたのは、巡回しているときにスライドにあるような子に会うことです。私は学校が四時半に終わったので地域をぐるぐる回っていて、こういう子たちとちょっと折り紙などをしたり、何となく仲良く遊んでいたのですが、ここに行ったときにどうぞ座つて下さいといって座布団を出してくれたのですが、自転車のサドルから綿がばーっとでたものを出して下さって、なんだかとても有り難かく感じました。

四月に新学期が始まるのですが、そのときに私はこの子のあとについて行って、学校に行くよう親とこの子たちに話をして、次の日に「来るかな?」と思っていたら来てくれました。言葉がちょっとインドの言葉だったので、通じなく、別の女の子がネパール語に通訳してくれるのですが、とりあえず一日、一回連れてこようと思って連れてきました。それで、「明日学校においでよ」と言ったら、門の外から覗いているだけで入って来なかつたのです。ずっと向こうから覗いているのです。図工だけでも一緒にやろうと思って日本からの鉛筆などを使って一緒にやりました。

また、運動場がある学校を見つけたとき「ここでバスケットボールをしよう」と思いやったのですが、草がイネくらいに伸びており、私が先生たちに「これ刈らないの?」と言ったら、「冬になったら枯れるから刈らなくてもいいんだよ」と言われたので、「えーっ」と思いながらも「だめ、これ刈らないとバスケができない」、「任期が終わる」と思い、皆でハサミを使って毎日切っていました。しかし、先生たちも、皆でやっていたら重い腰を上げて下さって、だんだん先生たちも手伝ってくれるようになりました。

やっとバスケの練習が始まりましたが、18校もあったので一日3校ずつ練習しました。大会などをして「私はスポーツを教えているのだ」と他の先生がわかり、今まで教科書を読んで体育をしていたのを「サッカーやるから一緒にやってよ」ということができるようになりました。

困ったことです。スライドは、水が出なくて並んでいるところです。こちらはガソリン待ちです。インドからガソリンが来るのですが、それがもうストップしています。これはまるで米騒動のようですが、ガス騒動です。シリンドラのガスが夜中届いたところです。これはストライキによる渋滞です。これをネパールのカーニバルと呼んでいました。こうなると先生も来られないで、学校も休みになってしまったことがあります。

赤痢で入院しました。日本では二週間隔離のところですが、ネパールでは5日でした。ネパールの病院の点滴はとても痛かったです。

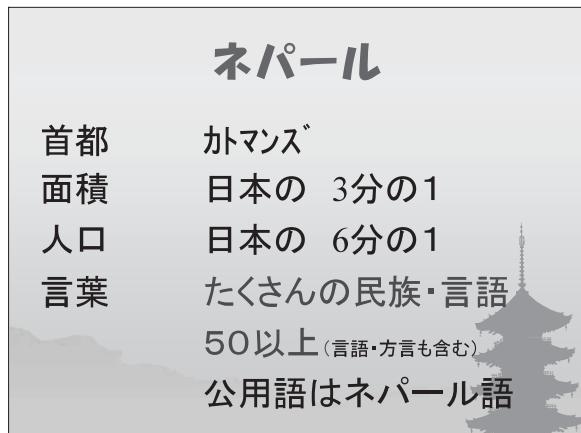
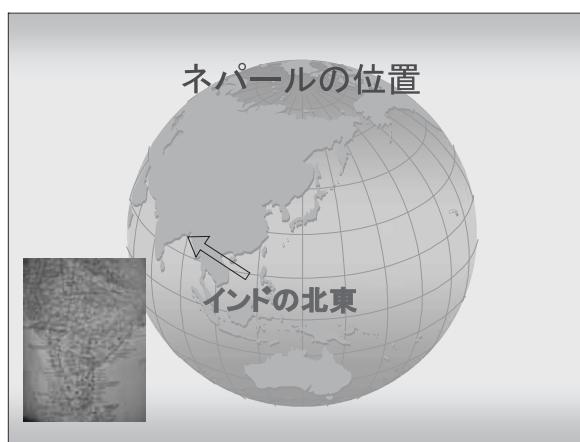
これは、JICAのシニア・ボランティアの方が学校に来られない子のために活動をしていたので、私も行ってみたのですが、とても遠くて、帰りにはストライキに遭い、買ったバナナを持って歩く羽目になりました。

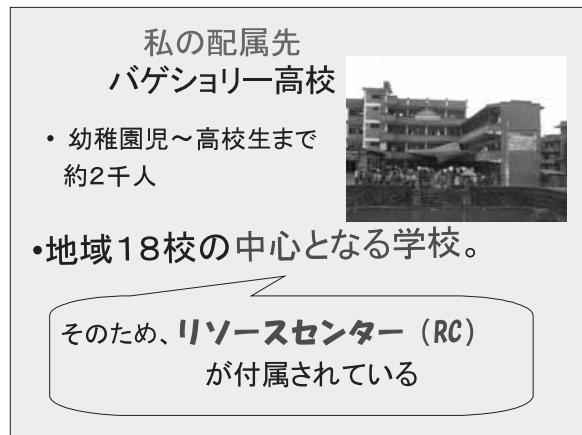
日本の子供たちに伝えたいことです。スライドは、巡回のときに私がクーピーを二人に一個あればいいなと思い一杯持って行ったら、「先生、どうしてこんなに持ってくるの?! お金凄くかかったでしょ? こんなの校長先生が買ってくれた一個で僕たち楽しいし、足り

るのに」と言っていたのが、「あら、目から鱗」という感じでした。これは男の子が三年生でお兄ちゃんが一年生という兄弟のネパールの現状です。そして、水が出ないのでいつも井戸に行きます。ロウソクで宿題をやったりします。

私は一年生の担任なのですが、一年生の子に「ネパールってちょっと遠いね」と言ったのですが、「やはり一回見せてみないと」と思い写真をばーっと見せたら、「びっくり」という子も多かったのですが、「貧乏ってかわいそう」て言つたのです。私は朱書きのとき「本人に聞いてみないとわからないね、かわいそうかな? どうかな?」と書いて終わつたのですが。私は一週間前ネパールにもう一回行きました。そのときにビデオを撮ってきて、「ロウソク、電気がないときなにをやっているの?」と聞いてみました。「お姉ちゃんとお茶飲んで、おしゃべりして、楽しいこともある」とか言って、「これを是非聞かせないといけない」と感じました。「かわいそう」で終わらず、その子たちがその中でも一生懸命生きている様子を伝えるのが大事だと思うので、それをやっていきたいなって思います。また、ネパールの文化とか、日本と同じ部分もある、ということを伝えていきたいと思います。とても楽しかったです。ですが、最後に言われたことは、「他の学校にはいろいろ教えるけど、私たちには何で教えてくれないの?」ということです。私は最初からもっと見せて、こういうことをやるのだっていうのをやっていったら、「こういうこと教えて」とかいろいろ聞いてくれたと思うのです。ですから、是非次に行かれる方は、最初から表現していくと、「こういうこと教えてほしい」とかいろいろ聞いてくれると思いますので、考えながらもどんどん動いていったらいいなと思います。

これで終わります。ありがとうございました。





要請内容

- ①配属先に付属するリソースセンター(RC)の機能の強化
 - ②算数の学力向上
 - ③教師の指導技術の向上
- ・RCは、勉強会、コンテストの開催など地域の学校の中心的役割を果たす。

まずは、 地域18校を巡回



問題に感じたこと

環境・しつけ

- ・暗い教室
- ・机の配置
- ・掲示物なし
- ・ゴミを床に捨てる
- ・椅子に土足で
- ・カンニング
- ・物を投げて渡す



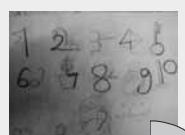
問題に感じたこと

- ・教師の指導法
- ・教具を使わない
- ・教科書を写すのみ
- ・机間指導なし
- ・答え合わせなしも あり
- ・分からぬ子への支援が不足

活動内容

グループ

- ・リソースパーソン(RP)
- との話し合い
- ・算数勉強会
- ・マス目ノート推進



個人

- ・校長会議に参加・提案
- ・18校、学校巡回
- ・自発的活動(例運動会や授業研究会)



グループで活動

1 算数教師や各CPと話し合い。



問題点をもとに →



個人の活動 学校巡回

見て、参加して、提案して
ネパール人の先生と授業



先生と話す中で

- ・楽器・ボール・運動場が無い
- ・教具が少ない
- ・図工・体育・音楽は教師自身も経験が無し→指導できない。

「世界の笑顔のために」プログラム
を利用して共に授業を

日本から届いた 絵本・ボール



ネパール人の先生と翻訳

けん盤ハーモニカ



日本の学校から 届いた善意



図工



音楽



いろんな方法で 勉強会



授業研究会



幼稚園クラス



届かない おもちゃ



文字を書くテスト

ナーサリークラス 勉強会



シニアボランティアと共に



学校に来れない子どもたち



ゴミ拾いで生活する子ども



下校後 子どもたちと遊ぶ



学校へ行こう



図工に誘って



大きな運動場がある
唯一の学校



ここで、バスケットボールをしよう！

しかし 休み明け
草は 稲のよう…。



運動場の草を、みんなで毎日刈る



バスケ練習



18校 バスケットボール大会



教科書だけじゃ
外で体育！



さあ、困った！

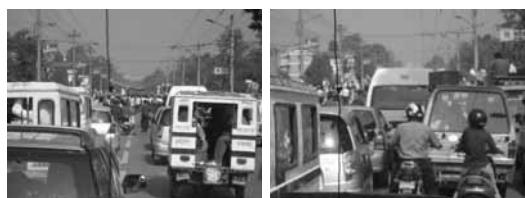
水が出ない



ガソリン・ガス不足



抗議運動による渋滞



交通妨害



学校も休みに



赤痢で入院



学校が遠いこのための
代替車



帰り ストライキ発生！！



車通れず

バナナを抱き 2時間歩く…。



お土産。

日本の子どもたちに
伝えたいこと

1つでいいのに



学校に行ける



ミルクとぬいぐるみ持つて



朝晩 水くみ場から運ぶ



暗い中 井戸から水をくむ



ろうそくで 宿題



電気が無くても
けっこう 楽しい



ネパールの祭り



ティホール

女性だけの休み



ティージ

お別れ



ご清聴ありがとうございました

インドネシアの生活と活動報告

吉嶋哲也

(19-1、インドネシア、体育、福岡県立香椎高等学校)

みなさん、こんにちは。インドネシアにバレーボールの指導者として派遣された吉嶋哲也と申します。現在は福岡県立香椎高校で保健体育科の教員。バレーボール部の顧問をやっております。1年前の今頃は、インドネシアで生活していたのですが、特に正月ということで日本のような盛り上がりもなく、雨期で道路が冠水して家の前が川のようになり、バレーの練習に行けない、家の中はカビが生えて困っていたなあと思い出します。インドネシアでの生活は、活動も日常生活も今思うとハプニングの連続だったような気がします。それでは、活動報告をさせていただきます。まずは、任国のインドネシアの紹介をします。

インドネシアは、気候は雨季と乾季しかなく、いつも真夏です。地図で見てもらうとわかるように、多くの島々で構成されているため、島や地域によって民族、言語、文化、習慣、宗教が全く違っている多種多様な状態です。これを、1つに繋いでいるものが、公用語のインドネシア語です。

配属先は、中都市のバレーチームでした。政府が全国22ヶ所に、ジュニア層のスポーツ強化を目的とした施設・組織を設置しています。中1～高2の選手が寮生活を送りながら練習をするといった形態です。とても素晴らしいシステムのように聞こえますが、実情は機能していない部分が多くあり、これが国を挙げてやっている選手強化なのかと疑問に思うことばかりでした。だから協力隊員が派遣されたんだと思います。

練習環境について話をさせていただきましたが、覚悟はしていましたがとにかく厳しい状況でした

もう組織されて何年も経つのですが、こんな感じです。とても練習できる状況ではありませんでした。実は、選手や指導者にコートを整備するという意識、習慣が全くないのであります。自分たちはバレーをするだけで、コート整備は事務所の仕事。事務所は、ボールさえあれば練習できるだろうといった感じでした。これでは、選手がけがをしてしまうと思い、選手・コーチにコート整備の重要性を話しましたが、なかなか理解してもらえませんでした。

それなら自分でやるかと思って、カマ1本で手作業でやりました。やってみるとこれが大変で、鎌はすぐに壊れる。日陰はない。汗は大量に噴き出て泥まみれ、といった感じでした。いったん始めたので意地でもやめられないと思っていましたが、おかげで、体重は8kg位ダイエットさせてもらいました。一生分の草抜きをしたと思います。

スライドの写真は整備前のコート、日頃の練習風景、試合の写真です。

ある朝、「YOSHI！もう草抜きやらなくてもいいよ！」と配属先から話がありました。「よ

かつた、ちょっとは私の行動が通じたんだ」と思っていましたが・・・。こんな感じで、目が点になってしまいました。目をつけるポイントが違うんです。実はその週末、スポーツ省の視察が入っていたからでした。結局。選手のための整備になっていないのです。

コートは、水をまかないと足が滑って仕方がありません。選手が遠くから小さいバケツに水を汲んできて撒く、乾いたら、また同じように遠くから水を運んてきて撒く。とにかく効率が悪いのです。日本人のように、時間を大切に効率よく練習する習慣が、やはりないのです。

ふとコート横を見ると井戸が草に覆われていました。「これを何とか使おうよ！」と粘り強く説得しました。しかし、なんとポンプが盗難されました。その後、手で汲み上げる井戸に改修したのですが、次は水を汲み上げるロープや滑車が無くなりました。とにかく、いろんな物が無くなります。最初、選手やスタッフはコート整備をなんでやらないんだ！と腹を立てることがありましたが、彼らには、彼らの言い分があり、お祈りの時間や食事の時間確保が原因だと、だんだんわかつていきました。そして、徐々にコート整備の定例化を定着させていきました。それが、スライドの写真です。

スライドの写真を見てもらえばわかると思いますが、土地だけは広いので、ボールがどこまでも転がっていき、効率よく練習できません。また、たまにどこからかやってきたヤギが暴走するので、危なくて練習に集中できません。配属先に現状を話すと、こんな感じで、また一つになるかわからないし、コンクリートの壁作る資金があるなら、もっと選手のために使おうよといった感じでした。

コンクリートの壁はいつになるかわからないし、もたもたしていると、雨季がやってきます！それなら、防御柵自分で作ってしまえ！と思い、近所に竹屋さんを発見し、竹を運んでもらいました。そうすると、スタッフや選手もおもしろがって手伝ってくれました。

これは竹を使ってのレシーブの練習です。何でも利用しました。後ろの方にさつき写真できれいになっていたはずの観客席が写っていますが、もう木とか草とか生えているのがわかると思います。雨季は、あっ！という間にこんなに生えてしまいます。

街のスポーツ店や首都にはボールや用具は売っていますが、配属先が選手の用具にお金を使いたがらないのです。予算の立て方が無茶苦茶なので、いろいろな所で使われ、肝心の選手の所には資金が届かないのです。日本では、ボールは大切な物ですが、ここでは、質が悪くても、あるからいいだろといった感じです。

トレーニング用の重たいボールを作りました。中身は古着の靴下、シャツです。おかげで指に一生分の豆が出来ました。

最初はボールカゴもませんでした。効率的な練習を考えたときにボールかごは必要ですが、そういった発想がないのです。写真のボールカゴは、実は元は鳥かごです。鳥かごとしては、地面にかぶせて使うのですが、ひっくり返せばボールカゴになると思いました。早速、カゴ屋を開き出し、このカゴを頭からかぶって自転車に乗って、練習に行きました。選手やコーチは大笑いしながらも喜んでくれました。

今思うと、効率的な練習を知らない、考えない。ということもあります、暑い気候、お金がない状態等置かれている環境がそうさせて、あきらめているところもあるように思いました。それと、実は選手もコーチもコート、用具の状況には困っていました。インドネシアでは、上下関係が厳しいので、インドネシア人コーチが配属先の上司に意見を言うことが出来なかったのです。なので、私が言うしかありませんでした。しかし、配属先は口約束だけで、いつまでたっても状況は変わりませんでした。

スライドの写真を見て皆さんは何を感じますか？選手は立派な揃いの服を着ていると思いませんか？左側の男性が、首都のスポーツ省から、お役人が視察に来たのですが、そんな時だけは、配属先が新品のジャージを配布するのです。特別な日ではなく、日頃が大切と言いたいのですが、それが通用するのは、日本人だけかもしれません。スライドの写真ですが選手は、雨季はびしょぬれになりながら練習。乾季はコート整備をしながら練習。そして、日本から送ってもらった道具を、選手は拭いて大切に使っています。スライドの写真は、私の家でおにぎりパーティーをしています。なんと、寮で選手の食事が停止されたのです。これも、予算が旨く廻らない結果でした。それが当たり前の社会なのです。そのため、選手は道になっているパパイヤを取って食べたりしていました。選手は、みるみる痩せていきます。これでは、立派なシャツを支給されても、強くなりません。そんなお金があるなら、選手の食事、ボール、体育館使用料にお金を使って欲しいと感じました。一生懸命にやっている選手を見ると、涙が出るくらいに強く感じました。

体育の授業を視察に行ったのですが、裸足でも平気な顔です。先生が横断歩道がない道路を、普通に渡って連れて行きます。たぶん、日本では考えられないと思います。スライド③の写真は、工事の中でのテスト風景です。これで、何のテストが出来るんだろうと不思議に思いました。日本では考えられないですよね。①～③の学校と、④の学校は違う学校ですが、比較してどうでしょうか？体操服が綺麗で揃っていますよね。靴を履いている割合も違いますよね？貧富の差、格差が学校現場にも当然あるのです。

開発途上国でありながら、小学校の就学率はかなりいいように見えますが、実際は月謝の200円が払えなかったり、家庭の状況、怠けでかなりの子供達が学校に行かなくなります。そして、行かなくなった子供達は、釣りをしたり、道路で物乞いをしたりしています。

その他に、いろんな事をやっておりました。スライド③の写真は、日本で勤務していた学校から用具を送ってもらいました。用具を私が準備して本当に現地のためになるのか、でも、準備しないと日にちばかりすぎてしまい、練習が出来ないと本当に悩みました。それで、結局送ってもらつたのですが、かなり古い中古の用具が送られてきました。日本人にしてみたら、「物がないなら中古品でもかまわないだろう」、インドネシア人にしてみると、「そんな中古品は要らない。」といった感じでプライドが傷つけられてしまいます。協力隊に参加する前なら、そんなに用具が不足しているなら、中古品でも捨てる物でも、困っているならあげよう。と考えたかもしれません。何ら悪気はないのですが、現地の人々

の置かれている状況、支援内容、緊急度によっては、こちらの親切が誤解を受けることもあると思います。この時、インドネシア人のスタッフに、「ごめんね、中古品が届いてしまったんだけど」というと、「いいよ、気にすんなよ！おまえの言いたいことはわかってる。ありがとう」と言ってくれました。彼らの懐の大きさを感じました。

それでは、次はインドネシアの紹介ムービーです。

最後に、インドネシア人から見た日本人に対してのイメージは、ここにあげているようなことです。この内容というのは、日頃のしつけとして、家庭や学校で言われていること、言われてきた事だと思います。これは日本の今までのしつけが間違ってなく、自信を持っていいことだと思いますし、こういった点が、外国からは評価されていることを、日本人として忘れてはいけないと思いました。そして、このようなマイナスなイメージを持たれているのですが、スライドは教員をさせてもらっている私にとって、学校現場や生徒と接する上で気をつけておかなければならぬことだと感じました。

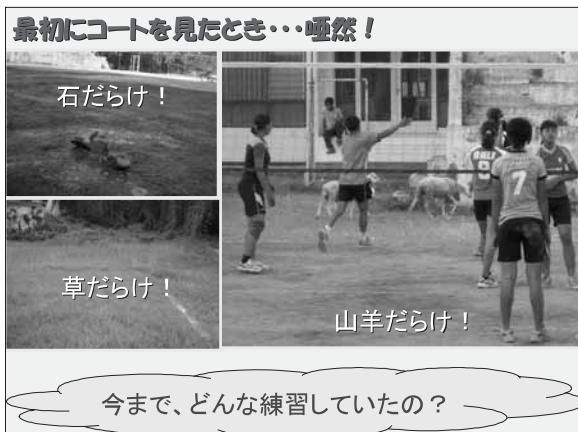
又、今まで学校の現場では、不登校や退学する多くの生徒達、社会規範が低下していく子供達と接する中で、この先の日本はどうなるんだと感じていました。しかし、赴任前の研修所では、バイタリティーあふれる多くの若者と出会い、日本の若者もこんなにすごい人たちがいるもんだと感心しました。そして、嬉しいことなのですが、教え子が既に私の先輩隊員として派遣され、また、1人は同じ隊次で派遣。実はその子は、研修所が別であったため、県庁の表敬訪問でバッタリあって発覚しました。1人は、帰国後、別の帰国報告会があり、その時に発表者として出席したのですが、隣の席の発表者が教え子だったということもありました。現役の高校生の頃とは、見違えて成長しており、私としては、嬉しいと同時に、少し恥ずかしいといった感じでした。志を持って生きている彼らに、とにかく、感動しました。

異文化、異国、異なる社会で生活する上で大切なことは、自分から理解しようとする心や姿勢を持つことだと思います。結局、目の前で起きていることは、全てを知らないとわからないと言うことです。そのためには、………こんな感じです。しかし、謙虚な姿勢とともに、時にはきっぱりと自己主張を行うことは、必ず必要だと感じました。そして、ふとした時に現地で思ったのですが。このことを「学校・生徒」に置き換えてみると、教員生活、学校現場、生徒と接する上で、必要な姿勢という点、気づかされた部分がありました。

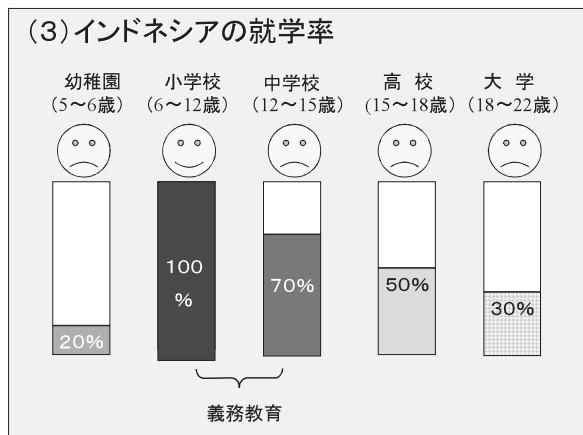
本当にいろんな事が起き、いっぱい笑い、怒り、泣き、戸惑った2年間でした。実はまだ頭の中がうまく整理できていません。日本は、便利で、水も、食事も何でもある。高度な医療。高度な制度がある。その反面、日本が無くしてしまい、インドネシアから学んだこともあります。例えば、家族の繋がりの強さ。人との距離の近さ。助け合いの心などです。そして、自然災害、医療技術の低さ、日本ではありえない事でよく人が亡くなります。その事が当たり前の社会であり、インドネシア人はそれを受け入れています。とにかく、「命」について考えさせられました。そして、Tidak apa2 とありますが、

失敗しても、何がおきても、彼らは「大丈夫」、「問題ない」と笑顔で言います。失敗やミスを許す寛容さ。と、そう言ってないとやっていけない現実といったところでしょうか。「幸せの意味」と書きましたが、お金がなくても、物が無くても、家が狭くても、みんな笑つて生きていました。家族が本当に仲がよく、どこに行くにもバイクで4人乗りといった感じです。今の日本は、物質的な豊かさ、技術の進歩、便利な世の中になっています。その分、忙しく、何か余裕が無く、心の豊かさ、人の温かみといった人間本来持っているもの、持つべきものに社会が光を当てていないというように感じます。インドネシアの方々と共に生活し、今までの幸せの価値観を変えられました。その感じた部分を、これから出会っていく生徒達、周りの人達に伝えていきたいと思っています。

ご静聴ありがとうございました。







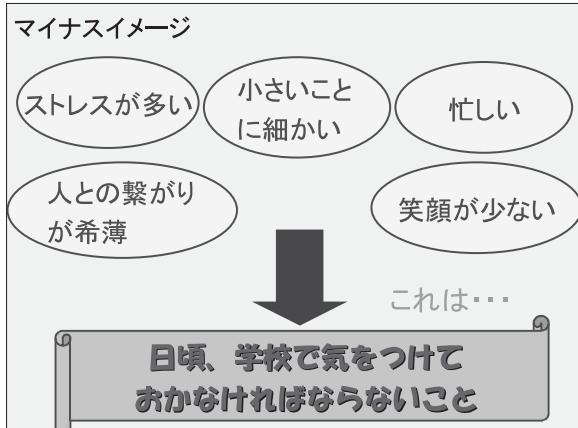


日本人に対してのイメージ

プラスイメージ

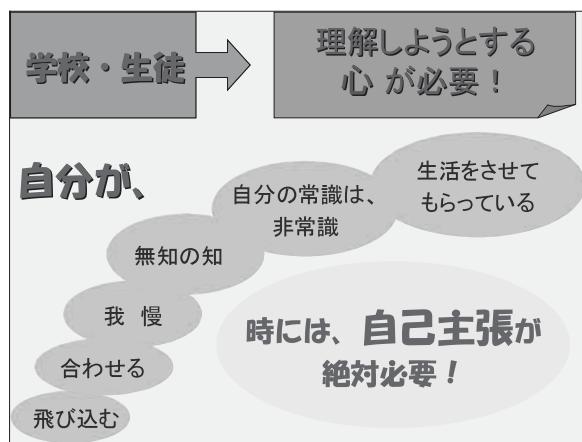


日々、学校・家庭で言われていること



やるじゃないか！日本の若者！ ～いろんな若者との出会い～





活動報告 in SRI LANKA

橋本尚子

(19-1、スリランカ、小学校教諭、士別市立多寄小学校)

皆さんこんにちは、19年度一次隊小学校教諭としてスリランカに行って参りました、橋本と言います。大変拙いのですが、私の活動を紹介させて頂きます。宜しくお願いします。

まず、スリランカですが、どこにあるかおわかりですか？ここですね。ここがスリランカです。だいたい北海道の8割くらいの大きさの島で、「光り輝く島」とか「インド洋の真珠」とか言われている、とてもきれいな国です。大きな遺跡があって、その上空から撮った写真がこのスライドで、あまり高いところ、低いところが無く平坦な形で、ジャングルが一面に広がっているような、そんな国です。豊かな植物や動物に恵まれていて、南国に行かれる方はほとんどだと思うのですが、バナナの木、これはバナナの花なのですが、カレーなどにして食べたりします。

いろいろな動物に会いました。これは私のバスルームで、動物のそばにあるのが蚊取り線香の台座なのですが、これと比べると大きさがかなりわかると思うのですけど、巨大なミミズだと思います。こういうのが出たりしました。また、驚いたのがこれですね。大きさが手のひらよりもすごく大きい蜘蛛です。家に帰って来てからベッドに座って、向かい側にかけてあるスーツを見たら、そこにコサージュのようについていて、私は勝手にタランチュラじゃないかと思っているのですけど、そういうのが出て、「ぎゃー！」と叫びながら「助けて」と助けを呼びに行った経験もありました。あと、綺麗どころで言うと、孔雀ですね。家の前に孔雀がいたりとかして・・・これだけじゃなくて、本当に豊かな動物や植物や、いろいろなものを見てきた感じがしています。

任地なのですが、これはウェッラワーヤというところで、これがスリランカの地図なのですが、首都が「世界一長い名前の首都」と呼ばれていて、ご存じですか。そうです。「スリジャヤワルダナプラコッテ」です。実質的には、コロンボが首都の役割を果たしています。そこから私の任地ウェッラワーヤというところまでだいたい 210 キロくらいです。コロンボから、だいたいバスで 7 時間くらいかかるところです。「210 キロなのになんで 7 時間もかかるのだろう？」と思うかもしれません。私もそう思って行ったのですが、やはり道が悪いのと、交通手段のバスがあまりよくないというのが原因で、7 時間かかるかなという感じでした。これは「海外の危険地域」とか、そういうところから取ってきた地図なのですが、私が行ったときにはまだ「十分注意してください」という所だったのですが、派遣後 9 ヶ月位してからテロが起こって、私が住んでいるところから 30 分位の街のところで爆撃のテロがあり、一週間くらい外出禁止になりました。危険地帯のレベルも上がって、私のあとに後任が来るはずだったのですが、来られなくなりました。と言うことで、私は

新規だったのですが、後任も入っていません。

交通手段なのですが、バスはこんなような感じです。これでもいいほうかな、と思います。きれいめのバスでも、ここを見て頂くとわかるのですが、パンクして、何度もみんなでタイヤ交換をする、という場面に出くわしました。任地の生活なのですが、一番苦労したのが、水だったな、というふうに思います。家の上にこういう水を貯めておくタンクがあって、そこに水を貯めておくのです。本当か嘘かわからないのですが、任地の人の話によると、「一日に三時間か四時間ぐらいしか給水されていないので、給水されている時間にここに貯めておくんだよ」と言っていました。上から見た写真がこれなのですけれど、ここに全部水が貯まっているのですが、上のふたがトタンなのですよね。なので、なんでも入り放題です。最初に見せて貰ったときは、行ったばかりだったのできれいだったのですが、友達が来たときに「水はどうなっているんだ」という話になって、「ここだよ」と言って中を見たら、中に枯葉や虫の死骸やら、埃やら土埃やら何でもかんでも入っていて、とても不衛生な状態でした。よく見るとここにパイプみたいなものがあると思うのですけど、この横が私の家になっていて、屋根がこういう感じで平らなので、そこに全部雨の時降った水が貯まるんですよね。で、水がここから排水されてくるのですが、その汚い水もなぜか飲み水というか、水を貯めている所に全部入ってくると言う仕組みになっていて、「なんでそんな仕組みになっているのかな」と不思議に思うのですが、とりあえず水を貯めておくために汚い水でも何でも貯めているのかな、と思いました。そんな水と、上水道から流れてきた水がタンクに貯まって、自分の家のシャワーだとか蛇口をひねると出てくる、という形になっているので、この水はシャワーで使うと時にはくさいし茶色いし・・・という感じです。飲み水のほうはどうしたかというと、一度沸かして、濾過器で濾過して飲みました。現地の人は一度沸かした水を濾過しないで冷まして飲みます。そこで一番困ったのが、自分の家で作る水はいいのですが、大家さんの家で出される水です。私は大家さんに全部食事を出して貰っていたのですが、食事の際に水を出されるのですね。水を「飲め飲め」といわれるのですが、その水も当然沸かしているので大丈夫なのですが、やっぱり臭いがするんですね。雑巾を絞ったようなにおいがしてどうも飲めなくて、最初のうちは買った水を飲んでいたのですが、どこからともなく「ナオは外国人だから私たちと同じ水は飲めないみたい」ということを嫌みつたらしくいわれたりして、「これはちょっと飲んだほうがいいな」と思って、ちょっとずつですけど飲みました。飲んでみると意外と早く2週間くらいで慣れました。帰って来るころには全然平気で、臭いは何も感じないようになりました。いいのか悪いのかよくわかりませんが・・・。でもそういうふうにすることで、仲間意識というか、現地の人と同化できたのかな、という気はします。しかし、健康のことなので、飲まないなら「飲まない」としても構わなかったのかな、とも思います。

あとは、ネパールの方も話されていましたけど、停電の話。停電は結構あって、毎日短ければ5分、長ければ2~3時間ありました。でもその時間はロウソクの炎のもとに家族が

集まって話す団らんの場面にもなって、それが語学の上達にもつながったかなと思っています。

長くなりましたが活動内容です。私はウェッラワーヤという先ほどの町の教育事務所に配属となり、学校への巡回指導を行いました。私の活動の場合はちょっと特殊で、「学校改善プロジェクト」という JICA のプロジェクトと連携していたんですね。それで、学校運営能力の向上、5S だとか、校長が地域の人や先生方と協力して学校を運営していく、そういうものの向上、それから理数科の学力の向上という 2 本の柱を基にしたプロジェクトが入っていました。そのプロジェクトと関わって、私は主に算数科の部分で活動をしました。算数で何をしたかというと、IMaCS という本がこの地域、ウェッラワーヤの事務所が管轄するのは 87 校あったのですが、87 校のうち 30 校にこのプロジェクトの IMaCS という本が配布されました。IMaCS が何かというと、簡単に言うと 100 ます計算です。100 ます計算の普及を専門家の先生と一緒に行ったという感じです。どういう風に普及したのかというと、私がその 100 ます計算の本を利用しながら授業を行ったり、または現地の先生と一緒に TT で授業を行ったりしました。この 100 ます計算の普及に当たって、計算力がなかなか定着しないという課題がありました。それで、「教具とその利用法の紹介」ということにも取り組みました。これは独自に私がやったモノです。いくら 100 ます計算を「やれやれ」といってもやっぱり指計算から離れられなかつたりする子が多かったので、10 の合成・分解とか、10 進法だとか、そういうことをきちんと定着させないと、100 ます計算を毎日やろうが成果があがらない、というふうに思ったので、10 の合成・分解だとか 10 進法をきちんと教えるために教具を使って「こういうふうに教えたらいいよ」ということを先生方にお話したりしました。

毎日の活動はそんな感じだったのですが、その 100 ます計算が入っている 30 校の先生方を対象としたワークショップを行ったり、最後の方はプロジェクトも終了していったので、プロジェクトに入っていた学校の先生たちを対象としてこんなことをやつたらいいよ、と言うような紹介をワークショップで行いました。あとは、日本の文化伝達と言うことで折紙教室をしたり、日本の歌を紹介したり日本の文化を紹介したりというような活動をちらつとしました。あとは、現職教員ならではだと思うのですが、自分の学校の子供たちにスリランカの情報を発信したりしました。

これは授業風景なのですが、これが IMaCS の本で、毎朝やるというのが日課になっています。これは先生が時間を見ながらやっているのですけど、私が授業終わった後に「もつとこうしたほうがいいよ」と言ったりとかノートをチェックしたりとか色々やりました。これは私自らが授業しているところです。あとは、毎日やってもなかなか成果が上がらないくて、ただ、だらだらやっている、ということがあったので、グラフを使って成果が見えるようにしたら子供たちも張り切るし、先生方も楽しく授業ができるよっていう話をして、グラフの活用紹介などをしたりしました。また、先ほど言った教具の紹介ですね。これはヨーグルトカップを使って算数ブロックのようなものを作って授業しているところです。

日本の教具は優れているな、と思いました。これは、先ほど言いましたワークショップの様子です。現地の先生とTTで授業を行っていました。これはプロジェクトのなかつた学校の先生を集めてIMaCSの本を紹介して「こうやるといいですよ。」って話をしたり、教具について「こういう風に教えると効果的ですよ。」「十進法はこういうことです。」という話をしたりしている所です。また、これはパソコンなのですが、「他の学校でこんなにいい実践をしているよ」みたいな話をワークショップの中でさせてもらったりしました。

次に、プロジェクトと連携したメリットとデメリットと言うことで話したいと思います。私の活動はプロジェクトと凄く関連していたので、それが良かったか、悪かったか、と言う話です。プロジェクトと一緒に活動される方っていらっしゃるのですか？メリットについてです。実際にやって、その状況がわかって、じゃあ自分に何ができる、相手がなにを求めていて・・・とわかって来るまでには、行く前から話を聞くと「1年とか半年とかかかるよ」って言われていました。それが私の場合は、行ったらもう「ああ、プロジェクトの人ね」「あのプロジェクトでしょ」という風にわかられていたので、「これどうしたらいの？」「ああしたらいいの？」って結構訊いてくれることがいっぱいあったのです。それで「自分で何かしよう」って考える前にどんどん仕事が来て、それで困った部分もいっぱいあるのですが、よかったですかなと思います。ただデメリットとしては、自分が何をしたいのか明確に目標を持っている人、皆さんそうだと思うのですが、「このことがしたい」とかって思っている人は、却って窮屈に感じるかもしれません。あと、プロジェクトの内容に触れた時に、「100ます計算なんかやりたくない」って思う方がいらっしゃったら、やっぱりそれは窮屈なのじゃないかなと思います。で、やっぱりメリットとデメリットとしては、プロジェクトの人だと思われること。これは両方に関連するのですが、デメリットとしては時間の制約と、成果が絶対に求められるプロジェクトに対して、「私たちはそうではない」というところで、明らかな差が生まれるのだと思いました。私たちは先生方と一緒に地元に入って、「ああでもない」「こうでもない」といろいろ言って、例えば10こ目標があったとして、1つでも2つでも進むと、「ああよかったです！」「じゃあ次こうしようか」というふうに話が進んで行くのですけど、プロジェクトの人は期間が決まっているので、3ヶ月か4ヶ月に一度回って来てみると、「あれができない」「これができない」といふうに結構文句・・・指導指示？が入ってくるのですね。そういうふうになってくると、「頑張ってやる気になってきたぞ」というところでそれがくしゅんとなってしまったり、「ナオ、あなたもプロジェクトの人だものね・・・。」というように信頼関係が削がれていくような場面に遭遇したりしました。そういうところがやっぱりデメリットかなと感じました。でもずるいので、都合のいいときだけプロジェクトを持ち出して、「だってこれだけお金出でるよね？」とか「こんなふうに言われてるからお願い」とか、進めていった部分もあります。なので、デメリット、メリット両方でした。

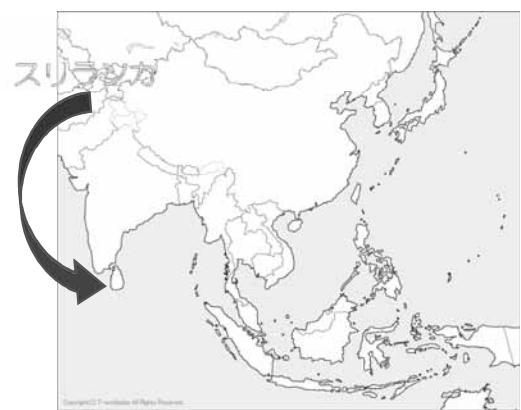
最後なのですが、帰国して思ったことです。一つ目は、プロジェクトの力は大きいということです。日頃日本の教育の中に居ると、プロジェクトや、そのプロジェクトをやって

いる JICA の委託の方々や、その方がしていることがわかりません。それを目の当たりにする経験をさせてもらったということです。プロジェクトの力は凄く大きいですし、お金の力もあるのだろうなというのは正直ありました。それから日本の教育は改めて、きめ細やかさだとか、システムだとかクオリティだとか、凄いんだなあというふうに感じました。

ただ、二つ目に思ったことは、いくら日本の教育が凄くても、「日本の教育をそのまま持ち込んでいいのかな」というのもちらりと思いました。プロジェクトの方々との話で、100 ます計算をやっていてできない子の待遇について話をするのですが、その子たちに放課後残って指導しなさいとか、教えてあげなさいとか、まあ当たり前のことなのですけど推進していました。でも放課後残ってやることを奨励したところで、現地の先生方の生活もやっぱりあるのですよね。子供が居て、子供を預かってもらえるところがないとか。家に帰ったら洗濯機があるわけでもなく手で洗濯をして、夜遅く帰ったらシャワーが水なので寒いとか、色々現地のことを考えると、「じゃあ補習をして、それが本当に当たり前でいいのか?」っていうふうになってくると、「いや、そうでもないかもしれない」というふうに日本の教育をそのまま持ち込んでいいのかどうか、と思いました。でもその反面、現地のリズムにいつまでも合わせていくと、もしかしたら支援ということはできないのかもしれない、ある程度の強要みたいなのは必要かな、とも思いました。そのように考えていくと、「やっぱり支援は難しいな」というのが結論で、私では何がどうなのかなっていうのはわかりません。ただひとつ言えるのが、私自身の問題で、向こうでなにかできたかできなかつたかと言うと、本当に何もできなかつたと思うのですが、私自身の宝となつたというように思います。帰ってきて日本の中学校に戻った時に、「あーっ日本の学校って楽しいな」って思いました。どうしてかなー、と思うのは、簡単には言えないと思うんですけど、やはり言葉が通じること。言葉がある程度通じて、スリランカの子供たちも、通じない分わかろうしてくれたところはすごくあって、それはそれで嬉しいし楽しいのですが、やはり言葉は、日本に帰ってきて、言いたいことを 1 から 10 まで自由に言える、子供たちの言いたいことも 1 から 10 までわかる、そういういろんな部分で楽しいなって、ちょっと今思います。

ご静聴ありがとうございました。

活動紹介 IN SRI LANKA



豊かな植物・動物



任地（ウェッラワーヤ）の紹介



主要な交通手段（バス）



任地の生活



水タンク
上水道 ⇒ タンク ⇒ じゃ口

活動内容

私の活動
「ウェッラワヤ教育事務所」配属
・学校への巡回指導



「学校改善プロジェクト」との連携
・学校運営能力の向上
・理数科の学力向上

・IMaCSを利用した授業
※小学校算数における
100ます計算の普及
(単独/TT)
・教具とその利用法の紹介

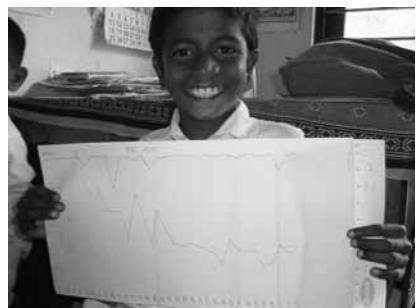
・ワークショップ
の開催

・日本の文化伝達
・自分の学校の子どもたちへスリランカの情報の発信

授業風景 1



授業風景 2



授業風景 3



ワークショップ 1 (研究授業)



ワークショップ 2



デメリット

自分が何をしたいか明確に目標を持つている人、プロジェクトに賛同できない人にとっては插座。

メリット

用意しようか考える前に、求められる仕事が結構になり活動期間をより有効的に過ごすことができる

プロジェクトの人だと想われる

時間の制約と成果が絶対に求められる

都合のいい時だけ、プロジェクトを持ち出して、自分の活動しやすい状況を作ることができる



ご清聴、ありがとうございました。



中国内モンゴルにおける日本語教育事情と実践報告

宮腰卓秀

(19-1、中華人民共和国、日本語教師、北海道月形高等学校)

ご紹介にあずかりました、月形高校の宮腰です。普段は国語、書道を教えております。日本語教師の資格はなかったのですが、現職参加ということで、特典だったのかなと思っております。まず、前に発表なさった橋本先生は「日本に帰ってきて日本語が通じてよかったです」といいますけれども、僕は全くの逆で、僕が赴任したオルドスの中学校、日本で言うと高校に当たるのですが、そこは進学校で優秀な生徒だったので、逆に今教えている高校生のほうが日本語通じなくて、「死ね」とか「うぜえ」とか「きもい」とかそんな言葉しかなくて、なんの活用もしないのですけど、そんな感じで日々やっています。

これは二本松の訓練所の前で、19年度一次隊全員が映った写真なのですが、これから研修なさると思いますけど、過ごし方というか、僕はその期間でとてもわかりました。

私の派遣は中国内モンゴル地区オルドス市第三中学校というところです。皆さん、ご存じのかたいらっしゃいますか。中国は長江と黄河という二つの大きい河がありまして、黄河が北上して四角い地形を作っているところがあります。そこが全部オルドスです。日本の面積でいきますと、四分の一ぐらい。内モンゴルといいますと、皆さん大草原、見渡す限りの大草原を想像なさると思うのですが、砂漠です。後で写真も何枚かお見せします。

内モンゴルがどんなところでしょうか。内モンゴルにはオルドスのある方のお墓があります。これが誰かといいますとチンギス・ハーンです。実際の所、お墓には骨がありませんが、ここには縁があります。今は砂漠だと言いましたが当時はここも見渡す限りの大草原で、風光明媚なところでした。チンギス・ハーンが演習で来て、あまりの景色の美しさに鞭を落とした、そういう逸話の残る土地なのです。私がいたそのオルドスというのはですね・・・カシミヤセーターを今日着てらっしゃる方はいますか？カシミヤの産地といいますか、山羊ですね、カシミヤ山羊。その山羊が草を食うので砂漠化が加速しているのですけど。その中で私が居たのが東勝区というところで、見て下さい。全然日本とかわりません。実は今はこのオルドスの東勝区というのは石炭、天然ガス、携帯電話を使うレアメタル、そういうものの値段が北京よりも高くなっています。ここに見えている車、これはほとんど外車です。日本人よりお金を持っていましたから。だから僕が「日本人だ」っていっても「あ、そう」という感じで、デパートとかに行って売っているものを見てもね、値段が一桁違うのです。住んでいるマンションとかも、今は本当にもう投資の、バブルの絶頂という感じで、これからまだ加速してくるぐらいです。中国の年のGDPが今は8%といいますが、ここは30%になりますので、それぐらいすごいお金持ちということです。先ほども言いましたが、地下に石炭、天然ガスがあって、そういう資源が豊富な所はやっぱ

りいいですね。ただ、街を一歩出ますと、このようになります。これは本来水が流れる川なのですが、こんな感じなのです。さっきも言いましたが、砂漠化が加速しているというにも、徐々にこういうところに現われています。これは大ヒントなのですが、最近私の居たオルドスではこの方の遺跡が発見されました。これは博物館です。何かと言いますと、秦の始皇帝が真っ直ぐ内モンゴルまで道を造ったということです。直道と書く真っ直ぐな道なのです。これがその道です。昔はここに木だとか石だとかで道が作ってあって、この石の向こう側が長安、今で言うと西安、秦の始皇帝がいたあの方角です。

そういうオルドスですが、これは石炭です。一個の大きさがですね、こんな感じです。ごろごろごろっ、と。露天掘りですから、日本の石炭のような大きさではないのです。こちらの車と比較するとわかると思うのですが、これぐらい差があります。それだけ資源が豊富ということです。オルドスの紹介はここまでにしておきます。

僕の主な活動は、先ずは日本語教師。そして日本語教師をしている中で、色々と中国の日本語事情というものがわかりまして、このように日本語問題集の作成をしました。それともう一つ、要請にはあがっていない活動なのですが、このオルドスというところに切っても切れない日本人がおりまして、その方に出来うことになって、ウランダワ砂漠で植林活動をしました。先ほど言いましたが、砂漠化が激しいということで、そこら辺の活動にもタッチしました。

先ず日本語教師なのですが、全校生徒 4000 名、日本で言う高校なのですが、4000 人生徒がいます。どんなことかといいますと、私はいま月形という小さな町で高校教師をやっていますが、月形町民全員集めても 4500 人です。そんな感じなのです。たとえば筑波大学だとどのくらいの人数がいるのでしょうか。北大は何千人といないのでしょうか。教職員が 200 人いますから、だれがだれだかわかりません。知っているのはやはりトップと日本語の教師たちです。市内三番目の進学校です。しかし残念ながら、北京大学とか清華大学には何年かに一人しか行けません。もちろん進学校ですので、一番の外国語は英語です。大学受験のため、英語のできない生徒が日本語を選択します。だから、日本語というか外国語を勉強するレベルがどんなものかは十分わかると思います。しかし、外国語ができないと大学には行けませんので、日本語を頑張るしかありません。彼らはふつう、例えば洛陽、大連、北京の子はですね、中学校から勉強している子がいるのですが、配属先の学校は、高校から入りますので、中学校三年間と高校三年間を合わせて六年間をぎゅっと半分に圧縮しています。だから、生徒が大変です。教えるのは簡単です。先生はプロですから。でも、生徒が大変です。しかし、生徒は頑張ります。とても勉強熱心で、彼らの一週間の時間割が私のこのレジュメにあります。朝は 06:50 から自習が始まり、夜は何時に終わるかと言えば、22 時に終わります。これが中国の高校生の一週間の一般的な時間割です。日本の高校と同じように、学校の先生は自分の持ち時間だけ教えればいいのです。だからその途中家に帰ろうと何しようといいのです。パーマ屋に行こうとなにしようと自由です。だけど生徒はびっちりです。生徒 4000 人の半分は寮に住んでいて、半分は地元、このオル

ドスの東勝区という所に住んでおります。学校の周りにも寮がいっぱいあります。

時間割はとても面白いです。ここに書いてあります2・1とか2・2というのは私が持っていた日本語クラスです。皆さん要請をよく御覧になって申し込んだと思うんですけど、私の授業は週に5コマしか無いのです。週に5コマだけやればいい、そういう頭で行ったんです。一番少ないコマ数のところで、それ以外の時間をいろいろなことに使おうと思って行ったのですが、最初はやはりそんなこと許される訳もない全部の時間に出ていました。そして一週間に32時間くらい出ることがあり、二ヶ月くらいしか持ちませんでした。そのうち、先生も「出なくていいよ」となって、私も週に5コマだけを一生懸命やって、それ以外は全部教材研究することができました。

授業の内容ですが、主に文法、それに日本語の会話、作文です。この中で一番中国人の先生がやりたがらないのは作文です。文章は作れるのですが、正解か間違っているかを見るのは大変そうでした。逆に言うと、中国人の人たちは文法を教えるのが得意です。で、もちろん僕は中国語はペラペラではないです。これではやはり説明しにくい。だから自分のできる会話、あと作文、こういうのをやったので特に授業は困りませんでした。普段高校で教えているのと同じようなものですね。

これはうちの高校の正門です。立派ですよね。中国はですね、隊員の派遣先としては恵まれています。住むところに困りません。食うモノにも困らない。虫は出ません。もし何かに困るとなったら、中華料理が油っこいことです。私は派遣前には64キロでしたが、派遣時に一番太っていた頃は79キロありました。帰ってきたときには70キロだったのですが、今は64キロです。元に戻りました。ここは内モンゴルですから、北海道ですとジンギスカン、ここでは羊の肉です。

これは屋上から見た図です。学校の周囲も浸食されていて、だんだん砂漠化が迫っています。ここが学校の前、グラウンドはこっちにあるのですが、集合場所といいますか時間割にもあるんですが、揚旗（シャンチー）といって、旗を揚げると書くのですが、この時間はですね、20～25分くらいあるのですけれど、この時間、英語の読みの練習を外でやります。どうなると言いましたら・・・。4000人がですね、一度にここに集まると、こんな感じなのです。そこで、英語の発音練習をこの何分間かの間にやります。一学年20クラスありますから。

これが、我が日本語クラスの生徒です。英語はできません。でも彼らは英語ができないことをこれっぽっちも苦にしていません。なにせ日本語ができますから。前の方から、日本語ができる子、できない子、だんだん後ろに行くとできない子になっていきます。でも、僕は後ろの子の方が好きなのですよね。前から成績順に並んでいるので、女の子とか、優秀な子がいます。

向こうでは軍事教練があります。入学したら最初の一ヶ月間は歩行訓練です。やはり中国、北朝鮮、韓国もですね、こういうふうにきちっと整列します。ここにいるのが校長、教頭、あとは共産党の書記の方々です。各学校に共産党員がいます。

私は今日、実は日本語問題集を作りました、ということをメインに話そうと思って來たので、ここからが本題なのですが、私が派遣されたこの年は、中国で言うと激動の年でした。まず、オリンピック、そして四川の大地震。オリンピックにまつわることでいうと、チベットの暴動です。そして新疆ウイグル地区の暴動もありました。旅行しようと思っていたのですが、全然行くところがありませんでした。そういう年もあって、やはり協力隊ですから、仕事せよ、ということなのでしょうか。

高校の教科書がちょうど改訂の年だったので、現場にはまだ教科書が行き渡らず、昔の教科書を使っています。切り替わる時期なのでなにが大変かと言いましたら、その新しい教科書を導入するに当たって、問題集が不足していることです。これは昔の教科書にしても、問題集が不足で、やはり向こうはどんどん作るということができないのです。そういうことで、これは各学校共通の悩みでした。どうしてこういうことがわかったのかと言いましたら、たまたま私が自分のカウンターパートの先生と行った研修会に参加して、そこで他の、中国全土の先生方と集まったときにこういう話になって、「どうか作ってください」と僕に言われているような感じがして、なにを血迷ったのかわかりませんが、使命感に燃えて、日本語教師隊、19年度一次隊以外の人にも声をかけてですね、そうしたら9人集まってくれました。問題集作成委員会を立ち上げ、初中班（中学校）、高中班（高校）でやりました。我々の日々の活動というのは、もちろん日本語教師がメインですから、それ以外の時間を作って、私は週5コマなので「それ以外の時間」はたっぷりあったのですが、他の方はそれは行かないで、無理をいってやりました。私の活動一年間半の間で2回、北京に集まって編集会議ができました。これはJICAの方にお金を出して頂き、日本国民の税金でやることができました。成果はいかに？ということで、続きます。

これは私が参加した2007年に北京で行われた日本語教師の研修会です。前に並んでいるこの方はトウライ先生といって中国の教科書会社の日本語分野のトップです。こちらの方々は国際交流基金の先生方です。もし自分が派遣される国に国際交流基金があるのでしたら、どうぞ利用して下さい。こちらは人民教育出版社のトップです。こちらに並んでいる方全員、中国で日本語を教えている先生方です。それぞれ分科会のように分かれて研修をしました。これは私のカウンターパートなのですが、日本語ペラペラです。「専門は？」と言いましたら、日本語じゃないですよ。彼は、専門は農業なのです。内モンゴルで農業を発展させるために農業の勉強をしていたのですが、農業の勉強に日本に来たとき、日本が好きになって、そこから勉強をし直して日本語教師の資格を取って、今日本語を教えている、という先生です。こんな感じで、和気藹々と。皆さん、中国人の方なのですが、どうですか？着ている服とか、もちろん日本人と違うといえば違うのですが、僕は今から三年前にも中国に行ったのですけれども、そのときと比べて着るモノが全然違います。

これは協力隊の我が仲間です。問題集作成委員会を構成しているメンバーです。たまたま私のいた19年度一次隊は、一次隊と二次隊が一緒に日本語教師の研修をやりました。だからつながりも強固で、声をかけたら快く引き受けました。こちらがヤングチーム、

初中班（中学校用）の問題集を作ってくれました。一番若いのは彼女です。大学卒業したてです。こちらはアダルトチームで、もう阿吽の呼吸なのです。彼らは実は 18 年度の二次隊、三次隊の方々なので、中国で日本語を教えている経験がいろいろとあります。活動成果は？と言ふことですが、できました。初中班 130 ページ、高中班 410 ページ、合計 540 ページの問題集が完成しました。これは 9 人の力を合わせた結晶なのですが、今どうしたことになっているかと言いますと、教科書会社、人民教育出版社のホームページに掲載されるということです。中国では著作権の問題が一番ネックで、ひとつは JICA で（私は協力隊で JICA に所属していたので）JICA のもの、こちらは出版社で中国の教科書を使ったモノなので中国の出版社のものだ、と。喧嘩しては困ると思ったので、ちゃんと間に弁護士を立てて、今調整中です。なぜホームページにこだわったかといいますと、中国の出版事情のためです。先ほども言いましたが、問題集が不足しています。実は北京の人は不足していると言いません。北京で印刷していて、そういう大都市では買えます。しかし、僕の住んでいた東勝、街から外れると、全然手に入りません。「じゃあどうしよう？」と言うと、インターネットはどこでも普及しているので、これを活用しない手はありません。しかし、作ることはできるのですが、掲載することはできません。そこでお願ひします、と言うことでいろいろな人を巻き込んでやりました。自分でできるところは自信を持ってやってもいいけど、あとは丸投げじゃないんですけど、いろんな人を巻き込んで、力を借りてやるといいのかな、と思います。

これはウランダワ砂漠です。この人は覚えて下さい。坂本毅さんです。ホームページ「オルドスの風」と検索したら一発で出てきます。協力隊の日本語教師の OB でもあり、中国の元調整員でもあり、オルドスの地をこよなく愛している日本人です。

植林。これはウランダワ砂漠の羊ちゃんです。これが芽を食べて、こんなになっちゃいました。これがウランダワ砂漠です。でもこうやって、草がぼろぼろっと生えているでしょう。どうして生えているのかというと・・・。長くなるので、私のレジュメ「ウランダワ砂漠植林のすすめ」を植林に興味のある方はどうぞ読んで下さい。これは生きています。砂漠といつてもですね、水が流れていますから、木を植えたら絶対生えます。また大草原に変わります。坂本さんもそれを信じてやっています。これはポプラですが、現地の人と一緒に植林をやっております。こうやって、欠けている所に植えて行きます。これは植林した結果です。これはサージという木です。ブルーベリーよりもすっぱい果物です。これから日本で売るとしたら、ビタミン C 豊富、ミネラル豊富なすっぱい果物です。

これは天然ガスです。ウランダワ砂漠も、掘ったら天然ガスが出るということで、いま開発の波が押し寄せております。

終わりに、と言うことで、全然なんの脈絡も無く「人の輪」とありますが、僕は協力隊に参加して何が一番宝物かといったら人脈です。今日こここの会場に私の大学の後輩がいます。びっくりしました。で、「えーっ！」と思いました。年は一回りくらい違います。ここにもう一人、磯田先生という筑波大学の先生、名前を聞いたことがあると思いますが。こ

の方は、私が教育大学時代に数学を教えて下さった先生なのです。そういうつながりがあるのですが、協力隊のメリットは人間のつながりです。これは我が 19 年度一次隊、二次隊の日本語教師の集まり、研修の時の一枚です。これは二本松の訓練所の同じ班の最初の飲み会です。もう最初の飲み会からこんな感じです。和気藹々、ひとつの村でした。11 班村です。私は村長とか呼ばれていました。これは同じ中国チームです。班は違いますが二本松です。二本松はですね、これから桜がきれいな時期にさしかかります。一次隊の訓練は最高です。これは私のカウンターパートの先生方です。二人とも専門は農業ですが、日本語を勉強しました。この方は大学でも日本語を専攻してペラペラです。中国人じやありません。朝鮮の養護教員と言ったらおかしいでしょうか、そういう感じで保健の担当をしていました。私は学生よりも先に食堂のおばちゃんとその息子と仲良くなりました。私が派遣された六月の下旬は、向こうではもう夏休みが始まる頃です。だから学生が一人もいない。それで、食堂のおばちゃんと仲良くなりました。そうしたら「よく来た、おまえ日本人だろ」と酒盛りです。これは白酒です。やられます。酒はがぶがぶ飲みます。これは食堂の雰囲気です。向こうの人たちは、カメラを構えると必ずポーズをします。おばちゃんたちもポーズをします。しかも撮るときは必ずきれいな格好をます。でも撮ったものをあげると凄く喜びます。これが三年生のクラスです。二年生のクラスです。担任ではなかったので一年生の写真はありません。砂漠の植林の時のものです。これは内モンゴルのモンゴル文字です。友好の好（ハオ）、好きという文字です。これはモンゴル文字の好きという文字です。これは私が派遣された高校ではなく、私がボランティアとして行っていた学校です。みんな女子です。女子は日本語は趣味でやっている程度です。これは東勝唯一の日本料理店の方々です。これはモンゴル族のパオの中でご飯を食べる時のモンゴルの民族衣装です。これはわが日本語問題集作成委員会です。

話がだいぶ長くなりました。まとめはありません。こんな感じでどうぞ二年間楽しんできて下さい。

平成21年度 青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会
「国際協力と帰国後の社会還元」



JICA 青年海外協力隊 19年度1次隊
日本語教師 宮
腰 卓秀

はじめに・・・ 派遣先

中国
内モンゴル自治区
オルドス市
オルドス市第三中学





主な活動

- 1. 日本語教師**
- 2. 日本語問題集作成**
- 3. ウランダワ沙漠植林活動**

1. 日本語教師

- ①全校生徒4,000名、教職員200名、市内3番目の進学校。
- ②大学受験のため、英語のできない生徒が日本語を選択。
- ③日本語クラス1年生：120名
2年生：100名
3年生：30名
- ④授業内容は、文法・会話・作文。
主に会話と作文を担当、週5コマ。





2. 日本語問題集

- ①派遣された2007年は高校の教科書改訂の年。
・・・しかし、現場はまだ旧教科書を使用。
- ②日本語問題集不足は他校共通の悩み。
- ③日本語教師隊員有志9名により日本語問題集作成委員会を（初中班・高中班）を立ち上げる。
- ④日々の活動と平行して、各自の分担場所を作成、
2回の編集会議を開催。

成果はいかに・・・





活動の成果は・・・

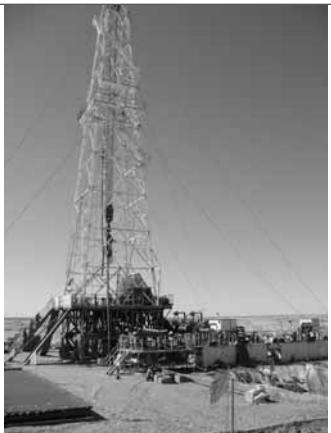
- ⑤初中班 130ページ、
高中班 410ページ、
合計 540ページの問題集が完成！！！
- ⑥教科書会社のHPに掲載決定！！！！

3. ウランダワ沙漠植林活動

- ①坂本毅さん（HP「オルドスの風」）と
出会う。
- ②青年海外協力隊日本語教師OB、元調整
員、同じオルドスの地で日本語を教える。
- ③活動中3回、植林活動に参加。徐々に白
酒の飲み方をマスターしていく。



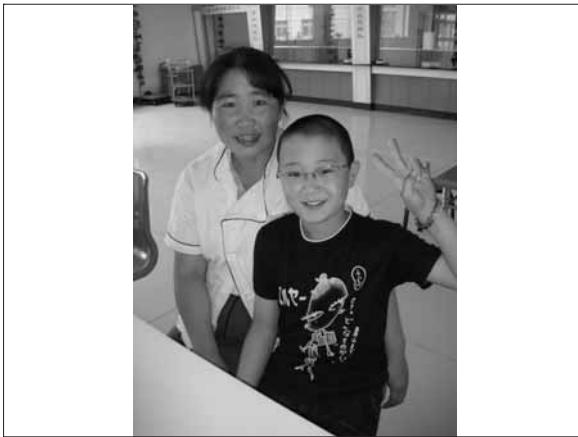




おわりに・・・

気になる
“人の輪”とは・・・









チョコレートの国？ガーナでの1年9ヶ月

高岡哲郎

(19-1、ガーナ、小学校教諭、摂津市立鳥飼東小学校)

まずガーナについてですが、人口は大体2300万人、面積は大体本州と同じくらい、公用語は英語なのですが、ほとんど現地語で英語ができない子供がたくさんいます。ガーナと言って皆さんのが思い浮かべるのはガーナ・チョコレートではないでしょうか。私自身もガーナに行く前はガーナといえばチョコレートというイメージを持っていたのですが、そもそもそのはずで、日本のチョコレートの約8割はガーナ産のカカオからできており、ガーナのカカオがなければ日本のチョコレートは食べられないというほどです。実際カカオ豆の生産量でいうと1位がコートジボワール、2位がガーナ、3位がインドネシアとなっており、ガーナは世界有数のカカオ豆の生産地となっています。しかしチョコレートの生産量では、1位から20位まで先進国で占められています。チョコレートの国ガーナというイメージがありますが、実際は途上国が原材料を生産して、それを先進国に売って、そしてチョコレートが作られる、ということです。実際のガーナがチョコレートの国になるには、自分達でもっと加工ができるようにならないといけません。現在のところ、カカオの国かなと思います。開発途上国の現状はこういうところにも表れています。

ガーナでの活動なのですが、要請内容として2点あります。1点目は子供の理数科能力の向上、2点目は教員の教師力の向上です。つまり対先生、対子供という2点が要請内容になります。

タマレ市内の小学校を巡回し、とここに書いてあります。これは巡回型といって1つの学校に所属するのではなく、教育委員会に所属しているいろいろな学校を回る、という形式です。ここに書かれている通り、自分の授業のコマ数が決まっているわけではなく、学校に行って授業をさせて下さい、あの先生の授業を見学させて下さい、というように交渉をしなければならないのでなかなか大変でした。その分、都会の学校だったり、農村の学校だったり、いろいろな学校を見ることができ、その違いもいろいろと見ることができました。

ガーナの教育スタイルなのですが、ここに書いてある通りCHALK & TALK、生徒に考えさせる時間、練習させる時間が少ない、教師中心の授業、授業のテンポが良い、ということが挙げられます。上の3つはもう少し改善する必要があると思いますが、テンポが良いというのはとてもいいと思います。

黒板しかないような状況で書いて喋って書いて喋って、なかなか子供が質問できるような状況じゃないのが向こうのスタンダードです。先生が定理を2分間くらいずっと書き続けて、はいじやあ写しましょうという。ほんとにそういうのが実際あり、子供達は意味が

分かっていなくても写している、という状態があります。僕が好きなのは、良い正解を言うと皆でこのように手拍子をするところです。これはアフリカのいろいろなところにあるのですが、いい正解をしたら彼に拍手をということでこういう風に拍手をするという、こういうテンポの良さというのはあると思います。

今見せたのが学校の授業のスタイルなのですが、やはり子供たちの弱さというのが 2 点あります。基本的な計算力の差と数量感覚です。 $24 \div 6$ は 4 なのですが、日本の子供なら 6 の段を使ってすぐ 4 と出るのですが、数がそもそも覚え切れていません。この子は本当に要領のいい子で、数字を書いてやっている子というのはなかなか珍しいです。こういうように数えて、今 12 個だったから 2 個ずつ足していくことで、2 個ずつ足していくたとすることで能力的に高い子だなと思うのですが、これで 2 と 4 つだなということで答えを導きだせるというのはとても良いのですが、実際この子も次の $63 \div 7$ というものは数が多くなって間違えてしまいます。このように本当に九九ができません。そこで私が活動で最初にやったことは、ともかく九九を覚えないと分数も足し算もできないので、フラッシュカードを使って、ともかく九九を暗証しようということをやりました。効果は学校によりけりなのですが、本当にいいところははじめに取り組んで、9 の段の九九も言えるようになったので、それは良かったかなと思います。

数量感覚がないと申し上げたのですが、それがこれに現れています。 $6+7=13$ 、 $1+2=3$ 、だから 313、こういう形の間違いをしても子供達は別に何も気づかない。普通 16 個のものと 27 個のものを足したら大体 50 くらいかなという私達の感覚があるのですが、本当に数の操作だけでやっており、こういう間違いや掛け算なども $3 \times 3 = 9$ を $3 \times 3 = 80$ なんばとかいようになっちゃったりします。このように数量感覚の弱さということがあったので、右にあるこういう具体物とかを使って、10 のまとめは 10 と書いてある中に石を 10 個入れて、これが 10 個ある、それが 10 個で 100 という形で本当に身近に手に入る教材を使って、数量感覚を育むような授業をしました。

また、教師中心の授業だったので、ともかく子供たちが楽しみながらということを考え、足し算リレーや 7 の倍数の時に手をたたく、というようなゲーム的なものや競争させるようなものを取り入れました。これらはガーナの先生にも本当に好評で、何もない状態で、ちょっとした空き時間に行えるということで好評でした。

算数以外に理科の時間がありました。例えば教育現場ではよくあると思うのですが、この上にクリップがあります。ちょっと緊張していますが、力を入れ、下がれ下がれ、ストップ、といのような本当に簡単なことなのです。これは浮沈子といわれているもので、よくテストにもでてくると思います。これなどはストローと水だけの本当に簡単なものが、これがあれば抜群にウケます。言葉がわからなくても、本当にこういうような簡単な向こうのお店にあるものを使った楽しめる授業というものをやる。その時に気を付けておきたのが、ただ楽しいだけじゃダメだということです。こういうようにこういう感じのものを用意して、この中にも理科のこういう色々な仕組みがあるのでよ、というのを伝える授

業をやりました。

大体巡回して1つの学校で5回くらい授業をします。これは小学校2~3年生の授業なのですが、その点数はというと100点というのは15%ぐらいで、30点とか本当にできない子供が10%以上いるというような状況でした。数の操作ができる子というのは本当にできます。できないこの層の子供をターゲットに簡単過ぎる授業をやっているのかもしれません、巡回前と比べて巡回後は全体的に山が右に行ったのかなと思います。

次は教員の教師力向上についてです。皆さんこれから活動をされていくと思うのですが、数字でこういうグラフだとか、これだけ変わったとわかるものが必要だと思います。このほうがいいですよ、このような指導法がいいですよ、ではなかなかうまくいきません。こういうような数字を出してやったのですが、それもなかなか難しいことは難しいです。今回の反省なのですが、やはりモチベーションの低い教員に対してのアプローチというのは本当に難しいと感じました。そのやり方いいね、このやり方すごくいいね、と言って下さるのですが、それで終ってしまうのです。それでは、そこでどういうように教師中心よりも子供中心とか、もっとこうやらせるようにしようよ、と言っても継続できないというのがやはり厳しいところだと感じました。そして配属先との連携についてですが、自分自身が教育事務所と連携を取らないといけないのですが、教育事務所もやる気がある人との人がいます。ワークショップを開催しようなどとも言っていたのですが、私の任期中に開催できませんでした。やる気のない教員を下から上げていくことももちろん大事だと思うのですが、期間が1年9ヶ月と限られていることから、やる気のある人と組んでそこからやっていくという方が良かった、と自分自身の反省としてあります。しかし、私の後に後任が入ってその人がまたワークショップを開催し、1年9ヶ月終わっても、その後引き継いでいくことがあるので自分の活動プラス後任のこととも考えてという点も必要なのかと思いました。

要請内容以外の活動として、学校隊員なので夏休みなどがあります。ガーナは理数科隊員がとてもたくさんいます。その休みを利用して、理数科分科会といって隊員が20人くらい集まっていろいろな学校に行って、実験ツアーをしたり、それぞれ自分の学校の先生を連れてきて、授業はどういう風にするのかというワークショップを開催したりして、休みも有効的に活用できたのかなというように思います。

また、Zani Cupと書かれていますが、これは感染症対策や他の職種の隊員と一緒に行いました。ザンビの夢という現地語なのですが、広くとてもきれいなサッカースタジアムができたのですが、そこで子供達にサッカーをさせてあげようということで隊員支援経費を使って行ったものです。小学校教諭ということで、運動会などの運営などは他の隊員の方よりノウハウがあるので、そういう部分で連携しながらいろいろな活動を行いました。

要請内容とかは関係ないのですが、現職参加ということで、日本の小学校との交流についても何点か紹介させていただきます。これはクロスロードという雑誌に日本の先生たちの生徒への手紙というのを応募させてもらって、これを実際にJICAを持って行きました。

これがその子らにとってとてもいいきっかけになり、日本に帰ってから実際にその子に会ったときにバスケットをもらい、外を見る良いきっかけになりました、すごく刺激になりました、と言われました。こういうのもうまくやっていけたらいいのかなと思いました。一方的なのですが、自分の所属している学校にガーナ便りという形で月に 1 度くらいを目標に、本当に簡単なガーナの身近なものを紹介したりしました。色々あって 1 2 回しか出せなかつたのですが、たとえば向こうの教室はどんな感じなのかとか、一番分かりやすい食べ物など、こんな食べ物がありますよ、というのを学級通信形式で配布しました。一応スカイプは速度的にはできる環境にあったのですが、ガーナとは時差の関係でなかなかできませんでした。そこで自分の学校に頼んで日本の学校の様子をビデオレターという形で、日本の学校はこんな感じだよ、というのを送ってもらいました。それを実際にガーナの子供たちに見てもらいました。そしてその様子を私がデジカメで撮って送るということをしました。大体こんな感じです。登校時の様子です。子供たちに色々聞いたりして、逆にガーナの 1 日の様子、こういう風に始まりますよ、というのや、授業の様子、遊びはこんなこと人気がありますよと、いうのを紹介しました。これは実際に人気があったアンペという遊びです。それから最後にガーナの概要を、こんな感じでやっているというのを作って、上映会みたいな形でやってもらいました。子供たちの反応もすごく良くて、日本に帰ってきたときに先生あれ見たよって言ってくれたりして、それはすごく良かったです。やはり映像という形で送るのはすごく有効なかなと思いました。

こういう活動はあまりできなかつたのですが、E-mail、今でしたらアフリカでも首都とかでしたら回線が速いので、こっちで撮った動画とかを送るというのが頑張ったらできると思います。そういうのももっと早くから気づいていたら良かったかなと思います。メールだけじゃなくて他にも色々方法があるのですが、そういう形でできたらと思いました。これが大体自分の活動の内容になります。

レジュメに書いてある通り、自分の中の反省、感想としては違うものさしで、つまり違う価値観が自分の中に持てたのはとても良かったと思います。特に人の出会い、ガーナ人ととの出会いというのはもちろんんですけど、訓練所などの出会いもありますし、同期の隊員、他の職種の隊員との出会いというのもすごく自分にとっては良かったなと思います。また、日本によきを改めて知ることができたことがあります。先ほど言ったように自分達が習った数学のモデルというのは、小さいころからちょっとずつやっていた日本のシステムというのがあると思います。それに対してガーナでは $6+7=13$ と覚えなさい、というような形でやっている部分が少なからずあります。そうするとできない子が出てきます。日本の子供がこれだけそういう計算がきちんとできるというのは小さいころからのきちんとした日本の教育システムがあるのだなと改めて分かりました。

最後なのですが、今後の方向性についてです。日本に帰ってから社会還元という形で色々やってみたいと考えているのですが、日々の仕事でなかなかできていないというのが現状です。自分は担任を今回持っていないので関わるクラスで簡単にガーナのことを紹介する

ことはあるのですが、なかなかしっかりと実行できていないということがあります。今後ガーナを紹介する授業を行ったりしたいと思います。やはり一番やりやすいのは6年生かなということで、6年生の社会の時間を使って、3学期に4時間ぐらいやらせてもらうことを考えています。また、大阪のOBの集まりである大阪教育ネットワークに参加させてもらっています。

もっと色々なこういうところで還元していますということが言えたらいいと思うのですが、帰って1年目でなかなかできないというところがあります。来年以降はもっと積極的にやっていきたいなと思います。

御清聴ありがとうございました。



○○ 本日の報告内容 ○○

- 1. ガーナについて**
(チョコレート、日本との関係)
- 2. 任地での活動**
(要請内容、算数、理科、活動成果、課題)
- 3. 要請以外の活動**
(理数科分科会、他の隊員との連携)
- 4. 日本の小学校との交流**
(クロスロード、ガーナだより、ビデオレター)
- 5. 感想・今後の取り組み**



1. ガーナについて
○○ガーナってどこ?○○

ガーナ共和国
2300万人
面積：23万9460km²
公用語：英語



1. ガーナについて
○○ガーナと言えば○○

カカオ豆の生産量		チョコレートの生産量	
1位	コートジボワール	1位	アメリカ
2位	ガーナ	2位	ドイツ
3位	インドネシア	3位	イギリス

<国際ココア機関(ICO)カカオ統計2007より>

2. 任地での活動



2. 任地での活動
●● 要請内容 ●●

タマレ市内の小学校を巡回し

- ①生徒の理数科に対する関心を高め、理数科の能力を向上させる
- ②教員の教授力を向上させる

巡回型とは？

- ・自分の担当のエリアの学校を巡回し指導する
- ・教室型の隊員とは違い、授業時数が確保されていない
- ・サーキットスーパーバイザーに学校を紹介してもらい、学校の校長・担任と話し合い、授業時間を調整する

2. 任地での活動
●● ガーナの授業スタイル ●●

・CHALK & TALK

- ・生徒に考えさせる時間、練習させる時間が少ない
- ・教師中心の授業
- ・テンポが良い

授業の様子

2. 任地での活動
●● ガーナの子どもたちの課題 ●●

・『基礎的な計算力』、『数量感覚』の低さ

『24÷6』を解く様子

2. 任地での活動
●●「算数」について ●●

① 反復練習の徹底。

フラッシュカードの活用

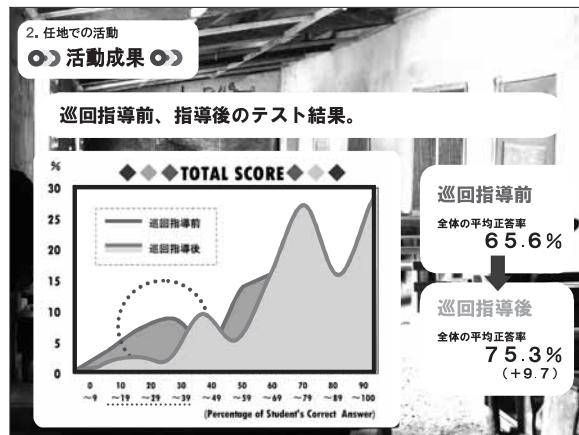
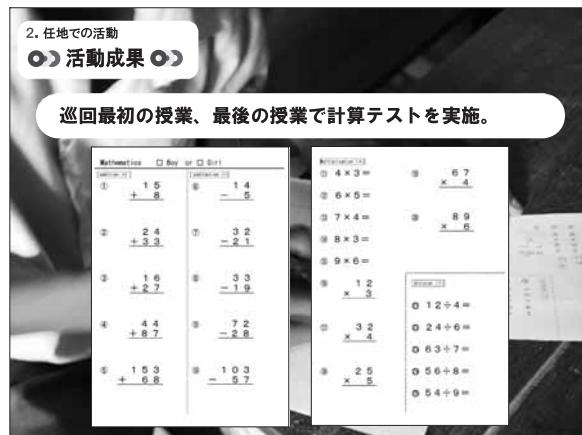
九九の暗記（暗唱）

2. 任地での活動
●●「算数」について ●●

② 数量感覚を育む授業を実施。

くり上がりのたし算の間違い

ピュアウォーターバッグを使ったTLM



2. 任地での活動
○○ 課題と反省 ○○

◆教員の教授力の向上について
・モチベーションの低い教員に対してのアプローチの難しさ。
・教授力の向上に理解はしてくれるが、行動変容まではなかなかいかない（継続しない）。

◆配属先（タマレ教育事務所）との連携について
・JICAのプログラムと連携した活動ができなかった。
・巡回指導主事との連携ができなかった。

3. 要請内容以外の活動



3. 要請内容以外の活動

◎◎ 理数科分科会 ◎◎

理数科分科会活動に所属し、ターム休みごとに理数科のイベントを実施。



3. 要請内容以外の活動

◎◎ 他の職種の隊員との活動 ◎◎

村落開発普及員、感染症対策など他の職種の隊員と連携した活動。



4. 日本の小学校との交流



4. 日本の所属先との交流

◎◎ クロスロード ◎◎

教え子への手紙「日本の生徒たちへの手紙」がクロスロード（2008年6月号）に掲載。



4. 日本の所属先との交流

◎◎ ガーナだより ◎◎

学級通信形式でガーナを紹介する「ガーナだより」を発行。



ガーナ料理にはどんなものがあるの？

ガーナには、お米以外にも『フフ』、『パンクー』、『プランテーン』などいろんな種類の主食があり、それらをシチューにつけて食べます。(シチューにも色々種類があり、好みにより肉や魚をいれたりもします。) また、『ジョロフライス』と呼ばれるお米の料理もあります。

『フフ』
左のお餅のようなものがフフ。(右はシチュー。)ゆでたイモなどを日本の餅つきのように杵と臼でついて作る。食感もお餅に似ていて、やわらかい。

『パンクー』
左の白いものがパンクー。(右の黒いものは蕪)。とうもろこしの粉を丸く固め、醸酵させて作る。見た目はフフと似ているが、フフほどやわらかくなく、味は少し酸っぱい。

4. 日本の所属先との交流
ビデオレター

日本の小学校の様子を紹介したビデオレターの上映会を実施。
上映会の様子やビデオを見た感想、そしてガーナの小学校の様子を紹介したビデオレターを所属先の学校にE-mailで送る。

上映会・ビデオレター

5. 感想・帰国後の取り組み

5. 感想・今後の取り組み
感想

- ◆ 違うものさし（価値観）を持つことができた
- ◆ 人との出会い
- ◆ 日本の良さに改めて気づく

5. 感想・今後の取り組み
帰国後の取り組み

- ◆ ガーナを紹介する授業を実施
- ◆ 大阪の教育関係の隊員OVの集まり、「教育ネットワーク」に参加
- ◆ 6年の社会と総合的な学習の時間を使って、協力隊の経験を生かした開発教育を実施予定

ご清聴ありがとうございました。

現職教員の現実と開発途上国の現実

外山瑞穂

(19-1、ジンバブエ／ウガンダ、行政サービス、川崎市立菅生中学校)

川崎市菅生中学校教諭の外山瑞穂（とやまみづほ）と申します。よろしくお願ひいたします。

19年度の1次隊、職種は行政サービスとしてジンバブエ共和国に派遣されました。第2の都市といわれるブラワヨ市役所へ配属され、市の広報・大使館員や訪問者の接待・地域行事の企画と運営、市長スピーチのゴーストライターなどをサポートする仕事をしていました。市役所内の各機関との連携や地域のNGOとの連携をとり、電気が安定していればパソコンでプログラム等を作成しました。時には地域の高校生評議員の生徒たちと共に地元の孤児院を支援し、ボランティア活動を共にすることもありました。活動がバラエティに富み充実しつつあった日々でしたが、時の大統領選挙を迎えてハイパーインフレーションが留まるのを知らず、9ヶ月の滞在の後、日本の外務省の決定で荷物も置いたままジンバブエ国外の退避を命ぜられてしまいました。隣国ザンビアに退避の後、結局任国変更との決断が下されました。

次の派遣国はウガンダ共和国でした。ウガンダでは東部のトロロ県保健課に所属になり、データの管理と保健事務のスーパーバイズ・地域への健康教育の啓発とアウトリーチ補助、また、県立病院のデータ化を図るため病院職員にパソコンの使い方を指導することも行いました。ここでも村落との連携、医師・看護師との連携によって活動が広がり、また自ら徒步圏内の小中学校を訪問し保健安全指導や公衆衛生の知識啓発をするなど、非常に充実した日々を送ることができました。

このパワーポイントには、どの写真がどこの場面で…というような説明がありません。私は、今回の帰国報告をするにあたり、かつて、自分がこれから旅立とうという派遣前、その前年度の帰国報告会に参加し、何を感じてどういう思いになったかを省みてみたのです。その結果、どんな発表のレジュメをもらおうとも、また説明を聞こうとも、本当に印象に残ることは、「どのような体験談を聞いた自分がいざ行ってみる前までにどんな自分自身をイメージするかどうか」で、これが何より大きいのではないかと思いました。よって、これを材料にしてアフリカといわず開発途上国について考えを深めていっていただけたら嬉しく思います。

アフリカ=みんな子どもはお腹が大きくて栄養失調、事態は常に貧しい、という考えは捨てていただきたいと思います。それは、ジャパン=みんな空手ができ金閣寺のような家に住んでいて、浮浪者など決していない、と思われている私たち側の偏見をどう隊員が壊して、次の活動や人間関係につなげていくかということです。貧しい人々や集落はあります

すし、電気や水の供給が不安定な地域もあります。けれども、そうでない人々や地域もあるということを、日本人という棚にあげているのは誰か、ということも忘れないでほしいということです。橋の下にビニールシートをかぶって生活している人々は私たちの生活のすぐそばにあるのですから。

そういった、世界の状況と自分の状況をしっかりと見極め、世界の中の日本とは何か、世界の中で自分はいったい誰なのか・どんな存在なのか、そんなことを考えてみるきっかけとして役に立つかも知れないと思い、私は帰国後に異動した今の学校の自分が担任するクラスで、このパワーポイントを用いて話をしました（道徳の授業）。子どもたちは興味津々でしたが、いきなり外国の写真を見せて「なにこれ？」「俺らはアフリカ人じゃねーし」になってしまいます。やはり、それなりの時間をかけお互いの話・思いを交換し合える人間関係を構築してきたからこそできる授業でした。後に、PTA役員の方の前でも話をする機会をいただきました。

中学校の毎日が多忙なことは、現職参加の先生方には言うまでもないことです。このパワーポイントの合間に日本の学校の生徒たちの写真が入っているのは故意であり、その意図は、自分たちの生活の写真で自らを振り返り、違いはどこにあるのか、違いがなく同じだと思えることはどんなことなのか、また互いにどんな表情をしているのか、について迫るためでした。時間がない・余裕がなくてそこまで出来ない、ということを揶揄する前に、そんな状況でも可能なことは何かを探し、出来ることからはじめてみる、ということが非常に大事になってくると思うのです。無理をしない=やらない、のではなく、どこに妥協点や可能なことがあるのか、どこに無理な点や不都合があるのかを分析し、そのためのコミュニケーションをしっかりと取り、いま出来ることをまずやれるように協力者を求め、関係を築いていくこと…これは、資源や材料、予算や人材の不足、宗教の違いなどで思うように進まない開発途上国でのあらゆる実践を試みる際にも共通することではないかと私は考えます。

53ヶ国あるうちの2ヶ国の滞在・派遣経験だけで、アフリカの全てを語ることは間違っています。また、短期間だったからこそうまく行ったこと也有ったはずで、これが5年、10年の滞在になったとしたらどういうことになるか、それはまた別の話です。すなわち、限定された期間だということをしっかりと念頭に置き、その上でかつて経験したことのないような言葉の違い・習慣や食べ物の違い、人の考え方や仕事の進め方の違いを全身で経験することが、隊員としての醍醐味であり、ユニークさではないかと思います。これからいかれる現職参加の方は、どうか、気持ちよくその出発の日を迎るために、あたりまえのことをあたりまえに行うこと…すなわち、3月31日までしっかりと現在の学年・学級を終了し、その上で、意外性と発見に満ちた世界を心待ちにされるといいと思います。

あたりまえにことの感謝できる、そんな人になってほしいと常に生徒たちにいって聞かせているのは先生自身ではなかったでしょうか。それは自分のことだとハッとする瞬間が、忙しさのせいで見えにくくなっているかも知れません。けれども、協力隊員はそれを実行

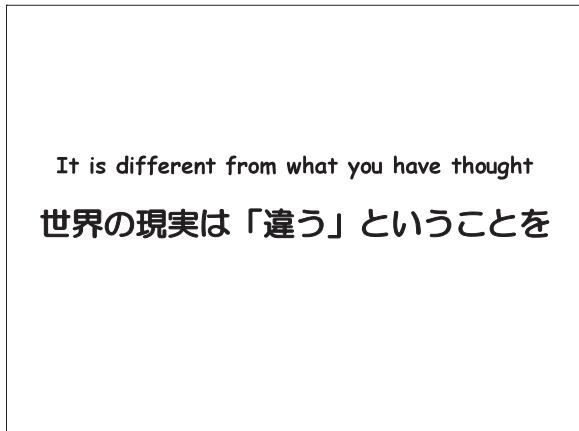
できる人であるべきではないか、と思うのです。停電で1週間メールが開けない、電話が充電できない、その不便さを詰っているくらいなら、なぜ途上国を選んだのか。無いときは無いなりに違うことを見つけるよう普段言い聞かせている自分は、一体誰なのか。パワー・ポイントで紹介する写真たちは、そういった部分に気がついていただきたいと願うものです。決して「この写真は○○をしているところです」で終わるものではないのです。

帰国後の活動・体験の還元は、これから始まるものだと私は考えています。いま、ようやく1年が経とうとしており、そこでゆっくり日本の学校の流れに追いつきつつある自分がいます。さし当たって昨年は、ジンバブエ共和国大使館の職員に来校していただき、国際交流教室を開催することができました。この時の参事官の言葉は、大変力強いメッセージがありました。「自分がみなさんのように学生のころは、将来、自分が日本にいるなんて考えてもみなかった。でも、いま自分はこうして日本の子どもたちの前で話をしている…みなさんにも、そんな、今の自分には考えもつかない未来がきっと待っている」と。肌の色も言葉も異なっている、それがどういうことなのかを、生徒たちはつぶさに自分自身を見つめながら、思いを膨らませるので。けれども私は、これは国際理解の始まりであつて、まだ成功でも達成でもないと捉えています。帰国隊員の道はここから続していくのです、ですから私も途上国のように発達段階の途中にあります。

帰国して「日本が嫌になった」という人がいます。でもそれは、そんな自分が日本人だからこそ言えるちょっと傲慢な考え方なのではないかと思うのです。身近にあると見えていない“当たり前”や“便利”への感謝はどこへ？という視点を忘れてはならないと思います。日本にもたくさんよいところがありますし、自分こそ日本人なのだから、だからこそもっと世界に寛大になれるよう、“人”に学ぶべきではないでしょうか。そういうことを惜しまない大人に（帰国隊員であればこそ）私はなりたいと思います。これから旅立つみなさんの派遣が誰にも代えがたい、貴重な活動を生み出すことを心から願っています。そして帰国後は次の隊員にしっかりとその思いをつないで、いつの日か同士として語り合うことができたら嬉しく思います。



The world has become a global village
世界は“地球規模”で対話できるようになった
however, we know very little about
とはいえ、未だ私たちは見えていない
how the realities of the world
are beyond our imagination
自分が思うよりもはるかに…







世界の中で...自分は誰だろう



いま、何ができるだろう

帰国後、教室での実践

国際交流と人権尊重教育

ジンバブエ共和国大使館の方を学校に招いて国際交流教室開催



「将来自分が日本にいるなんて、君たちの年齢の頃、考えもしなかった」



世界は行ってみるまで、わからない！充実の2時間でした



その他にも…

- ・「地球のステージ」 桑山医師の公演
- ・授業での実践(多文化共生)
 - 教科…英語
 - 学活…集団の形成、リーダー育成
 - 道徳…他者理解・人権尊重教育
- ・外国籍の生徒との交流や学級づくり
- ・PTAさんとの交流

最後にひと言

「帰国したら、日本が嫌になった」という人もいます

でも、これは、日本に生まれた人だけが言える
「贅沢」ということを
現職教員参加の隊員は知っているべきだと私は思います

あたりまえのこと感謝していないのは
自分自身かも知れません

みなさんの活躍、心から願っています

mizuhobyojp@yahoo.com

川崎市立菅生中学校教諭 外山瑞穂

異文化に触れて（学校教育編）

渡辺正之

(19-1、タンザニア、理数科教師、栃木県立学悠館高等学校)

みなさんこんにちは。栃木県の学悠館高校から参りました渡辺と申します。私は、理数科教師という立場でタンザニアに派遣されました。実は村に派遣されまして、村にあるちっぽけな学校に配属されました。本当は村での生活をお話できればすごく楽しい話になつていいのかなと思いますが、今日は先生方対象ということで、学校の現状を、多少ショッキングな話も出てくるかもしれません、学校生活を中心に話をさせていただきたいと思います。

先ず、タンザニアですが、私も行くまで場所がわからなかつたのですが、アフリカにあるのだろうくらいは知っていました。地図では緑のところですね、タンザニア。ずっとタンザニアをご紹介しますと、首都はドドマです。一番大きな町がダルエスサラームという町なのですが、ここは首都ではなくて、最大の町です。面積は日本の2.5倍、人口は日本の3分の1ということなので、人口密度が低いです。部族がかなり多くて130あります。有名どころだと、マサイ族でしょうか。私の任地の近くだとヤオ族とかマコンデ族とか、まあいろいろいろいろですが、そういう部族が130あります。宗教はイスラム教、キリスト教、その他です。その他というのは、伝統宗教ですね。山奥に行くと今でも、お祈りで病気を治すなどそういう怪しげな宗教が残っているのですが、仏教とか神道とかはまったく知られていません。言葉はスワヒリ語です。英語が公用語となっておりまして、学校では英語で授業することになっているのですが、実際は英語が通じないです。ケニアとか、ザンビアとかタンザニアの周囲の国では結構英語が通じるのですが、タンザニアはスワヒリ語が定着しているという特性もあってか、余り英語が通じません。気候は乾季と雨季。今ちょうど雨季ですね。そんなにジメジメとはしてなく、スコールがたまにザーッと降ります。通貨はタンザニアシリング。物価はとても安いです。日本のだいたい5分の1から3分の1でしょうか。以上タンザニアを簡単に紹介しました。

これが見づらい地図なのですがタンザニアの地図です。黄色い四角で囲まれているのは、先ほどお話ししましたダルエスサラームです。タンザニア最大の町ですね。ただ首都は真ん中のドドマというところです。で、最大の町ダルエスサラームから飛行機で1時間かけて、黄色の四角のムトワラという南東部最大の町に行って、そこからバスで5~6時間かけて、マサシというところに行って、そのマサシにあるチググ村というところにある学校に配属されました。今日はそのチググ村の様子はお話できないのですが、その田舎で、約2年間生活しました。私の活動についてお話しする前に、まずタンザニアの教育制度について、お話ししたいと思います。このピラミッドがタンザニアの教育システムを表しているのですが、

Primary school、小学校が一番下ですね。Secondary Olevel、これが日本で言うと中学校に当たります。Secondary Alevel、これが高校ですね。Advance diploma というのがよくわからないのですが、その上に大学というこのようなピラミッド状になっています。私が赴任したのはSecondary Olevel、青くなっているところで、日本で言うと中学校に配属されました。ただ中学校といつても、年齢は、むこうは留年制度があるので、17~20才くらいの子もいたりして、年齢的には高校生もしくは、高校生以上の生徒が少なからずいました。教授言語は、実際に授業で使う言語は英語ということになっているのですが、実際はスワヒリ語を多用しています。というのは、特にFORM I、IIでは英語が通じないからです。私の赴任した中学校は4年制でした。1年生から4年生までで、3年生、4年生になると少し英語がわかるようになってくるのですが、1年生、2年生は全く英語がわからないのですね。だからスワヒリ語を取り入れながら授業を進めていました。必修科目はほとんど日本と同じような科目を勉強します。ただ宗教という科目がありまして、宗教の時間になると、イスラムとキリストに分かれて、それぞれ宗教の勉強をします。国家試験、ナショナルイグザムというのがあるのですが、これがですね、小学校のころからありますて、これに合格しないと進級、卒業ができません。このナショナルイグザムが一番やっかいですね。おそらくアフリカに行かれる方もいらっしゃると思うのですが、きっと耳にすると思います。タンザニアだけではなくて、他の近隣の国でも、このナショナルイグザムをやっていましたが、数学と物理で8~9割がFです。Fというのは落第点なのですが、とにかく100人いたら90人は点数が取れないので。だから理数教師の派遣要請が来ているのだと思うのですが、惨憺たる状況です。

これが私の赴任したムベンバセカンダリースクールという学校です。空がとてもきれいです。これは乾季の映像ですが、アフリカの乾季は毎日こんな空ですね。とてもきれいでした。比較的新しい学校で、今年で5~6年目くらいです。ただ以前小学校として使っていた校舎を使っているので、校舎自体は新しくなくて、中はボロボロなのですが、できて5年目の学校です。生徒数が352名、そんなに大きな学校ではありません。教員数は4名です。私を含めて4名です。ですので、私が帰った後は3名で、もう学校は回りませんよね。やはり教員数が足りないというのは一番大きな問題でして、理数教師が派遣されていますが、それでも全然十分じゃないという状況です。

生徒の学校生活の様子です。7時から学校清掃となっていますが、7時に行っても誰もいませんでした。朝の集会は日本と同じような集会をやります。気をつけ、回れ右とかそういうのもあるのですよ。校歌も歌ったりするのですが、長い校長先生のお話があつて、だいたい1時間目が8時から始まるのは稀ですね。

これが授業風景です。左上の写真をご覧いただけするとわかると思うのですが、とにかく机といすが足りません。これは途上国だったらどこでも同じような状況だと思います。ただ私の学校は比較的恵まれていますて、校長先生がとても教育熱心で力のある方だったのですね。ですから、これでも机といすがあるほうなのです。学校によっては床で書いたり、

次にお話される山田先生の行かれたウガンダはもっとすごいと思うのですが、とにかく物がなくて、そういうところで生徒は頑張っているということです。これは土曜日に課題をやっていたのですが、そのときの様子です。ムービーもお見せできればよかったです、ちょっと手違いというか、時間の関係もありますので省略します。

数学指導における課題と対策ということで、課題は山積みです。たぶんここにいらっしゃる方は理数科教師の方だと思うのですが、タンザニアに限らず、アフリカに限らず、途上国共通の課題だと思うのですが、基礎計算力の向上が課題です。計算力がないのですね、とにかく掛け算ができない。中学生でもです。なぜかというと、教わってないというか、小学校の時に授業をやってもらっていないのです。ではどうしたかというと、簡単な計算の反復練習ということで、100マス計算をお聞きになったことがあるかと思うのですが、100マス計算なんかやらせたらそれだけで20分とか30分とかかかっちゃいます。ですので、それを小さくして、ますを、36マスとか25マスにして、そういうのを授業の時に取り組ませて、反復練習をさせていました。応用力の養成です。暗記中心ではなく過程を重視する授業と書いてありますが、これは無理でした。数学が嫌いな生徒は一杯いました。というか、ほとんどが数学嫌いです。なんで嫌いなっちゃったかというと、できないからです。解けない、できないからです。確かにそうですよね、掛け算、九九ができない。正負の足し算、引き算ができない。そういう生徒が、ベクトルとか行列の計算なんて、できるわけがないのです。嫌いになっちゃうのは当たり前なのです。そこで、そういう生徒に対して簡単な問題を解かせて自信を持たせる。そこから始めるといけないな、と思って取り組んでいました。

次にナショナルイグザム対策です。これが本当に厄介だったのですが、とにかく授業だけでは対応できませんので、課外授業を土曜日、放課後と行いまして、何とか、力をつけさせようとしていたのですが、なかなか難しかったです。それからおそらく皆さんも行かれて、最初の頃は問題なくいくと思うのですが、だんだん生徒との関係に慣れてくると、生徒たちが、日本と一緒にですが、授業中に勉強しなくなります。よくコマーシャルで勉強したくてもできないみたいな映像が映ります。たしかにそういうことも多いのですが、いざ学校に来て見ると、やっぱり勉強はつまらないから授業が騒がしくなってしまうこともあります。そこは、現職や大学卒業してすぐに協力隊に参加した人に関わらずほとんどの隊員が悩むことなのですが、とにかくノートを持ってこない。ノートをとらない。授業中おしゃべりをする。授業に遅れてくる。練習をやらない。トイレに行く。そしてトイレに行ったままどつか消えちゃうのですね。トイレはそんなに遠くはないのですが。私が授業を開始してから半年後にはこういう状況になってしまいました。日本でも大変な学校に何年か勤めていたので、そこはへっちゃらだったのですが、ではどうやってそういう状況を改善したかということなのですが、対策としては簡単な授業中のルールを作って、それを繰り返し生徒に言い聞かせるという方法しかちょっとと思い浮かばなかったので、それを繰り返しました。それと、あとは生徒との信頼関係の樹立ですよね。これは日本の学校

でも同じだと思うのですが、とにかくコミュニケーションを授業中以外にもとるようにして、一人でも多くの生徒の名前を覚えるなど、信頼関係を作る。そうすると、時間はかかりますが、少しづつ言うことを聞いてくれるようになると思います。それはたぶん先生方よくご存知だと思います。実は学校では、これ言っちゃいけないかもしないですが、先生はムチで、体罰しているのです。隊員の中でムチを使って体罰をしたという方もいるようなのですが、私はしませんでした、もちろん。日本では禁止されていますからね。でも、そこまでやらないと授業を成立させるのが難しいという現状があるというのが実際のところです。

クラブ活動もありました。うちの学校の場合、毎週一回だったのですが、バレー、サッカー、ネットボールとかやっていました。サッカーの写真を見てもらうと裸足で走り回ってます。よくケガをしないなと感心して見ていましたが、このような環境でやっています。

ディベートなんてものがあって、向こうの人は話すのが好きです。私は得意じゃありませんが、人前で発表するのもむこうの人は大好きです。授業中などに質問すると、生徒が手を挙げて、前に出てくるのです。前に出てきて説明するのですが、トンチンカンな説明して、全然わからないのですが、みんな笑って、また次のやつが出てきて、またトンチンカンな説明をして、それを何回も繰り返します。目立ちたがりなのかどうかわからないですが。

自主学習なんていうクラブ活動もありました。これは学校によっていろいろあると思います。たぶんディベートは、特にアフリカに行かれる人は目にする機会があるのではないかと思います。

このクラブ活動にも問題は山積みです。グラウンドがまずないです。グラウンドは小学校を借りてやっていたのですが、ボールがない。指導者がいない。講堂がない。ディベートをやるのに外でやっていますから、雨季で雨がバーッと振ったら逃げ場がないのです。みんなバーッと逃げていって、そのまま戻ってこない。教科書、問題集がない。学校に教科書がありましたら30冊だけでした。30冊をテスト前に貸し出して、3人か4人くらい組みになって、使えというように渡すのですが、ちゃんとチェックしないと戻ってきませんから、その辺はしっかりやりました。そして、極めつけは教員が来ないことですね。学校に来ないこともあります。

Teacher's on duty 週番をやってくれっていうように要請に書いてあって、皆さんも依頼されることがあるかもしれません。わたしもなにかのためになるかなと思ってやってみたのですが、清掃監督とか集会指導、構内巡回などです。構内巡回って言うのは生徒が森の中に逃げていくのを引き止めるのです。出席管理、体罰もありますが、体罰は右下の写真に写っている木の枝のムチでバチバチ打つのです。生徒が泣き叫んでも、やめない。それで不思議なことに、これが法律でも認められていて、4回までストロークをやっていいという法律があります。その4回という根拠がわからないのですが。しかも4回どころじやな

いです。私も何でそんなに体罰するのだって聞くと、タンザニアの生徒は悪いからねって一言で片付けられました。その他の雑用もあります。

タンザニア教育の諸問題についてです。これはうちの学校に限らず、私が感じた問題点です。いろいろな隊員からも聞いて、おそらく、アフリカ、もしかすると途上国全般の共通問題なんじゃないかなと思います。まず教員、有資格教員の不足です。そして専門的知識の低さ。平気で間違ったことを教えてしまう。それをどうやって指摘するかが難しいのです。どうしてかというと、プライドがありますから、間違っても生徒の前でそれ違うよと言わない方がいいです。先生もすねちゃいますから。それを別の時間とかに、「良い教え方していましたね。でもここはこうやったほうが良いのではない？」という風に指摘したほうがいいかもしれません。

授業に行かない赤で書きましたが、本当に授業に行かないのです。時間割はあるのですが、職員室でお茶を飲んでいたり、お話ししたり、全然授業に行きません。週に3回くらい授業に行けばいいというような、もちろんすべての学校ではありません。うちの学校の先生です。何でそんなに授業に行かないのって言うと、生徒が自習しているから大丈夫だと言うのです。自習なんてしていないのです、寝ていたりしゃべったりしています。それで体罰ばかりするのですが、逆に私が一生懸命時間割どおり授業に行っていたら、なんでそんなに授業に行くのって聞かれました。

生徒は明るく、素直で人懐っこいがモラルが低い。モラルは低いです。平気でガム、アメを授業中に食べます。日本でも一緒かもしませんが、ひどいのはマンゴーを普通に授業で食べている。お前何食べているのって聞くと、マンゴーです。でも、注意すると素直に聞いてくれるので、ストレスは溜まらないです。授業は大好きです。他の先生が授業に来てくれないから、私が授業に行くと、WELCOMEです。歩いている途中から2~3人寄ってきて、私のノートとか教科書とか持って、教室に手を引くように入ってくれるのですが、30分くらい授業を続けるともうダメです、飽きちゃいます。それでクラスルールが必要になったのです。そして欠席、退学が多い。退学はお金とか病気とか、妊娠が理由です。アフリカ諸国ではおそらく妊娠がかなり多いとは思うのですが、それで退学していく生徒も多いです。

体罰についてです。先ほど申し上げましたが、これが一番の問題です。実際見ると、正直心が痛いというか、何とか助けてあげたいとは思うのですが、彼らに体罰を止めさせるのはなかなか難しいです。今までそれで生徒指導をしてきましたから、彼らにはそれしか手段がないのです。生徒と話をしてどうこうっていうのはそういうスキルはないですから、その体罰を先生から取り上げちゃうと、おそらく、学校が成り立たなくなっちゃう恐れもあるのかなと思います。

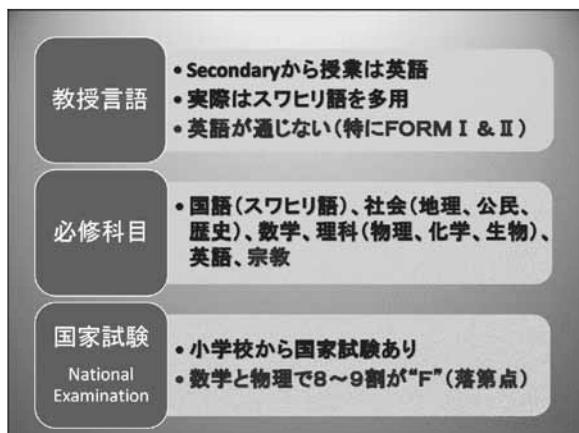
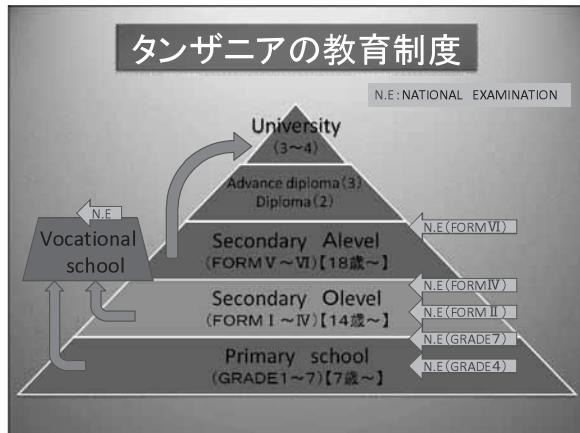
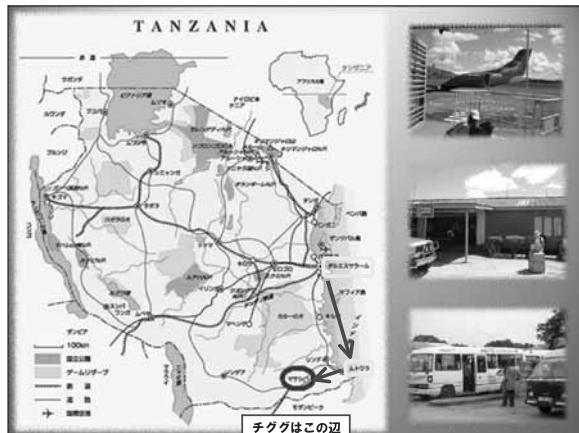
学校運営についてです。とにかく一言で言えばテキトーです。教育環境、これはそうですね、テキトーという一言につきるかなと思います。

最後にタンザニアで感じたことを簡単にお話して終わりたいと思います。こっちが笑え

ば、向こうも笑う。これは今日の発表のキーワードというかテーマみたいなところに書いたのですが、この一言かなという感じがします。やはり異文化に行って、受け入れてもらえるのか不安ですよね、2年間住むわけですから。受け入れてもらえるためにはどうしたらいいかなってやはり考えると思うのですが、その一番の秘訣は、おそらくこっちが先に相手の異文化に溶け込む努力をすることだと思うのです。隊員の方でもやはりいるのですね、タンザニアに行って、オレは日本人だからタンザニアの文化には合わせない。やつらはダメだ。タンザニアはダメな国だと。もうそればかり言っていて、会うたびにタンザニア人の愚痴、それから文句です。何しにこの人は協力隊に来たのだろうと思っちゃう人も中にはいるのですが、そんな事をしていたら、受け入れてもらえないのです。相手を受け入れようとする、そういう姿勢がこっちを受け入れてもらう一番簡単な方法なのかなと思います。向こうの人たちの生活を見ていると、助け合いながら生きているなというのがわかります。貧しくても与え合っている。繋がりがあるのです。近所の繋がり、家族の繋がりです。最初に話したとおり、村に入ったのですが、村人が本当に、毎日声をかけてくれて、家族同然に扱ってくれて、幸せでした。帰ってきたら何でこんなに孤独なんだろう、そういう感じになりました。日本人って孤独なのかな、いや、皆さんは孤独じゃないと思うのですが、タンザニア人に比べると繋がりが希薄なのかなという気が今でもしています。いじめのない学校、けんかとか言い争いとか、からかいとかは普通にありますよね、人間ですから。でも、クラスみんなでの子を無視しようとかわけのわからないいじめは見たことも聞いたこともありませんでした。

いろいろ考えると、タンザニア人と日本人はどちらが幸せなのでしょうか。私もこういう話を何回か学校でして、この言葉を生徒に投げかけていつも話を終わります。日本の素晴らしさ、これ私の学校です。学悠館高校、栃木県の初めての単位制高校ということで、県税60億かけて造られました、まだ5年目なのですが、うちの学校は環境的にはとても恵まれている。日本人って勤勉だなと思います。歴史的にも、文化的にも、世界的にユニークな面をもっていて、そして日本食は本当においしいと改めて思いました。ぜひみなさん日本食はインスタントでいいので、味噌汁とか、持って行ったほうがいいと思います。

帰国後の活動ということなのですが、何回か学校の方で講演をしたり、JICAさんの報告会で話をさせていただく機会がありました。以上で私の説明は終わりです。



学校概要

ムトワラ州マサニ県ムベンバ村に2004年に設立
生徒数352名、教員数4名(2009年3月現在)

	クラス数	男子生徒	女子生徒	合計
FORM I	2	41	44	85
FORM II	2	46	40	86
FORM III	3	62	67	129
FORM IV	1	42	20	62

生徒の学校生活

登下校風景

日課(月曜～木曜)

- 7:00～ 清掃
- 7:40～ 朝の集会
- 8:00～ 1限～4限
(1コマ40分休み時間なし)
- 10:40～ 休憩時間
- 11:10～ 5限～12限
(1コマ40分休み時間なし)
- 14:30 放課

* 金曜は休憩後に30分授業
通り、12時前には放課



数学指導における課題と対策

- 簡単な計算の反復練習(36マス計算)
- ① 応用力の育成
- 暗記中心ではなく、過程を重視する授業
- ③ 教学が嫌いな生徒
- 簡単な問題を解かせ、自信を持たせる
- ④ NATIONAL EXAM 対策
- 土曜日の課外授業

クラスコントロールにおける課題と対策

[課題]

- ・音楽でうるさい子がいる
- ・机の私物を頻繁に盗む
- ・勉強を怠る

[対策]

- ・簡単な「授業中のルール」を作り、繰り返し生徒に言い聞かせる
- ・生徒との信頼関係の樹立

クラブ活動(スポーツ)

- ・毎週火曜日16時から
- ・近隣の小学校のグラウンドを借用
- ・種目はサッカー、バレー、ネットボール
- ・勉強が苦手な生徒も大活躍

バレー

ネットボール

サッカー

クラブ活動(ディベート)

- ・隔週木曜16時から
- ・場所は学校の校庭
- ・教員顔負けの英会話力を持つ生徒も

議長の挨拶でディベート開始

堂々と演説するプレゼンター

クラブ活動(自主学習)

- ・隔週木曜16時から
- ・各教室毎に異なる科目を学習
- ・先生が居なくとも真面目に勉強

結構真面目にやります

生徒が先生

クラブ活動における問題点

- ・グラウンドがない(スポーツ)
- ・ボールが足りない(スポーツ)
- ・指導者がいない(スポーツ)
- ・講堂がない(ディベート)
- ・教科書・問題集がない(自主学習)
- ・教員が来ない(共通)



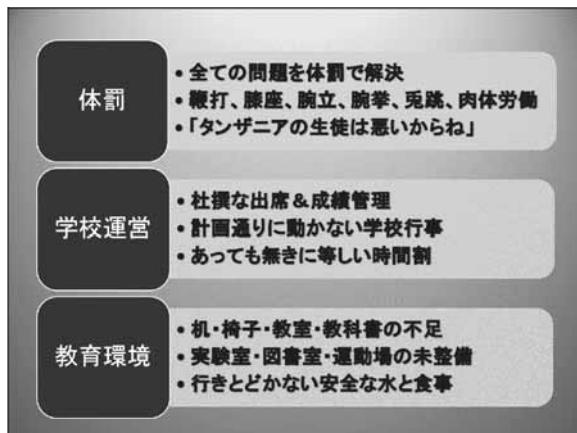
タンザニア教育の諸問題

教員

- ・有資格教員の不足
- ・専門的知識の低さ
- ・授業に行かない(給料が低いから?)

生徒

- ・明るく、素直で、人懐こいがモラルは低い
- ・授業は好きだがあまり勉強をしない
- ・欠席、退学(お金・病気・妊娠etc)が多い



タンザニアで考えたこと





ンポランポラ～ウガンダでのボランティア実践～

山田千夏

(19-1、ウガンダ、養護、神奈川県立高津養護学校)

今のはウガンダ語での挨拶で「みなさん、こんにちは。私の名前は山田千夏です。」という意味です。

こんな感じで向こうで暮らしていました。今日は1年9ヶ月滞在して、とても大好きになって、今も帰りたいなと思うウガンダの、主に障害児教育の話を中心としながら、お話をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

協力隊に応募した経緯です。私は神奈川県の高津養護学校という知的障害がある子供たちがいる学校で、高校生を相手に9年間勤務していました。私の中のイメージでは養護学校に通ってくる生徒は知的に問題を抱えているというイメージがあったのですが、この養護学校で出会った子供たちの半分くらいの子供たちはボーダーと呼ばれる子供たちで、知的に障害があるかないか、狭間にある子供たちでした。中学校3年生まで普通校にて、授業を受けて高校進学を考えたとき、養護学校に行こうか、工業高校に行こうか、どうしようかなという選択肢があり、見学に行ってみたら、なんかこの学校授業なさそうだし、遊んでばかりいるように見えるし、ちょっとといいかなと選んで入ってくる子もいますし、いじめにあって普通の同級生と関わるのがつらいので、養護学校に行ってみたいというような心にちょっと傷を持った子供たちも来ます。親御さんが教育熱心であれば、本校を選ぶことはなかっただろうなというような、ちょっと家庭が崩壊してしまっているような子供たちとの出会いもありました。3年間、彼らは養護学校にいるのですが、その間に自分が嫌い、家族も嫌い、生きている意味もわからないしと考え、積極的に自殺をしたいとまでは思わないまでも、消えてしまいたいと思って悩んでいる子供達にも出会いました。3年間ではもちろん解決できない問題もたくさんあります。私が11年前に教えた子供たちと今も交流があって、とても自分のことが嫌いとか思っている彼らなのですが、私にしてみれば、力が十分にある彼らで、そんな彼らと何かができるのかなと、その何かを探したくて、協力隊に応募しました。

そしてウガンダに行くことになりました。派遣国の希望調査というのを、最初試験で皆さんお書きになったと思うのですが、私は全部中南米を書いて、面接のときに中南米好きなんですかということを聞かれて、特にそういうことはありませんというふうにお答えしたら、じゃあウガンダへということで通知がきました。ウガンダって聞いたことはあったのですが、地図上で探しなければわかりませんでした。アフリカの赤道直下にある国で、正式名称はウガンダ共和国です。国の面積は日本の本州とほぼ同じ。人口が3099万人なので、人口密度は日本に比べれば、ずいぶん少ない。首都はカンパラというところで、赤道

直下なのですが、平均高度が1200mを超えていたため、1年中日本の春とか、秋のような気候で、日中は30度近くまで上がっても、朝晩は涼しくて、1年を通して過ごしやすいとても素敵な国でした。野菜や作物は何でも植えればすぐ育って、暖かくて、冬もないというところで、貯金をしなきやとか何かを蓄えなければいけないなんていうことはないので、それがまた経済的な発展を阻害している原因なのではと私の同僚などは言っていました。1年中飢えることはないので、というような話も同僚とはしましたが、とても気候の良い国です。日本の本州と同じくらいの面積に50を超える部族がいまして、部族語がとても多くあって、公用語は英語と定められていますが、小学生は英語をそんなには理解していないません。先ほどの渡辺さんの説明にあったタンザニアはスワヒリ語を公用語にすることで、中学校から大学までスワヒリ語で教育を受けられるという国だと思うのですが、ウガンダが抱えている問題に言葉の問題があります。英語で授業を小学1年生からやってきたのですが、どうも理解度が上がってこない。これにはやっぱり母国語が必要なのではないかと、普段家で使っている言葉を教育現場で使ったほうがいいだろうという動きが出て、この小学校3年生までは、その地域で使われている言葉を教育の言葉にしましょうということになり、子供たちはそれでいぶん救われて、算数や足し算や掛け算などができるようになってきています。しかし今度は教員の方に問題が出てきます。生まれた地域で教員になる人はいいのですが、ちょっと離れた地域で教員になると、喋ることはできてもそれで指導案を書くことがとても難しいというような問題を抱えています。幼稚園から大学まで一つの言語で教育を受けられる日本は、それだけで学力的に上がっていいく要素がそういうところにもあるんじゃないかという話をされて、自分は意識したことがなかったのですが、もしかしたらそういうことがあるのかな、というような視点を持たされました。

宗教はキリスト教、イスラム教が強く、また、伝統宗教もあります。

ウガンダについて、私が行ったのはルコメラといって首都から60キロ北西に行ったところにありました。これは首都カンパラの写真で、一応高層ビルがある唯一のところです。あと、ビクトリア湖に接していて、ナイルペーチという魚は日本にも輸出され、マクドナルドのフィッシュバーガーの原材料として使われています。

写真でウガンダの紹介をしていきたいと思います。私の住んでいた村は電気と水道がありませんでした。これは台所です。生徒の寮と私の住んでいたところが接していたので、共同で使っていました。木炭が買えるときは木炭で、木炭がちょっと高い時はファイヤーウッドって言って、木を刈り取ってきて薪で料理をするというような生活をしていました。よくアフリカというと乾いた大地というような貧困のイメージがあるのですが、ウガンダはアフリカの真珠と呼ばれるところで、水と緑が本当に美しい国です。活躍している車は、9割くらいは日本から輸入しているもので、トヨタのハイエースは乗り合いバスとしてかかせない交通手段でした。日本では8人乗りのハイエースですが、向こうでは20～25人が定員で、ひしめき合うように乗っています。日本車よくがんばっているなと思うのが、セダンです。日本だと5人乗りですが、ウガンダでは8人乗り、私が見た中で最高は12人乗りまで

乗っていました。電気がない生活というのは不便ではありました、とても豊かな時間も過ごさせてもらいました。17時半、18時半くらいになるとだんだん暗くなっていって、19時15分を過ぎたらもう何も見えず、見えるのは天の川と満天の星空というような任地でした。給食がない、ちょっと貧しい小学校だったのですが、果物は豊富にあって、休み時間に皆がいないなと思っていたら、パパイヤを取りに登っていました、マンゴーを取りに登ったりして、皆で果物を分け合って給食代わりに食べていました。ライオンやキリンもあり、サファリもあるのですが、残念ながら、ウガンダの子供たちも私たちも実際にライオンやキリンを見たりできる者は本当に少ないです。野生動物が住んでいる国立公園まで移動する交通費がますないです。そのため、サファリに行けるチャンスが私が教えていた子供たちの生涯の中にあるといいなというように今も願っているという状況です。私は何もそういうことを知らなかったとき、旅行で行って、国立公園に行ったんだというようなことを言ったら、あわてて理科の先生が教科書を持って走ってきて、野生動物の家畜というページを見て、ウガンダにはどの野生動物がいるのかというように質問をされました。これとこれは見たよというと、そうかじゃあそういうように生徒にも教えるよというような状況でした。これはナイルの源流と呼ばれるところなのですが、これもやはりなかなかウガンダの人たちは見に行けません。

大好きですね。赤道もこういう感じなのですが、ここまで行くのもなかなか大変で、これは私の日本の同僚がウガンダに遊びに来てくれたときに便乗させてもらって、便乗というには人数が多くたんですが、ウガンダの同僚と一緒に旅行に行き、ウガンダに赤道があるって聞いていたけどここだね、なんて写真を撮りました。世界遺産に登録されている王様の墓もあるのですが、ウガンダの人が行くのはなかなか本当に難しいですね。これは水運びの写真です。子供が軽々と持っていますが、重さにして15キロです。よくこんな風にしてたくましく運んでいるなと思います。日本にいたときは子供たちが水汲みをしなくてはならなくて、重労働で大変だなというように思っていましたが、向こうに行ってみると、子供たちも家族の一員として、きちんと仕事をします。このように友達と今日あったことや家族のことを話しながら、本当に井戸端会議というような感じで話をしていく、日本にいたときに自分がイメージしていた重労働で大変でというようなそういう感じとはまた違うのだなということを感じました。私の家の前は子供たちの遊び場で、いつも子供たちが来て踊ってくれていました。

これはフォレストという私が住んでいた家で、いろいろなことがあって新築で急遽建てていただいた家で、快適に過ごさせてもらいました。これは同僚がダルマ落としゲームに夢中になっているところで、こういうような簡単なゲームはすぐに仲良くなれるツールなので何個かお持ちいただくといいのかなと思います。ウガンダの教員の給料は高くはありません。休みはトータルすると年間4ヶ月くらいは休みになるのですが、その間ウガンダの教員はレンガを作ったり、パイナップルの栽培に励んだり、副業をして生計を立てています。これはウガンダの伝統的な食事を作っているところです。

私はルコメラ小学校の特殊学級に勤務しました。日本でもらった要請書には特殊学級はないというように書いてあったので、向こうに行って、聴覚障害の子供たちの特殊学級を設置するため国際手話ができるボランティアの人を募集しています、という英文を見た時に真っ青になって、手話もできないし、これは困ったことだなと思いました。しかし、自己紹介をしたときに、向こうの小学校の校長先生はJICAと約束をしている家ができていないということでしたので、五分と五分だという感じでスタートしました。そして児童への指導はクラスに20人障害がある子がいまして、担任の先生はサラという女性で、本当に素晴らしいカウンターパートを持って幸せでした。サラ一人で20人を教えていたので、私が入ったら、教科は半分ずつに分けようということになりました。算数、英語、図工、体育、音楽、ライティングという授業を手話を使ってやるという活動でした。まだまだ障害児教育が始まったばかりだったので、時間割も障害がない子供とほとんど同じ時間帯で、長時間で科目数も内容も障害のある子にはちょっと厳しいというのが行われていることの実際です。そのため、サラと考えて、もう少し遊びの要素を取り入れたり、作業的な要素を取り入れたりということができないかという提案をし、導入をしました。評価についても、学期末に健常児と同じペーパーテストをやらされるのですが、こんなものはとても無理なので、そこはどうにかならないかということで、評価表の作成などを行いました。数や形を覚えてもらうのにビーズ、アクセサリーを作って、楽しみながら学習をして、さらにお金もどうにか得たいというような活動をしました。まだまだ学校に通えていない子供が多くだったので、障害児の巡回なども行いました。机がない状況という感じで、私がいた時教室はこんな感じでした。そして、我が家でやったビーズのアクセサリー作りなどを通して、お金を得到了。子供たちのがんばりでセメントを買うことができて、ちょっとお金を調達して、机といす、ロッカーを作ることができて、今はルコメラ小学校の障害児学級は少しいい状態になったかなと思います。

ぶつかった壁は、先ず手話が読み取れなくて、小学校3年生のナカドちゃんという女の子には、言葉が喋れない人とはやりたくないわという感じで、4ヶ月間授業をボイコットされました。そのような中で活動が始まりました。また、村の人たちには障害を持った子供への偏見がたくさんありまして、呪われた家族に生まれた子供は障害を持っているというような、そういうような事を直接口に出す方もいらっしゃいますし、口には出さないけれどもそう思っているという方もたくさんいるような状況でした。それからボランティアとして行ってみて、限界も感じました。もし日本がウガンダに支援をするとすれば、先ず病院へのアクセスをよくする事が大切だなと思いました。私が受け持ったケースでは、2歳未満の子供がマラリアなどで高熱を出して、病院へのアクセスが悪かったために後天的に聴覚を失うと言うようなケースがとても多かったので、医療へのアクセスをどうにか近づけてあげるというのが大事なのだろうなと思いました。しかし、私はここで何もできないまま帰ってきてしまったので、ちょっと残念に思っています。

村の女性たちが好むようなデザインをということで、生徒たちとはこのようなアクセサ

リーを作つて、高校生の協力を得て、クリスマスの時期など女性がオシャレをしたい時期に売つて歩いてもらつてお金を得ました。また、日本人を相手にクラフトカードなどを売つたりしました。

村の巡回で出会つた子供の一人で、最初は手で食事や書くこともできていたのですが、手の筋力がどんどん落ちていつてしまつて、今はそれができません。しかし、お母さんとお姉ちゃんがとても優しく、足の筋力も衰えつつある中、まだ使えるということでこの子に教えてあげているので足で書くこともできるし、食事も足を使ってできます。

その他、学校以外の活動です。ウガンダ隊員は大変人数が多くて、私がいる間に100人を超えた時期がありました。そんなに隊員が多いということで、いろいろな特技を活かして、楽しい活動をしたいねということで、ラジオ局主催のお祭りに出演してロックソーランを踊つたり、日本祭りというものを首都で開催しました。600人くらいのウガンダ人のお客様が来てくれました。

それから、プライマリー研究部という研究会をカウンターパート、同僚、同期の隊員を中心に立ち上げて、行ける地域が限られているんですが、広域研修でザンビア、南アフリカ、ガーナの隊員とその同僚を呼んで小学校の授業について研究をする研修ができたのがよかったです。写真で、お祭りなどこんな感じで文化紹介などを楽しめました。プライマリー研究部では研究授業をやりました。日本でやられているような研究授業はなかなかウガンダでは見られないことで、先ず員が授業を見せて、それに対してディスカッションをするということをやりました。カウンターパート、同僚もだんだんと自分の授業も見てほしいと言ってくれるようになりました。この時、隊員の任地を訪問するということを含めて隊員活動支援金を申請して、バスで移動しました。

1年9ヶ月は短いので、任国外旅行に行くのをどうしようか自分自身迷いがあつたのですが、ルワンダに行って虐殺の記念館などに行き、多くのことを感じました。皆さんも任国外旅行に行く機会があると思います。リフレッシュするために行くのもいいですし、何か感じるために行くのもいいと思います。私にとっては任国外旅行もなかなか貴重でしたので、ちょっと入れさせていただきました。

活動を終えて、豊かさって何かなということは今も考え続けています。協力隊に行くきっかけになつた日本の教え子と一緒に、今後はウガンダへの支援やウガンダ以外の国の子供達にも何かを発信できたらなということで、ウガンダ語なのですが、虹の橋というグループをつい最近立ち上げて、これからなんびりやついていきたいなと思っております。

ウガンダの私の大好きなことわざで、ゆっくりゆっくり始めれば遠くに行けるよ、というようなことわざがあります。皆さんもたくさんやらなきやいけないことに追われたり、焦る気持ちがあると思うのですが、ゆっくりゆっくり楽しんでつけて下さるといいなと思います。長くなりましたが以上です。

ンポランボラ ～ウガンダの障害児教育事情～

高津養護学校：山田 千夏
平成19年4月～21年3月まで青年海外協力隊隊員として
ルコメラ小学校（ウガンダ）で勤務

協力隊に応募した経緯

- ・神奈川県立高津養護学校の高等部に9年間勤務
- ・ボーダーと呼ばれる子供達との出会いがありました。彼らは家族が無い、自分が無い、自分に自信がない、生きている意味が分からないと自問自答していました。



そんな想いを抱える彼らと一緒に何かをやっていきたい！その基盤となる何かを掴みたい！

そしてウガンダへ！



国名：ウガンダ共和国
面積：24.1万平方Km（本州とほぼ同じ）
人口：3,092万（2,007年：世界）
首都：カンバラ（標高1,312m）
民族：バガンダ族、アチョリ族など50を超える部族がある。
言語：英語、スワヒリ語、ルガンダなど
宗教：キリスト教、イスラム教、
伝統宗教
通貨：ウガンダシリング
一人あたりのGNI：\$370（2,007：世界）
経済成長率：7.9%（2,007：世界）

ウガンダについてもう少し・・・



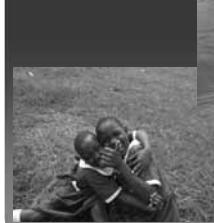
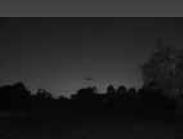
任地：ルコメラ
(カンバラから北西へ60km)

首都カンバラ



ピクトリア湖

ウガンダの紹介





主な活動内容

- ルコメラ小学校の特殊学級に勤務
- 児童への指導（主に手話を用いて行っている）。算数、英語、図工、体育、音楽、writingを担当。
- 時間割作成の提案・導入
- 評価表の作成
- 楽しみながら数や形の概念を学習することができるよう、手工芸(ビーズアクセサリー)の導入。
- 地域の障害児の巡回

学校の様子



活動でぶつかった壁・感じた問題点

- ・ウガンダの手話が読み取れない。（**自分の問題**）
- ・時間割の改善が必要
- ・学校に通えない大勢の子供達。障害に対する間違った認識、偏見。
- ・病院へのアクセスが悪い（後天的な障害を少なくするために改善が必要）

生徒達が作ったクラフト



よろしかったらお買い求め下さい♪

村の巡回で出会った子供



学校以外での活動

- ・ラジオ局主催のお祭り「ENKUUKA」に出演ロッ クソーラン/世界に一つだけの花
- ・All Africa University gameオープニングセレモニーに生徒を引率
- ・日本祭りの開催
- ・プライマリー研究部（研究授業と研究討議・広域研修の実施）
- ・田中光栄氏による「ハーモニカサンタinウガンダ」の実施

ENKUUKA 日本祭りなど



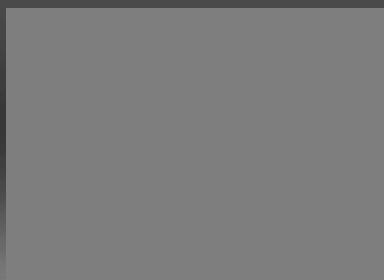
プライマリー研究部



ルワンダへの旅行



ハーモニカサンタinウガンダ♪



協力隊の活動を終えて

- ・「豊かさとは何か」
- ・「同じ時代に生まれた人間同士、経済的に豊かな国に生まれた私達と、ウガンダの彼ら」
- ・教え子とウガンダの人の心の交流
- ・今後やりたいこと
- ・★ウガンダで出会った最高の同僚の講演会を日本で行いたい
- ★ハーモニカサンタの活動を支援し、色々な国の子供達と音楽を通して楽しみたい
- ★小さな奨学金制度を長く続けていきたい





活動をつなぐ～JOCVにしかできないこと

JOCVだけではできないこと～

宇佐美陽子

(19-1、パラグアイ、小学校教諭、高崎市立並榎中学校)

群馬県から参りました、高崎市並榎中学校というところに勤務しております、宇佐美陽子と申します。19年度一次隊、派遣先は南米のパラグアイという国で、非常に小さい国です。私自身も行くまではどこにあるか実際にイメージできませんでした。小学校教諭、算数ということで行って参りました。実は自分自身は英語の教員です。ただ、群馬県は（他の都道府県もそういうところはあると思うのですが）小学校、中学校の交流人事がありまして、派遣の当時は小学校に勤務をしておりました。算数を教えたという経験も二年しか無かったのですが、「やってみたいな」とずっと思っていましたので、算数という形で派遣していただけた機会に恵まれました。

まず、パラグアイという国についてです。非常にマイナーな国なのでご存じない方が多いと思うのですが、南米の真ん中にあって、「南米の心臓」なんていうふうにパラグアイ人は言うこともあるようです。形もちょうど、たしかにそう言われると似ているかな、と思います。人口は600万人、面積は日本の約1.1倍です。主要産業は農業それから牧畜というふうになっています。日本の1.1倍とだいたい同じくらいなのですが、地図で見ていただくと真ん中のアスンシオンというところが首都になっています。それから南のほうにエンカルナシオンというそこそこ大きな街があって、そこは領事館なども昔はあったところなのですが、今は大使館の事務所みたいな感じでやっているみたいです。その間に8割方の人間が住んでいて、上の3分の2は乾燥地域と言うのでしょうか、夏は乾燥して水がない、冬になると乾燥が更にひどくなつて山火事がひどいというそういう土地で、ほとんど人がいなかつたりします。農業牧畜は主にそちらでやられているということなのですが、テレビの映像で見ると、骨ばかりになった牛などが出て来たりして、やはり決して豊かな国とは言えないと思うのですが、主要産業はその二つです。農業で比較的成功しているものとしては、日系社会のある国なので、もう70年くらいになるということなのですが、入植した日系人が始めた大豆栽培というのが軌道に乗つて、そこでかなり大規模な大豆栽培が行われています。日系社会があるので援助額も中南米ではトップになっていると言つていいです。今、パラグアイ全土に7000人ほど日系人が暮らしていると云つて、JICAのほうからも道路を敷設したり、農業開発センターを建設したりと、プロジェクトが進んでいるのですが、今までの累計支援額は1300億円を超えてます。このことも私は行くまで全く意識もしなかつたことなので、「こういうふうにお金って使われているのだな」とわかつた

のも、いい経験だったと思います。

ボランティアの内訳ということで書いたのですが、パラグアイで教員がどんな活動をしていたかということで、赴任した当時にどんな人たちがいたかというのをちょっと書いて見ました。まずは私たちのような幼稚園・小学校教諭です。それから野菜などの農業隊員、看護士等医療隊員、それから調理、被服など家政隊員、青少年活動といい施設のようなところで子供たちを対象に活動をしている隊員も何人かいました。それから後半少なくなつたのですが、獣医さんもありといました。電気工事ではシニアボランティアの方がいらっしゃり、大学などで教えていました。印象に残って多かったのはやはり上の4つぐらいまです。とくに教育、農業、医療の関係だと、JICAのほうからプロジェクトが始まっているというのがありましたので、ボランティアもかなり大量に投入されていたのかなと思います。

こういう国に行った訳なのですが、自分が応募したときに書かれていた要請の内容というのをそこに挙げて見ました。まず一つ目は、チームティーチングの形です。現地の教員と一緒に教室に入って、具体教材を利用するなどして授業実践を行い、板書中心の授業を改善する。黒板に書いたモノを写すだけの授業をしているので、具体教材を使って授業をして下さいと言うことです。二点目としては、実際の指導だけではなくて、同僚教員を始めとして、現地教員を対象に教材、教授法を伝達する講習等を実地してほしいということです。この二点が主に挙がっていました。私の要請の形というのは、一校を拠点として配置されていて、特に巡回はありません。自分で希望すれば回ることもできるのですが、まずはどこそこに配属になる、学校にいるという形の要請でした。

この内容を受けて赴任したわけなのですが、最初の赴任国のパラグアイで語学研修があり、実際に学校に行ったのは8月上旬くらいだったのです。パラグアイは子供たちが学校に行くのが11月末までという国だったので、その8~11月くらいの時期で把握した実態ということで、そこにいくつか挙げさせて貰いました。

板書内容を書き写すだけの授業が多い。聞いては居ましたが、本当にその通りでした。先生が書き取ったものを子供たちがひたすら写す。とにかく手の体操みたいな授業が多くかったです。

二番目、図形領域ではほぼ公式を丸暗記です。図形領域では、4年生の後半にまず図形の周囲の長さというところから始まります。円周ではないのですが、「正方形の周囲の長さはいくつになる」とか、「三角形は?」「五角形は?」とか基本を教えればそのようなことは誰でもわかることで、公式にする必要はありません。それを一々「一边掛ける5は五角形」とか、「一边掛ける6だと六角形」とか、そういうふうに公式にして教えているのです。そのため、それを覚えることにいっぱいいっぱいです。5年生、6年生になると、面積、体積が入ってきます。ここでも非常に高度な図形を扱っています。6角錐とか、5角柱とかです。円錐の体積も出せます。けれども、(私ははつきり自分でも勉強していないし、2年しか算数を教えてないのですが) 円錐の側面積というのは、私たちにとって基本的に扇形の面積で

す。パラグアイに行ったら、「円錐の側面積の求め方」という公式があります。その公式は円錐の側面積なので、当然なのですが底面の半径なども関わって来ます。扇形ではないからです。じゃあ扇形はどうするかというと、「そんなのは教えない」と言われました。とにかく公式が沢山あって、それを 2 年間の間にぼんぼん入れていく訳なので、全く子供たちはわかっていないません。図形も具体的にどんな図形かというのがわからっていました。これは非常に衝撃的でした。

三つ目です。1 か 8 かのクイズのような授業です。先生が黒板に問題を書きました。「さあ、こういう場合はどうしますか?」というと、生徒は皆「たしざん!」と答えます。「本当に~?」というと、「ひきざん!」「引き算だよねー」と言います。そういう授業を先生がしています。1 年生、2 年生だと足し算か引き算かしか答えがないわけですから、二択です。3 年生からかけ算が入り 3 択になり 4 択になり、そういう状況で 6 年生まで続いていきます。中学もたぶん同じだと思います。その諸悪の根元になっているかと思うのですが、教科書がありません。私は実は「教科書ってそんなに重要かな?」と思っていたのですが、やっぱり行ってみて「凄く大事だな」と思いました。「私なんかでも日本で教員ができるのは指導書があって教科書があるからなのだな」とつくづくを感じたのですが、教科書がありません。この教科書がないというのがどう関係するのかというと、パラグアイの場合、先生になるのには高校を卒業したあと二年制の教員専門校を出ます。そうすると先生になれますかが、当然知識は十分とは言えません。先生方に訊いてみると、養成校では課題もあり、立体図形を作る課題も出るらしいのですが、「そういうのを友達から請け負ってお小遣いを稼いでいた」と言う人もいたりするので、やはりそういう状況で適当に教員になってしまうし、教科書がないのでどのように指導をしたらいいのかわからない。市販されている教科書というのは、実はあってですね、ただこれは日本で言ういわゆる参考書のような形で売られています。そのため、裕福な生徒の場合は先生が使っているのと同じ教科書を本屋さんで買って使える。しかし、本は割と高いです。日本円にして千円くらいの金額なのですが、向こうの普段の生活で考えると、教科書にそれだけだすのはやっぱり大変なのかなという金額なので、持っている子は余りいませんでした。この教科書にも問題があり、解答・説明が一切付いていません。だから先生も問題を出してはいますが、理屈がわからっていない場合というのが非常に多かったです。その結果どうなるかというと、わかる問題は教えるけれど、わからない問題や苦手な問題は当然のこととしてスキップする訳です。そういうことを繰り返して行くので、やはり系統立てた指導というのが積み重なりません。5 年生のなかには指導要領のようなものが一応あって「最小公倍数、最大公約数を教えなさい」となっています。そのため、5 年生の先生は分数の計算の指導に当然それを使っている訳です。話はそれますが、「私は去年も 4 年だったから、今年も 4 年がいいわ」という風に学年固定みたいな感じになっています。教科書は自分で持っているものしかないのと、「3 年と言われても、3 年の教科書は持っていないから嫌です」とか、そういう先生方がやっぱり多いのだと思います。私の行った学校では 5 年生の先生が非常に指導力のある先

生で、最小公倍数、最大公約数などきちんと教えてているのですが、6年生の先生はそこまで力がありません。分数のときにどういう指導をするかといいますと、「分母同士を掛けなさい」という指導をする訳です。生徒はそれがどういうことか理屈を理解していないため「え、でも最大公約数は?」「そんなのは面倒くさいから分母同士を掛けなさい」、「分母、分子を斜めがけすればそれでいいんです」と言って、約分も適当な指導しかしていなかったため、恐らく先生もかけ算、九九が怪しかったりする人も中には居ますので、そうすると当然約分し損なっても×にします。「あ、これ全然答えが違うわ」というようになります。このように先生もとにかく知識が不足していますし、生徒も教わっていることが去年と同じだと理解しないまま4年生、5年生、6年生と学年が上がっていくのかを感じました。

このようなことを見た結果として、重点的に活動を進めていこうと思ったのが、先ず一点目が授業に100ます計算を取り入れてかけ算、九九の定着を図ることです。やはりかけ算は基本だと思います。最初に100ます計算をやらせてみたとき、できませんでした。3年生でほぼ1年かけてかけ算九九をやるのですが、ほとんど覚えられていない状態でした。これではこの先の5年、6年の授業はとてもできないだろうということで、高学年(3年生、~6年生)で100ます計算をとにかく毎回やるようにしました。日本では考えらませんが、100ます計算大会を行い、全生徒参加の形で、「1、2、3、はい!」で始めて、できたら「できました」「できました」という形式です。これは案外面白いと言うことで、生徒は好きでした。升目もありいいノートは無いので書かせるのですが(升目描かせるのもすごく面倒くさいのですが)、「はい、一つ目からいくつ目まで線引いて」と言って、「次の時間にはできるだろう」と思っていると、次の時間まるっきり忘れているのです。「一つ目からいくつ目まで次の線を引くんだよー、次はこうだよー」と毎回説明しなければいけません。自分たちでできるようになるには3ヶ月ぐらいかかりました。

二点目は、図形の領域あまりにも記憶記憶記憶・・・ということで、どんな形かわかつていないとことがありました。要請にも具体教材を是非たくさん利用して欲しいと言うことだったので、立体図形がいいかなと思い、立体図形を利用して理解を深めるとともに考える力を育てるようにしました。「これがこうだから」というように自分で説明できるようになって欲しいという目標を立てました。これは先生方にも非常に好評で、「どうやって作るの?」と興味を持って見てくれる先生が多かったです。

これは非常に簡単な問題なのですが、赴任した当初、図形の学習をしている5~6年生の児童が解けなかつた問題です。なぜ解けないかというと、右のXのところを訊くのですが、「ここからここまで10センチね。ここからここが3センチね。じゃあここからここは?」と聞くと、「5センチ」と言います。「なんで?」と訊いたら「半分だから」だと。スペイン語で半分はミタと言うのですが、日本だと半分は本当に半分で、等分の考え方だと思うのですが、そういう等分か、等分でないかというのが、たぶん概念的に余りないのでと思ひます。とにかくこう、ぶちっと分ければ半分と言うことになります。「じゃあこことここ

同じに見える？」と聞くと、「同じだ」「ほんとに見える？！」「いや、違う」と言います。こっちが「同じ」と言えば「同じだ」と皆が言うのですね。これを3回か4回繰り返すうちに、一人が「ん？10でここからここが3なら4、5、6、7、8、9センチ」というのが出てきたということがあって、そういうびっくり仰天の世界なのです。

続けていくうちに、こういうことがわかるようになります。帰ってくるころには感動したのですが、きちんと理屈を説明して、「ここからここ2センチで、ここからここ5センチだから引くと何センチ？」ということができるようになつたりしました。6年生になると立体図形の表面積をやるのですが、5年生はまだ長方形とか正方形とか平面図形の面積です。その子たちに箱を持って行って、「この表面が全部金できているとしたら、いったい何平方センチメートル金がある？」という話をし、「それでいい？」と言つたら、やはりクラスの中の何人かが、「いや違う」と言う。「なんで違うの？だってもうここ出たじやん」と言つたら、「裏もあるから」と。「そうか、どうする？足せばいいかな」と言つたら、「ふたつあるのだからかけ算にすればいい」、「かける2、これでいいね」というと、「そうだ」と半分くらいは言います。でも中には「違う」という子もいて、「横がある」「横もそういえばあるよね」なんて言います。そして、ついに回答できるようになったということがあったので、「やっぱり考える力というのはこうやってついて行くんだなあ」と非常に自分で手応えを感じました。最後はそういうこともできた2年弱でした。

このようになつてしまう原因としては、教材が良くないこともあります。これが何かと言うと、中学3年生の教科書からコピーをしてきたのですが、「これを切り取って組み立てると立方体ができる」と書いてあります。一目見て右にどう見ても長方形があり、左の3つを組み合わせても正方形はできないだろうとわかると思うのです。上のダイヤモンドみたいなのは、くっつけたら上に穴が開くのではと一目見てわかるのですが、こういうのが平気に教科書に載っています。だれも切り取って組み立てようとしないのが幸いです。組み立てたら、「駄目じやん」と気が付きそうなものですが、誰も気が付きませんでした。それで、これは教科書です。もう十何年前になりますが、中学校には一応政府で作った教科書がありまして、毎年年度始めになると、理科が3冊、数学が8冊、健康の授業が4冊、みたいな感じで適当に送られてきて、それを職員室にしまっておいて、生徒が授業のたびに取りに来る形にしています。パラグアイでは小中が一緒になっています。同じ校舎内で、同じ授業のコマで、幼稚園の最年長さんから中学3年生まで一緒に授業をしていると言うことなのでこのようなことを見る機会もあったのですが、このような教科書が政府の名前で出されています。そしてこのような課題も新聞にのっています。私は一瞬自分が間違っているのかと思って繰り返し数えたのですが、見て頂くと、何が違うかわかると思います。4分の2、4分の3、4分の4、1です。4分の4は約分すると1分の1だから、というのを私は5分くらい真剣に考えました。毎週火曜日の新聞にこういう学校版というのがついてきて、これを元に授業をする先生もいます。しかし、やはり回答などが一切載っていません。先生が「これ面白そうじゃない」と思ったのを適当にやっているという状

態です。これは全国版です。日本でいえば朝日新聞、読売新聞に当たる新聞がこんな教材を出して毎週配っている訳です。おかしいですよね。こういう状況の国なので、しょうがないだろうと思いました。

授業も積極的にやっていたのですが、後半になって積極的に行つたのが教職員対象の講習会です。要請の2番目にもありましたので行いました。考え方や指導方法、「分数というのはこういう考え方なんだよ」「この公式が何からできているか」ということを教えた他、人気が非常にあった立体図形の作り方や組み合わせも教えました。支援経費を使わせてもらえたので、至れり尽くせりで、画用紙なども用意して、作らせて、「持つて帰れば使うだろう」と思ったのです。「家で作つて下さい」だとなかなかやってくれないでしょうが、「これ使えるよ」と作らせて持つて帰るといいのではと思ったので、そういう講習をよくやりました。なかなか自分で公式を出せると言う先生は少ないのですが、一生懸命作っていました。飾りとか好きなようで、割と好評でした。

これは先程の写真から何人か出ているのですが、近隣のバスで30分から1時間くらいの範囲に、4人の小学校現職算数教員が派遣されたという凄く恵まれた状況だったのです。プロジェクトがあったわけじゃないのですが、たまたま一緒だったのです。それなので、皆気軽に感じで「じゃあ来週はどこどこへ行こう」という感じだったのですが、やってみて効果的だったかなと思ったのが、「私が分数をやるから、××は立体図形をやって、○○ちゃんは数の繰り上がりの計算ね」というふうに分担を決めることです。学校の活動プラスということになるので、付加的な負担が比較的少なくて済みます。更にそこで得たものを、自分が学校を持って帰るということができたのが良かったです。また、効果的な教材や指導内容を吟味することができました。何が一番必要か、何が一番先生たちは使えるか、ということを4人で相談して決めて、それをあちこちに広げていく、ということができました。効率的で良かったと思います。こういう形で、自分たち4人の学校はもちろんのですが、「体育で行つているけれど授業数も少ないから来年算数もやってみたい」と言う派遣教員もいたので、そういう子の所へ行き、先生たちもふくめて授業参観をして貰ったり、それからほかの職種の隊員の任地を訪問して、先生たちを講習会に招いたりということもしました。ちょうど私たちが赴任をしている最中に、パラグアイでは「ボランティア派遣30周年」というのがありました。隊員の教師部会というのがあり、20数名の割と大きな部会だったのですが、そこで一日授業参観をやりました。30周年の宣伝のような感じで、そのときの話が先ほどでたらめな教材を載せている新聞などにかなり大きく取り上げられました。そういうこともあります、医療隊員のところに、「これはおまえのコンパニエロ（コンパニエロは同僚のような意味です）か？」というような問合せが来て、「こういうのを是非うちでもやって欲しいって言われたんだけど、来てもらえない？」というようなことがあります、割とあちこち呼んで貰いました。なかなか有意義な活動になったかと思います。

その中で一番大きかったのが、地域の教育監督局と連携して行った講習会です。これは各校からひとりずつ代表者を呼ぶという形で行つたのですが、コンパスの使い方を知らな

い先生が居たりしました。隊員支援経費で会場費や必要な画用紙、コンパスなどを買わせてもらつたのですが、本当に「税金使わせてもらつてなんだ！」というようなことがありました。修了証書の印刷代です。修了証書を貰うのがパラグアイでは非常に大事なことだそうです。また、おやつの費用まで計上しなければいけません。そういう「ええーっ！」ということがたくさんありましたが、一方では、「郷に入つては郷に従え」というようにも思ったことがありました。いろいろ驚くことが多かったです。この講習会は面白かったです。

各地域で連携校システムみたいなものがあり、地域で5校、6校が一つのグループになっています。各校から代表者を一人ずつ呼ぶと言う形だったので、それぞれの代表の先生に伝達講習会を行つてもらいました。何ヵ所か見ることができたのですが、私たちが思つてはいた以上に良かったです。ちゃんとわかつてくれた、理解してくれた先生も多く、当然ですが現地の人なので、言葉の問題がありません。その分、自分たちが行つていた講習会以上に、「これはいいんじゃないかな」という伝達講習会をしてくれた会場もありました。そういう先生たちが上に立つて講習会をして国全体を引っ張つて行く、というのが、本来目指す協力隊活動じやないかな、と強く感じました。パラグアイだけなのかもしれません、実力があつても上がつていく機会が少なく、コネクションがないと上には行けません。逆に、コネクションがあると、教育監督局などの先生が「え、こんなこともわからないの？」という人だつたりしました。

このようにしていろいろ活動ができたと思うのですが、ほかのボランティアの活動と組み合つさせて効率的に分担できたことが非常に良かったと思います。このように共に働くというのがボランティアの間で実施できるといつのはと思つました。協力隊員のいい所というのは、現地の生活に入り込んでいる分、人材発掘ができるという点だと思いました。毎日一緒に働いている先生、それから講習会で出会う先生で「この人、力あるな」ということを見抜くのは、私たちだと思います。その反面、そういう人たちを上へ引き上げることができなかつた、と強く感じています。そのため、私はタイトルにも「活動をつなぐ」と書いたのですが、協力隊だけではなくて、シニアボランティア、専門家の方が入つているところもあると思います。そういう人と効果的につながつていくことで、「この人良いですからぜひ次の研修に呼んでください」「このひとを指導者にしてあげてください」などいうことができるのではと思つました。JICA と言うとお金と言われることも多いと聞きましたが、そうではなく人が行つているその価値を認めてもらい、協力隊員の価値を高めるというのが本来の目的かと思います。「協力隊員に来て貰つてこういうことを教えて貰いたい」と向こうから言って欲しいと思います。そういう活動ができるのがいいと思いましたので、是非いろいろ繋がつて、「協力隊員がいるとお金が落ちてくる」ということではなく、人として行くことの価値が上がつていくといいなと思います。そして、引き上げた人たちが、その国の力をのばしていくのが本当の国益になるのではと強く感じました。

最後の写真です。私は赴任当時小学校にいました。私は2年間だけこの小学校にいて、

その後、また中学校に戻りました。実際にはその小学校には勤務した経験はありません。そここの子供たちから絵やお習字などを送ってもらい、展示会のようなことをしたり、また、私がお便りを送ったりしていたのですが、そういう交流は双方にとって有意義だと思いますので、先生方も是非やって欲しいと思います。

帰国してからは、実際には余り活動ができていなく申し訳ないのですが、経験談を話すようなことは自分の学校や知り合いの先生の学校で何回かしています。しかし、一番還元しやすい場所は、日々の授業の中でさりげなくこんな国があるよ、こういうのがあるよ、と話をするということが一番大事かと思います。私自身が小学校、中学校のときに図形の求め方を知らない国があるというのを知りませんでしたし、おやつを要求する先生がいるのも知りませんでした。そのような話をすることによって、「そんな国があるんだ」「そんなことがあるんだ」と興味を持った子供たちが、本当に必要とされる医療や農業などについて、「僕はこういう仕事がしてみたい」というように育っていってくれる、これからはそういうお手伝いをしていくのかな、と考えています。

話が長くなりましたが、どうもありがとうございました。



パラグアイとは

- ・人口
… 600万人
- ・面積
… 日本の1.1倍
- ・主要産業
… 農業、牧畜
- ・その他
… 日系社会
… 援助額中南米トップ



ボランティアの内訳

職種例

- ・幼稚園・小学校教諭
- ・野菜等栽培
- ・看護師等医療
- ・家政
- ・青少年活動
- ・獣医
- ・電気工事



要請内容

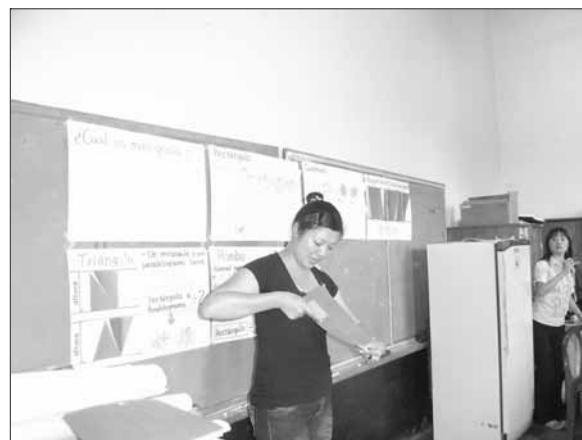
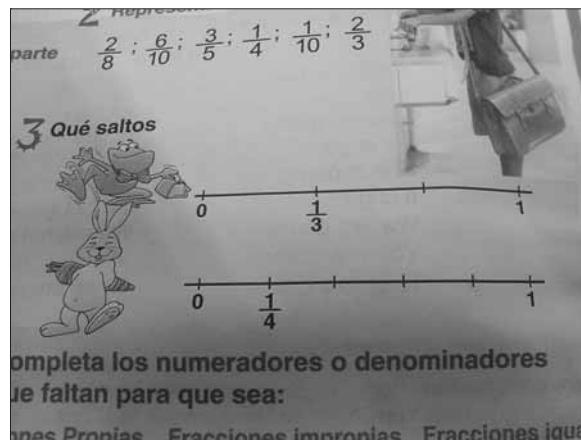
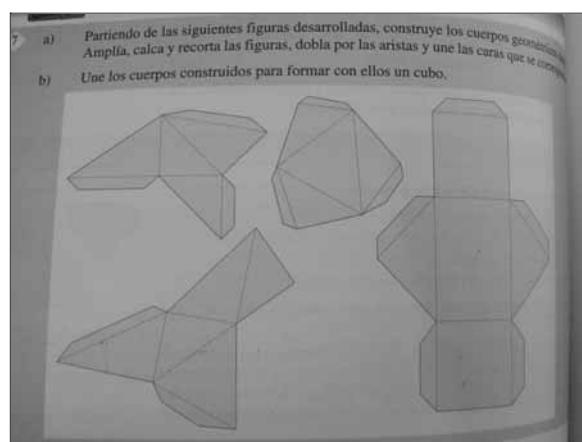
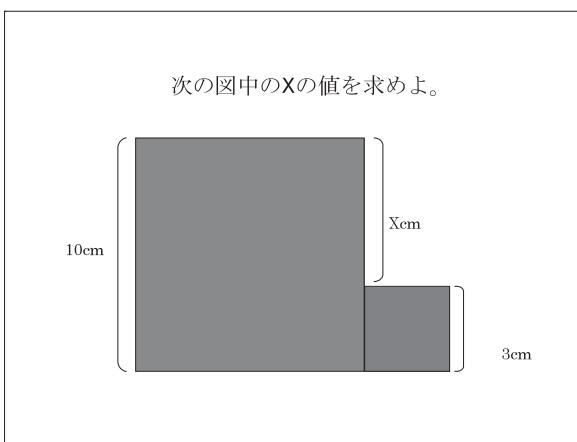


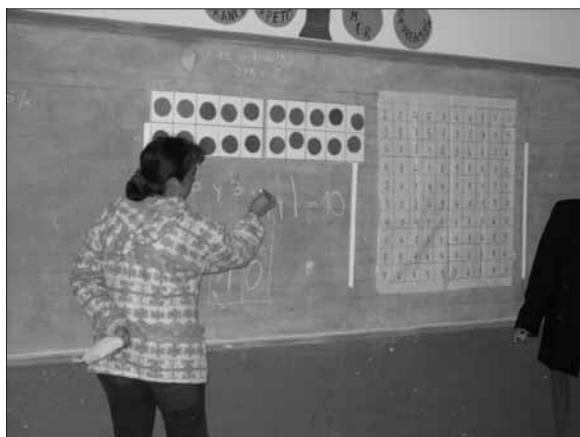
- ・板書中心を嫌がるだけの授業も多い
- ・因数分解の計算 公式を丸暗記。
- ・「かの子のやうの授業」
- ・教科書がない
- ・教師の知識不足

2. 活動の重点

- ・授業に100ます計算を取り入れて掛け算九九の定着を図る。
- ・図形領域で立体図形を利用して理解を深めるとともに、考える力を育てる。







活動報告 in Belize

安藤千華

(19・1、ベリーズ、PC インストラクター、兵庫県立須磨友が丘高等学校)

こんにちは、中米のベリーズで PC インストラクターとして小学校で活動をしていました、安藤千華と申します。本日はよろしくお願ひします。

ベリーズと聞いて「どこだろう、初めて聞くな」という方が多いと思いますが、私も要請書を見るまで知りませんでした。こちらがアメリカで、下がメキシコ、その下にある小さな国です。時差は 15 時間ありますので、日本の朝が向こうの夜中、というような感じです。四国ぐらいの大きさで、とても小さな国でこちらがカリブ海です。中米にありますが、カリブ・カルチャーの影響を強く受けている国です。人口は 30 万人と本当に小さな国にあるものといえば、海とジャングル、大自然です。気候は亜熱帯気候で一年中暖かいです。年間を通して、突然の大雨（いわゆるスコール）がありまして、突然や止みます。こんなスコールが朝からあると、学校は遅れてスタートしたり、あまりにもひどいスコールが続くと、学校がお休みになったりすることもありました。

ベリーズはもともとイギリスの植民地で、1981 年 9 月 21 日に独立した若い国です。今でも 9 月 21 日は独立記念日として盛大にお祝いをしています。みんなベリーズのことが大好きで誇りに思っていて、国旗を家の前に飾ったり、車につけたりしてします。通貨は米ドルの 1/2 の価値のベリーズ・ドルを使っていて、アメリカ・ドルをそのまま使うこともできます。アメリカとは繋がりも強く、影響も大きな国です。民族はいろいろな民族が住んでいる他民族国家です。しかし、いろいろな人たちがいてもそれぞれ認めあって、ベリーズ人（ベリージアン）として仲良く暮らしています。

これがガリフナ、古くドイツから移住してきたメノナイトで、こちらがメソチーソ、これがクレオール、これがマヤの人たちで、今でも民族衣装を着て暮らしている人が多いです。このように肌の色も様々で、いろいろな人が住んでいます。公用語は英語ですが、それぞれ自分の民族の言葉を家で喋り、学校や公の場所では英語を喋っていると言うことが多いです。そのため、二つ以上の言葉を話せる人たちがほとんどです。宗教はカソリックとプロテstantが大部分を占め、キリスト教徒が多いです。

私の任地は通称 PC、プンタゴルダという街です。首都から約 200 キロ南下して、バスで 6 時間くらいかかる海辺の街です。これが街の入り口にある看板で、これが街のシンボルである時計台です。これは海辺での様子で、サドルに子供を乗せてもう一人を抱っこして、自転車をこいでいる姿や、海辺で泳いだり釣りをしたりしている姿をよく目にしました。こんなふうに外でお喋りをしていたり、いろんな動物が放し飼いになっていたり、のんびりとした居心地のいい田舎町でした。ちょっと角を曲がるだけでもいろいろ人に「ちか、

元気？どう？」などと声を掛けられて、みんなに見守られていて居心地が良かったです。子供たちはとても元気で、裸足で走り回り、木登り大好きで、マンゴーの季節になるとマンゴーの木に登って取ってかじっている姿というのもよく目にしました。これは土曜日の朝、マーケットがあって一番活気づく日です。

活動内容の説明の前に、少しへリーズの教育制度について説明をします。プレスクールというのが幼稚園で 2 年間、その後プライマリースクール（小学校）が義務教育として 8 年間あります。4 歳半で入学して、12 歳から 14 歳で Std (スタンダード) 6 になって卒業して行きます。中には留年する生徒もいますので何年も同じ学年を繰り返すこともありますが、15 歳までに卒業できなかったら、追い出されてしまいます。Std6 のときに PSE テスト（卒業テスト）に合格した人だけが、セカンダリースクール（高校）や職業訓練校などに進学できます。小学校の種類で日本と違うのは、この 2 つで、教会が作った学校です。学校の運営は教会がしていて、先生の給料を政府が払うというタイプの学校ですので、学校の運営費は学校独自で捻出していかないといけません。

私もベリーズで一番多いタイプの（RC=ローマン・カソリック）教会が作った学校に派遣されました。人口 5000 人の小さな街の一一番大きな学校でした。幼稚部 2 年から小学部 6 年の 8 学年、約 850 名の生徒が在籍していました。1 学年 3 クラスから 4 クラスで、1 クラスあたりの生徒数が 30 名から 45 名でした。教会が学校の横にあります。毎週月曜日の朝は教会で集会があって、国家を歌ったりお祈りをしたり、校長先生や牧師さんの話があったりあります。

こちらが教室での授業の様子です。教室での授業中心で、先生が黒板に書くことをひたすら写すことが多いです。カリキュラムの中には音楽とか美術がありますが、ほとんど実施されていません。これが学校のメインの建物で、行事があり生徒がたくさん集まっている様子です。これが裏庭と海に面した校舎です。道を挟んでまた海辺に校舎があります。私が活動していたのはメインの建物の下にあるコンピュータ教室です。

これがインファント（低学年）の生徒たちです。これが Std3, 4 とで、この日はカルチャーデイという日だったので、それぞれの民族を意識した格好で来ています。これが Std5, 6（高学年）の生徒たちです。

要請内容はこのような内容でした。盛りだくさんで最初は何をすればいいかと少し戸惑いました。二つ目に「IT 授業の指導内容およびカリキュラムの作成」とありますが、ベリーズでは小学校ではコンピュータの授業は指導要領には組み込まれていません。しかし、小学生から教えた方がいいと言うことで、独自で実施しようとしている状況です。なぜ、小学校からコンピュータを教えなくてはいけないかというと、高校生になるとコンピュータの授業があります。ただ、家にコンピュータのない生徒も多く、急にコンピュータを習ってもついて行けない、そこで単位を落としてしまう生徒が沢山いるからです。また、進学をしない生徒はコンピュータに触れるチャンスがありません。私がした活動は、まずコンピュータの整備をして、授業をして、カリキュラム、教材の作成などをしました。活動

目標は「学校全体のパソコンスキルの向上」として進めていきました。そのためにはまずコンピュータの整備が必要でした。派遣された当初動いていたコンピュータは 6 台だけでした。最初は 20 台くらいあるという話だったのですが、ほとんど壊れていきました。ベリーズは熱帯の気候で、湿気が多く、突然の大雨や落雷で停電が起きます。埃や虫も多くて、コンピュータには最悪の環境です。すぐにそういうことが原因で壊れてしまいます。学校にはコンピュータを新しく買うお金がないので、修理するか寄付に頼るしかないという状況です。古いものが寄付されて着いたときにすでに壊れているものも多かったので、コンピュータを直す人が居ないと使えませんでした。整備を進め、9 ヶ月後くらいには全てのコンピュータをインターネットに繋ぐことができ、帰るころには 18 台のコンピュータが稼働しているという状況まで持っていました。最初の数ヶ月は、コンピュータの修理に追われていました。

具体的に授業の様子を見ていきます。最初、一クラス全員（約 40 人）の生徒を対象とした授業を進めていきました。9 月から授業が始まるのですが、時間割にコンピュータの授業を入れていない先生や、予定変更が多くて、授業計画を立てたのに実施できないことが多く、苦労しました。また、教室での授業がほとんどの子供たちなので、いつもと違った環境で授業をするのに興奮してしまって、静かにできなく、指示が通らなくて困ることもありました。当初は動いていたコンピュータも少ないので、4 人で 1 台のコンピュータをシェアするという状況でした。コンピュータに触ることのできない生徒がいたり、取り合いになったりしました。そのため、最初にネームカードを置いて座席を指定し、個別に実技テストをしてちゃんとできているか確認をし、放課後にコンピュータ教室を開放してできるだけ多くの子供たちがコンピュータに触れられるよう心がけました。これが授業の説明のために作りはじめたポスターです。最初はプロジェクターとか無かったので、黒板やポスターで授業を進めていました。このポスターを掲示することによって、他の先生に何をしているのかをわかって貰うのにすごくいいアピールになりました。それまではコンピュータの中の整備に力を入れていたので、私が何をしているか、どう変わったかというのを他の人に見て貰えなかつたので、こういうふうにコンピュータ教室に張り出すことによって、私が何をしようとしているのか、何をしているのかを現地の先生にアピールできました。ふらっと立ち寄り「ここはこういうことだね」と話しかけてくれたりとか、そこから立ち話が発展していくんな話が聞けたりとか、予定変更などもわかるようになってきたので、活動がスムーズになって行きました。これはノートを書いている様子です。コンピュータの授業はカリキュラムにありませんので、教科書もありません。そのため私が作ったポスターだとか、黒板に書いたこと、それがすべて情報になります。ほかの教科に関しても、教科書は学校のモノで必要なことはすべてノートに写しています。これはテストです。生徒の理解度を測るため、また、「コンピュータの授業は遊びじゃないよ。」ということを意識付けするために、簡単な筆記テストもしました。これは放課後の様子です。名前を書いて、荷物を置いて、責任を持ってコンピュータを使用する、としました。兄弟で登

下校をしていることが多いのでその子たちが待っているあいだ退屈しないように、待っている場所というのも作ってあげました。先生方も放課後コンピュータを使っています。

1年目の3学期、この頃からインターネットが使えるようになりましたので、卒業間近のStd6の生徒を対象に、コンピュータの基礎知識からインターネットの使い方を教えました。2年目は、今までとは違って少人数制で授業をすることになりました。1クラスを半分に分けて、その半分の生徒を対象に私が授業を行っていくという形式を取りました。授業は充実してきたのですが、このとき課題になってきたのが、担任の先生は私が授業をしている間教室で授業をしています。そのため、私が何をしている見ることができなくなり、いかに担任の先生を巻き込むかということが課題になってきました。レッスンプランを配って、どんなことをしているのか知つてもらうようにしました。職員会議などですこし時間を貰ってコンピュータウイルスの話をし、「困ったことがあつたら気軽に来てください」というアピールをして、できるだけ担任の先生にコンピュータのことを知つて貰うように心がけました。

こちらは教室での授業の様子です。最初と違い少人数制で実施できたので、集中して話を聞くことができています。これは入る前に、手がきれいか、口の中にお菓子が入っていないかチェックをしているのですが、子供たちは休み時間にお菓子とかを食べるので、手がべとべとの状態で入ってきたりします。その手でキーボードに触ると甘いものがついて蟻が来てしまいしますので、飲食厳禁というのを徹底しました。

次は、授業の工夫です。「プリティ」という言葉を子供たちはよく使います。「素敵ね」「いいね」という意味の時によく使います。おもしろい授業の内容だったら「It's pretty!」というように言ってくれるのですが、そんな授業をすることだと思いました。例えば、これは菱形を作つてただ並べていくだけなのですが、簡単なことを繰りかえして、色やレイアウトを変えてなど応用できます。生徒たちにとっては、すごくやりたくて楽しいことなので、わかつた子にわからない子が「どうやってやるの?」と聞いていき、どんどんお互いに教えあってできるようになっていきました。他の教科との関連づけとして「エンカルタ」という辞書ソフトがコンピュータに入っていましたので、それで今ほかの教科で勉強していることを調べてみようとした。そうすると、担任の先生もそういうのがあるのだと知つて、コンピュータの授業以外で生徒を連れてきて、コンピュータを使って授業をする先生も出てきました。

2年目の2学期が最後の学期になると、カリキュラムがでけて授業は充実していましたが、「私が帰国したら、そのあとどうなるのだろう」と不安に思つて来ました。「私の帰国後どうするのか?」と話をしたら、「他のボランティアが来るさ」と言つされました。とてもボランティア慣れしていて、「それでは駄目だ」、やっぱり「依存して欲しくないな」という思いがあつたので、校長先生とかほかの先生方と話し合つた結果、担任の先生がなんとしても授業をするということになりました。それから私がサポートに移り、最後の学期は担任の先生に授業をして貰いました。これまでレッスンプランを配つたりどんなことを

しているのかで個別に話をしていたりしたので、スムーズに行きました。今まで「コンピュータの授業はしたくない。苦手だ」と逃げていた先生も、頑張って放課後に練習に来てくれました。プロジェクターを教室に持つて行って授業をする先生が出てきたり、インターネットが繋がっているので、そこで入手した映像を生徒たちに見せたりという先生も出てきました。私がこの1年9ヶ月でできたことと言うのは、コンピュータプログラムの基盤作りだったのではないかと思います。

その他の活動として、まずはあらゆる学校行事に参加しました。クリスマス会、スポーツデイ（体育祭）だったり、パレードに一緒に出たりです。これは卒業式です。カルチャーデイといって、それぞれの文化を紹介する日には、日本のブースも作ってもらって、日本文化の紹介をしました。実際に私たちは浴衣を着て、お箸の持ち方を説明したりとか、生徒たちと一緒に、空手のデモンストレーションをしたりもしました。いろいろな所に行って、情報交換をするように心がけました。これが大学と大学院です。こちらは職業訓練校を訪問した時の写真です。こここの生徒たちが、実習の一環として私の学校にコンピュータの修理に来てくれるということもありました。これは高校の様子です。こちらは教育省にあるコンピュータルームの様子です。近くの村の学校にもコンピュータの整備に行きました。この学校はコンピュータが20台くらいあったのですが、誰も整備しないで使えない状況でした。そのため、時間のあるときに整備の手伝いに行っていました。ちょっとしたきっかけで空手を習い始めることになったのですが、日本人として認めてくれる、私にとってすごく居心地のいい場所で、すごく心の支えになりました。そこで日本語を教えてたりとか、折り紙を教えたりとか、日本文化に触れて貰う機会というのを持たせてもらうことができました。他の隊員と協力してジャパンデイというのを数回開催して、日本文化と一緒に紹介しました。

最後に、このような活動をしていく中で気づいたベリーズのいいところ、気づいたことは、生徒たちが素直で元気、お手伝いをよくする、と言うことです。日本ではありえないトラブルが多いのですが、みんな助け合って生きているなあ、ということです。また、おおらかで明るいので、ちょっとしたミスでも責めないと言うところです。いろいろな民族がいるけれど皆仲良くてそれぞれの文化を誇りに思っている、と言うことです。これは仲良くしていた子供たちで、家の前で太鼓や亀の甲羅をたたいてガリフナという伝統的な音楽を刻んで遊んでいます。これは学校で、太鼓をたたいて音楽を刻んで凄く盛り上がっていきます。これはクリスマス会で、音楽をかけて腰を振って凄く楽しそうに踊っています。これは先生たちとの旅行で、ハリケーンがきて橋が流されてボートでわたらないといけませんでした。足がぐちよぐちよで最悪な状況だったのですが、先生たちは明るくて笑顔で元気です。

こんな生活をしていての私の中の変化というのは、一つ目、シンプルなものが楽しめるようになりました。学校のイベントとか地域のお祭りとか、一年目はつまらなく思えたモノも、二年目になるとわくわくときどきとして楽しめました。ドラムと音楽と、みんなが

集まればそれだけで楽しいなと思うようになりました。この国に来なかつたら感じなかつたと思います。また、いろいろなモノが受け入れられるようになった、少しおおらかになったと思います。「本当の幸せとは」、自分の大切な人たちに囲まれて、楽しく生活をして、モノやお金が一杯無くても幸せ、そう感じられる心の余裕かなというふうに思うことができました。

派遣中は、「クロスロード」の先生の手紙を書きました。日本の学校の生徒に向けて活動・生活の様子をブログに書きました。詳しい生活の様子はここに書いてありますので、またご覧下さい。

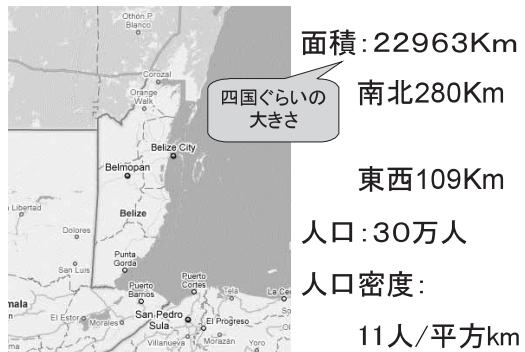
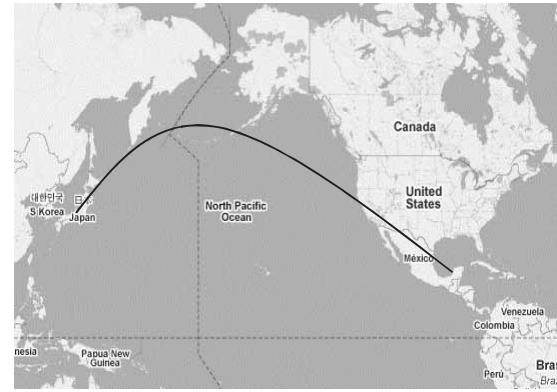
帰国後は、総合学科の高校に転勤になりました。新しい学校でなじめるか、不安でしたが、協力隊の経験があつて「なんとかなるさ」「日本語でしゃべれるし大丈夫だ」と気楽になって、すぐに新しい学校にもなじむことができました。授業の中で特別講師として話をする機会を持つことができました。また、講座を設定することができましたので協力隊の活動を通して学んだことを題材に授業をしました。今後も、教育現場を中心に、この経験を還元していきたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

活動報告 in Belize



PCインストラクター
19-1 安藤 千華



海とジャングル



気候

- ・亜熱帯気候
- ・平均気温27~28度



- ・乾季; 1月~5月
- ・雨季; 6月~10月

コールドシーズン; 11月、12月
7月~9月ハリケーンシーズン

歴史

- 1973年英領ホンジュラスからベリーズへと改名(元日)
- **1981年**英連邦加盟の立憲君主国・議院内閣制の国として**独立**(9月21日)

通貨

ベリーズドル 米ドルの1/2
2BZ = 1ドル(US)

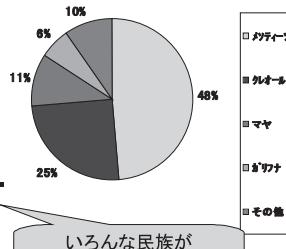


28歳の若い国

民族

- メスティーソ... 49%
- クレオール人... 25%
- マヤ族... 11%
- ガリフナ... 6%
- その他... 10%

華人・白人・メノナイト・イーストインディアン



いろんな民族がベリージアン！！



ことば

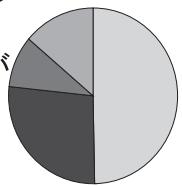
- 公用語が英語
- クレオール語
- スペイン語
- マヤ語
- ガリフナ語



* 2つ以上の言葉を話せる人が多い。

宗教

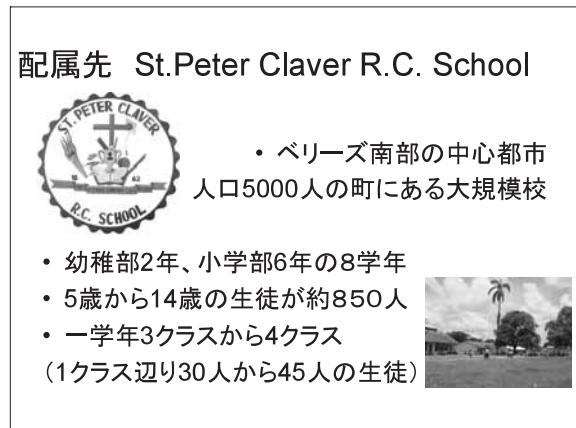
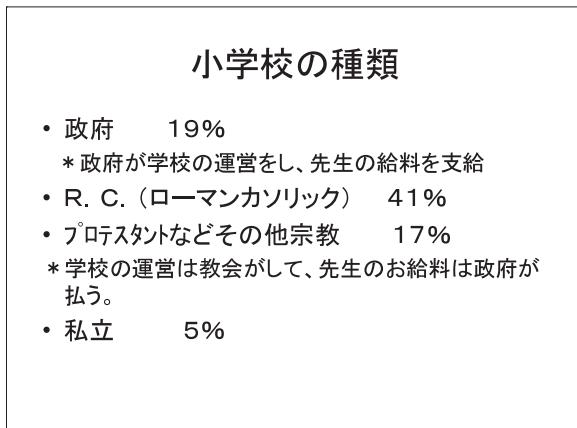
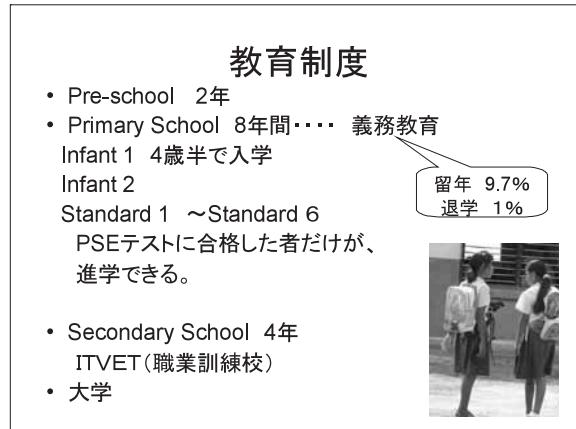
- ローマ・カトリックが50%
- プロテスタントが27%
- 無宗教が9%
- その他14%



任地: PG プンタゴルダ

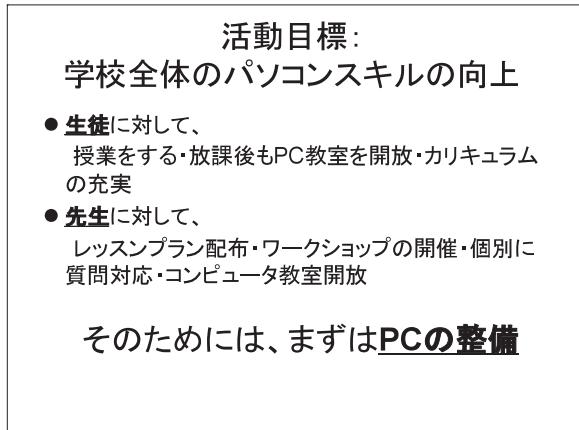
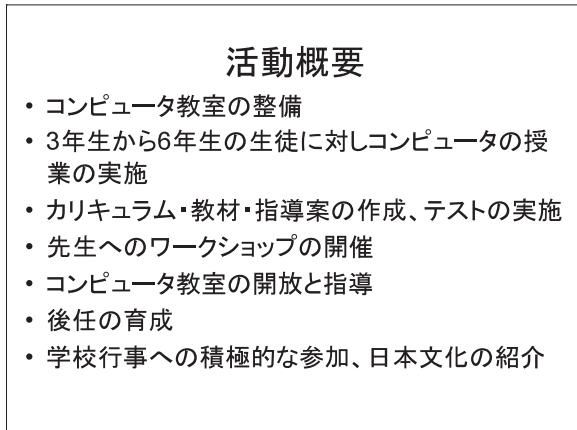
首都から200km
バスで6時間の海辺の町







- ### 要請内容
- 4年生～6年生(9歳～14歳)の各クラスの1～2コマ(1コマ45分)/週の授業を担当する。
 - IT授業のカリキュラム・指導内容の作成
 - パソコンの基礎知識
 - Word,Excel,Publisher,Internetの基礎知識
 - パソコン故障時の対応
 - 教師に対するITセミナーの実施



PC教室の整備

- 派遣された当初:14台中6台が稼動
- 6ヵ月後:19台中13台が稼動
- 9ヵ月後:21台中16台が稼動
インターネット接続完了
- 12ヵ月後:21台中18台が稼動
プロジェクト設置
- 15ヶ月後:22台中18台が稼動
- 18ヶ月後:22台中17台が稼動
- 21ヶ月後:22台中18台が稼動



授業 1年目(1・2学期)

- 07.9~08.3 3年生~5年生
40人一齊に、週一回 合計11クラス (1コマ45分)
4人で1台のコンピュータを使わないといけないことがあり、コンピュータに触れるチャンスのない子もいる。

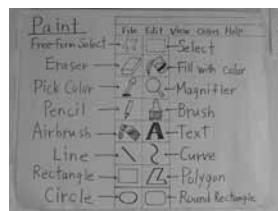
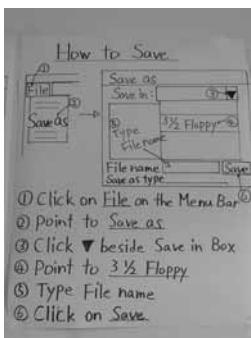
対策 → 放課後PC教室開放。

個別に実技テスト実施し補習

*一人1台あるいは2人1台でコンピュータを利用するのがベスト



ポスター



ノート



テスト



放課後の様子



授業 1年目(3学期)

インターネットが使えるようになった

- 08.4～08.6 6年生 習熟度別に集中授業
約100人の生徒を6グループに分け週3回集中授業 (1コマ30分～60分)

結果 → 生徒のコンピュータスキルは向上したが、先生が残りの生徒の面倒を見るため、授業に参加できなくなった。



授業 2年目(1学期)

プロジェクトが使えるようになった

- 08.9～08.12 4年生～5年生
1グループ約20人 週1回 合計12クラス(1コマ45分)
クラスを半分に分けて、コンピュータの授業とガーデニングを実施。
結果 → 担任の先生にはできるだけコンピュータの授業に来るようになるとレッスンプランを各授業ごとにレッスンプランを作成し配布したが、あまり、授業には来なかった。
生徒はコンピュータに触れる機会がふえ、スキルは飛躍的に向上



授業の工夫

- Pretty(こども達にとって魅力的)なことをする
・他の教科との関連付け



授業 2年目(2学期)

- 09.1～09.3 4年生～5年生
1グループ約40人、週1回 合計 6クラス (1コマ 60～90分)
各クラスの担任の先生がクラスを丸ごと教える。1、2人でコンピュータを使用し、残りの生徒は中央のテーブルで待機(課題をする)途中で交代。

結果 → 思ったよりもスムーズにいった。担任の先生は生徒をよく把握している。
ただ、全員の生徒の把握ができない。コンピュータに触れるチャンスを逃す生徒もいる。
担任の先生は、事前に配布したレッスンプランを元に授業をするが、今までコンピュータに苦手意識を持っていた先生が積極的に予習に来た。





活動成果 コンピュータプログラムの基盤作り

- ・コンピュータ教室の整備
- ・教室利用マナーの徹底
飲食禁止・コンピュータ利用者の管理・把握
- ・カリキュラム・教材の作成

生徒のコンピュータリテラシーの向上

基本操作はマスター
コンピュータが勉強に役立つ、調べ物の仕方を学んだ

先生のコンピュータリテラシーの向上

レッスンプランをもとに、コンピュータの授業を実施できるようになった。
コンピュータウイルス対策をするようになった。
コンピュータについて詳しくなった

教材など



問題点

- ・PC専用の先生を雇う余裕がない
教育委員会は先生を雇うためのお金を出さない。学校独自で金を作つてやつていかないといけない
ただ、ベリーズ国内で貧しいこの地域は、保護者からお金が集まらない
→ もう少し支援を続けて周囲の理解を得る必要がある。
 - 人材がない
→ PCの技術・知識を持った人はインターネットショップを開いて、教育現場に残らない
人材が増えれば解決・5年後生徒も有力候補に
- あと少し、支援が必要**

今後



PCを専門に担当するカウンターパートは見つからなかったので、私のしていた仕事を分散して引き継ぐことに

授業: 担任の先生 → カリキュラム充実の必要性

PC管理: 各先生、その内代表者一人

掃除: 生徒

メンテナンス・修理: 教育省IT部門

→ いずれは学校のスタッフのみで

掃除



その他の活動

- ・学校行事の参加
ハローウイン・クリスマス・カルチャーデイ
- ・学校・授業見学
PC隊員の学校・近くの高校・職業訓練校・大学
- ・周辺校のコンピュータラボのメンテナンス
- ・サマーキャンプのお手伝い
- ・空手で、日本文化紹介
- ・JOCVの日本紹介イベントのお手伝い

学校行事



学校行事



Culture Day



学校訪問



サンアントニ(出張整備)



ベリーズの中
の日本



Japan Day



JOCVの仲間と



いいところ

- ・生徒達は素直で元気
- ・お手伝いをよくする
- ・みんな助け合っている
- ・大らかで明るい
- ・色んな民族が居るが、みんな仲良く、それぞれの文化を誇りに思っている。



村の生活



海辺の生活



私の中の変化

- ・シンプルなものが楽しめるようになった。
- ・大らかになった

Simple Slow

Life in Belize

本当の幸せとは？？



派遣中、日本との交流

- ・クロスロードの生徒への手紙を執筆
- ・ベリーズでの生活・活動の様子をブログに書き報告をした。

<http://belize.natureland.tk/wordpress/>

高校のホームページからリンクを設定。



帰国後…

総合学科の高校に転勤

- ・転勤先の学校の授業(異文化理解)の中で、ベリーズでの経験を発表。
- 2月には“地理A”的授業で発表予定。
- ・産業社会と人間の分野別研究で、「食から世界を考える」という講座を設定、担当した。
- ・今後も、教育現場を中心に協力隊の経験を還元して行きたい。



豊かな南国マレーシアから

清水和夫

(19-1、マレーシア、養護、神栖市立大野原西小学校)

皆さんはじめまして。JOCV の 19 年度一次隊の清水と申します。最初に自己紹介と、派遣までの経緯を話します。私は利根川に程近い茨城県神栖市にある大野原西小学校に勤めております。地元は四国なのですが、そちらの方で若者向けの婦人服販売をしばらくやつておりました。その後、縁あって茨城県の養護学校の教員となりまして、その後特別支援教育に 10 年あまり携わってきました。高校のときからの「協力隊に行きたい」という想いが叶い、今はとても満足した気持ちです。

それでは最初にマレーシアについて説明します。この写真はマレーシアの象徴である、クアラルンプールにあるツインタワーです。12 年前に完成した当時は世界一の建造物ということでした。今はもうだいぶ下の方の順位になってしましましたが、2 本のビルが建っているものとしては現在も世界一だそうです。マレーシアの面積は日本とほぼ同じ 33 万平方キロですが、人口は日本の四分の一なので日本と比べて人口密度は低いという印象です。民族は主にマレー系、中華系、インド系からなる他民族国家というのが大きな特徴です。その中でも、多数派のマレー系民族をさまざまな面で優遇する「プミップトラ政策」という政策がとられています。

かつては天然ゴムのプランテーションが主な産業でした。現在は原油を中心として農業や工業、IT 産業などが栄えており、国の財政は比較的豊かです。1990 年から自動車の F1 マレーシアグランプリも開催されており、今年は 12 回目の GP が開催される予定です。私も去年の F1 は見に行ってしまいました。このようにマレーシアは 10 年後の 2020 年に先進国入りを目指す勢いで日々発展しています。

ここでマレーシアの学校教育の特徴について説明します。義務教育は 17 歳までの 11 年間（ちょっと日本より長いですね）であり、無償です。1 学級の人数、これは普通学級においてなのですが、上限は日本と同じく 40 人です。しかし校舎不足によって、2 部制を取っている学校が多くあります。2 部制の場合は高学年が朝 7 時から昼まで、低学年が昼から夕方 6 時まで、という仕組みになっています。もちろん子どもは入れ替わるのですが、教員も昼間で入れ替わります。休み時間は 30 分の休みが半日に一回だけあり、その時間子どもたちは食堂で各自好きなものを買って食べます。

下の写真ですが、これは食堂の一角の写真です。食堂では、魚のすり身やソーセージを油で揚げたものとか、パン、お菓子などを売っています。全体的に日本より揚げ物類が多いという印象を受けました。中には自宅から持ってきて食べるという子もいました。30 分休み以外の休み時間はありません。日本のような授業と授業の間の休み時間はないのです。

だいたい時間になると先生が来て授業が始まり、先生が「終わり」と言ったら授業は終わりで、その後に子どもたちは教室を移動するという具合です。小学校から教科担任制ですので、毎時間教員が替わります。これは特別支援学級においても同じです。特別支援学級の一学級は、6人ちょうどが定員です。特別支援学級2クラスあたりに1人介助員が配置されています。日本では人数的にも介助員はそれほど目立たない存在なのですが、マレーシアの学校では介助員はとても沢山います。教員は基本的に子どもの介助はしません。重度の子どもは少ないのでそんなないことですが、クラスの児童がお漏らしをしてしまった時は、教員が見つけると介助員を呼んできて介助員に始末をさせています。特別支援学級は一応障害種別に分かれています。しかし実際の運用では、クラスは分かれても一緒に活動することが多いです。その中でも聴覚と視覚のクラスだけは流石に分かれています、違う教室でそれぞれの授業をやっています。

教員の給料というのは、日本と同じく公務員なので、国民の平均とほぼ同じか少し高めです。しかしながら先ほども言いましたように、半日で終わるので勤務時間が短いのが日本と大きく違うところです。勤務時間は学校によって少し差はあるのですが、ほぼ5~6時間程度で短いので、特に女性に人気の職業になっています。実際に、女性の割合は全ての校種で高くなっています。日本は高校になると男性教員の割合が高いですが、マレーシアでは高等学校（中等学校）においてもやはり女性教員の割合が高いです。

それでは、私の活動全般について説明します。活動目的は、マレーシアに13州あるうちの一つ、ペラ州内の特別支援教育のレベルアップです。私の来る前にすでにCBR（地域に根ざしたリハビリテーション）これは日本で言うところの更生施設や作業所のようなもので、公的な所なのですが、このCBRの巡回指導を協力隊員が何代かにわたってやっていました。かつての日本がそうだったように、マレーシアは障害のある子どもは学校教育を受けることができませんでした。その中でもかろうじて聾教育は行われていました。教育可能と言うことで聾教育はそれなりに行っていたのですが、それに対して知的障害のある子どもは、ほとんど自宅にいるか、先ほどのCBRという施設に通っていました。しかしマレーシアでも、ここ数年流れが変わってきました。普通の小中学校の中に特別支援学級が少しづつ増えて來たのです。しかし歴史が浅いために、まだまだ教員のスキルが積み重ねられていないのが現状です。

その現状を変えていこうとすることを目指して主に3つの活動を行いました。一つ目は学校を巡回して教員にアドバイスしたり、実際に授業で一緒に教えるという活動です。二つ目はよく行く学校をモデル校として、公開授業や教育課程の改善を目指して活動しました。三つ目は、州教育局や地区事務所と協力して講習会を実施しました。

この写真は学校での様子です。校外学習は頻繁に行われていました。左上の写真は、学校から少し離れた近所のプールに校外学習で行った時です。右側はケンタッキーで誕生会をした時のものです。余談ですがマレーシアではファーストフードといえばマクドナルドも確かにありますが、なんといってもケンタッキーが圧倒的に一番人気です。店舗数も

っと多いです。下の写真は、ちょうど独立記念日の前の時期でもあったということで、国旗に色塗りをしているところです。私が最初にマレーシアでの授業を見て思ったことは、このような色塗りの授業がとても多いということです。特別支援教育の活動は色塗りの活動が中心になっている感じです。理科の授業なら動物や虫の絵を色塗りし、独立記念日は国旗に色塗りし、とにかく色塗りのオンパレードです。授業の最初に先生が色塗りの紙を子どもたちに渡して、あとは色を塗らせて放っておくという授業も多く見ました。これは他の協力隊員に聞いたところマレーシア全体の傾向のようです。確かに学校だけでなくCBRを行った時もこの色塗り活動は多くの場面で見られました。

次の写真です。マレーシアの学校教育の特徴として、こういった施設面はかなり充実しているということがあります。私はこの写真の設備を日本では見たことはありませんでした。「スヌーズレン・ルーム」という主に自閉症児が落ち着くという部屋だそうです。右上の白い管のところが暗闇で光ったり、左下のところの細く出ている白い管がキラキラしていました。この部屋には右側の写真でわかるようにウォーターベッドもあります。これはどこのスヌーズレン・ルームにも必ずあります。そこでごろごろしてリラックスするのかなと私は想像しました。しかし実際にはあまり使っているのを見たことはありません。

活動の中で感じたこと、そこからの改善に向けての活動を大きく三つに分けました。まずは、左が教師目線の教室環境です。こちらの教室は必要以上に飾り立てていることがとても多いと感じました。マレーシアの国民性として装飾することが得意というのがあり、そういう教室環境を一生懸命作るという姿勢自体はとても素晴らしいと思いました。しかしかわいく飾り立ててはいるのですが、障害のある子どもにとっては自分の視界の中に余計なものがあるとそこに目をとられて気が散ってしまうということがおこっていました。この考え方にはマレーシアの教育の中ではこれまで全くなかったものでした。そこで子どもの目線で必要なものだけを飾りたて、それ以外のものはやらない、という考えを提案しました。

二つ目は、教育技術の共有と継承が不足していることです。日本であれば研究授業などがあり、養護学校などは基本的にチームティーイングで行いますので、どうしても他の先生のやり方などは自然に目に入ります。それを見ながら自分なりにアレンジして自分で授業を作り上げていく、といったことを日本では自然に行っています。私も実際そうでした。しかし、マレーシアには研究授業もありませんので、教育技術の共有や継承が欠けているなど感じました。そこでひとつ試みとして、公開授業の提案をしました。

三つ目は、重度の子供たちでも、机上の学習中心であることです。重度の子どもも最近少しづつ学校に入り始めました。しかしその重度の子どもに対してもやはり机上の学習中心という活動が多かったので、それを「教育課程の改善」と書いてしまったのですが、日常生活やそういったものを中心とした要するに毎日ある程度同じパターンでやっていくということを提案しました。

これは教室環境の改善についてです。特別支援クラスに掲示してあった時間割、この写

真は小学校のものですが、縦軸に曜日、横軸に時間が書いてあります。こういうふうに一番左上のところにPと書いてあるのは、これが集会の時間ということを表しています。集会の時間があり、次はマレー語、生活単元、・・・と教科名が字だけで書いてあるのです。これでは字を読むことのできない子どもたちは今何を学習する時間かわからせんし、次の時間が何の教科かというのも全然わかりませんでした。先生が来て何か授業で使うものを出してはじめて、次の時間は何をやるのかがわかるといった現状でした。授業が細かく30分刻みというのもあるせいなのか、時々授業をする先生が教室に来ない時もありました。おそらく教員が忘れているだけなのだと思うのですが、そういう時も30分間子どもが、ぼーっとただ待っています。私がたまたまその教室の前を通りかかって、「今、何の時間?」「どの先生が来るの?」と訊いても、子どもたちは「知らない。」という答えです。そういったことをなくすため、字の読めない子どもたちにもわかりやすいように、「この時間はどの先生がどの授業をやる」のを各クラスに視覚的にわかりやすく掲示することを始めました。左側の写真の左端のほうに時計の絵がありますが、それが授業時間を表した絵です。その右に先生の写真、右端に教科名と、教科名だけではなかなか子供たちがイメージするのが難しいと思ったので、その教科を連想させるような絵もつけました。これによって、今は「何の時間」で「どの先生」が「何の授業」をするというのをほぼ全員の子どもがわかるようになりました。この時間割の導入は、最初先生たちに説明しただけではなかなか受け入れてもらえなかつたのですが、そのうちにだんだん先生たちとコミュニケーションが取れていくと、協力してくれる先生というのが見つかり、その先生に導入してもらいました。一回あるクラスで導入するとおもしろいもので「うちのクラスにも作ってくれ(作りたい)」という先生も他にも出てきて、この時間割があつという間にだんだんと広がっていきました。今度は右側の写真なのですが、これは鞄を置く場所をわかりやすく示したものです。それまでは鞄を置く場所が決まってなく、学校に来たら教室の端っこなどに教員の指示に従って適当に置いていたのですが、「子どもたち自身でできるように場所を決めて表示してやってはどうか」と言ったところ、その学級の先生はこういう風に「見てわかる」ように写真がいいのかなと工夫して考えて作ってくれていました。私はとても嬉しかったです。この先生は提案したことや私の言いたいことが、ちゃんとわかってくれているな、というのが凄く感じられました。

続いて、公開授業の提案です。これはモデル校と言うことで私がよく行っていた小学校で公開授業、つまり研究授業にいたようなことをやってみました。日本人もその傾向はあります、マレーシア人も他人の批判批評をするということは割と苦手です。そのためにはやる前は、研究協議をやっても意見はほとんど出てこないかなと思っていました。ところが実際にやってみると、ある程度建設的な意見も出てきました。思っていたよりも公開授業の意義はあったと思いました。実際の先生たちの意見としては「他の先生の授業を見られて凄く参考になった」や「この先生はあまり授業ができないかなと思っていたけれど、ちゃんとできているじゃないか」というようないい意見が出ていました。

続いて、教育課程の改善です。これはあるクラスにあった従来の時間割です。算数・図工・理科・体育・マレー語というように教科名がずっと並んでいます。これがだいたい日替わりで続くのですが、やはり重度の子供たちのクラスでこれをやるのはかなりきついということで、「何を授業でやつたらいいのかわからない」という先生も多かったです。そのため、私は一番重度のクラスにおいて日本でやっているように時間割を少しアレンジして、着替えを授業の中に取り入れることをしました。（前日の終わりに洗濯機に入れて干してあるのですが）干したもの取り込んで着替えて、その後は体操したり、朝の会をやつたりということです。こういうように一日をある程度同じ流れにして毎日続けてみてはどうかという提案をしました。ここでも取り入れた最初のうちは、先生たちは何をどういう風に進めていいのかわからないところもありましたので、私がつきっきりでやりました。そのうちわかってくるようになり、その後も継続されていると思います。

その他の活動です。講習会も何回か行いました。指導法の講習会などです。左側は作業学習で巾着袋を作る講習会をしました。何故このような講習内容にしたかというと、学校にミシンが結構配られてはいるのですが授業の中で使われていないという現状がありました。なぜかというと、先生たちはミシンの使い方はわかついていても、それをどういう風に授業に取り入れるかがわからないのです。そのため、私は「簡単なモノを作る」、「作ったモノがきれいとか、良くできているとか、そういうのにはあまりこだわらなくていい」ということを強調しました。現地の先生たちはどうしても「いい物、きれいな物を作りたい」という気持ちがあったのでなかなか難しかったです。現在、ペラ州内の学校ではこういった作業学習を多くの学校で取り入れ始めています。縫製もその後、取り入れる学校が増えました。そのほかの作業学習でよくやっているのは農業活動や洗車です。また、右側の写真は教育局主催の州内特別支援担当主任向けの講習会です。これは他協力隊員と連携して行った活動です。この他にも隊員の活動先NGOで教職員向けの講習会を行いました。また、うどんづくり講習ですが、これは精神障害者の施設に配属されていた協力隊員がいて、そこでうどん作り講習会をやりました。

活動を終わってですが、「子供というのは国が変わっても、どこに行っても同じ、可愛いな」と思いました。障害もいろいろありますが、話している言葉が違うだけで、動きとか、行動特徴はかなり共通点があるということもわかりました。また、マレーシアと日本の両方の教育現場を見ることができたのは良かったと思います。日本の教育のここは優れているな、という点もたくさんありました。それに対してマレーシアのほうが余裕があつていなと感じることもありました。そして自分自身が日本人ということを強く意識できたということも大きな収穫です。

帰国後は小学校の少人数指導担当として、特別支援教育と少し離れたところにいます。各クラスの指導の中で時間が余ったときなどにマレーシアの話をしています。その程度で、まだ協力隊活動を現場に還元しているとは言えないところが辛いところです。

豊かな南国マレーシア



青年海外協力隊19年度1次隊 マレーシア国派遣
茨城県神栖市立大野原西小学校 清水 和夫

マレーシアについて①

- ・ **面積:**約33万平方キロ
(日本の約0.9倍)
- ・ **人口:**約2664万人
- ・ **民族:**マレー系66%,中華系26%,
インド系8%,その他1%
- ・ **言語:**マレー語(公用語),
英語(共通語),中国語,タミール語など
- ・ **宗教:**イスラム教(国教),キリスト教,仏教,
ヒンズー教,シーアク教など



マレーシアについて②

- ・ 時差:日本時間マイナス1時間
- ・ 主要輸出品目:電気機器,原油,パーム油,天然ゴム,繊維製品
のんびりとした国民気質、
しかし原油産出国という
ことで財政は比較的豊か
である。2020年に先進国
の仲間入りをすることを
目指している。



学校教育について①

- ・未就学児のための幼稚園はあるが任意。6歳から小学校6年間,中等学校5年間が義務教育で無償である。
- ・新学期は1月からの2学期制。基本は週5日制である。
- ・半日授業で午前と午後で子どもも教師も入れ替わる。
- ・休み時間は1回のみで、30分程度。食堂へ集まって各自食事を買う。
- ・小学校の特別支援学級でも教科担任制。1単位時間30分。1学級6名の児童に対して教師1名。そして介助員がいる。



学校教育について②

- ・いろいろな障害を持つ子どもが共に学ぶ。
- ・教師は障害児の介助をせず、介助員がする。
- ・子ども中心ではなく、教師の都合ですべてが進むことが多い。
- ・教師は公務員であり、給料も割とよく勤務時間が短いため特に女性に人気の職業である。

活動全般について

- ・ **期 間** 2007年6月～2009年3月
- ・ **目 的** ペラ州の特別支援教育レベルアップ
- ・ **主な活動**
 - ①学校巡回で教員に教室環境や指導法のアドバイス、提案授業の実施
 - ②公開授業や教育課程の改善をモデル校にて提案、支援
 - ③州教育局や地区事務所と協力して教員や介助員向けの講習会を実施、あるいは依頼されたテーマに応じて講義を行う



活動の中で感じた問題点、そして改善に向けての活動

- ・ 教師目線の教室環境 ➡ 子どもの目線で
- ・ 教育技術の共有と継承が不足 ➡ 公開授業の提案
- ・ 重度の子どもに対しても机上の学習中心 ➡ 教育課程の改善

モデル校への提案①（教室環境）

PROGRAM INTEGRASI PENGETAHUAN DALAM PENERAPAN PEMBELAJARAN SENTRALISASI KEGIATAN SERTIFIKASI JENIS TINGKAT AGENDA KARIRAN 2020 PADA JADWAL KEGIATAN KELAS STATION 2020											
RPP SITULABU - TAHUN 2019 SEKOLAH : SMP N 10 BANDUNG											
JADWAL KEGIATAN : EN. MICHIG KARIN DINI MULIAH											
WAKTU	1.45	2.15	3.45	4.15	5.45	7.00	7.45	8.00	11.45	12.30	13.00
MOND	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
TUSON	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
RABU	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
PERMISI	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
SABTU	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
JADWAL KEGIATAN : EN. MICHIG KARIN DINI MULIAH											
WAKTU	1.45	2.15	3.45	4.15	5.45	7.00	7.45	8.00	11.45	12.30	13.00
MOND	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
TUSON	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
RABU	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
PERMISI	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
SABTU	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓

特別支援クラスに掲示してあった時間割

**教室環境を
教師目線から子どもの目線へ**

今、どの先生が、何を教えてくれるのかがわかる時間割

ここに、誰が、何を置くのかがわかる掲示物

モデル校への提案②（公開授業）

公開授業

授業後の話し合い(授業者の反省、良かった点、改善点、意見、感想など)

モルタルへの提案③ (教育課程の改善)

時間	従来の時間割	改善後の時間割
7:40~ 8:10	算数	登校後 -通音えを取り込む→着替え
8:10~ 8:40	図工	-敷地内を散歩 -休憩
8:40~ 9:10	理科	-教室内に戻り、朝の会 -学習
9:10~ 9:40	体育	
9:40~10:00	ミノム	ミノム
10:00~10:30	日常生活	教室に戻り、歯磨き -作業(紙書き、スモア作り) -後片付け、掃除
10:30~11:00	英語	-運動場に入る
11:00~11:30	英語	
11:30~12:00	宗教・道徳	宗教・道徳
12:00~12:30	マレー語	帰りの用意、下校

その他の活動（講習会）



北キンタ地区事務所と協力して阿部隊員と教員向けに指導法の講習会を実施

ペラ州教育局主催の講習会にて州内全学校主任と介助員にそれぞれ講義を行う

NGOで他隊員と連携しての活動



他隊員活動先(障害者通所入所施設兼学校)で行った教職員への講習会

他隊員配属先(精神障害者入所施設)で行った、利用者へのうどん作り講習会

活動を終えて

- 子どもは国が変わってもどこにいっても同じでかわいい。
- 日本とマレーシアの両方の教育現場眺めることができたことの重要性。
- 日本という国を外から見れたのが良かった。自分自身が日本人ということを強く意識できた。

帰国後は・・・

- 勤務先の小学校では授業の中でマレーシアの話を時々する程度である。
- 市の国際交流協会などに顔を出してみようかと思っている。
- 周りの人を協力隊に誘っているところである。(現職教員も含め)

協力隊に参加して学んだこと

伊藤由紀子

(19-1、ホンジュラス、小学校教諭、大泉町立北中学校)

先ずはじめに本題に入る前に、私が派遣されていたホンジュラスという国の紹介をします。ホンジュラスは、南北アメリカ大陸の中間の「中米」と呼ばれる地域で、太平洋とカリブ海に挟まれた地帯であり、国土面積は日本の北海道くらいです。日本よりは赤道に近いので日差しは強く、標高の低い海辺の夏の暑さはすごいのですが、湿度は低く標高の高い村の冬はまるで軽井沢のような涼しさでした。人口は約 710 万人で、国民の多くはインディアンと白人の混血でキリスト教徒が多く、言語はスペイン語です。国内にはいくつかの少数民族も暮らしていますが、北部カリブ海沿岸には、ガリフナ族と呼ばれる黒人系の民族が暮らしていました。主食はトウモロコシの粉で作った薄いパンで、定番のおかずは豆の塩ゆでやバナナのフライ、卵やチーズなどです。一番ポピュラーな飲み物はコカ・コーラなどの炭酸飲料で、コーヒーにも砂糖たっぷりです。基本的にホンジュラス料理は油たっぷり、飲み物も砂糖どっさりなので、でっぷりしたお腹のおじさんやおばさんがたくさんいます。ホンジュラスの観光の目玉は、なんといってもカリブ海とマヤ遺跡です。ホンジュラスにやってくる外国人観光客は、ほぼ 100% この二つがお目当てです。カリブ海には美しい珊瑚礁のある島々が連なり、ダイビングやシュノーケリングなどのマリンスポーツも盛んです。また、中米一帯に点在するマヤ遺跡の中で、「コパン遺跡」と呼ばれる遺跡がホンジュラス国内にあり、世界遺産にも指定されています。ただ当のホンジュラスの人たちは、貧富の差が大きく中流以上の金銭的に余裕のある人々くらいしか、そのような場所に旅行には行けません。そしてホンジュラス人の気質は、何といっても第一に中南米のラテンの陽気さです。明るく人なつこく、フレンドリー。歌や音楽や踊りが大好きで、サッカーが国民的な人気スポーツです。

ここまでホンジュラスについての紹介をしてきましたが、次は、ホンジュラスでの私の活動について話したいと思います。職種は小学校教諭で、中でもホンジュラスの教育課題の一つであった、算数に焦点を当てて活動を行ってきました。さてここで、ホンジュラスの算数教育が抱える問題点について、少しふれておきましょう。ホンジュラスは、2015 年までの達成を目指しているいくつかの教育目標を掲げています。まずは「小学校の就学率・修了率の 100%達成」です。これは、現在就学率 92% ということで目標に近づきつつありますが、これが「小学校を 6 年間で修了する割合」になると、32% と急激に低い数字になってしまいます。このことはつまり、小学校での留年率・退学率がとても高い、ということになります。ホンジュラスには、義務教育の小学校であっても「留年制度」があり、学力が身につかず何年も 1 年生を繰り返している子どももいました。そのような子どもは、い

ずれ退学してしまうことも多かったです。この、子どもたちの学力不振を改善するため、不振が特に目立つ「国語」「算数」での学力向上を目指して目標が掲げられました。「小学校6年生での算数得点率70%」です。しかし現実の得点率は、目標の半分の39%でした。目標の達成のためには、「算数」の学力不振の解決が急務だったのです。そこでJICAの協力で、1989年より「算数指導力向上プロジェクト」という活動がスタート、2005年には児童用の書き込み式教科書と、教員用の指導書が開発され、ホンジュラス教育省に国定教科書として認められ全国配布となったのです。私が赴任した2007年は、この算数教科書が全国に配布されたばかりだったので、これを用いてよりよい授業を開催することで、算数の学力向上を図ろうとするのが活動の大きなねらいでした。この教科書は、日本のものに大変よく似たつくりになっているうえ、私は赴任前日本の小学校で働きながら、校内研修などで算数の授業改善についてもたくさん勉強する機会があったので、現地ではこの経験が大変役に立ちました。実際の活動では、ホンジュラス人教員に欠けていた、「算数の正しい知識」と「算数の授業の効果的な指導方法」の伝達に焦点を絞り、算数研修会を開いたり、教材研究会や模範授業、チームティーチングを行ったりしました。任地のすべての教員とこのような活動を開催していく、と初めは大きな構想を持っていましたが、だんだん現実的になって対象を徐々に絞っていき、最後には意識の高い数名の教員と中身の濃い活動を開催し、自分の持っている技術を伝えることを心がけました。

ただし、「学用品を寄贈する」だとか「校舎を建築する」などの物理的な援助方法に比べ、「教科書の使い方や授業の仕方を伝える」という技術移転という援助方法には、それ特有の困難さと、逆に技術移転ならではの確実さがあると思います。困難さと確実な技術移転、この両者の狭間で、もがきながら自分にできることを模索し、試しながら活動してきた1年9ヶ月でした。ここからは、実際の活動で実感したいくつかのポイントについてふれてみたいと思います。今振り返ってみて、やはり一番感じたことは「日本の常識は世界の常識ではない」ということです。その国の価値観・文化・歴史をまずは受け入れ、尊重することが大切です。「どうしてそんな風にするのか」「なぜこんな考え方をするのか」と、日本の基準に照らして考え方を憤慨したりイライラしたりするのは、日本の常識を押しつけようとする自分勝手な考え方です。そういう考え方を取り扱い、「へえ、そんな風にするんだ～」「わあ、おもしろい考え方！」と考えた方が、相手に受け入れてもらえるし、何より自分の気持ちが楽になります。「違いを楽しんでやろう！」というくらいの心構えているといいと思います。次に、「自分は自ら望んでここへ来た」ということをいつも忘れない、ということです。活動が壁にぶち当たったときや、うまくいかないことが起きたとき、とかく「要請を出したのはあなたたちでしょう？！」と、相手を避難することばかり考えてしまいがちです。でもそのようなときこそ、自分がこの国で活動しているのは誰かに頼まれたわけではなく、自分で希望して、自らの意志で行っているんだということを思い出すことが大切です。そして最後に、「何か大きな成果をあげよう」ということよりも、「小さな種を、一つでもいいから蒔いてこよう」という心構えで望んだ方がいいです。意気込みすぎて現

地にはいると、必ず理想と現実のギャップに苦しむことになるからです。これら3つのポイントは、すべて自分の反省から出てきたもので、ホンジュラスに限らず、また小学校教諭という職種に限らず、どの国でもどの職種でもいえることだと思います。

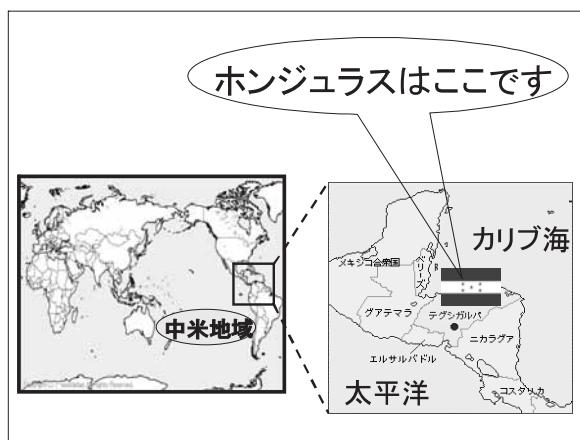
さて長くなりましたが、ここからが今日の私の発表のテーマである、「協力隊に参加して学んだこと」のお話です。1年9ヶ月の間、現地の人とともに生活しながら活動する協力隊だからこそ、得られたことがたくさんありました。今思えば、自分が援助に行ったつもりでいて、逆に現地の人々からたくさんのこと学んでくることができました。それは大きく3つあります。一つ目は、「モノはなくとも何とかしてしまうたくましさ」です。日本のようにたくさんのモノにあふれているわけではありませんが、人々はその中から何かで代用したり、何とか工夫して自分で作ったりしています。二つ目は、「いちいち腹を立てたりくよくよしたりしないおおらかさ」です。約束したことが守られなかつたり、計画したことがうまく行かなくても、それに対してイライラして腹を立てたり、誰かの責任を追求したりすることではなく、「まあ仕方がないさ」「また今度ね」と笑って許し、気持ちを切り替えられるのです。三つ目は、「家族や親戚・近所の人、同じ人間同士の、人と人との絆の深さ」です。大人は子どもを大切にし、子どもたちは親に感謝して家のお手伝いをよくします。親戚や近所の人との交流も、日常生活の中にたくさん残っています。私はホームステイでしたが、見ず知らずの外国人である私を快く受け入れ、家族の一員としてあたたかく接してくれました。町の人々もすごくフレンドリーで、道ですれ違うと初めて会う人でも気軽に挨拶の言葉をかけてくれたし、街角では偶然会った人同士でも会話が弾む、そういうところにも、「絆」を感じることができました。ここで、協力隊経験から学んだことを短いビデオにしてありますので、見てください。

裏を返すと、私がこれらのことを見たのは、それまで過ごした日本では違った状況にあった、ということもあります。たとえば、日本の学校では教員の数はきちんと保証され、教科書だって、毎年4月に確実に子どもたち全員が手にすることができます。先生は指導内容をきちんと理解していて、常にわかりやすい指導法、よりよい授業を心がけて仕事に取り組み、時間外労働だっていとわない熱心さも持っています。また、義務教育制度、教育課程、指導要領など、すべてが国中で統一され、しかも末端の教育現場までしっかりと浸透し守られています。今まで当たり前と思っていたことが、実はすごいことなんだと気づかされました。教科書だけでなく教材・教具も豊富で、必要な物はほぼ完璧に揃えられています。また、約束や計画は100%に近い確率で実行され、それらの実績は積み上げられて、次回に有効活用されたり改善されたりしていきます。これも当たり前ではなく、本当にすごいことなんです。日本を離れ、外から日本を眺めることで、今まで気づかなかった日本のすばらしさに気づくことができました。

帰国後は異動となって絞りが代わり、中学1年生の担任として仕事に復帰してめまぐるしい毎日を過ごしています。南米からの労働者が多く住んでいる地域の学校なので、学校にも外国籍の生徒が1割ほどいますが、協力隊参加前に比べ、外国籍の子どもたちや保護

者の行動や考え方を理解できるようになったことも、大きな収穫でした。家庭訪問や、保護者との連絡などでは、時々スペイン語も使うことがあります、日本語からスペイン語に切り替えて語りかけると、保護者がホッとするらしく、安心して話せる雰囲気になるのがうれしいです。今後は自分の体験したことや感じたことを、日本の子どもたちにも是非伝えていきたいと思い、「協力隊経験の伝え方」の講座に参加したり、情報を集めたりしているところです。

また派遣前の準備から派遣期間中に渡り、私たちの活動を支えてくださった JICA 関係者や文部科学省、筑波大学の皆様には大変感謝しております。せめてもの恩返しにと、協力隊の募集説明会での発表や隊員訓練所の講座での講話、また本日のような帰国隊員報告会などの機会にできるだけ参加することで、お世話になった皆様へのお礼としていきたいと思っています。



ホンジュラスが抱える問題

2015年までの目標は、ホンジュラスの
・小学校の、現状は…
就学率・修了率100% ⇒ 92%
・小学校の、
6年間での修了率85% ⇒ 32%
・小学校6年生の、
算数得点率70% ⇒ 39%

課題
**留年・退学率
が高い！**

その要因は
**算数の
実力不足**

算数学力を向上させるには…

ホンジュラス教員に

JICA開発の教科書
を使って

その① 正しい算数の知識

その② 効果的な指導法

を伝えることが必要！！



活動の二大目標

活動あれこれ



心がけたいポイント

- ① 日本の常識は、世界の常識ではない。
→ 違いを楽しもう！
- ② 自分は自ら望んでここへ来た。
→ 誰かに頼まれたわけではない。
- ③ 小さな種を一つでもいいから蒔こう。
→ それがいつか芽を出すことを願って…

協力隊に参加して学んだこと

- ① モノは無くても何とかしてしまう たくましさ
- ② いちいち腹を立てたりよくよしない おおらかさ
- ③ 家族や親戚、近所の人、同じ人間同士、 人と人との絆

さらに、日本のはばらしさも再認識！

支えてくださったたくさんの皆様、
ありがとうございました。



～ご静聴、ありがとうございました～

学習に向かう雰囲気作りとクラス作り

諸永健二郎

(19-1、エルサルバドル、小学校教諭、京丹後市立五箇小学校)

平成 19 年度一次隊の諸永と申します。

今日は大変限られた中での話になりますので、まとめながら話したいと思います。パワー・ポイントの資料ですが、一ヶ月くらい前に急いで作成したものなので、余りきちんとした資料ではないと思いますが、どうかご勘弁をいただければと思います。

エルサルバドルをご存知でしょうか。名前を聞かれた事はありますか。エルサルバドルの人口は約 600 万人、首都はサンサルバドルで、大きさはだいたい四国くらいの大変小さな国です。サンサルバドルに人口の 3 分の 1、200 万人が住んでると言われています。このエルサルバドルですが、1980 年から約 10 年間、大変厳しい内戦を経験しています。非常にひどかったようとして、特にエルソノデという村があるのですが、約 800 人の村人全員が虐殺されたというような惨劇があったとのことです。これは、兵士が直接下したものとしては、20 世紀最大の虐殺だったという事なのですが、このような歴史を持つエルサルバドルには内戦の影響が今でも色濃く残っているんでしょうか、かなり治安が悪い国です。

私の任地は首都からバスで 1 時間半の所にありますエルサル第二の都市、サンタ・アナという町でした。現在、私が住んでいる所は京都の北側の日本海側にあるのですが、そこと比べるとずいぶん都会で、協力隊員としてこのような所に住めるなんてスゴイと思ったほどです。学校はサンタ・アナ市内からバスで 30 分、そして歩いて 20 分の所にある大変小さな学校でした。エルサルバドルは、幼稚部から高校まで、午前と午後の二部制をとっていました。午前の部は朝の 7 時 30 分から 12 時まで、午後の部は 13 時から 17 時 30 分までというのが基本になっています。学校には毎朝 7 時には到着していないといけませんでしたので、家を出るのはだいたい 6 時頃、だいたい 6 時 5 分のバスに乗っていました。帰り着くのはいつも 19 時頃、暑さも重なって毎日疲れ果てて帰宅する状態でした。そのためご飯を食べる気力がなく、料理をしなくともいいもの、特にキュウリや果物を食べていました。任地へ行く前はたくさん食べて、5 キロ程太ってふくふくして行ったのですが、赴任後に 9 か月で 17 キロも痩せてしまいました。いまちょうど 6 キロくらい戻ったころでしょうか。

私の派遣要請の概要なのですが、JICA プロジェクトの中でエルサルバドルのプロジェクト、算数・初等教育・算数指導力向上プロジェクトというのがありますと、そのプロジェクトと連携をしながら、教員の指導力を伸ばすというものでした。そのため、プロジェクト隊員ではありませんでしたので、連携ができるところは連携をして、その他は自分の興味のあるところ、得意なことを生かしながら、先生たちの指導力を向上させていくという

内容でした。

これが学校の先生たちです。小さな学校で、幼稚部から小学校 6 年まで約 190 名の児童と 4 名の先生が働いていらっしゃいました。先生たちが皆僕より年下だったものですから、大変やりやすく、また、やる気のある先生たちでとても活動しやすかったと思います。ただ、お世辞にも授業が上手とは言えず、赴任当初、最初に思ったことは、「どうしよう、日本に帰りたい！」ということでした。何から手をつければいいのかわからない、と思う状態でした。どんな感じかと言いますと、授業中ご飯を食べるなどは当たり前で、いなくなったりもします。携帯電話で話をするのも当たり前です。また、授業中でもお菓子が食べたくなったら子どもにお店までお菓子を買いに行かせます。もうどうしたらいいの、という感じでした。

このような状況の中で学習しているわけですから、子ども達も学習内容が身に付いているはずがありません。次に、どんな感じで授業が進んでいくのかということを紹介していきたいと思います。最初の 15 分間ですが、教科書に書いてあることを黒板を使って一方的に説明します。学年が上がるほどに学習内容を教師自身が理解していないという事が多いので、本当に一方的に説明するだけになります。その後に子どもたちが黒板に書かれている事をノートに写します。それがだいたい 15 分くらいかかります。その後に 10 分くらいの練習問題をやります。ノートに写す時点で先生たちはドカっと自分の席に座ってしまい、ご飯を食べたり、コーヒーを飲んだり、携帯をいじったりします。そして、練習問題が終わると、子ども達は一人ずつ先生の所にノートを持って行って、丸つけをしてもらいます。間違いがあればその場でポイントを説明したりするのですが、時間になればそこで終了してしまいます。練習問題ができていない子はそのまま遊びに行ってしまいます。練習問題をしたくない子もそのまま遊びに行ってしまいます。先生の方でチェックを全くしません。日本では当たり前のことですが、ほとんどの先生が一年間の学習内容を教えきる事が出来ないようです。だいたい図形領域というのが教科書の後ろの方、日本でいえば三学期にあたるところに入っていくわけなのですが、そこまでまず授業が行き着けないようです。このため、エルサルバドルの人たちは大変図形に弱いです。先生たちもほとんど理解できていないように感じていました。本当にそのあたりがすごく問題だなと思っていました。先生たちは苦手な事から逃げようとするようなところがあり、国民性でしょうか、頑張るとか、根性とかありません。温かい所に住んでいますので、山に行けばバナナがあります。マンゴーなどもたくさんあるので、別に働かなくても、山に行けば食料が調達できるので、明日のために頑張るなんてことはしません。今日のために、今日楽しければいいという感じです。そのため、図形がわからなくともいいよね、というような感じになります。日本だとそういうわけにはいきません。日本人はわからないところは授業の前に、と思い、教材研究なんかすると思うのですが、そういったことはエルサルバドルの人たちにはありませんでした。

そういう状況の中で先生をしてらっしゃるわけですから、それほど自分の仕事に誇りを

持っているというわけでもなく、また責任感があるというわけでもありません。子どもが授業を理解できないのは教師の責任ではなく、子どもと親の責任だというふうに思っています。これは学年に関係ありません。一年生からそのように先生たちは思っています。理解できないのは教師の教え方が問題なのではなく、子どもに理解力がないと、親の育て方が悪いからだということになります。ですから、彼らには授業改善をする必要がありません。完璧な授業をしていると自分達では思っているからです。つまり、技術を教えるというわけではなく、意識を変えていかないといけないのだなという事がわかりました。

子ども達も、したくないことを無理にさせられるということはありませんから、体育もしたくなかったら体育お休み、授業も出たくなかつたら出なくともいいという風潮です。勉強をするということを履き違えているふしがあります、学習内容を理解するのではなく、黒板に書いてあることをノートに写すことが勉強をすることだと思っているふしもありました。

ノートにどれだけ書いてあるかというのが保護者の担任教師への評価指標となっていましたので、学校の先生たちもノートにたくさん書かせないといけないという思いがあったようです。こういった状況の中で、私がこだわりたいこと、それから1年でできることは何かと考え、それはクラス作り、学習集団作りということにこだわっていくことが一番良いのではないかと思いました。

クラスを作ると言ってもピンと来ないのではないかと思い、児童全員が学習に向かえる、学習しているという意識と、学習したという満足感、そして、それらの作用による学力向上に向かうために、学級内の雰囲気を高めるということを先生たちに伝えました。しかし、雰囲気、様子、学習集団作りをしようということはどういう事なのか、ということを説明しようとしても、スペイン語もままならない状態であり、それから現地の先生にとっては経験したことがないことでしたので、理解ができないな、ということはその説明したときの先生たちの顔を見て感じました。

理解してもらうには、やはり自分で行動して見せるのが手っ取り早いと思い、算数の授業を毎回10分間だけいただき、百マス計算を始めました。百マス計算にして理由は、まずあまりスペイン語が必要でないこと、毎日計測するタイムで、自分の努力の結果が分かること、目標の設定が簡単であること、毎日するので何度もチャンスがあること等です。それから100マス計算のために九九を絶対に覚えさせようということで九九の合格基準を作り、6の段まで合格したら銀メダルとか、9の段を合格したら金メダルをあげようというような取り組みも行いました。元々面倒なこと、やりたくないことはやらない子ども達ですから、なかなか乗ってくれませんでした。36人いたのですが、2ヶ月くらいかけて2、3人の覚えの良い頭の良さそうな子たちをピックアップして、その子たちを集中的に教えました。そして、銀メダルや金メダルをクラスの中で実際に掛けてあげました。そうすると、僕も欲しい、なんて他の子も思いだして、だんだんと学級の中に九九を覚えないといけないという雰囲気が出てきて、最終的には全員合格しました。

これをきっかけに先生たちが変わりました。今まで覚えなさいと言っても全然覚えようとしなかったのに、何でこんな自分から進んで覚えるようになったのだろう、というような感じです。ビックリしたのだと思います。このことにより、これが学習に向かう雰囲気作りみたいなものですよ、という事が説明できたと思います。

また、教具の見本を作ったり、日本の方法などを紹介したりもしました。色々紹介はしたのですが、実際に現地の先生達がやりやすくて、興味があるものだけをすれば良いと思っていましたし、そのようにも伝えていました。今でも続けているものでは、絵日記と読み聞かせのようで、自分たちでやりやすいようにやり方も少しづつ変えたようです。

このような中、100マス計算だけしていってもしかたがないと考え、やはり教師の意識だけ向上させるのではなく、子ども達の意識も向上させないといけない、保護者の意識も向上させないといけない、と思いました。小さな学校でしたので動きやすく、「保護者会します。」と校長先生が声を掛けると、ほとんどの保護者が集まるという環境でしたので、この保護者の意識も高めるように働きかけていこうと思いました。しかし、私個人では大したことは出来ません。そこで他職種の隊員や現地の人々と協力し合うこと、コラボレーションをしていくことが、教師や児童にとっても、また、保護者にとっても色々な刺激になるのではないかと思いました。

スペイン語がままならない状態でしたので百マス計算が手っ取り早かったのですが、その百マス計算では、いろいろな小学校や大学の教員養成課程の数学の授業に飛び込みで百マス計算をさせてもらいに行きました。そして赴任する学校の中から代表者を決めて、大学や他の小学校に連れて行き、百マス計算で対決するということをしました。

そして、一番力を注いだのが授業研究でした。赴任していたエルサルバドル西部の教員能力開発センター、国立大学等と協力し、帰国直前まで32本の研究授業を行いました。教材研究は毎回4名の先生たちと一緒に授業を作っていました。もともとこの学校は大変優秀な学校ということで有名だったのですが、研究授業で先生たちにも自信を持ったようで、回を重ねる毎に真剣に取り組むようになっていき、色々なアイデアも出すようになってきました。また、2008年から09年にかけて教育大会が3回あり、全国から700～800名の先生が毎回集まりました。その3回ともに赴任校の先生が研究授業を行いました。もちろん子供達も首都まで連れて行き、エルサルバドルの教育テレビで全国に放映されました。

ちょっと見えにくいですが、ちょっと太った女の先生、この先生が一番力をつけたのではないかと思います。教育大会では3回中2回、全国から集まった大勢の先生たちの前で授業を行いました。この先生はその1年間で散々泣きました。税金泥棒だとか、ゴミのような授業だとか、ちょっと人権問題になるのではということまで言って何度も泣かせてしまつたのですが、彼女はそれすごく力をつたのではないかと思います。休み時間に理解できていない子どもを呼んで説明をしている彼女の姿を見た時には、意識がかわったのかなと思い、うれしかったのを覚えています。

また、平和教育も行われました。日本の学校とも交流しました。5～6年生に授業をして、その子たちが4年生に、3年生に、2年生にと授業をしていき、折り紙、折り鶴なども折りました。たまたま教育省の役人でJICAの研修で広島に行くという人がいたので、学校で折った鶴を広島まで持っていました。こんな資料を作りました。その後、折り鶴の意味、戦争の事、原爆の事、日本の文化紹介を子どもたちが地域の人たちに教えたいといいだし、地域でのお祭りでブースを出させてもらい紹介していました。最後は日本大使館に出向き、大使に千羽鶴を受け取っていただき、学習の成果を聞いていただきました。

いろいろな職種のボランティアにも学校に実際に来てもらい、授業を行ってもらったり、保護者向けの講演をしてもらいました。最新の農業を体験してもらうために病虫害隊員と協力して農業学校の生徒による出前授業、栄養隊員による栄養指導、考古学隊員による歴史授業、看護隊員による性教育もしてもらいました。性教育の時には保護者会でも講演をしてもらったのですが、その話の中で、お米をおなかの周りに3キロほどつけまして、妊婦体験を何名かのお父さんにしてもらいました。これが大変好評でした、それまで保護者会の参加率はだいたい50～60%だったのですが、お父さんが妊婦を体験するという事がすごくおもしろかったようで、その研修をきっかけに、保護者会の出席率は90%以上になりました。

隊員最後の仕事として、地域の教育主事、校長会のメンバーと一緒に授業研究研修を行いました。その研修とは、まずは赴任校の先生達の授業を見てもらい、その授業から学んだことや感じたことを元に自分たちの学校で、新しい授業方法や教具を試してもらう。その後その方法や教具が児童の学習にとってどうだったか、また、工夫した点や問題点、新たに作った教具などを紹介し合うというものでした。エルサルバドルの学校では横の繋がりがあまりありませんので、良い授業をしていたり、良いアイデアを持っている先生がいても、それらがなかなか他の先生に伝わっていないという問題点もありましたので、この研修会を企画しました。この他にも企画したことはいくつかありますが、どれも色々な人のコラボレーションの中で出来たことでした。

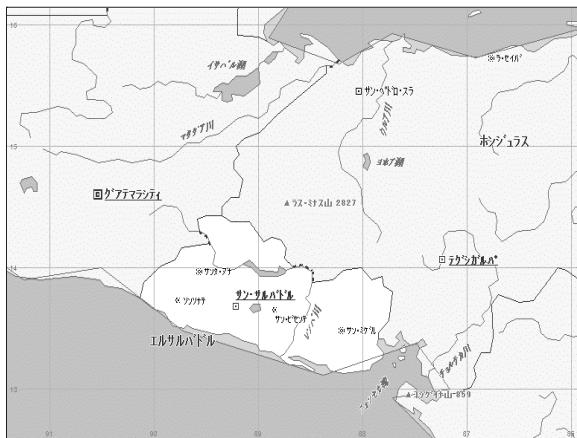
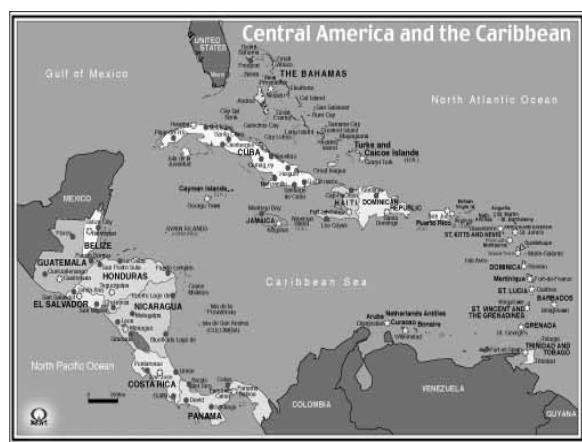
現在、私は2年生を担当しております。全校で71名と大変小さな学校で、転勤が決まった時は嬉しかったのですが、蓋を開けてみると、研究指定校で今年が最終年度ということと、夏休みまでは何をしているのか全然わからないような状態でした。

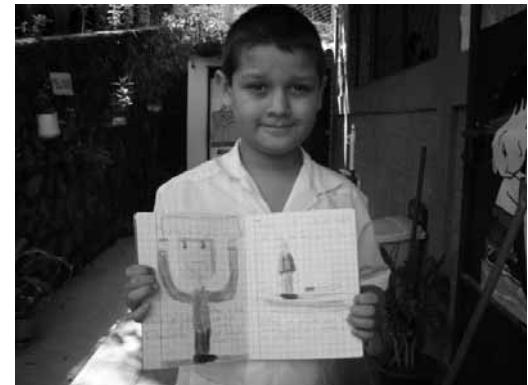
社会還元ということで何かしないといけないとは思っているのですが、2年生の担任ということもあります、また、研究発表の年という事もありましたので、まだエルサルバドルの話は一度もしたことがありませんし、具体的な行動も起こせていない状況です。ただ、協力隊に行っていた先生が一人、身近にいるというだけで学校の雰囲気が違うのではないかと思ったりしています。近い将来、エルサルバドルの子ども達、それから他の地域の人たちとの交流ができたらいいなとは思っているのですが、時が来れば、そういったような話になるのではと思っています。

これから赴任される先生たちという事ですので、どうか2年間頑張って来て下さいと最

後に申し上げたいと思います。そして、何より、地球の裏側で、また、他の国で、2年間一緒に汗を流した仲間がいるということは、本当に素晴らしいことで、1回しかない人生の中で、かけがえのない経験になることだと思います。ぜひ頑張ってきて下さい。

長くなりましたが、最後まで聞いていただきありがとうございました。これで終わります。





コラボレーションの中で

- 百マス計算
- 授業研究
- 平和教育
- 他職種隊員の協力









人の中で

榎原裕子

(19・1、ベトナム、養護、福島県立西郷養護学校)

福島県立西郷養護学校から派遣されました榎原裕子と申します。ベトナムに養護分野で派遣されました。

本日は、先ず始めにベトナムについてお話し、次に活動の目的と実際という形で説明させていただきます。実は私はベトナム語の劣等性でして、そういう私がどうやって活動を進めてきたのか、また活動を進めるにあたってこれは良かったなという方法などを中心にお話しさせていただきたいと思います。

先ずはベトナムについてです。情報ということで載せておきましたが、一番下に乳幼児死亡率というのを載せてみました。どうして私がそちらのほうに目がいったかというと、学校に派遣された時に、重度の障害のお子さんというのが全然いなかったのですね。どうしていないのだろうかと思い、医療系の隊員の方とお話しした時、日本だったら出生時助かるのに、ここでは難しい、という話を聞いたことがあったので載せてみました。

そして私の任地です。ベトナム社会主義共和国のダナンです。ダナンっていうのはベトナムの真ん中にある海沿いの町です。海産物がとても美味しく、お刺身も食べられるぐらいのところなのです。ベトナム戦争の時は枯れ葉剤による戦争被害が大きかったそうで、そのため、日本というと戦争被害という共通点だと思うのですが広島や長崎をイメージする方も多いいらっしゃいました。

そして学校についてなのですが、小学校1年生の時から留年が存在していたようで、塾に行ったり、家庭教師をつけて勉強したり、ものすごいがんばって必死で勉強していました。また、親も非常に勉強させているという印象が強かったです。

そして、戦後30年間ということもあり、人口ピラミッドでも子どもの数がとても多く、学校が足りないのです。そのため、入りきらないからしょうがないというところでは、午前の部、午後の部というように子どもを学年で区切って授業を進めている学校も多くありました。

特別支援学校なのですが、入学資格があるという所では、入試という形でやっていたわけではないのですが、日本で言うと教務主任の先生に当たると思う方が、子どもと保護者の方とお話をしていました。他の所に行った時に聞いたのですが、やはり障害が重いという事を理由に入学をお断りするというようなことがあったようです。公立の学校だったら足切りされている、そういう状況ではありました。現地の大学の先生から聞いたのですが、ベトナムの就学率はほぼ100%となっていますが、実はその母数の中に障害児は外されているそうですが、聞いたところによると、2010年に障害児の就学率を70%に上げる

という目標は立てているそうです。実際カウントされていない状況でどうやって 70%を出していくのかと疑問があったのですが、そこは調査できませんでした。

特別支援学校の教育について、実際に学校に入ってみて様子を見ていると、先生方は大量に書類を書きます。しかも、ちゃんと子どもが帰る時に一緒に帰るんです。どうやっているのかと思うと、授業中に一生懸命書いているのです。

また、とても大切なのが研究実践です。何故大切かというと、それによってお給料が決まっていくというようなのです。また、先生方の協力体制が素晴らしいのです。何が素晴らしいかというと、例えばA組の研究授業があるとなると、先生方全員で教材づくりを協力し合います。私も当たり前のように教材を作つてと言われて、道具類を渡されました。授業終わってから教材を作ろう、と思っていたのですが、「ちょっと何をやっているのよ、あなた今授業じゃなくてこれ作るのよ」と言われました。授業が一番の仕事だとは思うのですが、とにかく研究授業を皆で協力してやっていたのが印象的でした。

教員の配属地域には人気の地域があります。ベトナムというと、テレビなどではキレイに映っていると思うのですが、ハノイやホーチミン、また私がいたダナンもどちらかというと大きい都市で、そういう都市部では日本とあまり大差ないような生活が送れます。しかし、ちょっと地方に行くと、全く生活環境が違っている所もあります。また、自分が住んでいた地域や家族を大切にする気質があるため、ある地域に集中してしまうこともあります。

活動ですが、私が所属していたのはトゥオンライ特別支援学校です。ちなみにトゥオンラインというのは将来という意味だそうです。こちらの学校では障害種別として知的障害のお子さん、聴覚障害のお子さんを受け入れている学校でしたが、私は知的障害のクラスに入っていました。基本的に6歳から17歳のお子さんが学べる学校です。着任時、聾のお子さんのための就学前のクラスがあったのですが、一年後からは知的障害のお子さんの就学前クラスというのもできました。要請内容なのですが、学校からは先ず一つ目にコミュニケーション能力の向上をして欲しいとの要望がありました。次に日本の指導方法、音楽や図画工作を知りたいというように書かれていました。それを見る中で、私はどうしたらいののか考えていたところ、先ず、子どもたちが意欲を持ってやりたい、やってみたいという意欲をもつ事からコミュニケーションをとっていきたいと思い、最初に児童が意欲的に活動できる場を設定していこうと考えました。また、日本の指導方法を知りたいという事につきましては、日本の指導方法を伝えるために日本人の考え方や日本の状況、文化を知つてもらうことが良いと考えていたので、文化交流を図るという事から始めていきました。

活動の実際です。まず先程お話しした意欲的に活動できる場の設定ということで、授業の実施、音楽会、講演会の開催をする事にしました。授業ですが、音楽と図画工作の授業をするという事だったのですが、主に私は音楽の授業を担当させていただきました。音楽の授業を担当している先生方の授業を見せていただくと、音楽=歌という感じの授業でした。そこで私は、言葉ではなくても、自分の体で音楽を感じられる学習を進めていきたい

というように計画しました。そういう中で、楽しいと思ってくれる事で、子どもの意欲が出てくるのではないかというように考えて実践しました。体を使って学習することは、私はベトナム語ができないということや、通訳さんでも「ハ?」と言われる言葉もあるベトナム語の難しさがあったので、見てわかること、そして、実際にできることを体験することにより、私とコミュニケーションをとっていきたいという関係が生まれるのかなというふうに考えてやってまいりました。また、これまでのよう教材研究をし、それをカウンターパートや校長先生と一緒に改善していくことも考えました。学習内容の紹介は、一応がんばってベトナム語で書いて、それを仲良くなつた日本料理屋の店員さんが結構日本語をしゃべれたので添削してもらい、また、日本人の友達で通訳をやっている方がいたので見てもらい、学校を持って行きました。

音楽学習は、拍子を1、2、3、という形で視覚的に捉えながら表現する形で行っていました。音楽会も開催しました。音楽会の目的は二つで、一つ目は基本的に音楽が好きなベトナム人ではあったので、それを生の音楽を聴いてもらい、また、見たことない楽器などを見てもらうことにより、もっと興味を高めることができればということです。もう一つの目的は、校長先生とお話をした時に、卒業後は皆どうするのですかと聞くと、当たり前のように、家で過ごすよという返事が返ってきました。いろいろな事ができるお子さんがいるのに社会にでることができないのはもったいないなと考えたので、こんなに出来ることがあるんだよという事を一般市民の方にも知ってほしい、というように思ったからです。プロの演奏家と同じステージ上で発表したり、作品を展示したりしていたので、そういう形で皆さんできることを知ってもらえばいいなということで、実施しました。実際、学校での音楽会に関しましては、知的障害を持った子供に楽器の演奏は難しいのではと言われ、また、耳の聞こえないお子さんに音楽を聞かせるのは難しいというように言われたんですが、演奏会の鑑賞を通して独特な雰囲気が伝わってくるものもありますし、ということをJICAの調整員が通訳同伴で来校する毎に、教頭や校長に通訳を通して話をしていくうちに、全員で一緒に校内の音楽会に参加できる事になりました。ダナン市内には3つ学校があり、そのうち2つが公立の学校で、もう一つの公立の学校の方にも隊員がいました。その隊員と一緒に協力して2校共催という形で行ったのですが、私達隊員がメインでいろいろ準備をしたこともあり、現地の先生方を信頼して、もっともっと仕事をお願いしたら、もっともっと良い演奏会ができたかもしれないということが反省点だったと考えています。

また、講演会では、最初にハノイ師範大学の特別支援教育の先生と話をした時に、日本では重度重複障害やそのためのクラスがありますが、ベトナムではどうなっていますかと質問した時、大学の先生たちに「一体何を教えるの?」と、とてもビックリされました。その状況を見て、こういう学習をしていますとお伝えしたいなと思い、専門家を招いて講演会を実施させていただきました。恐らく養護の職種で行かれる方はあったことがある方なのですが、試験官をJICAでやられていた先生です。福島県の特別支援教育の課長をされていて、このような実情をお話した時に、私がボランティアで話をしに行きますとおっし

やつて下さり、旅行ついでにお話して下さるという形で来て下さいました。

自己研修ですが、まず相手を知ることによって、よりベトナムの中に入ることができますのではないかということで、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、そして企業などを見せていただきました。そして文献収集と称して、JICA の事務所の中で資料を探しました。また、医療分科会に入り、情報収集をしました。重複障害、重い障害のお子さんがまず最初に行くのは病院だろうと思い、病院関係、医療関係の分科会に入りました。分科会の中で障害の重いお子さんのお話を聞く事ができたので、良かったと思っています。これは高校を見させていただいた時ですが、軍事の時間というものがあり、私達日本人としてはなかなか見る事のできない光景で、私は結構ショックでした。

二番目の文化交流を図るということでは、次の 3 点について実施しました。そして帰国後の報告ということで、帰ってきてから 3 種類の活動をしました。情報発信ということで、ベトナムには日本のこと、日本にはベトナムの情報を発信しました。所属している学校や福島県の学校、そして県の方からも情報発信して下さいとお話をあったので、そこも活用させていただきました。日本ではインターネット、メールを通じて活動していました。このように、左側は現地の学校に飾らせていただいたものです。文章はなかなか難しいと思ったので、写真をボンボンと載せましたが、写真は視覚的にわかる物なので、この写真をみて反応してくれ、コミュニケーションが生まれたかなと思いました。この写真にもあるように、日本では肖像権の関係で人が映っていない写真をもっていたということがとても有効でした。また、ベトナムの情報を日本語で子供向けと大人向けに作りました。右側は子供向けに作ったものです。大人向けの物にはメルアドをつけておいたので、先生方からメールでこうだったね、こうなの、というやり取りがうまれたので、以外と有効だったと思います。そして作品の交換と説明という事で、私自身が友達とお互いに交換した作品を、作る事やできた作品を大切にするというような説明文をつけました。また、実際にベトナム人の先生と一緒に授業を進めさせていただき、現地人の先生を有効活用することは大切だと思いました。そして帰国後の報告会ということですが、自分が行ったことによって、ベトナムのいい所、日本のいいところを再確認することができました。学校で報告したりなどもしていますし、関係機関の会報にも載せていただきました。

所感ですが、要請にコミュニケーションの方法を広げてほしいということがありましたが、楽しいという体験からやりとりが生まれ、そこは大切にしていきたいなと思います。これは日本でも一緒のことだと思います。あと日本の指導方法を知りたいということですが、それも同じだと思います。楽しいと思えることをやっていきたい、やっていくことが有効だと思いました。私の目的ですが、意欲的に参加する授業を行うことが大切だと思いました。文化交流について感じたのは、ベトナム人の国民性としてアピールすることです。そして、共通性ということで、子ども達でも、先生方でも、ベトナム人でも、共通にある物を題材とすることにより、そこからとっかかりを作っていくと、すんなり受け入れてもらえるのかなというように感じました。

感想ですが、ベトナムは自己主張が強い国だと思いました。それは大切なことで、自分の意見を学校の中でも上の人に対してもしっかり主張します。一方、日本は思いやりの国です。相手があつて、自分がいる。色々なことに子どもの時から周りがどうなっているか、そういうことを大事にしていたというように感じて帰ってきました。そして活動を進めるにあたり感じたことは、まずは国際交流からということで、国際貢献するぞというよりも、仲良くなりましょう、相手はどうなのかな、というところから入ることによって、スムーズに活動できるのではないかなど感じました。そして連携プレーにより、より多くの事ができる、また有効なことができる感じました。

ベトナム人の心、日本人の心を大切にして、これからもやっていきたいなと思います。楽しいと思えることは楽しいと思い、そこからスタートしていくことが大事だなと思いました。御清聴ありがとうございました。

人の中で

福島県立西郷養護学校
榎原 裕子

概要

- 1 ベトナムについて
- 2 活動の目的
- 3 活動の実際
- 4 所感

1 ベトナムについて

ベトナムの基礎情報

- ・面積 329, 241km²(377, 835km²)
- ・人口 8, 520万人(12, 888万人)
- ・民族 キン族86% 53民族
- ・言語 ベトナム語
- ・宗教 仏教80% カトリック、カオダイ教他
- ・平均月収 22. 3\$(4, 205\$)
- ・乳幼児死亡率 17. 7人／1, 000人
(2. 8人／1, 000人)

※()内は日本(全データは2006年～2008年)



ベトナム社会主義共和国
ダナン市

学校制度

- 9月入学
- 義務教育: 小学校5年 中学校4年
- 小学校1年生よりテスト(留年)有り
- 一クラス50名程度の児童生徒
- 学齢児童生徒数が多いため、学校によっては全日制ではない
- 全国統一の指導内容

特別支援学校

- 1学級当たりの人数は10名程度
- 入学資格あり
- 留年制の適応(試験有り)
- 学齢児数の中に障がい児はカウントされていない

特別支援学校の教員

- 特別支援教育課程履修制度あり
- 専門知識を学んだ教員は少ない
- お給料は提出物と研究授業で決まる！？
- PTの配属有り
- 採用試験時の点数により配属地域が振り分けられる

2 活動の目的

トゥオンライ特別支援学校

《障がい種別》

知的障がい
聴覚障がい



《年齢》

6歳から17歳
(就学前クラス有り)

(1)学校

- ①コミュニケーション方法を広げて欲しい。
- ②日本の指導方法(音楽・図画工作)を知りたい。

↓

(2)隊員

- ①児童が意欲的に活動できる場を設定する。
- ②文化交流を図る。

3 活動の実際

(1)意欲的に活動できる場の設定

- ①授業の実施
- ②音楽会
- ③講演会
- ④自己研修

①授業の実施

《目的》
児童の経験を広げる。

《方法》
音楽、図画工作の授業実践
・教材研究
・授業の実践
・評価、改善
・学習内容の紹介



④自己研修

《目的》
・ベトナムの教育を知る。

《方法》
・学校、施設及び企業見学
・文献収集
・分科会



②音楽会

《目的1》
音楽経験を広げ、音楽への興味を高める。
《方法》 校内での鑑賞会

《目的2》
音楽会への参加を通して、学習意欲を高める。
ダナン市民に障がい者理解を広げる。
《方法》 音楽堂での音楽会と作品展



③講演会

《目的》

重度重複障がい児の指導法について知る。

《方法》

専門家を招いての講演会



(2)文化交流を図る

①通信の発行

②作品の交換と説明

③日本を題材にした授業の実践と説明

④帰国後の報告

①通信の発行

《目的》

ベトナム及び日本についての理解を広げる。

《方法》

通信の発行

- ・トゥオンライ特別支援学校
- ・西郷養護学校
- ・福島県



②作品の交換と説明

《目的》

同年代の外国人の作品を見ることで意欲を喚起すると共に、作業学習について伝える。

《方法》

各校の児童生徒作品を交換

作業学習の紹介



③日本を題材とした授業の実践

《目的》

日本の遊び及び、生活単元学習について伝える。

《方法》

日本の遊びを題材とした授業の実施



④帰国後の報告会

《目的》

ベトナムの良さを伝えたり、日本の良さを再確認したりする。

《方法》

帰国報告会での報告

関係機関の会報等での報告

4 所感

(1)活動の目的から

《学校》

- ①コミュニケーション方法を広げて欲しい。
 - ・興味をもつことから

- ②日本の指導方法(音楽・図画工作)を知りたい。
 - ・やってみる → 楽しい、楽しそう

《隊員》 ~言語の未熟さという実態より~

- ①意欲的に参加する授業を行う。
 - ・実態に応じた課題
 - ・わかりやすさ(単純明快)
 - ・継続性

- ②文化交流を図る。
 - ・国民性からのアピール(例:美しさ)
 - ・共通性から(例:車)

(2)感想

《ベトナム》

- ・自己主張の国

《日本》

- ・思いやりの国

《活動を進めるにあたり感じたこと》

- ・まずは国際交流から
- ・連携プレー(適材適所)



ありがとうございました。
Xin c?m on!



フィリピンの子どもたちのために何ができるか。

フィリピンと向き合った1年8ヶ月

小倉琴恵

(19-1、フィリピン、小学校教諭、仙台市立南光台東小学校)

宮城県内の小学校で教員をやっています小倉と言います。宜しくお願ひします。戻ってきてから3年生40人の学級の学担をしています。最初の3カ月ぐらいは仕事も遅れてて全くついていけない日々を送っていました。しばらくフィリピンのことを考えるのも忘れているような感じで、久しぶりに思い出しながらやってきたと思います。

御存じだと思いますが、フィリピンはたくさんの島でできている国です。これはフィリピンの拡大図なのですが、その中で私がいたところは3角形の島、パナイ島というところです。これはパナイ島をさらに大きくしたものです。このイロイロっていう風に書いている所の Dep Ed、Department of Education 教育省に配属されました。先生方は一つの学校に配属されて一つの学級とか学年とかを教える立場で行かれる方が多いと思うのですが、私はこのオレンジのイロイロ州全体の教育省に勤める形で、その中の980校の小学校全部をカバーする指導主事の同僚として配属されました。ここは5つの行政地区、52の学区に分かれています。そういった立場として配属されたのですが、いったい何を求められているのかよくわかりませんでした。

先ず、SBTP から説明します。School Based Training program ということで、教員研修のプログラムです。それへの参加・アドバイス、つまり、自分が授業をするだけでなく、先生たちの授業を見させてもらってアドバイスをするという立場でした。イロイロ州全体の算数のレベルを上げて下さいと言われましたが、1校の小学校の教諭というわけではなく980校全体の先生の先生役ということで、私にはやや荷が重いといいますか、範囲が広すぎるという印象を持ちました。

先ずは目標を決めようということで、発見学習を導入していきたいと思い赴任しました。自分自身が考える、自分で解き方を考える、発見していくということが出来る授業です。どこの発展途上国もそうだと思うのですが、先生がガ一としゃべって、それを生徒がただウンウンと聞いているような授業が多いという噂を聞いていましたので、開始はそこからではというように目星をつけていました。

これは向こうに赴任してからの5つの柱です。1番目は学校めぐりで通常授業参観です。これはSBTP が月に1回しかないので、他の余った時間がもったいないということで、授業の実態を把握するために、校長先生やいろいろな学校の生徒とコンタクトを取って、予約を入れて授業を見せてもらうという活動です。これは実態把握にとても役立ちました。2

番目は先程から出てきている SBTP です。3 番目は新人の研修会・教員講習会で講演、4 番目はワークショップ開催での教材作りの講師です。向こうは教材が非常に足りなくて、発見学習を進めるにあたって足りないものが多かったので、ワークショップを開いて一緒に教材を作りませんか、というように呼びかけてワークショップを開催しました。5 番目は参考書作りです。一つ一つについて詳しくお話していきたいと思います。

学校めぐりで通常授業参観というのは、先ずは先生の授業を見させてもらう、最後にアドバイスをさせてもらいます。また、サブとして参加したり、全然知らない子ども達の前でいきなり授業をしてくれと頼まれることもあって、たまにメインとして子どもの前で授業をさせてもらうこともありました。

それから SBTP とはどんなものだったかというと、先程 52 の学区に分かれていると言いましたが、ここ全体でやっているわけではなく、たった 2 つの学区でやっていました。それでもすごい人が集まるのですが、先ずは模擬授業を観察し、その後に検討会に参加してアドバイスをするという 2 本柱でした。模擬授業の時はこんな感じです。このために 1 カ月くらい前から先生が準備をしているので、教材があつたり、先生たちの板書が綺麗だつたりという工夫がされていました。また、同じ立場で先生たちが意見を交換できるようにということで、こんな風に検討会もやりました。なかなか途中で意見を挟めず、最後に意見はと求められていたのですが、校長先生からアドバイスお願いします、のような形で話していました。授業の前に先生に会える時は、実験の資料を見せてもらい、アドバイスさせてもらって、それから事後にアドバイスという形で行っていました。間違いが結構多いので、このセクションは間違えを指摘したりもしていました。その中で気づいたことは、フィリピンの現実です。教科書が足りません、それからノートをとらせていません。足りない教科書は一人一人に渡せないので、学校に置きっぱなしになります。ノートを取らないで帰ると、家で復習したり、何か発見したものが残らないのですね。そのため、その場で理解して覚えて帰れる子でないと置いていかれます。ほんとは基礎・基本が全員に定着しているような授業をしていきたい、と思っています。また、板書が児童のために工夫されていません。一回の模擬授業のためには考えますが、毎回の授業のためには準備されていません。そのため説明がわかりにくいです。授業の目標をはっきりと提示して、わかりやすいクリアなプレゼンを板書に残す、発見のネタを板書に残すという授業をして欲しいと思います。さらに先生自身の理解が不十分です。また、とにかく喋っています。子どもはただ聞いている。先生がずっと喋っている。「わかった」と言えば、「はい、わかりました」とわかっていないなくても答えなければいけないような雰囲気です。喋っている時間は先生の方が短くて、子どもたちがいっぱい質問したり、意見交換したりするような授業がして欲しいと思います。しかし、フィリピンは先生中心の授業です。私が目指すのは児童が中心の授業ということ、逆でした。勝手に作った教育改善です。目指す発見教育がここにあったとしたら、下の方にフィリピンの現実がありました。どこから手をつけていいのか全く分からなく、しばらく困ってしまいました。何が困ったかというと、1 個の授業を見さ

せてもらうと突っ込みたいところが 10 個ぐらいあります。それを全部言ってしまうと、関係も悪くなるし、外国から来た人が何を言っているのみたいな感じになります。そのため、ストレスを貯めながら授業に向かうことになりました。今は日本語で伝えているので、言いたいことは全部ペラペラと出てくるし、聞いている先生達も理解しやすいと思うのですが、英語なので細かいニュアンスが伝えきれなくて、言いたいことだけズバッと言うすごくきつい印象になってしまったりして、伝えきれません。また、外からきた人が何を言っているのという風に聞かれてしまう。もう少し効果的な方法はないのかととても悩みました。問題点は一つの所に集約できるのではというように悩んだ結果、最初に目標を立てた発見学習はとりあえず置いておいて、単純にもっとわかりやすく、手作り教材を紹介して行こうというように思いました。

先ず、フィリピンで手に入る安い材料を使う、操作可能で発見学習につながりやすいという教材を開発し、手作りで作りました。フィリピンの先生たちに自分で作って欲しかったと言うのが、この安い材料の理由です。例えば、見た事があると思うのですが、表に数字、裏にドットがあり、目で数字を理解する教具を先生達用と子どもたち用を作りました。それからハイルーズ、日本の学校だとマグネットでできているのですが、黒板がマグネット使用になっていないので、ポケットをいっぱい作ってファイルを出し入れしやすくしました。もちろん子ども用も作りました。それからこれはくるりと回るとカラーの部分の大きさが変わるのが、分数のやつとか、立体とか、ゴムで図形が変えられたりとか、Place Value とか、平行四辺形の公式を覚えるために形が変わるモデルとか、とにかくたくさん作りました。これはたまたま 8 つしか入らなかったのでそれだけしか入れていませんが、たくさん教材を作って、SBTP の後などに紹介して行きました。さつきも問題視していたフィリピンの現実、この 3 つの現実は教材を使うと理解の遅い子でも理解できるようになります。見て覚えられ、触って操作をさせることで、子どもの理解が深まります。板書は板書が工夫されてないとかわかりにくい説明になるということも、板書がなくても、その教材を見せて使うことで板書の代わりになります。子ども自身が発見するヒントにもなります。

それからここの 2 つの問題点、先生が理解していない、喋り続けているというところは、教材と一緒に作っていく過程でコンセプトもはっきり先生たちの中に入っています。教材は一度作れば長く使えるということで、教材を使う発想が発見学習の導入への足がかりになるのではないかと自分を無理やり納得させて教材を広めていました。新任研修会や教員研修会でこの教材を紹介したり、それから使い方を教えたりしていました。多い時はこんなにたくさんの先生たちの前で喋ることもあり大変緊張しました。英語ですし、手がブルブル震えました。子ども達の数が多いので先生達も多いのです。

わかりやすい授業造りのヒント教材の使い方や作り方などを提案してきました。ここまでは順調にいったのですが、行って 1 年たたないうちに SBTP が無くなっちゃいました。導入されたきっかけはアフリカのプロジェクトだったのですが、それが段々と引いていき、現地の先生たちに任せることになったのですが、3 年終わって違う地区に移動するタイ

ミングで、移動しないで始まらないまま消えていってしまいました。SBTPがないということは活動の中心の行事が無くなつたということで、年に何回かしかない先生達の研修会以外に先生達に直接教える機会が無くなつたということです。とてもやる気がそれてしましました。ちょうどその時、多分行かれる方は誰でも経験すると思うのですが、モチベーションが下がります。それと同時に体調も悪くなり、その時猫に噛まれて狂犬病の注射を5本打ち、寄生虫をおなかに飼いなど、全部が落ちていく時が絶対あります。どうやって復活したのか気になると思うのですが、もがいてもだめです。そのようなときは、大きな声では言えませんが、餌は巻き終わっていたはずと、果報は寝てまで遊んで待て、というのが私流の復活の仕方です。やはり先生たちを集めるチャンスがないというのはすごく困ります。こまめに回ったとしても、先生達全員にお話ができるわけではないので、とにかく人を集め一気に何かするチャンスを作りたいということで、ワークショップの独自開催に向けて動き始めました。そのための障害はたくさんありました。例えばSBTPが無くなつた、組織が大きすぎるなどです。時間と場所、授業を潰して時間を作る権限は私にはないので、偉い人の協力が不可欠です。それから教材を作ります。材料は安いのですが、それすら先生たちは出したくないということで、それでもお願ひして、先生達が個人で負担してもらうようにしてきました。先ず、これを動かすには偉い人の協力が必要でしたが、その人が台風被害の大きかつた学校でワークショップを開かないかと誘ってくれました。台風被害というのは、私が行って1年目ぐらいの時にあった洪水被害で、学校がめちゃくちゃになつたり、教室に丸太がずどんとつっこんだり、また、中にあった学校用の教科書がすべて流されてしまい何にもなくなつてしまいました。私はブログ書いているのですが、ブログの記事・写真を見て、日本からたくさんの教材が届きました、それからお金も届きました。3番目は竹なのです。竹で家を建てているのですが、私は竹を運んで、建てる材料を提供したり、服を提供したり、学習用具を提供したりしていたのですが、それを偉い人が見ていて、ワークショップを開きましょうということになりました。「ココ」って私の事なのですが、「ココが行くから午後の授業をキャンセルして先生達を集めなさい」と偉い人が言うと、まあまあ偉い人が、「はい、わかりました」と二つ返事でオッケーしてくれます。そして各学校の校長先生ややや偉い人達が、「お昼を用意してお待ちしております」となり、すんなりとワークショップをさせてもらいました。52地区があると言いましたが、その中でどんどん輪を広げて行きました。15地区位は回れたかと思います。

そして最後に手をつけたのが参考書作りです。教科書があまり良くない、教科書に沿つたレッスンプラン集というのがあるのですが、それもまたあまりいい図がない、時間が長いというものでした。もう一人フィリピンに派遣されていた小学校の先生が、自分達で作らないかと提案してくれました。ただ二人しかいないので厳しいのではという話をしたところ、弱い単元に絞りましょうとなり、足し算、引き算、掛け算、割り算、図形、そして分数の参考書を作りました。7か月ほどできました。ばたばた出てきたので4冊あったはずが3冊しか持ってこられませんでしたが、こういうものですね。興味がある方は後で見

てください。それをどうしたかというと、先ずは試験的に使ってもらう学校を募って、こんな風に使って下さいという講習会を開きました。講習会は小学校教員 2 人と理数科教員で入っていた 2 人の計 4 人で協力してやりました。SBTP 隊員と言われていた私達なのですが、皆で協力してやり、それから偉い人と私の同僚も協力してくれて、上手く参考書を普及させるべく頑張ってまいりました。また、配った地区に行って使っているかどうかのアンケートをしたり、効果を調査したり、オフィスのお金で増刷を働きかけたりなどしました。私が帰る時点では実現しなかったのですが、そのあとどうなってるかはちょっとわかりません。すごくいい教科書です。

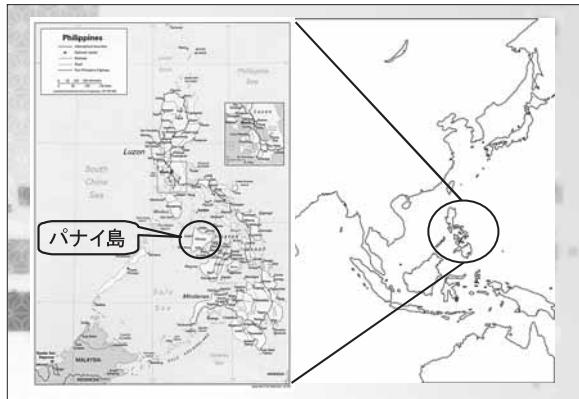
困った時は、窮すれば通ず、七転び八起き、上手くいかないときが実はチャンスで、めげないで乗り越えましょう。ローマは一日にして成らず、石の上にも三年、待つのも仕事のうちで特にフィリピンはそういう国でした。風穴をあける。私達だから見えてくるという視点があり、私たちが行ってできることとはそういうところなのではないかと思います。日本の教育そのものを押し付けるのではなく、その国に受け入れられやすい形にして支援していくべき良いと思います。最後にあばたもえくぼ、最後はクリスマスパーティでこんな衣装を着て一緒に踊るくらいになりました。ありがとうございました。

活動報告

**What can I do for pupils
in the Philippines?**

～フィリピンと向き合った1年8ヶ月～

平成19年度1次隊 小学校教諭
イロイロ地域教育省
小倉 琴恵



配属先について
DepEd Iloilo

パナイ島イロイロ州
小学校数
980
5つの行政区
52の学区
に分かれている

何しに来たの？

- >SBTPへの参加・アドバイス
- >イロイロ州内980校の算数のレベルを上げる

1校の小学校教諭

じゃなくって

980校の先生の先生役

でかすぎる…

とりあえず目標を決めよう！

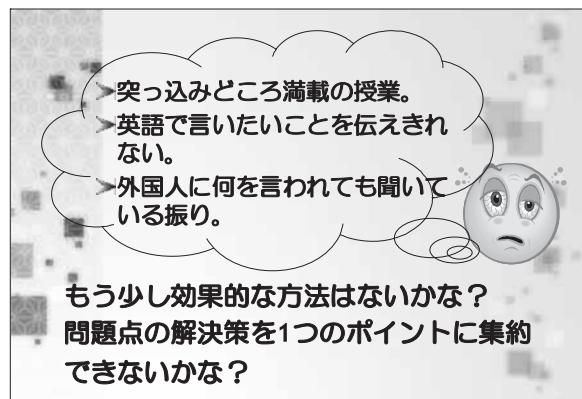
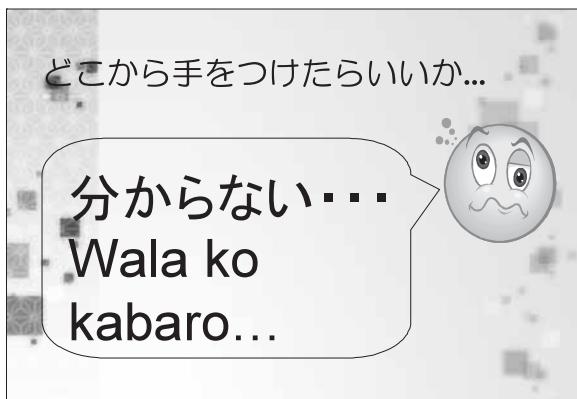
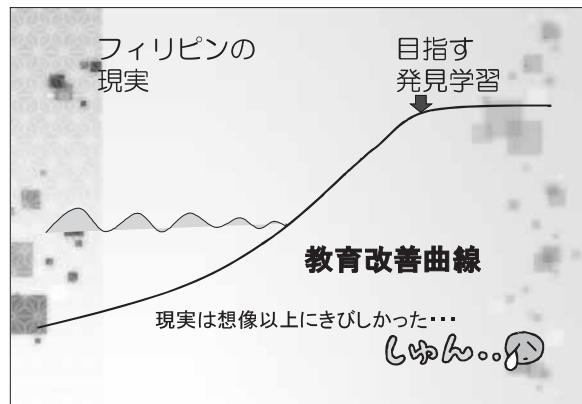
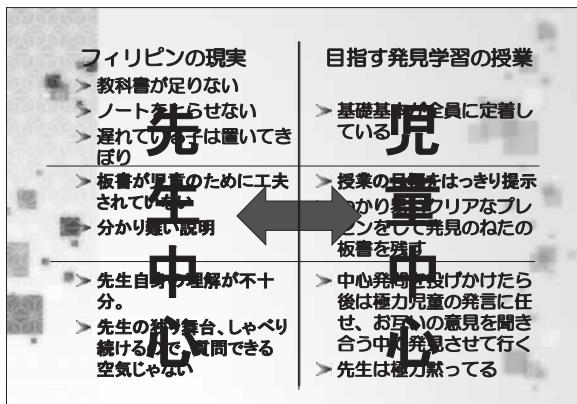
発見学習 の導入

>児童一人一人が自分で解き方を考えたり、
発見したりできる授業

フィリピンの小学生に
より分り易い授業を受けさせたいっ！

活動の5つの柱

- 1) 学校めぐりで通常授業参観
- 2) SBTP（教員研修会）参加
- 3) 新人研修会・教員講習会で講演
- 4) ワークショップ開催で教材作り
講師
- 5) 参考書作り



発見学習導入はとりあえずおいといで…
**手作り教材を紹介
 していこう！**
 フィリピンで手に入る安い材料を使う。
 操作可能で発見学習につながり易い。

フィリピンの現実 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 教科書が足りない ▶ ノートをとらせない ▶ 遅れている子は置いてきぼり ▶ 板書が児童のために工夫されていない ▶ 分かり難い説明 	教材を使うと… <ul style="list-style-type: none"> ▶ スローラーナーにも理解のチャンスがある。 ▶ 操作させれば子どもの理解が深まる。 ▶ 板書が無くても、ある程度板書の代わりにもなる。子ども自身が発見するヒントにもなる。 ▶ 教材を作る過程で先生自身、単元に対する理解が深まる。 ▶ 教材は一度作れば長く使える。
--	---

教材を使う発想がのちに発見学習導入への足がかりになる。信じたい。

3) 新任研修会・教員研修会で講演
 イロイロプロビンスを5つに分けた行政区ごとに回る。
 300人以上の先生たちが集まる地区もある。

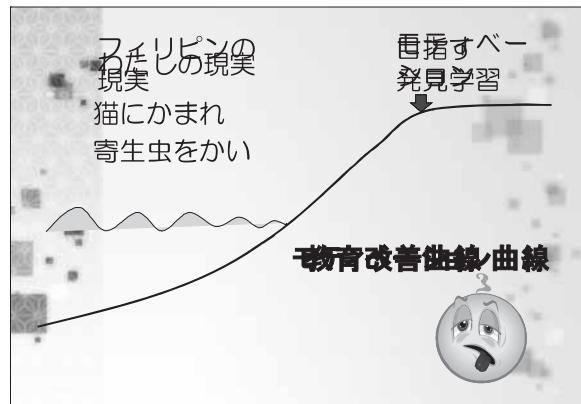
分かり易い授業作りのヒント。教材の使い方、作り方。
 フィリピンにはなかった新しい概念の提供。

順調に行くはずか…

▶ **SBTP（教員研修会）参加**

3年間のSBTP期間が終ったので卒業。
 次に開催する予定の地区へ移動。
 6月から始まる予定が…
 なかなか始まらない。

SBTPがないってことは、活動の中心行事がなくなったということ…。



どうやって復活したの？

遊んでました

大きな声では言えませんが…。

しかも丸2ヶ月も。ダイビングとか旅とかしてたなあ。

もがいても駄目なときは駄目。
 えさはまき終っていたはず。
 後は「果報はねて待て」
 遊んで待て…。

4) ワークショップ 独自開催に向けて

たくさんの障害あり

- >SBTPがなくなったこと
午後の時間をワークショップに使えなくなった
- >組織の大きさ
5行政区 52学区ある
- >時間と場所
授業をつぶして時間を作る権限は私には無い
偉い人の協力が不可欠
- >材料費
先生たち個人持ち
田舎だと買いにいくのに一苦労
そもそも自腹を切るという感覚がない

台風被害が大きかった学校で、ワークショップを開かない？

Dr. De Juan

台風フランク上陸

被災者救済のために、できる事はなんでもやってみました。

とっても偉い人 イロイロ州のナンバー2

ココがワークショップを開いてくれるって。
午後の授業をキャンセルして先生たちに集まつてもらって。
次の日からその教材を使って授業ができるわよ。

まあまあ偉い人 各学区のトップ

午後の授業は中止します！
せっかくだから近くの小学校からも先生たちを集めて、合同でやりましょう。
準備物は先生立ち持ち寄りにしましょうね。

ちょっと偉い人 各学校の校長先生

各先生たちに連絡して、準備させます。
お昼用意してお待ちしています。

ワークショップ実現

- >ポトタン・II
- >ハエワイ
- >ハロタックビエホ
- >オトン
- >レオン
- >カバトゥアン
- >ドゥエニアス
- >後々地区だ！

5) 参考書作り

こちらの既存のレッスンガイドに問題あり。
自分たちで作りませんか？

二人だけで???

弱い単元に絞ろう！

- >足し算・引き算
- >掛け算・割り算
- >図形

ボホールT隊員

後から一人で

分数

できたっ！

隊員支援経費で印刷
申請から完成まで 7ヶ月！

長かった

参考書説明会開催
23学区100人を集めて、
模擬授業、グループワーク、説明、質疑応答を行った

SBTP隊員の力を集結

強力な助っ人も登場

参考書を普及させる

- ほこりをかぶって本棚に並べられる姿を見たくない
だから

>配った地区に通って様子を見る
>23の配布地区で実験
>効果を調査
>オフィスのお金で増刷（実現せず）
>残りの29学区にも配布（4冊目で実現）
>知り合いや隊員を通じて他のDepEdや学校にも紹介

帰国直前の活動の5つの柱

- 1) SBTP（教員研修会）再開の働きかけ
- 2) 学校めぐりで通常授業参観
- 3) 新任研修会・教員講習会で講演
- 4) 残り44学区でのワークショップ開催で教材作り講師
- 5) 参考書普及の働きかけ

まとめ

窮すれば通ず **七転び八起き**
うまくいかないときが実はチャンス。めげないで乗り越えよう。

ローマは1日にして成らず **石の上にも三年**
待つのも仕事のうち。

風穴をあける
外国人だから見えてくる新しい視点
フィリピンにも受け入れ易い形の技術支援を！

あばたもえくぼ

Thank you for listening!

好きになったら多少のことは気にならない！

参考資料

何で発見学習が大事なの？

学習意欲・自己解決能力を高める。

学習意欲が湧く瞬間って？

- ほめられた時
- 「分かった！」時



授業中に児童の活躍の場を作れる
幅広い理解速度に対応できる
深く考え、自己解決できる場が作れる

発見学習

- ▶教師が結論を与えるのではなく、児童自身に探求させ、自ら課題に対する回答を見出したり知識体系を発見構築するように導く教授法。
- ▶知識の習得よりはその背景となる問題解決能力あるいは学習に際しての思考の方法や態度を身につけさせることに力点を置いている。
- ▶学習場面だけではなく生活場面において何が問題にぶつかったときに、解決できる方法を持ったり解こうとする意欲を持つことができる。

～青年海外協力隊で学んだこと～AFRICR・ZAMBIA

戸田裕美

(19-1、ザンビア、体育、東郷町立東郷中学校)

今しゃべらせていただいたのはザンビアという国で私が習いましたベンバ語という現地語です。私の名前は戸田と言います、私はザンビアから戻って来ました、今は東郷中学校で働いています、私は教師です、というようなことをベンバ語で喋らせていただきました。これまでに 3 つの講演を聞かれて見えると思うのですが、皆さんのが行かれる国でも現地語を学ぶということがちょくちょくあると思います。挨拶程度の現地語だけでも覚えておくと、受入れが大変良くなりますので、覚えていただくといいかなというように思っています。それでは私の講演をさせていただきたいと思いますので、宜しくお願ひします。パワー・ポイントの使い方が慣れないなくて、実はザンビアでやり方を少し覚えました。とても緊張しておりますので、どうぞ優しい気持ちで見守っていただけたらというように思っています。今日の報告内容ですが、任地の紹介、それから配属先の紹介、活動要請の内容、実際にどんな活動をしたか、自分の評価と反省、そして今後どういう風にしていきたいかということを柱にお話していきたいと思います。

それでは最初にザンビアという国がどこにあるのか、多分どなたも知らないのではないかと思います。こちらにある地図は JICA 手帳というこの手帳からとらせていただいた地図です。この手帳はとても使い勝手が良く、隊員をやった方は多分とてもこの手帳が好きで、私ももう一回欲しいなと思っているのですが、なかなか手に入りません。是非重宝してもらうといいかなと思います。これは子どもたちにザンビアの場所を教えたり、ザンビアのことについて話をするときに作った資料で、どれがザンビアだと思うとかいうように言うと皆手を上げます。1 番にも 2 番にも 3 番にも 4 番にも手が上がるとやっぱり知られてないなあということがよくわかるのですが、3 番のアフリカの真ん中より少し下のあたり、これがザンビアという国です。1 番はエジプトで、2 番はガーナで、4 番が南アフリカ共和国という国だよというようにいっても、南アフリカは良く分からぬというのが子ども達の印象です。私がいるのは中学校ですが、中学校で地理を習っているのではと思うと思うのですが、それでもアフリカというのは遠い地なのだろうなというのをこういうとき感じさせられます。どんな国だったかというと、面積は日本の約 2 倍、人口は日本の 10 分の 1 くらいです。実際のこの人口がどれくらいかというと、東京都の人口ぐらいになります。そのため、ザンビア人に東京の人口がこの日本の 2 倍の土地に住んでいるのだよというような話をするととてもびっくりしています。それから首都はルサカというちょっと標高の高い所で、民族は 73 部族ととても多くて、その部族ごとにいろいろな言葉を使いまして。ベンバ系、ニヤンジャ系、トンガ系、ルンダ系というように大きく分けると 9 つくらい

いの系統で、私がさつき喋っていたのはベンバ系といわれる人たちが使っていた言葉です。公用語は英語です。73 の言葉を使っていても全然話が通じないので、ということで英語が使われています。本当に似ている言語もあれば、全然違う言葉もあります、例えばベンバ語でありがとうだと、マトペラターナ、ニャンジャ語だとリコムグワンリーニ、トンガ語だとトワルンバ、ロジ語だとニトベリハブルというように、表現の仕方や、拍手をするところもあれば、なにかこう膝は曲げないだとか、手をちゃんとつないでしゃがむだとか、いろんな様式があって、先生方も自分が住まれるところがどういう風なのかということを現地に行かれたときにはすぐに調査をしておくといいのではないかなというように思います。宗教は 8 割近くがキリスト教、それからイスラム教、ヒンドゥー教などですが、その土地にしかない宗教というのもあります。祭日が 10 月 24 日ですね。備考ですが、アフリカというと暑いというイメージをもって見える方も多いと思うのですが、実際に私のいた地域は、大きく分けると乾季と雨季、雨が降る、降らないどちらか、暑いか涼しいかのどちらかです。昼に暑くなると、朝はとても寒くて毛布一枚ないとちょっとつらいなという時もあれば、昼になるとすごく暑いということで、朝着たコートをそのまま昼も着ているというような人がいたということも良くありました。ザンビアの地図がこれで 9 つの州でできています。いま矢印が付いているのがルサカといって首都のある州です。交通はすべてここからのスタートになりますので、例えばこのノープラプロジェクトというところから例えばこのノーブレスタンという所に行きたい場合は、一度ここからバスでずっとこのルサカというところまで行き、そこからまたずっと行くというとても遠回りな行き方しかできません。次ですがサウザンノービンス、これはザンビアの中では 2 番目の都市で昔は首都だった場所です。世界三大バブルと呼ばれるうちの一つビクトリアフォールズという美しい滝があります。これは雨季の時の様子で、すごい水量です。乾季になるとちょっと水の量が減ります。他にはホッパーイード、このホッパーという言葉は象という言葉になるのですが、象が良く取れる地域で、ここで象が取れるかどうかで、景気が上向きになるか、下降するかということが決まるというくらい重要な場所になります。それからノーザンコーリンズ、これはタンザニアにつながるタンザン鉄道という結構有名な鉄道が通っています。週に 1~2 回しか通らないのですが、時速 20 キロぐらいでとても遅いです。それからウェスタンノービンス、ここはちょっと特殊な場所で王国があります。国の中に一つ王国が、そしてその王国はちゃんと認められている存在であるというとても不思議な国でした。これはロジロフという人たちが着ていた衣装・帽子です。雨季になると王様が住んでいるところが水で沈むというか移動ができなくなってしまうので、この船に乗ってそこから川を上って行って上方にある宮殿で過ごします。実際にこの船には 100 人以上の人気が乗ってすごいお祭りになります。アフリカではとても有名なお祭りということを聞いています。男の人がこんなスカートをはいていて、女の人はこんなちょっと大分ぶくつとしたこのような服でお祝いをしています。それから、私がいたルアップラ州というところです。直線で結ぶと、ルサカからルアッラ・アラッシュまでは 5~6 時間くらいでばっと行ける

のですが、先ほど言ったようにここはコンゴになるので、コンゴは行ってはいけない国だということと、このルサカというところからこう遠回りにしかいけないということで、バス 10 時間かかります。もちろん移動の時の長距離バスはすごく狭いです。日本の 10 時間であればパーキングエリアがあって、すごくきれいなトイレがあって、ご飯も食べれてというような感じなのですが、当然トイレもありませんので野原でトイレということもあります。ほんとにちょっと困っただけじゃない、というところだとお金払えというよう言われ、物乞いやいろいろなものもあって、日本の 10 時間とは違うという感じです。私が行きましたルアプラッシュというのはマンサという州都がありまして、私はそこの州都で働いていました。先ほど言ったようにルサカから 10 時間かかるところです。この写真ですが、アフリカ最長の橋トゥーカブリッジというところを通るのですが、そこから見える風景で、これは雨季になるちょっと前なので、まだ野原みたいのが見えるんですが、雨が降ると一面が湿地になるという状態です。あつ、すいません、アフリカ最長ではないようで 2 番目になったそうです。配属先ですが、私がいたのは教育省の中にある教育大学、カレッジアットという 2 年制の短期大学みたいな所で、全国中で 14 校だけあるという学校の 1 つです。私が来たときはカリキュラムが変わった年で、7 月からのスタートになりますので、向こうに到着してから 7~11 月はまだよくわからない状態で過ごしていました。その次の年から新しいカリキュラムが始まるということで、2 年制大学のうち、最初に行った時は 2 年のうちの 1 年はもう生徒達は外に行って全部教育実習でした。そのため、1 年間で全部勉強します。それでは 1 年間の教育実習が長すぎるだとか、まだ学べない、ということでそれが変わって、2 年のうちの 1 学期だけが教育実習というシステムに変わり、ここにある 2nd Year – Certificate course ということになって、1 年間は学校で勉強、それから 1 学期学校で勉強、そして 2 学期は外に行って教育実習やり、3 学期戻ってきて勉強して試験を受けると、いうようにやりました。それでずっと行くのだろうなと思ったら、また次の年に変わるということで 3 年制の大学になってしまい、この子たちは Primary Diploma course といって下が 7 年生まで教えられるコース、上が 9 年生まで教えられるコースということで、ころころころころ変わっていく中で授業をやっていました。

このような銅像が各大学にはありました。次の活動要請内容ですが、皆さんもう知って見えるかもしれません、各国に行く前に皆さんこういう仕事をするのですよ、という調査表を恐らくもらっていると思うのですが、私のその紙にはこの 5 つのことが書いてありました。単なるスポーツの指導ではなく、体育の指導者を育てるべく授業を行う。それではなぜ体育でわざわざ行かなければならないかということなのですが、実は 2005 年までこの国には体育という授業がありませんでした。2005 年、体育をきちんと学校でやれ、体育というイメージはあっても体育をやっていないので体育をきちんとやれ、ということが大統領の声明で出されて、それをやらなければいけないということになりました。先ほど小倉さんが言ってみたように上の人が言った方が早いのですね。やらなきゃとなっても、体育受けたことがないからわからない。経験もないものを教えない、という状況だったの

で、とにかくスポーツの指導ができて、さらにスポーツではなくて体育というものがどういうものなのかということで、指導者を育ててほしいというような要請がありました。ただ、やはり行ってみないとわからないということがたくさんあり、実際に向こうに行って、校長先生、それから同僚になった方、それから調整員だといろいろな方とお話をしてもうと決めた内容がこちらです。もちろん体育の授業はしないといけない。ただ生徒は試験に通ることが必死ですので、勉強さえできればいいと思っています。そのため、理論の授業には来るけど実技の授業には来ない、というような形になります。試験で通ればやれてしまうのだから、今日理論だよ、今日セオリーだよ、というと全員来るのですね。今日は実技だからというと誰も来ないと、着替えもせずに来るだとか、ほんとに女の子もサンダルで来るとかそんなことがしそうある。実技が大事なのですということがなかなか最初は浸透しなかったのですが、全ての生徒の名前を覚えて、全て生徒のチェックをして、来なかつた生徒の寮まで行って、おまえ何で来なかつたのっと聞く。全部やつたら全員来るようになりました。この辺は先生達のやり方次第かなというように思います。特に相手が生徒の場合は、結構先生は偉いとかいうような感じがあるので、こちらが努力すればもしかしたらそれが反映されるのではという部分がお互いにありますので、ぜひ様子を見てもらえたならと思います。

また、校内スポーツ大会の企画や学校行事ということもやれたらなということでいろいろ取り組んでみました。実際にその一つ一つの紹介ですが、まずは先ほど言った理論です。これは私がきっちり言っていないと絶対に授業には来てくれないということが良くわかつたので、理論の授業をやりました。ところが行ってすぐの時には、本当に私は英語ができなかつたものですから、どうしようということで、全部ノートに書いたり、これを説明しようとか色々考えていたのですが、同僚と一緒にやろうとちょっとある種たかをくくつっていた部分がありました。ところが、働き始めて 1 カ月しなかつたころに置き手紙がポツンと机の上に置いてあって、ぱっと開いてみたら、今日からいいから宜しくね、と書いてあります。このような感じで、いなくなるのですね。本当に突然の形でいろいろな事がおきます。そこから名前のわからない生徒達に教えるという生活がスタートしました。最初の 5 カ月は本当に苦労しましたが、少しずつ模索していく中で、やらなければいけないことが見えてきました。こちらに書いてあるようなことを授業でやりました。もちろん教科書だとかそういうものはないので、写真にあるように自分で紙を購入してきて、書いて貼り、これを写しておくといいよ、というような形でずっと授業をしていました。じゃあ実技はどんなことをやってきたかというと、スポーツアクティビティやルールを教えた後、実際にやってみようということになります。実技の授業では、陸上競技、クラウチングスタートの仕方も知りません。当然ですが、スタートイングブロックってなんぞや、という世界でやり方も名前もしらない。とりあえず座ってスタートするのだと、小学生 1 年生位のレベルのことを大学生が言うわけです。それから器械運動ですね。このような技をやりました。今の学校は先ほど言いました 14 校中の 1 校なので、マットがたまたまありました。

たが、彼らは外でやっています。芝生の上で。スイミングはカリキュラムの中にはあります。イギリスからのカリキュラムをそのまま使っているのでスイミングがあるのですが、プールなど当然ないですからやりませんでした。あきらめてくれというように言いました。こういう風にやるのだよ、といろいろ教えてましたが理論だけです。それからボールゲームということで、サッカー、ネットボール、バレーボールの 3 つをメインに教えてくれというように言われました。ネットボールって何だろう、と多分皆さん思われると思いますが、簡単に言うとドリブルのないバスケットみたいなものです。自分達のポジションは決まっています。アフリカに行かれる方で体育を教える可能性がある方は、ネットボールの情報は絶対に行く前に仕入れておいた方がいいと思います。多分英語でしかルールが出てきませんので、英語の勉強にもなると思いますので、是非検索をしてみて欲しいと思います。それから Traditional songs と games 伝統的な遊びですね。それからこれは道具を使わない運動です。それから Physical Fitness ということでエアロビクスとかそういうのをやっていました。そのうちの Traditional songs と games というのを少しだけ紹介したいと思います。ザンビア人、アフリカ人は特にそうだと思うのですが、踊りとか歌が大好きです。だからこのゲームも彼ら大好きです。これはグループ作りをしているところです。今、トレヤツイカと言いました。あなたはどこ行くの、という意味です。あとはこっちだとか、あと一人なのでそんなにひついたら終わりやんか、というような感じです。そして近くにあった木の棒でラインを引いて、始まるわけです。そして、着替えて入って来ます、ギャーと言っています。はいやられたーって。大学生なのですが、本当に大喜びします。とても楽しそうにやるのですね。これはハンカチ落としのボールバージョンみたいなもので、ハンムシカリカリヤといいます。あのボールは手作りです。新聞紙とビニール袋でくるくる巻いて作ります。言いにくい話なのですが、彼らはこのボールの中によくコンドームを仕込んでいます。跳ねるのです。彼らはそれを良く知っていて、これをきちんと作って跳ねるでしょ、というのです。自分達で作ってそれを授業で使わないと教材がないということを良く知っているので、教材作りという意識もあります。この子は携帯をいじっているので私に怒られています。ハンカチ落としなら追いつかないといけないのですが、これは彼が投げるのです。そしてぶつかった、と大喜びで自分の席へ戻っていくという状況です。見てもらうとわかると思うのですが、先ほどボールをぶつけられたのが 35 歳、ぶつけた子は 25 歳、35 歳から 20 歳までがこの学校でした。これは左側に男の子が並んでいて、右側に女の子が一列で並んでいます。良く見るとわかると思うのですが、これはペアです。男の子一人、女の子が一人、私達のダンス素敵でしょ、というような感じで一人一人捕まえるのです。この捕まえるのは何なのですかと聞くと、将来のパートナーを見つける練習だそうです。この歌も今から一緒にベットに行きましょうね、となかなかきわどい歌なのですが、それを小学生がやっています。とても楽しそうに、意味わかっているのかなっ、というぐらいの感じです。それを自分が踊れないといけないという状況でした。

体育施設と道具の管理ですが、そういった事もやっていました。とにかく施設はぐちゃ

ぐちや、あるのかないのかもわからない状況からのスタートです。体育器具庫は大体こんな感じです。ぐちやぐちやで何がどこにあるのかわかりません。しかし支援をされている経験もたくさんあるので、ごそごそやるといろいろなものが出てきました。例えば、いろいろ探ってみると袋の中にたくさん靴が入っているということもありました。下に並んでいるボールもこれは使えるボールという状況なのです。次ですが、これも靴がまだ更にあって、上はスパイクです。サッカーのスパイクがたくさんありました。その上に並んでいるボールは全部使えないボールで、実はもらってきてあつた袋に詰め込んでいたら怒られたのですね、これはエクセクトボールだからだめだというように。すごく使われて、すごく大事にされて、それでもう役目を果たしたボールだから捨てちゃいけない、ということがあって、自分達は使えないものは無くして次新しいものを入れていくというようにしないと、どれだけ必要か分からぬのではということで整頓していたのですが、整頓して喜ばれた部分と怒られた部分がありました。本当にいろいろな人たちと話をしながら物事を進めていかないといけないと思います。道具があつても、あつたということも知らないわけですから、借りることもできません。そのため、貸出制度を作りました。バスケットをやりたいからバスケットボールのコートを作つて欲しいと言わされたのですが最終的に予算をつけるところまでやり、後任が引き継いでいるという状況です。自分はできませんでした。視聴覚教材を作ると、いろいろなコードの資料などは当然ありません。大きい紙をもらってきては全部こうやって書くわけです。バスケットボールのもの、もちろんバレー、ネットボール、なんでも書いて全部教室に掲示をしました。これは器械運動の絵です。それから教科書データを作ると、先程の小倉さんの物と比べると非常に安っぽいものなのですが、うちの学校にはコンピューター室があったのでそこで閲覧できるように CD でのデータをいくつか用意して置いてきました。といいますのは、印刷をするお金はないというように言われたからです。そのため、印刷できるお金ができたらこれをコピーして下さいというように残してきました。

また、スポーツ大会についてザーッと流してお話しします。1 学期と 2 学期にはトーナメントというのがありました。教員養成校だけのトーナメントです。1 学期は陸上競技、2 学期は球技大会が一応中心で、これに関係するようなゲームを学校でやりました。それから、クラブ活動もやりました。水曜日の最終の時間、授業が終わった間にクラブ活動という時間がありました。体育も時間割にあるのですがやらなかつたということが問題で、クラブ活動も時間割にあるのですがやっていませんでした。それはモチベーションが低いからであつたり、やり方がわからないからであつたりいろいろな理由があるので、こういうこともやってみました。生徒達にどんな部活がやりたいというように聞くと、このような部活動を幾つか挙げてくれました。柔道をやっていた先生がいたので、柔道着を日本からなんとか手に入れて、このような Martial Arts クラブというのも作りました。いろいろな部活を作つて子どもたちは楽しんでくれていました。

最後に学校行事ということで、陸上大会や球技大会を開催しました。こちらの子がやつ

ている手で何かするというのは向こうでは主流です。当然ラインカーなどはありませんので、まずはラインをピーっと引いてそこを掘って、掘ったところに粉をまくというようにやっていました。これが最も一般的なやり方です。最後の粉がないことの方が多いかったです。また、カルチャーナイトということで文化祭みたいなものをやりました。それからジャパンニーズフェスティバルということで日本の文化紹介というのもやってみました。隊員に協力をしてもらってロックそろばんをやるだとかそういったことも進めていきました。これを通じて、生徒達が現場に行った時に学校行事をやってやろうという気持ちになってくれたらという気持ちでやっていました。

自己評価と反省です。自分が体育を広めるために必要だなと思うことの目標の一つとして、生徒の知識の定着がありました。そのためにやらなければならないと思ったことが 3 つあります。通常の授業、エキストラレッスン、つまり実技、そして各単元のノートを作り誰でもコピーができるようにする、というようなことをやりました。エキストラレッスンがなかなか上手くいきませんでした。また、自分の英語力を考えると、100%には至らないなという状況でした。それから。学習環境の整備ということでこの 3 つをやらなければと思っていたのですが、それなりに上手くいった部分もあったのですが、同僚がいなくなったり、同僚がころころ変わったり、いろいろな理由があってなかなか継続して次に続かなかつたということで、30%のマイナスポイントというようにしています。それから自分自身のスキルアップがそのためには必要だということで、ネットボールやトラディッシュナルゲームなどの知識の習得をしたのですが、やっぱり現地人には負けるということで、マイナスポイントがたくさんありました。それから各学校の巡回指導もしましたが、できればいろいろな小学校を回ってやってみたかったのですが、先程も言った通り、同僚がいなくなつたということで学校の授業穴を開ける事ができなくなり、巡回指導をやろうと決めていたのにも関わらず、最初の少ししかできなかったので 20%、また、最後にワークショップをする予定だったのですが、自分のやり方に固執してしまったがためにできなくなつてしまつたということもあって 0%、全くできなかつたという反省もあります。

これからは日本での還元活動ということでいろいろなことをやっていきたいと思うのですが、ザンビアにいた間にザンビア通信というのを日本に送っていました。こちらにありますので興味のある方は後ほどご覧下さい。日本にいる間になかなかできなかつたことなのですが、日本に帰つてからこういう写真を撮つて。これをどういう風につなげてどういう教育をしたらいいのかとか、そういうことを考えてもっと 2 年間過ごせたら良かったな、というのが今の反省です。

大変長くなってしまいました。御清聴ありがとうございました。

帰国報告会

～青年海外協力隊で学んだこと～
AFRICA・ZAMBIA

19年度第1次隊 戸田裕美

報告内容

- 任地紹介
- 配属先の紹介
- 活動要請内容
- 活動の実際
- 自己評価・反省
- 今後の課題
- 最後に

ZAMBIAってどこ？

1 ↗ エジプト
2 ↗ ガーナ
3 ↗ ザンビア
4 ← 南アフリカ共和国

ZAMBIAってどんな国？

- ◆ 面積 日本の約2倍
- ◆ 人口 1,192万人（2007年）…日本の10分の1くらい
- ◆ 首都 ルサカ（人口約140万人） 海抜 1,227m
- ◆ 民族 73部族（ベンバ系、ニヤンジャ系、トンガ系、ルンダ系）
- ◆ 言語 英語（公用語）、ベンバ語、ニヤンジャ語、トンガ語、ロジ語
- ◆ 宗教 8割近くはキリスト教
その他…イスラム教、ヒンドゥー教、伝統宗教
- ◆ 国祭日 10月24日（独立記念日）

ZAMBIAってどんな国？

- ◆ 気候 四季はない

涼しい乾季	4～6月
暑い乾季	7～9月
暑い雨季	10～12月
涼しい雨季	1～3月

※ 暑いときは40度くらい、寒いときは10度以下
※ 朝と夜は寒く、昼は暑い！

ZAMBIAってどんな国？

1. 任地紹介

- 州都 Mansa, Luapula Province
- 首都 Lusaka ~長距離バスで約10時間



アフリカ最長の橋（Tuta Bridge）から見える風景

2. 配属先紹介



- MANSA COLLEGE OF EDUCATION
- 全国教員養成校 14校のうちの一校
- 1st Year - Primary Diploma course
生徒数約170名 6クラス
- 2nd Year - Certificate course
生徒数約120名 6クラス

3. 活動要請内容（要望調査票より）

- 単なるスポーツの指導ではなく、体育の指導者を育てるべく、授業を行う。
- 実技だけではなく、保健・応急処置等も含む。
- 生徒に対してのみではなく、教員となっている人たちも対象にしたワークショップの開催
- 各種スポーツ大会の企画・運営
- 地方の小学校には利用できる満足な機材もないため、身の周りにあるもので工夫して授業を行う。

4. 活動要請内容（実際）

- 体育の授業（理論・実技）
- 教育実習生の授業モニタリング
- 体育施設・道具管理
- 校内スポーツ大会の企画・運営
- 教員養成校スポーツトーナメントのための指導・引率
- クラブ活動の組織・運営
- 学校行事
(Culture night, Japanese Festival)

4(1) 体育の授業（理論・実技）

- 教室型授業 -

- 体育の目的・意義
- 体育史
- 解剖生理学
(筋肉・骨格・循環器・呼吸器系等)
- 応急処置
- 道具の作り方
- 各種スポーツ・アクティビティの紹介



4(1) 体育の授業（理論・実技）

- 実技の授業 -

- Athletics
- Educational gymnastics
- Swimming
- Ball games
(Soccer, Netball, Volleyball)
- Traditional songs & games
- Perceptual motor learning skills
- Physical Fitness



4(3)体育施設・道具管理

- 体育器具庫の管理 (Stock book)
- 道具の貸し出し制度の確立
- バスケットボールコートづくり
- 視覚教材作成・掲示
- 教科書データの作成



4(4) 校内スポーツ大会の企画・運営 4(5) 教員養成校スポーツトーナメントのための指導・引率

- 2008, Term I
陸上大会 & 球技大会 → Tournament in SOLWEZI
- 2008, Term II
球技大会 → Tournament in SELENJE
- 2008, Term III
Sports club activity → Tournament in KASAMA
- 2009, Term I
陸上大会 & 球技大会 → Tournament in MONGU

4(6) クラブ活動の組織・運営

- 目的
 - 生徒自身の各能力を伸ばす
 - クラブ活動の運営方法を知る
- 週1回（水曜日授業後1時間）



クラブの種類

- Anti - AIDS
- Anti - Drug
- Arts
- Chess
- Choir
- Conservation
- Culture
- JETS
- Martial Arts



4(7)学校行事



自己評価・反省

- 目標達成のための必要事項 -

- 生徒の知識の定着

- 通常の授業を行う
- 体育器具庫の整備を行い、道具の管理を行う
- Zambia特有の種目（フットボール・トラディショナルゲーム等）

近隣の学校教員および校内生徒を対象に、体育の重要性および体育指導法を伝える。
→ 自己評価 0%

今後の課題

- ▶ 日本での還元活動
 - Zambia通信再編集
 - 国際教育



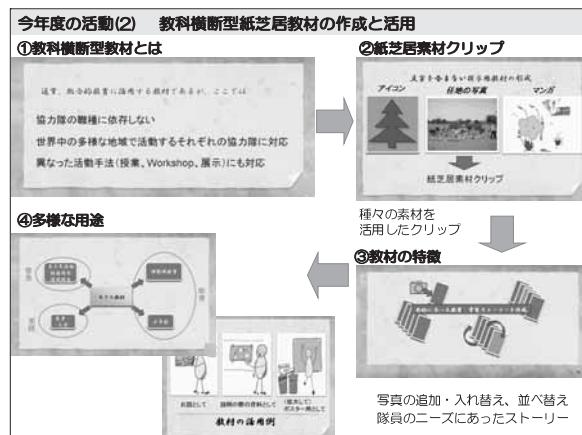
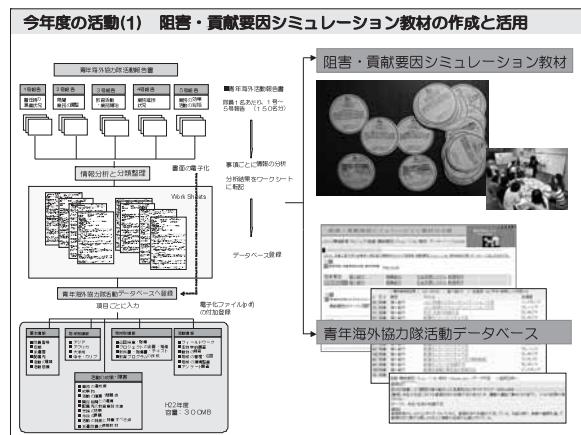
ご清聴
ありがとうございました
NATOTELA SANA!

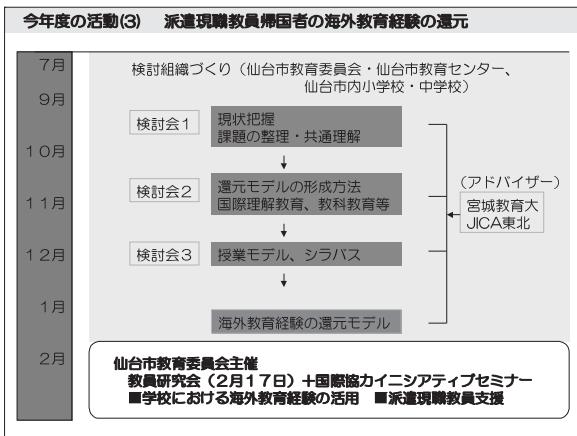
プログラム 6

海外教育協力者に対する教育実践指導と 教育マテリアルの支援

由佐 泰子／三又 英子

(宮城教育大学)





青年海外協力隊必携としての 日本の教育情報の整備と活用

佐藤 真理子／磯田 正美

(筑波大学)

青年海外協力隊としての 日本の教育情報の整備と活用

佐藤眞理子
(筑波大学人間総合科学研究科)

1

途上国における日本の教育情報を有効と考えられる教材作成

－発信－

「日本の教育制度と教育実践一研修のためのヴィジュアル教材」

日本語版・英語版
CD-ROM、及び印刷物

2

平成13～17年度事業
「日本の教育制度と教育実践一研修のための
のヴィジュアル教材」平成17年度版作成

3

「日本の教育制度と教育実践一研修のための
のヴィジュアル教材」平成17年度版の改訂

- ・平成18年度 教育基本法改正
- ・平成19年度 学校教育法改正
- ・平成20年度 学習指導要領の改正
- ・最新の統計資料

4

教材の対象

- ・途上国研修生に対する日本での受け入れ研修
- ・海外教育関係者への日本の教育説明
- ・海外での教育関係者のニーズに応える資料
(青年海外協力隊隊員等派遣者携帯)
- ・その他

5

9教材領域

- I 学校制度の概要
- II 教育行財政の概要
- III 社会教育の概要
- IV 教育課程の編成と実施
- V 学級運営
- VI 学校運営
- VII 保護者・地域との連携
- VIII 教員資格・養成・任用・研修
- IX 学校の生活と文化

6

- I Outline of Japanese School System
 II Japanese Educational Administration and Finance
 III Japanese Social Education
 IV Organization and Implementation of Curriculum
 V Classroom Management and Guidance
 VI School Management
 VII Cooperation between School and Local Community
 VIII Teacher's Qualifications, Training and Appointment
 IX Japanese School Life and Culture

7

小領域

・学校制度の概要	11 小領域
・教育行財政の概要	22 小領域
・社会教育の概要	9 小領域
・教育課程の編成と実施	16 小領域
・学級運営	11 小領域
・学校運営	15 小領域
・保護者・地域との連携	18 小領域
・教員資格・養成・任用・研修	12 小領域
・学校の生活と文化	4 小領域
合 計	118 小領域

8

例:学校経営の小領域(15)

- | | |
|-------------|---------------|
| 1. 学校経営 | 13. 学校選択制 |
| 2. 学校経営計画 | 14. 学校力 |
| 3. 学校教育目標 | 15. 日本の学校経営改革 |
| 4. カリキュラム経営 | |
| 5. 職員会議 | |
| 6. 校長の職務・力量 | |
| 7. 民間人校長 | |
| 8. 校務分掌 | |
| 9. 主任制 | |
| 10. 学校評価 | |
| 11. 教員評価 | |
| 12. 学校の危機管理 | |

9

各教材領域の項目数

・学校制度の概要	44項目
・教育行財政の概要	38項目
・社会教育の概要	41項目
・教育課程の編成と実施	75項目
・学級運営	44項目
・学校運営	40項目
・保護者・地域との連携	71項目
・教員資格・養成・任用・研修	20項目
・学校の生活と文化	67項目
合 計	490 項目

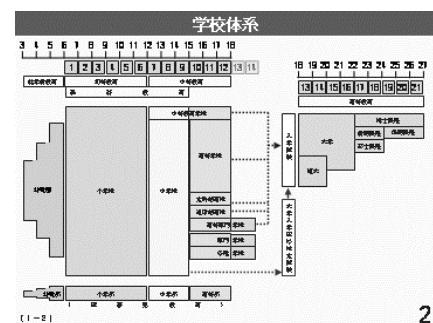
10

教材の作成

- 1項目には
 図 or 写真 or 概要説明、
 及び解説から成る。
 ・日本語版と英語版の作成

11

学校制度の概要



2

12

社会教育主事: Supervisor for Social Education

区分	社会教育主事			社会教育主事補			派遣社会教育主事
	計	都道府県	市町村	計	都道府県	市町村	
平成2年	4173	870	3303	457	31	426	1645
5	3583	792	3191	431	34	397	1623
8	4000	785	3215	454	49	405	1643
11	3599	740	2859	340	33	307	1326
14	3279	756	2523	264	46	218	1056
	(653)	(14)	(639)	(87)	(-)	(87)	

13

教育行財政

教育行政をめぐる改革動向(1)

●1948年 教育委員会法

●1954年 教育二法

- ・教育公務員特例法の一部改正
(職員の政治的活動について、それを国家公務員と同じにするというもの)
- ・義務教育学校における教育の政治的中立の確保に関する臨時措置法(中立確保法)

●1956年 地方教育行政の組織及び運営に関する法律

●1971年 四六答申:

「今後における学校教育の総合的な抜本整備のための基本的施策について(答申)(第22回答申)」

●1987年 臨時教育審議会最終答申

●1999年 地方分権一括法

14

Reform Movement in Educational Administration (1)

- 1948 Board of Education Law
- 1954 Revision of the Educational Personnel Certification Law, and Promulgation of Law concerning Continued Neutrality of Education
- 1956 Law concerning the Organization and Functions of Local Education Administration
- 1971 Final Report of the Central Council for Education
- 1987 Final report of the National Task Force for Educational Reform
- 1999 Law concerned with the advancement of regional devolution

15

教育行政をめぐる改革動向(1)

- 60年代までは、主に教育行政をめぐる戦後改革の変容、70年代以降は中央集権から地方分権へという動向が見られた。教育委員会法によって民主化の原理に基づいて再出発した日本の教育行政であったが、教育の政治的中立を図ることが政策課題であった50年代の半ばに教育委員会法は大幅に改正されて地方教育行政の組織及び運営に関する法律の成立を見た。ここで、教育行政の中央集権化が進んだ。臨教審答申の3本柱(個性重視、生涯学習体系への移行、国際化情報化等の社会の変化への対応)に基づいて、80年代半ばから具体的に展開される教育改革の原型を71年の中央教審答申に見ることもできる。

16

The adjacent flow chart shows that until the 1960s, post-World War II reforms focused mostly on educational administration. After the 1970s, reforms shifted from centralization to decentralization.

The Board of Education Law in 1948 enabled Japanese educational administration to start over based on the principle of democratization. During the 1950s, when the key policy concern was to secure political neutrality in education, the Board of Education Law was revised and the Law concerning the Organization and Functions of Local Educational Administration was enacted. These reforms promoted centralization of educational administration. We can see the prototype of the educational reform steps taken since the 1980s in the Report of the Central Council for Education based on the three principles (respect for the individual, transition to a lifelong learning system, accommodation to the changes in society such as internationalization and information exchange).

17

不登校: Enrollment & Non-Attendance



18

- In addition to special classes for school absentee children, there are similar facilities also in private free schools (? V-25) and free spaces to provide educational instruction for school dropouts. Attendance at these classes is considered equivalent to school enrollment.
- (Measures for School Refusal
? V-20~30)

19

今までの活用

- ・インドネシア・エチオピア・スリランカ・タイの教育関係者(校長・副校長・教員)への日本の教育説明(現地)
- ・アメリカ・ロシア・カタールから来日した教育関係者(校長・副校長・教員・教育行政官)への日本の教育説明
- ・青年海外協力隊員等派遣者に対する配布
- ・その他(アーカイブのダウンロード)

20

入学式: Entrance Ceremony



始業式・Opening Ceremony



22

給食: School Lunch



23

掃除の時間・Cleaning Time



(1年生、2003年12月)

24



特別活動(クラブ活動) Special Activity :Club Activity



26

CD教材から研修キットの作成

各教材領域から研修対象にあった研修キットを作成

研修キット: 30分から1時間: 15項目～30項目

27

情報発信

- 日本の教育経験の情報整備作業として、教材の日本語版及び英語版を拠点システムアーカイブスに掲載。
- 高いダウンロード

28

青年海外協力隊必携としての日本
の教育情報の整備と活用
—パート2：算数・数学学習指導要
領解説—

<http://e-archives.criced.tsukuba.ac.jp/data/doc/pdf/2009/11/CourseOfStudyMathematics.pdf>

代表者佐藤眞理子
発表者磯田正美

発表概要

- 何故、学習指導要領解説か？
- どのように使うのか？
- 開発スケジュール
8月翻訳→11月に公開→1月に研修モデル作り
- 協力隊員と行う研修モデル作り
モデル提案：マーシャル

必要性と過去の実績

- 派遣現職教員の約半数が小学校隊員、その半数が算数をその職務内容に含んでいる。
- JICA：算数・数学を含むプロジェクト27カ国、JOCV57カ国
- アーカイブスでのダウンロードが30位以内
- 利用大学・機関
- 広島大学、鳴門教育大学、北海道教育大学、文部科学省、国立教育政策研究所

日本の教育経験を生かすとは？

- よく聞く考え方：現場で考える。
- よくある誤解：先方側の一般化。日本では・・・
- よくある誤りの起源：自分=日本の代替。
 - 算数の場合：
 3×2 は「3の2つ分」VS 2 times (2回), 2 times 3 (3を2回)
- 現職教員は日本で教育経験がある。
- 同時に現地枠組みで活躍することを迫られる。
- 期待される力
 - 適切な日本の教育経験・日本の教育理解
 - 伝える力（教養+語学力）

学習指導要領翻訳の 協力隊員による利用法 —読まないものを読むことの大切さ！—

- 日英対訳：英語による表現法を学ぶリソース
翻訳：米国在住日本人研究者
↓
バックトランスレーション・編集 by 磯田
- 日本の教育経験を語る際の根拠として
↓
研修の際の基礎資料（研修テキストではない）

日本の教育経験とは —算数科の場合—

例えば：

- 計算ができる。
 - 計算の意味がわかる。
 - 計算の仕方を考える。
- ⇒学習指導要領翻訳ファイルへ
⇒教科書ファイルへ

意味がわかる、仕方を考える、できる

本に於け、中学生・高校生では計算、分母の計算能力を大切に発展させることに注力する。また、中学生で、計算の運びを理解し、計算の仕方や結果について意識しなおしたり、着実に理解したくなるようにする。

(a) 「面上積」の範囲では、量や面積の問題について理解すること、量の大きさについての感覚を身につけること、面積の求め方などを学び、また理解したりすることを重視する。

例えば、世界中で、周囲の風景、遠くの山の大きさを実際に動かす音楽を理解する。中学生・高校生で、量や面積の問題を調べたりまとめてたりする力を培養する。また、音楽で、音節の運動の大きさを量にして、音節の音節の大きさを量で表現する。

(b) 「幾何」の範囲では、图形の面積と周長について理解すること、图形といつての感覚を整かすこと、图形の性質を活用して問題を解くことができることうを重視する。

本には複雑な算術問題を算出する力が「算数」を通じて4年生から6年生まで3年間で、彼らは必ずしも計算の運びを理解し、計算の仕方や結果について意識しなおしたり、着実に理解したくなるようにする。

C. In the "Surface area and Volume" domain, understanding the size of quantities, and calculating the surface area of a rectangular prism, estimating the size of quantities, and calculating the volume of a rectangular prism. In grade 4, through 6, they should develop calculation skills of decimal numbers and fractions. In grades 1 and 4, estimation of results are taught, and students are expected estimate the results of calculations and make appropriate reasoning.

C. In the "Question and Measurement" domain, understanding the size of quantities, and calculating the area of a rectangle, and calculating the area of a triangle, are associated experience. For example, in lower grade, direct comparison of quantities such as the length and area of actual objects is taught in grade 1. Through 4, students are taught to compare and calculate quantities and its relationship between them. In grade 1, students are introduced basic knowledge about area, calculation of the area of a rectangle and square are taught.

C. In the "geometrical figure" domain, understanding the meaning and properties of geometrical figures, calculating areas of geometrical figures, and learning how to use the skills in the geometrical figures in solving problems. It can be considered to be important.

協力隊員との研修活動 モデル作り

- ・ 太平洋／マーシャル諸島では算数科授業研究に協力隊員が従事している。

1月 19日現地校調査

1月 20日ライロック小学校： 隊員との共同（準備1）
授業研究 1by 磯田、授業研究2by現地教員・JOCV隊員
モデル作りのための協議

1月 21日ラウラ小学校： 隊員との共同（準備2）

授業研究3by 磯田、授業研究4by現地教員・JOCV隊員
モデル作りのための協議

1月 22日マーシャル教育主催教員研修
JOCV隊員と共同して「自ら学び自ら考える子どもを育てる算数授業づくり—かけ算の場合—」ワークショップを実施

日系社会青年ボランティア「現職教員特別
参加制度」活動支援のための
教育協力システムの形成

東 弘子／松宮 朝
(愛知県立大学)

平成21年度
「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業

日系社会青年ボランティア「現職教員特別参加制度」 活動支援のための教育協力システムの形成

課題実施機関 愛知県立大学
活動実施者 東弘子、加藤史朗、宮谷敦美、松宮朝、高阪香津美
松本一子(愛知教育大学)、小島祥美(愛知淑徳大学)

2010年1月10日(日) 14:30~15:00
筑波大学東京キャンパス大塚地区 G201

目的

(1) JICA日系社会青年ボランティア現職教員
特別参加制度による隊員の活動の質の向上
および、帰国後の外国人児童・生徒に対する
教員としての指導力の向上

(2) 日本、ブラジル間の移動をくりかえす児童
・生徒に対する教育支援のための情報ネット
ワークの形成

活動実施体制

・活動協力者(敬称略)

豊田市立西保見小学校、豊田市立東保見小学校、豊田市教育委員会初期指導教室「ことばの教室」、NPO法人子どもの国(放課後学習支援事業「ゆめの木」教室)、日本語学習支援教室Vizinho、NPO法人可児市国際交流協会、小川裕美(可児市教育委員会学校教育課・外国人児童生徒コーディネータ)、渡邊あづさ(愛知県西三河教育事務所・外国人児童生徒語学相談員)、菊池寛子(西尾市教育委員会・早期適応教室指導員)、勅使千鶴(日本福祉大学子ども発達学部・教授)、JICA日系社会青年ボランティアOG:久保真希子(愛知県東三河教育事務所・外国人児童生徒語学相談員)、川上貴美恵(せんねん村中野郷保育園・外国人児童コーディネータ)、今井さや香(知立市教育委員会・早期適応指導員)、青木由香(富山県高岡市・外国人児童生徒指導講師)、三澤由佳子((財)海外日系人協会・非常勤講師)

・アドバイザー

JICA、海外日系人協会、愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室、愛知県教育委員会、豊田市教育委員会

活動スケジュール(2009年度)

- 7月3日(金) 本事業採択決定 活動開始
- 8月5日(水) 第1回アドバイザリーボード
- 8月26日(水) 第1回研究会「ブラジル人児童生徒の教育活動
—ブラジル本国での活動経験をもとに—」
- 9月8日(火)~14日(月) ブラジル現地調査 (2名)
- 9月23日(水) 第2回研究会(公開)「学校教育における外国人児童生徒教育・日本語教育-岐阜県可児市の取り組み-」講師:小川裕美氏
- 10月29日(木) 第2回アドバイザリーボード
- 11月5日(木) 〈公演〉公開講演会「豊田市立東保見小学校における外籍児童への学習支援」講師:小山幾子教諭
- 12月23日(水) 第3回研究会「ブラジル人学校と日本の学校をつなぐ視点」
- 3月10日(水) 活動終了(予定)

活動と成果 1

日本国内の教育実践者・JICA現職教員隊員へのニーズ調査

1. JICA日系社会青年ボランティアOGかつ現在日本での教育実践者である活動協力者から意見聴取。
現職教員隊員に学んできてほしいことをテーマに研究会を実施。
→ **座談会記録(読み物)**
2. ブラジル人学校からみた日本の教育者に対するニーズを意見聴取。「日本の学校とブラジル人学校をつなぐ視点」というタイトルで研究会を実施。
1. 2. → **ニーズをまとめた報告書**
3. JICA現職教員隊員に対する意識調査
→ **アンケート集計、報告**

活動と成果 2

日本・ブラジル間の教育体制・文化の違いに関する、既存の情報の整理

外国人児童・生徒への指導の質の向上を目的に
各地の教育委員会などが作成した成果を整理・精査
→ 移動する子供が持ち運べる、日本・ブラジルの教育体制・文化の違いについて現場の先生や当事者が見てすぐにわかる、情報一覧シート

活動と成果 3 両文化を理解し、また相互に尊重しあう感情を育成するための教具と活用方法の提案

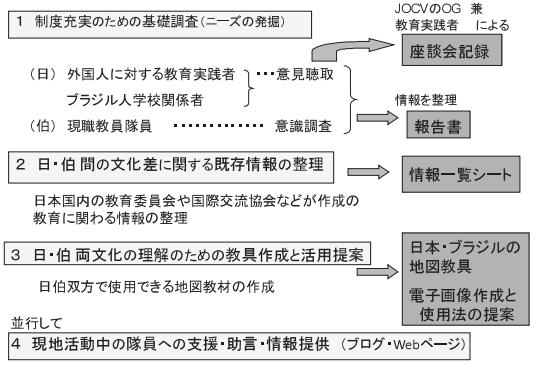
日本の教育現場、ブラジル人学校、ブラジルの隊員受け入れ学校において、様々なシーンで活用できる地図教具の作成と活用方法の提案。

→ 日本とブラジルの地図(県や州、行政区分などの各種分類)の電子画像と、わかりやすい地域に関する説明文の電子ファイルの提供、および使用方法の提案

活動と成果 4 現地活動中の隊員への支援(Webページ利用)

- 現地で求められている「日本語指導」活動サポートのための絵カードを提供
- 帰国後に必要となる日本国内の外国籍児童・生徒指導のための「お役立ちリンク」を提供

平成21年度 活動と成果



日本とブラジルの教育制度 & 学校文化一覧表 (作成中+ポルトガル語版)

	日本	ブラジル
1 教育制度	小学校6年、中学校3年、高校3年、大学2~6年	基礎教育（日本の小・中学校にあたる）9年、中等教育（日本の高校にあたる）3年、高等教育2~6年
2 総務教育年数	9年（小6年+中3年）	9年（小5年+中4年）
3 学年制	4月スタートで3月に終了	2月スタートで12月に終了
4 授業時間	全日制	2部制（午前又は午後）、3部制（午前又は午後又は夜）
5 学校選択	小学校制	親が学校を選択
6 入学制限	満8歳	満8歳
7 学期	2学期制(又は3学期制)	4学期制
8 入学試験	高校進学・大学進学に際して、必ず入学試験がある	高校進学・大学進学に際して、入学試験があるが、公立高校については入学試験がない場合もある
9 落第・飛行	ない	私学ではあるが、公立学校では原則としてない（もつては基督教者の年から落第があつた）
10 通学方法	小学校は通学団体校	親による送迎、スクールバス利用
11 授業料	義務教育は無料	公立の場合は無料
12 公立と私立のレベル差	公立と私立で教育水準を比較することができない	基礎教育と中等教育は、私立の教育水準が高いが、高等教育は公立の方が教育水準が高い。公立大学合格者はほとんどが私立高校卒業者
13 入学式など式典	入学式・卒業式始業式・終業式がある	卒業式はあるが、入学式・始業式・終業式はない
14 授業科目	国語・算数（数学）・社会・理科・英語・音楽・美術・技術・家庭・体育（学校にフルがあるため更には余分の時間がある）	技術・家庭科・音楽がない ブルはないとある
15 教科書	無料で支給される	貸出されて使用し、返却する

16 行事	遠足・学芸会・体育会・運動会・修学旅行・宿泊合宿・野外学習など	修学旅行など宿泊を伴うものはない。毎の日・クリスマス・イースターなどにはある
17 クラブ活動	野球・ソフトボール・カrosse・バッケージボーリング・バレーボール・陸上・水泳など各種部や英会話・ブリストン・英会話など多種な部活動	ない。個人的にスポーツクラブに通ったりする
18 総食・食文化	小学校のみ、どの中学部は給食がある。ブラジルは残り物の基本が盛り込まれるため、残る者のために時間がある	給食はあっても簡単なもの。校内の売店で買うこともできる
19 時間割	1日の授業が給食をはさんで4限あり、授業と授業の間は休憩がある	半日で8時くらいあるが、授業と授業の間の休憩は、2限と3限の間の間で休みで分くくらい
20 博物館	教室でもいじる運動会も児童生徒が構成をする	済伝令の職員の仕事
21 利用	公用車・冬用・制服があり、お金がかかる。	丁寧のような簡便な制服が多い。
22 保護者会・授業参観	ある	授業参観はない
23 校則・アセサリ	型式・持ち物など校則で決められていることが多い。アセサリは選入の自由	アセサリは選入の自由
24 欠席・遅刻の届出・連絡帳	欠席や遅刻の場合には、当日の朝、学校に連絡届出かの連絡は電話で直接連絡するか、連絡帳に書く	出席は75%で準拠できるため、届けなくてもいい。2~3日休んだときは、後日医師の診断書と共に報告すればよい
25 長期休暇	夏休み（7/20~8/31）、冬休み（12/26~1/7）、春休み（3/23~4/3）	夏休み（12/末~2/初）、冬休み（1月中期の1週間のみ）
26 算数の引き算や割り算の仕方	10~8の計算は、10-8=2、2+3=5と計算する	8にいくつはすと13になるかを計算
27 教師の勤務時間	フルタイムで勤務	午前の授業が終了後、午後は別の学校ではたらく教師がいる
28 給食	学年費・給食費・PTA会費・...・ワープラクツやドリル代・遅刻費・修学旅行費（6年生のみ）などの集金がある	公立学校は給食費も含めて原則無料
29 成績表	相対評価と絶対評価の組み合わせ	相対評価
30		

地図教材(日本・ブラジル)

- 全国図 → 地方図 (反転図も作成)
地方毎に色分け
- ランドマーク
中国地方
：原爆ドーム(広島県)
南部
：イグアスの滝(パラナ州Estado do Paraná)

地方のランドマーク

／ 県の情報

	名所	都道府県
北海道地方	雪まつり	北海道
東北地方	青森シーホル	青森県
関東地方	東京タワー	東京都
信越・北陸地方	富山ダム	富山县
東海地方	富士山	静岡県
近畿地方	大仏	奈良県
中国地方	須崎ドーム	広島県
四国地方	斜波通り	徳島県
九州地方	阿蘇山	鹿児島県
沖縄地方	普天城	沖縄県

都道府県名	情報(簡単な表現)
北海道	日本の一番北にあります。 土地が大きいです。氷や野菜がたくさんとれます。 夏はすずしいです。冬は雪がたくさん降ります。 動物がいます。
青森県	トキルで北海道に行けます。 日本で一番ひんごとれます。 ねぶた祭りが有名です。
岩手県	日本で二番目に高い県です。 サンマやわらかめがたくさんとれます。 わんこそばが有名です。
宮城県	東北で一番の多い県です。 七夕祭りが有名です。

『日本がわかるらうのえほん』(学研)よりライ

今後の課題

- JICA 隊員とのコミュニケーション
blogの活用
縦の関係をつなぐ役割
- 国内でのニーズの発掘
教育委員会における本制度の位置づけ
活動終了後の人材活用イメージの形成
- 日伯双方の制度理解の促進
隊員の活動内容の向上

プログラム 7

派遣現職教員サポート・ホームページ の紹介

柴山 信二朗

(筑波大学)

**派遣現職教員
サポート・ホームページの紹介**

筑波大学教育開発国際協力研究センター
(CRICED)
研究員 柴山信二朗

サポート・ホームページの内容

- ・「海外活動マップ」
- ・「国内活動マップ」
- ・「『国際協力イニシアティブ』ライブラリーへのアクセス」
- ・「支援事業・関連情報」の紹介
- ・リンク集(国際教育関連分野、学校教員の組織・ネットワーク、教育委員会・教育センター、その他様々な関係機関)
- ・派遣前研修報告書、帰国隊員報告会報告書等

海外活動マップ

派遣現職教員の
・任国事情の紹介
・活動の紹介

現在、59名の任国事情と活動を紹介



国内活動マップ

帰国後
・こういうことをやってい
ます
・こんな社会還元の仕方
もあります



「国際協力イニシアティブ」ライブラリーへのアクセス

入手可能な教材・資料(例)：

- ・日英「日本の教育制度と教育実践一研修のためのヴィジュアル教材」
- ・日英「小学校学習指導要領解説 算数編／中学校学習指導要領解説 数学編」
- ・青年海外協力隊現職教員参加特別制度ハンドブック、活動事例集(家政編)
- ・幼稚教育ハンドブック、途上国の幼い子どもの未来を拓く－ECD支援の内容と動向－

等

筑波大学教育開発国際協力研修センター(CRICED)
派遣現職教員のサポート・ホームページ

HTTP://WWW.CRICED.TSUKUBA.AC.JP/JOCV/

ご質問・ご意見・ご感想：
筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)
〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1
Tel/Fax:029-853-6573
サポート・ホームページ編集担当

プログラム 8

海外ボランティア経験教員の 還元について

佐藤 真久

(東京都市大学)

海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献
一実施動向・取組事例と今後の可能性
2010年1月9-10日
青年海外協力隊等派遣現職教員特別研修・帰国報告会@筑波大学東京キャンパス

佐藤真久
東京都市大学 環境情報学部 (m-sato@tcu.ac.jp)

*1: C N教諭(ドミニカ:小学校教諭)、2: C M教諭(斐济:体育教師)、3: C S教諭(ウクライナ:小学校教諭)、4: C O教諭(フィリピン:小学校教諭)、5: C 教諭(モンゴルラス:小学校教諭)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性



**調査研究の概要
—その背景と研究目的**

海外ボランティア※1経験教員の還元※2・貢献活動の動向や具体的な活動事例に関する情報を、経験教員、所属校長、教育委員会・自治体から収集し分析

→現況把握(実施動向と事例の把握)
→海外ボランティア経験教員が国内外の社会に還元・貢献できる潜在性・可能性の把握
→「現職教員特別参加制度」や組織的取組みの推進にむけた課題を整理

*1:本調査研究では、国際協力機構の実施する青年海外協力隊派遣事業をさす
*2:「還元」とは、海外での経験を日本のさまざまな活動に活かすことを意味する

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

**調査研究の概要
—全体の構成**

(1)教育委員会・自治体による制度活用にむけた取組みの動向調査
(調査票調査)
(インタビュー調査)

(2)経験教員と学校による取組みの動向調査
(調査票調査)

(3)経験教員による取組みの事例調査
(インタビュー調査)

→現況把握(実施動向と事例の把握)
→海外ボランティア経験教員が国内外の社会に還元・貢献できる潜在性・可能性の把握
→「現職教員特別参加制度」や組織的取組みの推進にむけた課題を整理

*1: © T教諭(シンバエ:体育教師)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

**調査研究の概要
—各調査の主目的**

(1)教育委員会・自治体による制度活用にむけた取組みの動向調査
(調査票調査・インタビュー調査)

「現職教員特別参加制度」の活用にむけて、47全国都道府県と17政令指定都市を対象に、調査票による動向調査を実施

→調査実施期間:2009年10月-11月末、回収率:10割
→調査票調査内容:(a)帰国後の還元・貢献活動に関する意義、(b)組織的対応、(c)取組み事例、(d)効果的に推進できる仕組み、(e)還元・貢献活動領域の潜在性・可能性、(f)各組織の機能・役割、(g)能力向上・評価・人事

→一部の教育委員会・自治体に対するインタビュー調査(補足調査)が予定(調査予定期間:2010年1月-2月)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

**調査研究の概要
—各調査の主目的**

(2)海外ボランティア経験教員と学校による取組みの動向調査
(調査票調査)

「現職教員特別参加制度」を活用した現職経験教員とその所属校長を対象に、調査票調査を実施
(実施期間:2009年10月-11月末、回収率:2割程度)

→調査票調査内容(経験教員所属校長):(a)制度の認知度、(b)帰国後の還元・貢献、(c)派遣活動における日本の教育への還元

→調査票調査内容(経験教員):(a)参加動機、(b)制度認識と対応、(c)派遣中の活動内容と還元・貢献活動、(d)派遣による自身の変化、(e)派遣後の還元・貢献活動(学校における授業内外の取組み事例、学校外との取組み事例)、(f)還元・貢献活動の阻害・貢献要因、(g)提案、(h)国際教育協力のイメージ

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

※1: ①教諭（ホンジュラス：小学校教諭）、②：M教諭（ブータン：体育教諭）

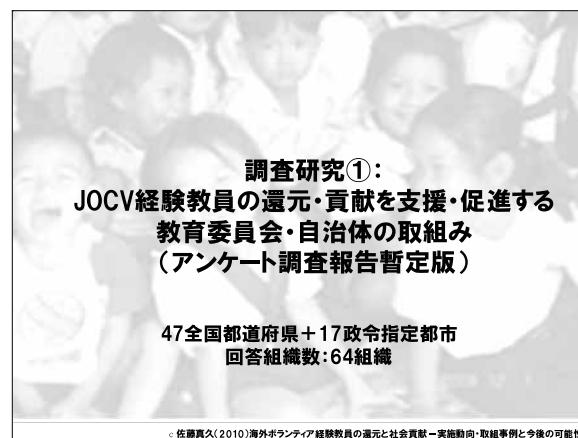
（3）海外ボランティア経験教員による取組みの事例調査（インタビュー調査）

「現職教員特別参加制度」を活用し、派遣中・派遣後の還元・貢献活動で多様な成果を上げている現職教員を中心選び、所属学校において詳細なインタビュー調査（2時間程度）を実施

（実施期間：2009年11月～2010年1月）

一調査対象：20名程度

一調査対象の選定：調査票調査（2）の結果と関係機関（JICA文部科学省）の既存情報に基づき、多様な還元・貢献活動（開発教育プログラムの実施や教科教育、学級運営・授業外活動、キャリア指導、外国人児童生徒への対応、帰国教師ネットワーク、ボランティア活動など）を事例研究できるように配慮



調査研究①： JOCV経験教員の還元・貢献を支援・促進する 教育委員会・自治体の取組み (アンケート調査報告暫定版)

【得回率の還元・貢献】

■問1：青年海外協力隊及び日系社会青年ボランティア（以下、「青年海外協力隊等」）現職教員特別参加制度参加希望教員のとりまとめに聞いて、貴教育委員会としての何からかの意義を感じておられますか。（複数選択可）

■問2：貴教育委員会が中心となって、青年海外協力隊等を経験した教員が、帰国後にその経験や成果を児童生徒、他の教職員、その他の方々に還元するような機会作りに組織的に取り組まれていますか。

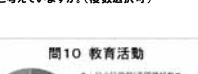
■問3：取り組んでいる場合、それはどのようなものですか。（複数選択可）

■佐藤真久(2010)海外ボランティア実践動向・取組事例と今後の可能性

【帰国後の還元・貢献】

■問10:青年海外協力隊等を経験した教員は、日本の学校教育との分野において経験の還元・貢献が期待できると教えていますか。(複数選択可)

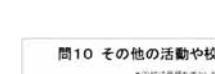
問10 教育活動



回答	割合
是	31.7%
どちらでもない	28.17%
どちらでもない	28.33%
否	1.7%

N=163

問10 その他の活動や校務



回答	割合
是	27.26%
どちらでもない	41.32%
どちらでもない	24.19%
否	7.25%

N=124

○佐藤真久(2010) 海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

教育委員会・自治体による還元・貢献の支援・促進事例
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

【能力向上・評価・人事】

■問15：現職教員が国際力を実践することにより、教員自身の能力開発と共に、日本の教育現場に与える効果として、次の5つの効果が想定されていますが、特にどの効果に期待していますか？（複数選択可）

選択肢	回答数
A 「英語力」による「国際化」の実現	44
B 「日本語力」による「国際化」の実現	41
C リーダーシップ・コミュニケーション能力による自分なりの「国際化」の実現	28
D 「国際化」に対する教員の意識向上による「国際化」の実現	25
E 機動化能力による「国際化」の実現	19
F 特別な理由なし	2

N=154

■問17：青年海外協力隊等に教員を派遣した場合、帰国後に教育委員会がその成果を把握するための機会は設けていますか？（複数選択可）

選択肢	回答数
1. 無い	1%
2. 既存までの提出を求める	5%
3. 併記用紙の提出を督促している	30%
4. 併記用紙の提出を督促している	60%
5. その他	10%

N=64

**教育委員会・自治体による還元・貢献の支援・促進事例
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【能力向上・評価・人事】

■問18:派遣された教員の現地での活動の成果を、貴教育委員会において評価し、それを帰国後の人事に反映させていますか。

問18

回答肢	回答数
評価しているが、人事には反映させていない	28
評価しているが、人事には反映させている	27
評価していない	16
合計	61

■問19:人事に反映されている場合、具体的にはどのようなのですか。(複数選択可)

問19

回答肢	回答数
削減率の算出	4
評議会への出席率	4
外国語学習率	1
人材育成率	1
その他	54
合計	61

■問20:人事に反映していない場合、その理由を記してください。

問20

回答肢	回答数
人事ローテーションの都合	25
その他	25
合計	50

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**教育委員会・自治体による還元・貢献の支援・促進事例
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【その他】

■問21:在外教育施設やREXプログラム(外国教育施設日本語指導教員派遣事業)への派遣教員の方々の帰国組織はありますか。

問21

回答肢	回答数
ある	30
ない	32
合計	62

■問22:その組織による還元・貢献の活動はありますか。あるとお答えの場合、具体例を記してください。

問22

回答肢	回答数
ある	25
ない	20
合計	45

【組織による還元・貢献活動の具体例】

「派遣先での活動の報告会や国際理解教育の研修会(群馬県)」
「教育委員会を通じてどった組織ではどの程度の活動が行われたか(群馬県)」
「国際理解教育の実施動向(群馬県)」
「在外教育施設派遣から帰国した教員が活動経験や海外事情等を東京教育委員会主催、研究会の作成(兵庫県)」
「在外教育施設派遣から帰国した教員が活動経験や海外事情等を東京教育委員会主催、研究会の作成(兵庫県)」
「高知県国際理解教育研究会」という組織を作り、年1回、国際理解教育に関する意見交換や学習会を行っている(高知県)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**調査研究②:
JOCV経験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版]**

■問2: 年次海外協力隊に参加した動機は何ですか。(複数回答可)

JOCV経験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

回答肢	回答数
物の見方を変え、視野を広めるため	42
国際協力への参加	24
国際理解を深めたため	12
人生観、価値観、世界觀を変えるため	8
広い目で学校教育を考えられるようになるため	7
人の繋がり合いの人間関係を拡大させるため	3
児童生徒を多角的かつ柔軟に見られるようになるため	3
合計	122

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【参加動機】

■問2:青年海外協力隊に参加した動機は何ですか。(複数回答可)

JOCV絏験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

回答肢	回答数
1. 物の見方を変え、視野を広めるため	94
2. 国際協力への参加	77
3. 国際理解を深めたため	69
4. 教員として経験能力を向上 (指導力、コミュニケーション能力など)	61
5. 人生観、価値観、世界觀を変えるため	54
6. 広い目で学校教育を考えられるようになるため	53
7. 日本の学校の長所や短所を、客観的に認識できるようになるため	52
8. 人と人との繋がり合いの人間関係を拡大させるため	38
9. 児童生徒を多角的かつ柔軟に見られるようになるため	35
10. 教育現場から離れた環境に身をおくため	29
11. 過応力や忍耐力などを向上させるため	24
12. ほかの業種・分野の人とのつながりを作るため	23
13. 教職に対するモチベーションを上げるため	19
14. 問題解決能力の向上を期待して	16
15. 仲間先を越えた教員同士のネットワークの構築のため	7
合計	639

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV絏験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【制度認識と対応】

■問3: 参加の希望を申し出た時、校長は現職教員特別参加制度を知っていましたか。

■問4-i: 参加に当たり、職場の反応はどうでしたか。

JOCV絏験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

回答肢	回答数
知っていた	65
知らない	54
合計	121

回答肢	回答数
どちらかどりだった	30
どちらかどりだったが、どちらかどりだった	29
どちらかどりだったが、どちらかどりだったがどちらかどりだった	28
どちらかどりだった	23
その他	10
合計	121

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV絏験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【参加教員自身の変化】

■問6-i:ご自身にとってよかつたといえる点は何ですか。(複数回答可)

JOCV絏験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

回答肢	回答数
他の教員がアドバイスを多く得た	37
自分の知識が広がった	88
自分の意見が尊重された	55
自分の意見が尊重された	36
他の教員がアドバイスを多く得た	36
合計	518

■問6-ii:教育現場にとってよかつたといえる点は何ですか。(複数回答可)

JOCV絏験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]

回答肢	回答数
他の教員がアドバイスを多く得た	20
自分の知識が広がった	110
自分の意見が尊重された	90
自分の意見が尊重された	63
他の教員がアドバイスを多く得た	63
合計	419

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【派遣活動中の還元・貢献効果】

■問12-i: 現地での活動に日本国内の教育現場での経験は役立ちましたか。

役立った	58%
役立たなかった	32%

■問13-i: 現地での活動中、派遣元の学校を含めて日本国内の学校等と交流を行いましたか。

行なった	33%
行なわなかった	67%

N=122

■問13-ii: 「行った」とお答えの場合、どこと交流をしましたか。(複数回答可)

派遣先の学校	97%
他の学校	3%

N=82

■問13-iii: 「行った」とお答えの場合、具体的にはどのような活動を実施しましたか。(複数回答可)

現地の状況を理解するための会議や座談会	87%
現地の状況を理解するための視察	7%
現地の状況を理解するための実習	6%
現地の状況を理解するための見学	2%
現地の状況を理解するための調査	1%

N=114

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【帰国後の還元・貢献効果:経験が活かされている場所】

■問16-i: 帰国後、学校教育の現場で派遣中の経験が活かされていますか。

活かされています	62%
活かされていません	38%

N=118

■問16-ii: 「活かされている」とお答えの場合、それはどこで活かされていますか。(複数選択可)

現地の状況を理解するための会議や座談会	97%
現地の状況を理解するための視察	2%
現地の状況を理解するための実習	1%
現地の状況を理解するための見学	0%
現地の状況を理解するための調査	0%

N=151

■問16-iii: 「16-ii」の機会はどのようなアクターにより作られましたか。(複数選択可)

現地の人	42%
現地の教育機関	17%
現地の教育行政	17%
現地の教育委員会	11%
現地の教育団体	7%
現地の教育者	5%

N=123

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【帰国後の還元・貢献効果:学校内(授業)】

■問18-i: 帰国後も派遣国の学校等と交流を行っていますか。

行なっている	57%
行なっていない	43%

N=121

■問18-ii: 「行なっている」とお答えの場合、具体的にはどのような活動を行っていますか。(複数回答可)

現地の人	75%
現地の教育機関	15%
現地の教育行政	5%
現地の教育委員会	0%
現地の教育団体	0%
現地の教育者	0%

N=59

■問20-i: 国際理解教育以外に、帰国後新たに力を入れ始めたものはありますか。(複数回答可)

現地の人	59%
現地の教育機関	31%
現地の教育行政	0%
現地の教育委員会	0%
現地の教育団体	0%
現地の教育者	0%

N=89

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【帰国後の還元・貢献効果:学校外】

■問21-i: 授業以外で、学校内で協力隊の経験を活かして取り組んでいる活動がありますか。(複数回答可)

現地の人	41%
現地の教育機関	27%
現地の教育行政	22%
現地の教育委員会	7%
現地の教育団体	3%

N=94

■問23-i: 帰国後、派遣先で得た知見を整理、蓄積する取組みを行っていますか。(研究会の設置・大学院進学・論文や書籍の執筆など)

行っている	80%
していない	20%

N=118

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動の動向
[アンケート調査報告暫定版(抜粋)]**

【帰国後の還元・貢献効果:その他】

■問22: 帰国後、日本の教育現場への還元・貢献の活動がなかなか取組めていない方は、その要因は何ですか。(複数選択可)

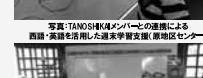
現地の人	53%
現地の教育機関	12%
現地の教育行政	12%
現地の教育委員会	13%

N=144

■問23: JOCV帰国現職教員が還元・貢献活動をできていない理由(学校長による認識)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献－実施動向・取組事例と今後の可能性



	<p>JOCV経験教員の還元・貢献事例(2) 【教諭】 （ホンジュラス・小学校教諭・在留外国人児童生徒対応・国際理解教育／開発教育）</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■経験教員：【教諭】（静岡県沼津市） ■派遣国：ホンジュラス（H14派遣） ■職種：小学校教諭 ■還元活動キーワード：在留外国人児童生徒対応、国際理解教育／開発教育、西語・英語を活用した週末学習支援、ペレーラ大使間連携の算数教材開発 ■教育経験キーワード：コミュニケーションの質的変化、「常識」概念の変化、安全・危機管理能力の向上、マイアリティの経験を生かした指導 	<p>【派遣後】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;">  <p>写真：TANISHI君（在メキシコの派遣による西語・英語を活用した算数学習支援（黒板ゼミナール）</p> </div> <div style="width: 45%;">  <p>写真：特別支援学校にて算数の授業実施風景。ペルー教育省のメンバーとも一緒につづり始めた地方の算数基礎学習の向上のためのワークシート</p> </div> </div>

JOCV経験教員の還元・貢献事例(4)
K教諭
(ウガンダ・小学校教諭・国際理解/開発教育・地域連携)

■経験教員:K教諭(埼玉県さいたま市)
■派遣国:ウガンダ(H19派遣)
■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード:派遣中の参加型学年通信(常盤小学校との連携)

※常盤小学校の教員による国際理解教育/開発教育、起業家教育、PTA・地域住民を巻き込んだバーゲーの開催とフェアレー

■教育経験キーワード:「異文化理解」概念の変化、日本の教育力、派遣前・派遣中の還元の可能性、近隣小学校との連携による教育実践

【派遣後】

写真:クラス通信におけるウガンダ間連の生徒会活動の紹介

写真:JOCV教諭と同僚教諭(常盤小学校)との連携によるウガンダとの交流プロジェクトの展開

JCVO経験教員の還元・貢献事例(6)
O教諭

【添付後】

■経験教員：O教諭（宮城県仙台市）
■派遣国：フィリピン
■職種：小学校教諭

■還元活動キーワード：総合的学習の時間、外国語教育、国際理解教育／開発教育、経験を生かした紙芝居づくりと朗読活動、外国語教育

■教育経験キーワード：日本の教育教材の質の高さ、教材開発の質的改善、教育実践の質的改善、同僚との連携による教育実践

JOCV経験教員の還元・貢献事例(7)
T教諭
(シンパブエ・小学校教諭・環境教育・生徒指導)

【派遣後】

写真: 派遣国の尊貴を活用した「水の大切さ」を伝える環境教育実践

■還元活動キーワード: 派遣隊員どうしの学び合い、万国共通の子どもたちの笑顔、日本の常識・世界の非常識、コミュニケーション手段としての英語、安全管理・危機管理能力の向上、チャレンジ精神、現実と理想を教える役割(教育者果たす役割の認識変化)、経験を通した外国籍児童生徒への配慮、子ども達との信頼の構築

■備考: 派遣後に教員へ

JOCV経験教員の還元・貢献事例(8)
Y教諭
(タンザニア・小学校教諭・帰国教員ネットワーク・国際理解教育/開発教育)

【派遣後】

写真: 開発教育協会(DEA)と派遣前隊員(タンザニア派遣)との連携による開発教育プログラム「貢献チーム」の実施

■経験教員: Y教諭(東京都町田市)
■派遣国: タンザニア
■職種: 理数科教師

■還元活動キーワード: 派遣中隊員との学び合い(タンザニア教育研究会)、活動情報の発信、米平和部隊との連携、国際理解教育/開発教育、総合的学習の時間、道徳教育との関連性、ICT活用の国際教育、開発教育支援ネットワーク

■教育経験キーワード: 行動力の向上、地球人としての世界観の醸成、ICT活用がもたらす国際理解、経験隊員のネットワーク構築と教育実践研究

■備考: 制度以前の参加

写真: 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(9)
T教諭
(シンパブエ・養護教諭・食育・給食指導)

【派遣後】

写真: 組合的学習の時間における「食」に関する作文
〔帰国後の還元活動〕

■経験教員: T教諭(神奈川県逗子市)
■派遣国: シンパブエ(H13派遣)
■職種: 養護教諭

■還元活動キーワード: 食育、給食指導、保護者参加型の授業実践、総合的学習の時間、学級間の交換授業

■教育経験キーワード: 児童生徒の個々に向き合う指導の重要性、一日一日の時間の大切さ、日々の教育活動に対する振り返りの重要性

■備考: 帰国後教員に

JOCV経験教員の還元・貢献事例(10)
H教諭
(ルーマニア・ソーシャルワーカー・地域連携・国際理解教育/開発教育)

【派遣中】

写真: クロコロード特集「日本の生き生きへの手紙」において、ストリートチャレンジの出会いに関する記事の発信

■経験教員: H教諭(大阪府大東市)
■派遣国: ルーマニア(H15派遣)
■職種: ソーシャルワーカー

■還元活動キーワード: 国際理解教育/開発教育、保健所とのボランティア活動(大東市たばこゼロプロジェクト)、社会教育活動(ルーマニアからのほほえみ)、日常会話、総合的学習の時間

■教育経験キーワード: 仲間意識の醸成、日本の教育制度の素晴らしいところ、言葉の重さ、生きる力、「あたりまえ」の概念、あいさつと日常会話の重要さ、学び合い、総合力を持った教員の育成、地域連携のプロデュース

【派遣後】

写真: 萩谷小学校の全校平和集会
「ルーマニアのこどもたちにかわって」の経験報告

写真: 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

JOCV経験教員の還元・貢献事例(11)
M教頭
(ホンジュラス・技術科教師・帰国教員ネットワーク・国際理解教育/開発教育・環境教育)

【派遣後】

写真: 児童生徒8年総合的な学習の時間「ひじりとり世界の友だち」での、ホンジュラスとのテレビ会議交流

■経験教員: M教頭(兵庫県大東市)
■派遣国: ホンジュラス(S63派遣)
■職種: 技術科教師

■還元活動キーワード: 教科教育(技術)、ふるさと学習、自然体験を通した感動体験、ICTを活用した国際理解・開発教育、「幸せ」に関する道徳教育、教育指導力向上研究会、教育支援ネットワーク、学校運営、JOCVクリスマスカードから始めるJOCV派遣教員と地元学校との交流プログラム

■教育経験キーワード: ふるさと教育、教育の国際化、「豊かさ」の概念、生きる力、日本の子どもが世界の子どもと繋がる意味、感動体験、自分で気づく力を養う

■備考: 制度以前参加

JOCV経験教員の還元・貢献事例(12)
K教諭
(ベトナム・SE・持続発展教育・人権教育)

【派遣後】

写真: 豊中市立上野小学校の国際理解・国際社会に通用する学力を求めての越野と主体的行動力の育成

■経験教員: K教諭(大阪府豊中市)
■派遣国: ベトナム
■職種: SE

■還元活動キーワード: 派遣中における日本の高校との連携による国際理解教育/開発教育プログラム(Meet the GLOBEプロジェクト)、総合的学習の時間、人権教育(バリアフリー、私たちの幸せ)、NGO連携の教材支援活動、持続発展教育

■教育経験キーワード: 人のつながりの大切さ、人権教育・国際教育を通した価値教育、既存の教育実践との関連づけ(つながり・かわはり・ふかはり・ひろがり)、「幸せ」の概念

■備考: 帰国後教員へ

写真: 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献事例(13)
S教諭
(ドミニカ・小学校教諭・外国語教育)**

【派遣後】

写真: 小学校5~6年対象の外国語活動の実践

写真: 北京師範大学実験小学校との組織連携による児童生徒の交流活動

■経験教員:S教諭(新潟県)
■派遣国:ドミニカ(H18派遣)
■職種:小学校教諭

■還元活動キーワード: 外国語教育、国際理解教育 /開発教育、北京師範大学実験小学校との連携プログラム、総合的学習の時間

■教育経験キーワード: コミュニケーション手段としての英語、日本語教育の重要さ、日本文化の尊重、世界に対する好奇心の醸成

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動の可能性
—インタビュー調査を通して(暫定版)**

【派遣前】

- 児童生徒との派遣前心境の共有
- 派遣前における派遣国に関連する開発教育・国際理解教育プログラムの展開、など

【派遣中】

- 所属学校・周辺学校・自治体への活動報告を通じた情報発信
- 所属学校・周辺学校の児童生徒との手紙のやり取りや継続的コミュニケーション(ICT利用)
- 所属学校・周辺学校との連携による開発教育・国際理解教育プログラムの実施
- 地域・PTAを巻き込んだ所属学校・周辺学校との連携による地域実践プログラムの展開(文化祭やバザー、支援物資の回収と送付)、など

【派遣後】

- 授業における活動(教科教育への織り込み、総合的学習の時間における学年教員・外部組織との連携によるプログラム実践)、など
- 授業外における活動(外国人児童生徒対応、文化祭や生徒活動の一環、学級運営、生徒指導、キャリア教育、児童会プログラム)、など
- 学校外における活動(PTAや保健所、社会教育施設、他学校との連携による教育プログラムの展開)、など

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動
—理想と現実のはざまで—**

**本調査研究に基づく、(1)還元・貢献活動の難しさ
(2)還元・貢献の潜在性・可能性**

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

**JOCV経験教員の還元・貢献活動
②還元・貢献活動の難しさ(暫定版)**

■JOCV帰国現職教員が還元・貢献活動ができる機会づくり ■JOCV帰国現職教員が還元・貢献活動をできない理由(教育委員会・自治体に対するアンケート調査一問2より) 由 JOCV経験教員に対するアンケート調査一問26より)

N=62	N=144

※1: c: S教諭(ホンジュラス:小学校教諭)

※2: c: I教諭(ホンジュラス:小学校教諭)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性

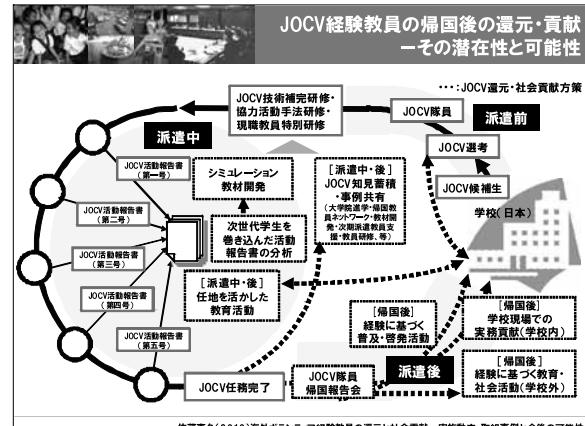
**JOCV経験教員の還元・貢献活動
○還元・貢献の潜在性と可能性(暫定版)**

■国際教育協力の経験から学ぶ
→地元人として生きる:日本の常識/世界の非常識、多様な文化・価値観の尊重、グローバリゼーションの下でのつながり・かかり・ひろがりの認識
→日本の良さを誇る:日本の良さ、地域の豊かさを知る
→力を合わせる国際協力:技術移転の国際協力の発想から脱却
→人と人の直接つながり:かわいそうではなく国連という発想からの脱却
→コミュニケーション:価値観の尊重、言葉の豊さ、個としての対応
→豊かさの概念:人間開発アプローチへの移行、心の豊かさ
→豊かさを促す教育実践:新規派遣教員、JOCV隊員・同僚教員・地域との連携を生みた日本の学校内外での教育活動

■教員個人の能力向上/組織能力の向上—その潜在性・可能性
一生懸命に頑張る力、豊かな学力、豊かな人間性、健康と体力、との深い接点
→持続発展教育(ESD):質の高い基礎教育の充実、MDGsとの整合性、道徳教育、つながり・かかわり・深まり・広がり等、参加型・対話型学習と教授、互いが学び合い、変容を促す教育の実践、文化的尊厳と地域学習、平和教育、環境教育・人権教育・国際理解教育・開発教育、など
→教員の實質向上:クローバルな視野をもたらし、地域で活躍できる教員の育成
→組織能力の向上:学級運営、校内分室活動、安全管理・危機管理、地域連携のプロセス、同僚教員との連携、部活動、生徒指導、総合的学習の時間、教科間連携、学級行事、キャリア指導、外国籍児童生徒対応、給食指導、など
→国際教育協力に関する学びのサイクル:日本・地域全体での知見蓄積・共有

*1: c: S教諭(ドミニカ:小学校教諭) *2: c: I教諭(カンボジア:小学校教諭)

© 佐藤真久(2010)海外ボランティア経験教員の還元と社会貢献—実施動向・取組事例と今後の可能性



閉 会 挨 捜

閉会挨拶

佐藤 真理子
(筑波大学教育開発国際協力研究センター)

本日はお忙しいなか、文部科学省、国際協力機構、筑波大学主催の平成21年度青年海外協力隊派遣現職教員帰国隊員報告会にご参加いただきまして大変ありがとうございました。私事ではありますが、私の研究テーマは「途上国に対する教育援助」であり、今まで、調査研究で、インドネシア、フィリピン、エチオピア、バングラディッシュなどに多くの途上国に行きました。

それぞれの国で、現職教員の隊員ではありませんが、青年海外協力隊員に会い、彼らが困難な生活環境、全く異なる文化、異なる言語の中で、たくましくボランタリー活動を行っていることに大変感銘を受けてきました。先進国の青年が、途上国に派遣されてボランタリー活動を行うという制度はアメリカで1960年に設置された平和部隊にさかのぼることができます。それに、範をとった制度が日本に限らずドイツ、フランス、イギリス、スウェーデンと多くの先進国で実施され、各国内、及び国際的に高い評価をうけています。

日本の海外青年協力隊も、日本国内、国際的に高く評価されています。そのなかでも高い専門性をもった現職の先生方が派遣される現職教員派遣制度は、どの先進国にもない日本独自の制度です。本日の帰国報告会で、現職の先生方が教育現場だけでなく、さまざまな生活の場に入り込んで、各国の文化・社会・伝統に配慮した教育を実施していることや日本での教育経験を実践の場に取り入れたことに大きく感銘をうけました。

本帰国報告会では大きな関心のもと、意義深い発言や活発な討論がされました。皆さんはアフリカ、太平洋諸国、中南米、南アジアと多彩な各国でご活躍された先生方の活動、それを支える大学のサポート活動、そして帰国隊員の還元活動等の発表を通して派遣現職教員制度の全体像をご理解なさったことと存じます。派遣現職教員制度は現職の先生方に教育に限らず、その背景となる文化・社会・経済・言語といったことの体験を通して、教育における深い洞察のみならず、自己啓発につながる貴重な機会を提供していると確信した次第です。現職の先生方は、今回の活動を通して、日本の教育現場に世界に目を向ける、すなわち世界を理解するということに貢献されています。現職教員の方々が開発途上国で新たな経験・知見を獲得し、かつ途上国の教員の方々との交流を構築して、それが国際的センスをもった人材育成など日本の教育現場に反映されていると言い換えることができると思います。今日、日本では内向きの子どもたちが増えているといわれているなか、先生方の活動が重要なものになると確信しております。今後とも、できるだけ多くの現職の先生方がこの制度を利用して活躍し、日本と途上国の友好の懸け橋となり、そして、日本の子供たちと途上国の子供たちとの懸け橋をなることを願っています。

本日のシンポジウムの開催につきましては、ご尽力なさいました文部科学省、JICAの方々にお礼を申し上げると共に今後のご支援を願いまして、短い挨拶ではございますが、以上をもちまして閉会の挨拶とさせていただきます。

平成 21 度文部科学省・独立行政法人国際協力機構(JICA)・国立大学法人筑波大学
国際教育協力シンポジウム

平成 21 年度青年海外協力隊等派遣現職教員
特別研修・帰国報告会
報告書

発 行：平成 22 年 3 月

発行者：筑波大学教育開発国際協力研究センター (CRICED)
国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業
〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1
電話 029-853-7287 FAX 029-853-7288
E-mail jocv@criced.tsukuba.ac.jp
<http://www.criced.tsukuba.ac.jp>

編 集：佐藤眞理子、柴山信二郎(CRICED)

印 刷：前田印刷株式会社 筑波支店

